

東京大学史料編纂所研究成果報告書2017-4 『開港前・後の
問屋仲間と藩専売』（研究代表者横山伊徳）より

翻刻

国会図書館蔵旧幕引継史料『市中取締続
類集』「諸家国産之部」（812-4）

「解題に代えて」

1. 研究の背景

日本近世史研究において、問屋仲間も藩専売も開港（による経済混乱）も、古典的研究テーマであり、非常に多くの研究を蓄積してきている。このなかで吉永昭『近世の専売制度』（1972年）は、天保期には、問屋仲間と諸藩の商品の集荷と販売を巡る対立が各地で頻発していたことを、全国的視野から鳥瞰したこうした幕藩関係の動向からみると、天保改革における「仲間解散」は、「素人直売買」と「諸家国産類」の「出入商人勝手販売」とを認める解散令第二条によって、水野忠邦政権が諸藩の専売に肯定的対応したと考えられる。しかし、解散令・復興令研究は「素人直売買」のみに焦点があつたものがほとんどである。その中で我孫子麟「問屋再興期の商品流通」（『研究年報 経済学』東北大学経済学部 1988年）が、再興令による諸藩専売の動向を主題として、幕府の藩専売抑制策として位置づけたが、この成果を踏まえた研究はその後進展を見なかった。

また、開港後の商品流通についても、安政条約が「双方の国人、品物を商売する事総て障なし」と「自由貿易」を規定したことから、日本側の主たる貿易主体（売込商）は、古くは三都問屋と対立する冒險的投機的商人とも、最近では開港により「自分荷物」を外商に売り込む商人とも言われ、彼らが幕府の問屋中心の流通を変容させ社会そのものを流動化したと位置づけられている（吉田伸之「伝統都市の終焉」『日本史講座 近世の解体』2005年）。しかし、これら先行研究では、商人が持ち込む商品の集荷過程は視野の外にあり、他方で、開港地向けの商品を専売化することが諸藩で叢生すると指摘されている。したがって、売込商の「直売買」品も実態は藩専売品である蓋然性が高いが、これを検討するために必要な、幕藩関係から開港期商品流通を分析する蓄積は乏しい。

そもそも安政条約のモデルとなった「英Ⅱシヤム条約」についても、従来は「自由貿易」を強制する仕掛けとして、条約において商取引への権力的介入の制限が明記されたことが決定的とされてきたが、海外の研究（B.J. TERWIEL, THE BOWRING TREATY: IMPERIALISM AND THE INDIGENOUS PERSPECTIVE, Journal of the Siam Society, 79, 1991）では、それは締結者バウリングの発言を歴史的実態と見なした結果であって、タイにおける外国資本との取引商品の調達は、実質在地権力（と華商）を前提としていたことが指摘されている。

これらを総合して、問屋仲間を重視する伝統的幕府権力と専売化を指向する藩権力の緊張Ⅱ対抗関係の変動の視点から、株仲間解散 → 仲間再興 → 開港の歴史的過程を再検討する必要性を感じるに至った。

2. 研究の目的

三都問屋（株）仲間の流通独占と諸藩の領内産品の専売政策とは天保期までは緊張Ⅱ対立したが、天保改革の「株仲間解散」により、領主的商品流通と農民的商品流通の対立へと変容するとされてきた。本研究は、問屋仲間と諸藩専売制との緊張関係が、株仲間解散・同再興・安政開港を通じて、どのように変

容したかに視角を定め、幕府・諸藩・外商の観点から再検討する。つまり、第一に、「株仲間解散令」と「再興令」における藩専売の位置づけを、第二に、開港による三都以外の巨大市場Ⅱ開港地の誕生を前提に、「五品廻送令」に代表される問屋仲間と藩専売との関係を、外商の動きとあわせて検討する。こうした問屋仲間と藩専売の緊張関係の変容検討により、開港による自由貿易の古典的イメージ（外商と問屋外の中小商人の取引）の再検討を行う。

3. 研究成果

開港に伴う諸藩の国産品生産・集荷・輸出について歴史的前提の再検討を行った。

まず、国会図書館蔵旧幕引継史料『市中取締続類集』にある「諸家国産品之部」の検討をはじめとして、幕府の諸藩国産政策と相互関連の分析を行った。

この研究の前半局面では、株仲間解散令がもつ諸藩国産政策への影響力を中心に、両者が江戸物流という観点から統一的に捉えられることを確認した。まず、株仲間解散令については、これまで同令の前半部分（株仲間の廃止）について議論が進められてきたが、国産との関係は、同令の後半部分、すなわち江戸における国産品販売における藩邸・売捌人・問屋という三者の直接取引を規定した条文が重要であることを指摘できた。したがって、天保十三年十一月の国産専売禁止令と考えられていた幕令は、他領の国産品を自領の国産品として取り扱い、専売（~~メ~~売）を行うことを抑止したもので、国産専売制を否定したのではない、と考えられるとした。この結果、再興令直前（嘉永前期）における、諸藩の国産品販売が中央市場の問屋を経由しないパターンが公然化する、と見通すことができることが判明した。

また、この研究の後半は、株仲間再興令により諸藩の国産品の取扱の変化について検討した。その結果再興令後も姫路藩や彦根藩など、幕府中枢に近い少数藩が国産取扱に関して幕府から特別な取扱を受けていることが明らかとなった。つまり、幕府から諸藩への特別な便宜（ないしは特権）供与として、国産専売制度は有効な経済政策であることが指摘できた。

なおまた、主に用いた旧幕引継史料目録は以下の通りである。

国会図書館蔵旧幕引継史料『市中取締続類集』「諸家国産之部」(812-4)

第一

- ① 嘉永五子年二月 松平肥後守国産石黄売捌方之義二付調
- ② 嘉永六丑年三月 久世大和守殿領分茶荷物売捌方之義調
- ③ 嘉永六丑年九月 尾張殿国産瀬戸焼物二属候美濃焼もの拔荷物之義二付御城付方掛合調

- ④ 嘉永七寅年五月 薩州産薬種公儀御用二成候様致度旨奥御器師御膳番方願候義二付御右筆方問合
- ⑤ 嘉永七寅年十一月 革類払底二付弊牛馬皮在所穢多頭江相廻度旨、阿部播磨守家来伺

- ⑥ 安政二卯年八月 向方方内藤紀伊守殿領分焼酎売捌方之儀二付再掛合
- ⑦ 安政二卯年九月 二条殿領地方出来候瀬戸物売捌所引替之儀二付調

第二

- ① 安政三辰年八月 日光御門之御領方出候産物売捌方之義、上野執当信解院位心院方申上
- ② 安政四巳年閏五月 向方相談廻駿州村々茶売捌方之義二付、御勘定奉行同吟味役申上調

- ③ 安政四巳年八月 向方相談廻松平薩摩守国産薬種類御当地并大坂表おゐて売捌候義二付大坂町奉行方懸合調

- ④ 安政四巳九月 紀伊殿領分産物売捌之義調

- ⑤ 安政四巳年九月 寄合妻木民之丞陶器類売捌之義調

- ⑥ 安政五午年四月 加藤大蔵少輔領分国産蠟売捌之義調

- ⑦ 安政五午年四月 酒井左衛門尉領分羽州庄内二而造込候酒江戸廻し致勝手遣二相用候義二付達書

- ⑧ 安政五午年六月 井伊掃部頭殿国産陶器外七品売捌方之義調

- ⑨ 安政五午年六月 神田小柳町三町目代地市兵衛箱館産物御用皮類手当方申渡候義二付、箱館奉行方懸合調

- ⑩ 安政五午年八月 堀江町三町目庄助蝦夷地昆布直売願之義二付箱館奉行方懸合
- ⑪ 安政五午年十月 小舟町壱町目太助外式人砂糖問屋仲間取極冥加金上納願并右太助紀伊殿国産物糖引受候義二付調

- ⑫ 安政六未年三月 細川越中守産物売捌方之義二付調

- ⑬ 安政六未年四月 向方相談廻濃州村々方焼出候陶器類売捌方之義、大沢豊後守方問合

- ⑭ 安政六未年五月 二条殿産物売捌用所之義二付調

- ⑮ 安政六未年九月 松平左衛門尉領分産物七島筵印銘之儀二付調

- ⑯ 安政六未年十一月 細川越中守領分生蠟売捌方之義調

- ⑰ 万延元申年閏三月 伊達遠江守領分国産蕨縄売捌方之義届 但書面差戻相成候事

- ⑱ 万延元申年八月 伊豆国島々産物売買町触之義調

- ⑲ 万延元申年八月 一条殿産物売捌之儀調

⑳万延元申年十月 佐竹右京大夫酒井雅樂頭松平隠岐守国産売捌之義二付調
第三

①万延元申年十二月 松平佐渡頭領分出産之延鉄売捌方之義調

②万延元申年十二月 尾張殿国産洪扇問屋限売捌候儀二付調

③文久元酉年二月 松平因幡守領分国産品売捌方之義調

④文久元酉年四月 紀伊殿国産江戸問屋口銭相除度旨御城付方懸合調

⑤文久元酉年五月 向方相談廻 松平隠岐守領分織出候縞木綿問屋家別払売捌調

⑥文久元酉年八月 右同断 水戸殿国産売捌方之義二付御差図振申上

⑦文久元酉年八月 稻葉伊予守領分産物青筵売捌方之義二付調

⑧文久二戌年二月 水戸殿国産油売捌場所替之義二付御城付方懸合調

⑨文久二戌年四月 二条殿領地瀬戸物売捌場所替之義調

⑩文久二戌年八月 浜吉組と唱候問屋共引受売捌候産物入津次第箱館会所江届出
改受候様箱館奉行方懸合調

⑪文久二戌年十一月 尾張殿国産洪扇御当地廻取扱差止候義二付御城付方達又

⑫文久二戌年十二月 尾張殿国産築地浜屋敷締所取建人売捌方之義調

第四

①産物売捌方之儀二付評議書 安政二卯年十二月 産物売捌方之儀二付評議書

②水戸殿領分仕切金之儀問屋共自尽之取計無之致度旨御城付方懸合

第一

①嘉永五子年二月 松平肥後守国産石黄売捌方之義二付調
(扉小口見出し)

嘉永五子年二月

会津国産石黄買捌方之

義二付調

(朱書)『書』

東条八太夫

(6)

(朱書)

『十月三日差出、同四日館市右衛門江調二下ル、』

松平肥後守内

小森久太郎

会津国産之石黄、本町

四町目葉種渡世致し候家持

堺屋九左衛門と申者二為売捌、

致掛札候様申付候、此段御届

申上候、以上、

松平肥後守内

十月三日

小森久太郎

┌

(7)

寛政七年町奉行池田筑後守様江
左之通差出之、

米沢領内方御当地江差出候

横麻上下地并絹類之品々、是迄

為試少々ツ、為差登候処、本

材木町書町目藤兵衛店辰次郎

と申者差配為致候付、辰次郎

宅江産物会所と掛札仕候様申付候、

依之此段及御届置候様、弾正

大弼申付候付申上候、以上、

上杉弾正大弼内

五月朔日

高橋平左衛門

(朱書)『子三月十七日附札案取調、高林右太夫ヲ以上ル、

即日御下二付、十九日留守居呼出候事』

(9)

附札案

(朱書)

『子三月十九日、会津留守居小森久太郎へ達』

書面石黄之儀是迄和産無之、

本町組薬種問屋・大伝馬町組

薬種屋共忝合見極兼候二付、

医学館江鑑定之儀相達候処、

舶来之品二不劣様相見候へ共、

砒石を以焼製塗物絵具等二

用候迄二而、服薬二八不相成旨申越、

引請人九左衛門義薬種問屋

仮組之もの二付、直荷物引受

候段は薬種屋共差障無之

旨申立候間、売捌之儀差支無之候、

尤(朱書)「別紙雛形之」(朱抹)「町年寄共取調之節申立」

候」通之文言二而掛札致候儀も

不苦候、此上引請人相替候ハ、

可被相届候、

雛形

「(11)」

(朱書)『亥十一月七日差出』

絵具合羽塗物受合

会津

水干石黄売捌所

国産

堺屋

九左衛門

「

(朱書)『亥十一月七日差出』

会津国産石黄売捌取調

之儀日延申立候趣申上置候書付

舘市右衛門

先月四日会津国産之石黄、

本町四町目薬種渡世致し候

堺屋九左衛門と申者江、為売捌

掛札致し候様申付候旨、松平肥後守殿

家来御届書并別紙共御下

「(12)」

被成、取調可申上旨被仰渡候、
 依之一忝両組薬種問屋行
 事共江相尋候処、是迄会津
 産之石黄取扱不申候間、見
 本九左衛門方差出候様被 仰付
 度旨相願候砌、九左衛門旅行二付
 延引、先月廿七日帰着罷出
 打合取調候処、此節屋敷方
 九左衛門方江相渡り候分、水
 飛細末計二而生石黄無之、
 性合相分り兼、其旨九左衛門方
 屋敷掛役人江申立候処、左候ハ、
 国元江立越、生之見本持参
 相見セ可申旨、掛り役人塩沢
 久兵衛申聞候間、右品着迄
 日延奉願候段、問屋行事并
 堺屋九左衛門一同申立之候、
 右之通日延申立、彼は延引
 仕候二付、此段申上置候、以上、
 亥十一月
 館市右衛門
 〱 (14)

「(扉)

会津国産石黄売捌之儀取調申上候書付
 書面之趣御掛合被成下候間、品持参
 医学館江罷出候様可申渡旨、并掛札
 取調之儀相心得可申段被仰渡奉
 承知畏候、
 子二月廿四日
 館市右衛門
 〱 (15)

会津国産之石黄、本町四町目薬種致渡世候
 家持堺屋久左衛門と申者二為売捌、致掛札
 候様申付候旨、松平肥後守殿小森久太郎
 御届并例書

寛政七年池田筑後守殿御勤役中
 米沢領内麻上下地并絹類、本材木町
 寺町目藤兵衛店辰次郎江差配為致、
 産物会所と掛札仕候様申付候旨、上杉
 弾正大弼殿家来差上候書付写
 右両通、去亥十月御下ヶ被成、取調被仰渡候
 〱 (16)

間、薬種問屋共相調、左二申上候、

本町組薬種問屋

大伝馬町組薬種問屋

行事共

右は此度会津国産之石黄売捌人

本町四町目堺屋九左衛門、看板差出取捌
差障無之哉御尋之处、和産之石黄と申ハ
初而承候二付、右九左衛門江掛合候处、水干細
末之品為相見、何共相分り兼候間、追々
日延相願、今般会津表方生之品并製法
仕上り共来着仕、一覽評議仕候得共、私共儀
是迄唐方相渡候石黄而已取扱、和産
之品は新薬之事二候得は、真（朱抹）依（朱書）『偽』難見極、
錠と石黄と治定仕候御請難申上、依之
御医師方鑑定被仰付候歟、又は私共より
医学館江相伺候様可仕候哉、御医師方鑑定
候ハ、和産石黄と相定候得は、売捌方二付
問屋共差障無御座候と申立之候、

本町四町目太助地借

堺屋

一、 両組薬種問屋仮組

九左衛門

右九左衛門申立候は、去亥五月中屋敷役人并
会津城下薬店之者罷越、右石黄売捌
被相頼候節忝合承候处、弘化四未年始而堀
出し、其後製法手を尽し、去ル酉年方
水干致塗物・合羽・絵具杯二相用候处、
唐方持渡之品同様之由、然は会津産
石黄と被存候得共、猶両組薬種問屋共江
申達、差図可受心得之内、今般御調二相成、
此節生之見本取寄両組行事并私
儀も立合一見仕候处、唐方持渡之品と
見競、当時水干仕候品は形子似寄二而、
色合赤ミ有之、火二入候得は煙り・香ひ等は
格別不相替、尤あく拔水干仕候得は持渡
同様可相成哉、乍去薬用二は未た免し不申
候間、慥二は申上兼、売買之儀は両組問屋と
熟談差図を受、何在共可仕心得二候旨
申之候、

右取調候处、前書之通御座候、堺屋九左衛門
申候迎も慥請合不申、両組問屋行事共
是迄和産之石黄と申儀取扱不申、
真偽難見極、御医師中鑑定相願候趣、
無拋儀二奉存候、乍去差当右躰之義
御役所方（衍）「御役所方」御医師中江御懸合二相成候

振合も無之、且は品御取寄其外御往復御手重之儀二付、右は両組問屋共方医学館江相伺、治定之返答可致と被仰付、勿論其二而一応医学館江御達被下置、其上行事共差出候様仕度奉存候、依之一卜先御渡被成候書付式通返上仕、此段申上候、以上、

(朱書)

『但例書寛政七 years 上杉弾正大弼殿家来御届産物会所掛札為仕候趣、其節私共江御下ヶ無之候哉、書面相見不申、為念場所本材木町名主江も相尋候処、其頃之書物多分焼失仕難相分旨申之候間、猶諸色掛名主共取調可申上処、今般之石黄真偽論中二付、右掛札之儀深相調不申候、』

子二月

館市右衛門

鰭付

書面会津国産石黄売捌之義、町年寄取調候趣二而は、是迄和産之石黄薬種屋共取扱候儀無之二付、御医師方鑑定相願候段、無余儀次第二御座候間、別紙之通多紀安良江御懸合有之候上、右渡世筋之もの石黄持参、医学館江罷出候様可申渡と、町年寄江被仰渡可然哉二奉存候、依之御懸合書案相添此段申上候、

但右鑑定相済、弥売弘不苦候ハ、懸札等之義は尚先例取調可申上候、

子二月

仁杉八右衛門

東条八太夫

中村次郎八

東条八太郎

(朱書)

『子二月十四日為持遣ス』

〔多紀安良殿

遠山左衛門尉

会津国産之石黄、本町四町目

薬種渡世九左衛門二為売捌致掛札候様

申付候旨、松平肥後守留守居方拙者

御役所江届出候付、町年寄共江申渡

本町組薬種問屋・大伝馬町組薬種

屋共并九左衛門をも為相尋候処、右は

「(22)」

「(20)」

「(21)」

去亥五月会津城下薬店之もの、
右石黄壳捌之儀九左衛門江申談候二付、
品柄相改候処、於同国弘化四未年
始而掘出し製法致し候品之由二付、塗
物・合羽・絵具等二相用試候処、粗
唐方持渡之品同様二候得共、和産
石黄と申は是迄取扱不申候間、
薬用二は不相用、就而は御医師
方鑑定有之、和産石黄と相定
候得は、壳捌方二付問屋共差障
無之旨申立候段、町年寄共申聞
候付、近々医学館江右渡世筋之
もの、右石黄持参罷出候様申渡候間、
御鑑定之上薬品二候ハ、壳捌之儀
承届不苦候哉、委細二被御申聞候様
致し度此段及御掛合候、

子二月

御書面之趣致承知候、会津産石黄
之儀渡世筋之者持参罷出候間、篤と
鑑定致し候処、当時舶来之品二劣不申
様相見候得共、素々石黄之儀は砒石
を以焼製、塗物・絵具等二用候迄二而
薬用二は不相成儀二付、右会津産
之品も同様絵具類二用候は格別、薬
用二は相成兼申候、此段及御答候、

子閏二月

多紀安良

（扉）

会津産石黄之儀医学館御答之趣申渡奉伺候書付

書面伺之通可取計旨被

仰渡奉承知畏候、

子閏二月九日

館市右衛門

会津産石黄之儀、医学館江御掛合被成下候
処、同所御答下ヶ札之趣、

当時舶来之品二相劣不申様相見候得共、

素々石黄之儀は砒石を以焼製、塗物

絵具等二用候迄二而薬用二は不相成儀二付、右

会津産之品も同様絵具類用候は格

別薬用二は相成兼申候旨、

右依之、御答之通薬種問屋行事并売捌人
堺屋九左衛門相心得、取捌方否今一応返答
書可差出旨、申渡候様可仕候哉、則別紙申渡
案奉入御覧、御渡被成候御掛合書返上仕、此段
奉伺候、以上、

子閏二月

館市右衛門

申渡案

会津国産之石黄、本町四丁目薬種渡世
堺屋九左衛門掛札致し売捌之儀、薬種問屋
行事一同先日取調候処、和産石黄と申ハ
是迄取扱不申候間、薬用には不相用、就而は
御医師方鑑定相願候二付、御奉行所より
医学館江御掛合仕成下候処、御答之趣左
之通、

「(27)」

会津産石黄之儀渡世之者持参罷出
候間、篤と鑑定いたし候処、当時舶来之
品二劣不申様相見候得共、素々石黄之
儀は、砒石を以焼製、塗物・絵具等二用候
迄二而、薬用二は不相成儀二付、右会津産
之品も同様絵具類二用候は格別、薬用」
二は相成兼申候、
右之通相心得取捌方否今一応返答書
可差出候、

子閏二月

「(28)」

上

館市右衛門

会津産石黄之儀、昨四日医学館江
薬種問屋行事共呼出有之、鑑定
之筋は 御奉行所江御達相成候旨
被申渡、見本之儀は相下り候旨昨夕
行事共届出申候、即別紙届書奉
入御覧候、以上、

子閏二月五日

館市左衛門

「(扉)

上

「(30)」

以書付奉申上候

一、先月廿五日当 御役所江被召出、会津

産石黄鑑定之儀医学館御役所江

御伺申上候様被 仰付、則翌廿六日見本

相添御伺申上候処、今日御呼出シ二付、

罷出候処、鑑定筋之義は

御奉行所様江御達二相成候間、追而

御沙汰可有之旨被 仰渡、見本之義は私共江

御下ケ二相成申候、此段御届奉申上候、以上、

本町組薬種問屋

行事

伊勢屋ひて

後見

嘉永五子年閏二月四日

与兵衛印

御伝馬町薬種屋

行事

大坂屋源八

店預り人

太兵衛印

仮組之内

堺屋

九左衛門印

館

御役所

（扉）

会津国産石黄売捌之儀再応取調申上候書付

館市右衛門

（33）

会津国産之石黄、本町四丁目薬種致渡世候

家持堺屋九左衛門と申もの二為売捌、致掛札

候様申付候旨、松平肥後守殿内小森久太郎御届

書并掛札例書差上、先達而取調被仰渡候処、

役所問屋共証合見極兼、医学館江御掛合被成

下、多紀安良老御答之趣、当時舶来之品二相劣

不申様相見候得共、素々石黄之儀は、砒石を以

焼製、塗物・絵具等二用ひ候迄二而、薬用二は不相

成儀二付、右会津産の品も同様絵具類二

用ひ候は格別、薬用二は相成兼候段被申越候趣

被仰渡候間、此旨相心得取捌方否可申立旨
申渡、再応取調左二申上候、

本町組薬種問屋

大伝馬町薬種屋

一、行事共

右兩組薬種問屋仮組

本町四丁目太助地借

堺屋

九左衛門

下ケ札

右は前書医学館御答之趣奉承知、取捌
方之儀、右品引受人堺屋九左衛門儀、兩組薬種

問屋仮組之者二付、直荷物引受方手順宜

敷、同人売捌之儀於兩組問屋共差障候儀

無御座候段、尤薬用二は相成兼候旨被仰渡候間、

掛札雛形

繪之具・合羽・塗物請合

会津

国産 水干石黄売捌所

堺屋

九左衛門

右之通、掛札仕取捌可申旨申之候、

一、依之掛札之儀例相調候処、寛政七卯年上杉

家国産米沢横麻上下地并絹類品々、

本材木町壺丁目藤兵衛店辰次郎江差配

為致、同人宅江米沢産織物会所と掛札為

仕候旨、同家来高橋平左衛門御届申上、池田

筑後守殿御承被置候、右辰次郎跡追々相替り、

当時富沢町玉屋久五郎と申者、米沢産物

会所掛札仕取捌罷在候旨、右町名主源六

申之候、

右取調候処、前書之通御座候、掛札之儀例も有

之、殊二此度之儀は薬用二不紛様、旁右掛札

被仰付可然、尤医学館御贈答之趣肥後守殿

家来江も被仰渡、九左衛門取捌御聞届可被成

下候哉、且追而万一同人引替、余人江申付候節は

猶又御届可仕旨被仰含候ハ、御取締可然哉と

奉存候、即差出候掛札雛形相添、此段

申上候、以上、

子三月

館市右衛門

下ケ札

先達而肥後守殿家来江届書二、本町

四町目薬種致渡世候家持堺屋九左衛門と

有之候処、右は家持二て無之、本文之通

右町太助地借二而御座候旨、掛り名主申之候、

「(扉)

雛形書上

「(37)

絵之具・合羽・塗物請合

会津 水干石黄壳捌所

国産

堺屋

九左衛門

右之通相認め候而、兩組問屋共二おゐて

差障無御座候、以上、

「(39)

本町組薬種問屋行事

伊勢屋ひて

後見

嘉永五子年三月

与兵衛[㊞]

大伝馬町組薬種屋行事

大坂屋孫八

店預り人

太兵衛[㊞]

「

(朱書)

『享保十四酉年間九月町触

覚

一、薬種之儀、式拾五人之薬種問屋共之外は、上方

表・在方より出候薬種共二直荷引請候義

停止二申付候処云々、

右町触品々薬品名目二石黄有之、見合可成

御触二有之、右町触写前二綴入有之候事、』

「(40)

「

(朱書)

『寛政七卯年

池田筑後守殿御渡』

米沢領内方御当地江差出候横上下地并

絹類之品々、是迄為試少々被差登候処、

此度本材木町寺町目藤兵衛店辰次郎と

申者江、右品々捌方差配為致候二付、右

辰次郎宅江米沢産織物会所之懸札

仕候様申付候、依之、此段御届および置候様

弾正大弼申付候付申上候、以上、

「(41)

五月朔日

(朱書)
『右町年寄方差出』

上杉彈正大弼内
高橋平左衛門

┌

②嘉永六丑年三月 久世大和守殿領分茶荷物売捌方之義調
(扉、小口見出し)

「 嘉永六丑年三月

久世大和守殿領分国産之儀二付
館市右衛門より差出候調書并例書

(朱書) 『式』

└

└ (42)

└

下総国関宿産物茶荷物取捌之儀
相調申上候書付

館市右衛門

久世大和守殿御領分下総国葛飾郡
関宿産物之内茶荷物之儀、靈岸嶋

└ (43)

北新堀於中屋敷為取捌度、兼而出入
致候大伝馬町壱町目利兵衛地借茗荷屋
善五郎勢州住宅二付店支配人太助・伊
勢町留蔵地借惣市屋ひさ後見
三保蔵江為取扱、尤町方直売捌候儀ハ
無之、右之ものより其筋問屋共江売捌候旨
御届書・例書共御下ヶ被成取調被仰渡
候間、左二申上候、

└

茶問屋壱番組行事

伊勢町伊兵衛地借

瀬兵衛勢州住宅二付

店支配人

徳兵衛

外傭人

└ (44)

一、

同式番組行事

大伝馬町壱町目

利兵衛地借

かつ後見平兵衛煩二付

代

由兵衛

外傭人

└

右は前書関宿産物茶荷物之儀、
北新堀御中屋敷二おゐて御出入仕候大伝
馬町壱町目善五郎店支配人太助・伊勢町
ひさ後見三保蔵取扱、町方直売不仕
荷物着次第茶屋共江通達有之、
入札払二相成候得は、一統差障候儀無
御座候旨申之候、

右取調候処書面之通御座候、町方直売
無御座候、依之御渡被成候書面式通返上
仕、此段申上候、以上、

丑五月

館市右衛門

例書

天保十二丑年正月八日、町御奉行遠山
左衛門尉様江御届書差出候処、同月
廿三日御附札相渡（朱書）『濟』

下総守領分越前国鯖江領産物
為取捌度、兼而致出入候江戸上楨町
家主喜四郎店左右平江右産物
別紙品々為引受為取捌候、尤町方
直売捌候儀は無之、右之もの方夫々
問屋共江売捌候儀御座候、此段御届申上候、
以上

正月八日

間部下総守家来

田子堅二郎、

御付札

書面之趣問屋行事共相糺候処
上楨町喜四郎店左右平方、素人売は
決而不致、荷物着次第問屋共江及
通達、定法之通入札払相成候上は
差障り之筋無之段申立候間、書面
之趣承置候、猶問屋共江諸事申合
取計候様左右平江可被申合候、

└ (45)

└

└ (46)

└

└ (47)

└ (48)

③嘉永六丑年九月 尾張殿国産瀬戸焼物二属候美濃焼もの抜荷物之義二付御城付
方掛合調

「(扉、小口見出し)」

嘉永六丑年八月

尾張殿国産瀬戸焼物二属候

美濃焼物抜荷物之義御城附方

掛合調

「(朱書)『三』」

東条八太夫」

「(3)」

(朱書)

『九月十六日衛作を以御渡、取調候様被仰渡候』

「池田播磨守殿

尾張殿

御城附

美濃焼物之儀、往古より尾州表江相廻、

尾張殿国産瀬戸焼物と一手二御府内

瀬戸物問屋共江積下来候義二候処、

美濃焼物之内四拾五箇前頭締筋

抜荷物二致し、水野出羽守領分三州

鷲塚村船積渡世八次郎と申者

所二有之候付、積出方差留置候、然処

右荷物之内八箇、馬場大助知行所

濃州釜戸村弥兵衛方本所相生町

寺町目弥三郎地借嘉兵衛江差送候

荷物之由二而、同人儀御府内瀬戸物問屋

に付、去ル亥年十組問屋御再興之

姿を以、美濃国他領より積取候荷物を、

尾張殿役人之申聞二任セ船積方差留

置候は、八次郎心得方不埒二付、屋形

御城附江懸合候上及出訴、八次郎を

相手取御吟味を請候趣、一印之通

嘉兵衛方八次郎江申遣、猶又三州平坂

漆問屋共江も、右之義二付尾張殿

役人も如何成行セ候も難計忤と之趣、

二印之通申遣候由二而、八次郎儀は殊

之外驚入、領主役場江申出候趣を以、

出羽守家来方右荷物取計方之儀

尾州表江申越候、然処美濃焼物

之儀は、享和之度瀬戸焼物尾張殿

蔵物二致し候節、濃州竈屋共方

段々相願、笠松陣屋方尾張殿役場江
添翰を以、瀬戸焼物は一手二積下
筈相成居、既天保四巳年御料

濃州土岐郡村々方焼出候荷物、

南本所千田新田重右衛門方江差

送候儀二付、御府内瀬戸物問屋共方

別紙三印之通榑原主計頭殿

御役所江及出訴、其節四印之通御掛懸合

およひ、段（朱書）「々」御吟味御取調中、規定

相立熟談相整候付、五印之通訴状

申下、其後六印之通規定も相

立候処、右規定之趣相背猥直（朱抹）竄（朱書）「売」等

致し候者も有之候付、嘉永二酉年

厳敷取糺候以後、締筋之儀

七印之通笠松陣屋江請書差出

有之候付、今般拔荷之儀も笠松

を以て段々吟味相成候処、拔荷売

渡候者共夫々村役人等を以重々

恐入買戻二致し、以後心得違ひ不

致様厳敷申渡相成候処、右之内前頭

八箇之分八釜戸村弥兵衛義内々買

取候品二候処、嘉兵衛儀美濃焼物

締筋引離押晴積取候所存と

相見、弥兵衛江品々申遣候（朱抹）処（朱書）「故」、売主江

弥兵衛方今以不差戻候由二有之候、右は

嘉兵衛儀も美濃焼物之儀尾州瀬戸

物と一手締之訳乍相弁居、弥兵衛と申合、

驚塚村八次郎を威遣、差留置候

拔荷物を其戻積取可申心底と相見、

殊嘉兵衛方八次郎并三州平坂漆

問屋とも江申遣候書面之内二ハ、屋形江

対し不敬至極之文面も相見、其後

当七月も猶又八印之通八次郎江文通

候由二候処、右書面之内二も、屋形御城附江

及懸合と之儀、又は町人之身分二而御三家

国持領主坏と不遜之書面振も相見、

其上右書面二は、嘉兵衛瀬戸物問屋

被 仰付、冥加上ヶ金迄も被 仰付候と之趣も

相見候得共、問屋二は無之仮組二相聞、

左候得は冥加金上納被 仰付候訳二も

無之哉、夫是以之外不埒之次第二而、嘉兵衛

儀右躰偽言等を以威遣候故、弥兵衛荷物

売先之窯元方買戻方申聞候而も

不取用、延々二致置候哉二も相聞候間、美濃

「（6）」

「」

「（7）」

「」

「（8）」

「」

焼物ハ尾州焼物と一手之締二付、右
締を引離、別段二積取候儀ハ不相成趣、
嘉兵衛江嚴敷御申渡之上、可相成は三州
鷺塚村八次郎方二留置候八箇ハ、早々
解之儀申遣候様二と之趣も御申渡候様二
致度、別紙八（朱抹）数（朱書）『枚』相添、此段可及御掛合旨
役人共申候、

但本文尾濃焼物之儀は、去ル寅年
問屋之名目御差留、諸家国産
素人直売買勝手次第之筈被
仰出候節も、美濃焼物ハ瀬戸物二属、
笠松支配所之分も一手之締二而積下
来、此表を以てハ出入元瀬戸物問屋共
而已江売捌方申付候程之儀二候処、今般之
荷物を嘉兵衛躰締引離積取
候而ハ、尾濃焼物一般之崩二も相成候上、
御府内瀬戸物問屋を以ても難渋
之筋二相成候間、嘉兵衛儀此後右躰
之儀不致候様嚴敷御申渡方、御舍
被下候様致度候、

九月

尾張殿国産瀬戸物二属候美濃
焼物之内、本所相生町壱丁目弥三郎
地借遠州屋嘉兵衛儀、抜荷物積取
候儀二付、同人江御申渡品之儀、別紙二及御掛合
候付而は、問屋組合再興且冥加金等
之儀、東条八太夫江追々及内問合候
次第も有之候間、右一件同人江為御取
扱有之様致し度、此段申添候事、

九月

（朱書、以下同じ）

『一』本所相生町壱丁目遠州屋嘉兵衛方
三州鷺塚村八次郎江申遣候手紙写

『一』本所相生町壱丁目遠州屋嘉兵衛方三州鷺塚村

八次郎江申遣候手紙写

以急便得貴意候、春暖之節御座候処先以
其御地御盛店様御揃御勇剛可被成御座
奉歓喜候、毎々船積之儀二付御世話二相成忝
奉存候、然は去ル天保十二丑年十組諸問屋
諸株とも御取崩二相成候間、御触二基附

「（9）」

「」

「（10）」

「」

「（11）」

「」

濃州釜戸村米屋弥兵衛と申者江瀬戸物
買次為致候二付、戌年中同人方私店江、松印
荷札付之荷物八箇為積入候処、貴殿方二而、
尾州様方船積御差留二相成候間、預り置候旨、

「(12)」

同人江被申間候間、其後同人方度々御懸合
をよひ候得共、荷物積出二不相成趣申越候二付、
左候時ハ、余り不法之致方驚入候次第二候間、
虚実難相分儀二奉存候、

御公儀様御触二背候姿不容易義二付、

米屋弥兵衛呼寄虚実相調候処、貴殿方方

慥成一札被差出候、則書付持参、此度出府
いたし、猶々驚入奉存候、戌年中も御府内
諸色潤沢いたし候歟と之御趣意を守、仕入
いたし候品、殊二去ル亥年三月十組問屋現在
之姿を以

「

御再興御調之節、米屋弥兵衛義ハ

御公儀様江瀬戸物買次之名前書上二相成、

御府内諸色潤沢いたし候様御深重之

御主意方、私店儀も乍恐

御公儀御膝元之町人、現在之姿を以瀬戸物
問屋被仰付、殊二今般御冥加御上金迄も被
仰付、無滞御上納仕候、其瀬戸物問屋江美濃国
他領より積入候荷物を、尾州様方被差留候儀ハ
不法之致方、且ハ貴殿方二而も

「(13)」

御代太平之御国恩を被思召候ハ、尾州様が
大切歟、御公儀様御触を背候而も宜敷

御座候歟、御勘考可被成候、左候時ハ譬尾州様方
御差留二相成候共、一応ハ江戸表江御問合之上
御取計被成候こそ可然歟と奉存候、其御問合も
無之、尾州様御役人之申二任セ御取計被成候儀ハ、
近頃尾州様御役人衆御同心二而御取扱之御儀と
奉存候間、片時も捨置かたく次第二奉存候、定而
尾州様方御差止被成候出役之御姓名書御控
可有之候間、此書状着次第委敷出役之御姓名書、
并其節次第急便二而被 仰越可被下候模様柄二
寄候ハ、市谷尾州様御屋形御城使江御掛懸合
之上、

「

御公儀様江奉御訴訟、貴殿様二も乍御氣之毒
御八判御尊判奉御願、江戸表江相手取商法
相立候様仕候間、其心得二而御返答可被成候、先ハ
右之御懸合申上度如斯御座候、恐々謹言、

遠州屋

三月廿四日

嘉兵衛

片山八次郎様

『二』 本所相生町一丁目遠州屋嘉兵衛方三州

平坂漆問屋共江申遣候手紙之写

『二』 本所相生町壹丁目遠州屋江三州平坂漆

問屋共江申遣候手紙写

然ハ近頃御用繁之中恐入候得共、御隣村

鷺塚村片山八三郎殿不法之致方二而、御触二相背

江戸表其品々其筋問屋江荷札付候、

私店瀬戸物荷物差留願居候始末、

別紙之通御同人江急便を以及懸合候得共、

不法之致方被致候方二御座候間、自然

返答も等閑二被致候も難計奉存候二付、

任御懇意二御両家様江御頼申上候間、

呉々も御繁用之所恐入候得共、別紙之通

御堅察被成下、急々御懸合、先方存意

御両家様方也被仰越可被下候様奉願上候、

内済行届不申候節ハ、御近村迄御難渋二

相成、私方二而八居附候公事入用等も

聊之事二御座候得共、八次郎殿二ハ不及申、

尾州様役人おゐても如何成行候も

難計奉存候間、深御勘考之上、可相成ハ

双方穩便二致度候得共、御返答二寄候而ハ

十組問屋御再興之御触れを背候血祭二

不相成候様、御両家方御利解可被下候、

先ツハ右御頼旁如此御座候、以上、

瀬戸物屋

三月廿六日

嘉兵衛

嘉造

太田伊八様

鍋屋常蔵様

「(16)」

『三』 天保四巳年瀬戸物問屋共方御出訴書面写

『三』 天保四巳年瀬戸物問屋共方御出訴書面写

乍恐以書付奉願上候

一、十組瀬戸物問屋行事浅草茅町貳丁目

宗右衛門店藤七・同通壹丁目藤兵衛店

善助・同牛込牡丹屋敷忠兵衛店金右衛門

煩二付代治兵衛申上候、

一、濃州土岐郡村々方焼出シ候焼物之儀、

先年

尾州様御国産瀬戸物御同様二御取締

有之候所、其後釜元方直積等仕候儀

有之、混雜仕候筋も御座候二付、其砌問屋共方

「(17)」

奉願上、猶又御一手之御取締二相成、是迄万端取締宜相続仕来候、然ル処笠松御代官野田斧吉様御支配所

之内同所儀七・同土岐郡円治願上

笠松表二而御取締二相成、御当地

一橋様御領知、南本所千田新田重右衛門方江積送、瀬戸物問屋共江御渡二相成候旨

御勘定所様より

尾州御屋形様江御懸合被為在、依之

問屋共江右之趣被 仰聞候二付、於問屋共二も

難渋至極仕候間、是迄之通被成下置

候様、從

尾州様御懸合被成下置候様奉愁訴候、

右之通御改法二相成候而ハ問屋共一同甚以

難渋至極仕候二付、乍恐御訴訟奉申上候、

則巨細之訳左二申上候、

一、十組御定以来蒙御国恩冥加至極難有

問屋共相続仕罷在、并

尾州様よりも厚御憐愍被成下置難有

仕合奉存候、然処去ル丑年大火之節、

問屋共多分類焼仕、瀬戸物蔵數十ヶ所并

置場余多有之候分不及申上焼失仕、

難渋仕候砌、從

尾州様御世話被為在、美濃焼物沢山二

積下二相成、其上右二付仕入方金子等

莫大二拝借仕、御影を以無滞商売相続

仕候仕合二御座候、殊二美濃焼物之儀ハ

焼失仕候焼物之内二而も多分二御座候得共、

前条之通御引立被成下置候二付、聊

無滞代金等相納来申候、然処此度

御改法二相成候而ハ、甚以難渋至極仕候、

殊更右土岐郡釜元七ヶ村之内下石・

市ノ倉兩所方ハ、此度御改法二相成候而ハ

必至と難渋仕候二付、何卒是迄之通二

相成候様申立呉候様、問屋共江厚相頼

申越候儀二而、釜元不残納得仕候儀とも

相見不申、内輪不穩様子二相聞申候、

前文申上候千田新田重右衛門方御渡之趣二

御座候得共、

尾州様御国産瀬戸物之儀ハ、問屋とも

之内四人江取扱被 仰付、

紀州様御蔵入瀬戸物之儀も問屋之内

兩人江被 仰付、諸事取締仕候儀二

御座候而、是迄問屋共之外之者差配仕

下 ケ 札

「(18)」

「(19)」

候儀無御座候処、此度重右衛門儀右様之節二
相成候而ハ、一統難渋至極仕候、右之通二
御座候二付無是非今般御訴訟奉申上候、
何卒是迄之通二相成、問屋共永久
相続仕候様、此上
御慈悲之御沙汰、偏二奉願上候、以上、

十組瀬戸物問屋行事

浅草茅町二丁目宗右衛門店

天保四巳年六月廿六日

訴訟人

藤 七

家主

宗右衛門

同

通巷丁目藤兵衛店

訴訟人

善 助

家主

藤兵衛

十組瀬戸物問屋行事

牛込牡丹屋敷忠兵衛店

金右衛門煩二付代

訴訟人

治兵衛

家主

忠兵衛

御奉行所様

(朱書)

下 ケ 札

『本文円治儀熟談済之上、美濃焼物
取締筋引請相成、都而円治手前江
荷物差出、夫方瀬戸焼物と一手二
積送候節「筈」相成候事、』

『四』天保五午年榊原主計頭殿江及御懸合候趣書取

『四』天保五午年榊原主計頭殿江及御掛合候趣書取

濃州焼物之儀、往古方尾州江相廻し締方

取計候上、国産陶器と一手二御府内瀬戸物

問屋共江積下来候儀二候処、今般右濃州

焼物尾州江相廻候儀ハ差止、御当地江別段二

積下売捌方取計度願之儀二付、一橋殿

領地南本所千田新田重右衛門地所借受

水揚致度旨申立候処、右之通二而は御府内

打越荷物二相当、於問屋共差支之次第等

有之候二付、右之儀ハ相止、重右衛門抱屋敷

深川扇橋芳次郎方江置場取建、江戸町

問屋共江売捌候共、於問屋共強而故障

可申立儀も有之間敷哉之儀、問屋共江

御理解御申聞有之旨申出候、右ハ今般申立

之趣二而ハ問屋共故障可申立筋も無之哉二

候得共、尾濃焼物兩段二引分レ売捌候而は、

「(21)」

「(20)」

双方相競直段売崩候儀、眼前二有之、
左候而ハ其成行二寄、領分方竈元之者共
大勢相続相成兼候儀出来可致も難計、
歎々歎、且尾張殿收納二も差響迷惑
之次第二有之、一躰濃州焼物之儀は元来
尾州瀬戸焼物別家竈二而、末孫之者共
於濃州焼立候儀二有之候付、往古方尾州
瀬戸物二属シ、彼地方一手二連綿積下候儀二
有之、殊更享和之度尾州焼物蔵物二
相成候節も、濃州竈屋共方段々相願、笠松
陣屋方尾張殿役場江添翰を以懸合之上
一手二積下候筈相成、当時迄右之通取計二
有之候処、此節二至リ、元来之約定亡却いたし、
別段二積下度旨申立候段、其時々勝手俣之
取計方不都合之次第二有之、是迄一手二積下
候共、不締之筋は無之候間、何れ二も是迄之通之
仕法二取計候様致度、尤問屋共方も御役所江
可申立候得共、前文之趣宜御差含御座候様
致度、此段及御懸合候様役人共申候、

三月

『五』美濃焼物一件御下ヶ願立候写

『五』美濃焼物一件御下ヶ願立候写

乍恐以書付奉願上候

十組瀬戸物問屋行事通壺丁目藤兵衛店
善助・同牛込牡丹屋敷忠兵衛店金右衛門
煩二付代治兵衛、同靈岸島町七兵衛店藤兵衛
申上候、濃州土岐郡村々方焼出候焼物之儀、
先年

尾州様御国産瀬戸物御同様二御取締有之
候処、其後竈元方直積等仕候儀有之、混雜
仕候筋も御座候二付、其砌問屋共方奉願上、
猶又御一手之御取締二相成、是迄万端取締宜
相続仕来候、然処笠松御代官野田斧吉様
御支配所之内、同所儀七・同土岐郡円治願上、
笠松表二而御取締二相成、御当地
一橋様御領知南本所千田新田重右衛門
方江積送、瀬戸物問屋共江卸渡二相成候旨
従

御勘定所様

尾州様江御懸合被為在、何之問屋共江右之趣
被仰聞候二付、問屋共二おゐても難渋至極
仕候間、是迄之通被成下置候様、従
尾州様御懸合被成下置候様奉愁訴候、

└ (22)

└ (23)

右之通御改法二相成候而ハ、問屋共一同甚以難渋至極仕候二付、乍恐御訴訟奉申上候、則巨細之訳左二申上候、

一、十組御定以来蒙御国恩冥加至極難有、問屋共相續仕罷在候、并從

尾州様も厚御憐愍被成下置、難有仕合

奉存候、然処去丑年大火之節、問屋共多分

類焼仕、瀬戸物蔵數十ヶ所并置場余多有之

候分は不及申上焼失仕、難渋仕候砌、從

尾州様御世話被為在、美濃焼物沢山二積下二

相成、其上右二付仕入方金子等莫太二拝借仕、

御影を以無滞商売相續仕候仕合二御座候、

殊美濃焼物之儀ハ、焼失仕候焼物之内二而も

多分二御座候得共、前書之通御引立被成下置

候二付、聊無滞代金等相納来申候、然処此度御改法二

相成候而は、甚以難渋至極仕候、殊更右土岐郡

竈元七ヶ村之内下石・市之倉両所は、此度

御改法二相成候而は必至と難渋仕候二付、何卒

是迄之通二相成候様申立呉候様、問屋共江

厚相頼申越候儀二而、竈元不残納得仕候儀共

相見不申、内輪不穩様子二相聞申候、前文申上候

千田新田重右衛門方卸渡候趣二御座候得共、

尾州様御国産瀬戸物之儀は、問屋之内

四人江取扱被 仰付、

紀州様御蔵入瀬戸物之儀も兩人江被 仰付、

諸事取締仕来候儀二御座候而、是迄問屋共

外之者差配仕候儀無御座候、此度重右衛門儀

右様之筋二相成候而は、一統難渋至極仕候二付、

無是非去ル巳年六月廿六日御訴訟申上候得は、

訴訟上置候様被 仰渡、同七月朔日被 召出

御吟味二相成、追々御調御座候、然処竈元

願人惣代円治儀幸出府仕罷在候二付、其段

申上候処、為引合当四月十九日同人被召出、双方

御糺御座候処、前書千田新田百姓重右衛門方

美濃焼物置所二致度旨、竈元方願立之通

相成候而は、御府内を打越荷物二相成、十組仲間

規定二相触候間、差障之儀私共方申立候

に付、円治儀も右之段御利解之上相弁、右

場所相止、先達而御願濟二相成候竈元方、

御上納皿置所南本所扇橋代地町由兵衛店

由次郎方を置所二致度旨、猶又申立候所、

問屋外無株之者方江直積之荷物水揚げいたし

候儀、是以差障之趣申上候処、何れ二も及

示談二候様、双方江厚御利解被仰聞奉恐入

「(24)」

「(25)」

「(26)」

種々懸合仕候得共、行届不申候所、右円治
 外吉人方尾州名古屋表伝馬町家持清左衛門・
 同与助并私共相手取、美濃焼物前書由次郎
 方江直積廻仕、右置所江積困置、問屋とも
 入用之時々卸捌仕度、右願口無謂差障不
 申様其外種々難渋申立、
 御勘定御奉行所江之御願書等、八月中御代官
 野田斧吉様迄奉差上候二付、猶又私共
 并円治儀も被召出、懸合中同人儀今般
 下方二おゐて熟談内済仕度、右二付去々
 辰年中方差上置候願書類有之候而は
 彼は廉立不都合之儀も御座候二付、願書
 御下被成下候様、右
 御代官所江御願申上候所、御伺之上願之通願
 書類御下二相成候二付帰国仕名古屋表問屋共
 江も及示談度旨申聞候、何之於問屋共二も
 御吟味御願可申上儀無御座候間、何卒以
 御慈悲右願御下々被成下置候様偏奉願上候、
 以上

十組瀬戸物問屋行事

通壱丁目藤兵衛店

天保五年十一月廿日

願人 善 助

家主 藤兵衛

五人組 伝左衛門

名主三郎右衛門煩二付代

清 八

同

牛込牡丹屋敷忠兵衛店

金右衛門煩二付代

願人 治兵衛

家主 忠兵衛

五人組 利兵衛

名主勝太郎若年二付

後見弥八郎煩二付

右 勝太郎

十組瀬戸物問屋行事

靈岸島町七兵衛店

願人 藤兵衛

家主 七兵衛

五人組 儀 八

名主 孫 市

御番所様

『六』美濃焼物取締相附売捌仕法規定書写

『六』美濃焼物取締相附売捌仕法規定書写

- 一、笠松御支配所濃州土岐郡多治見村本郷・同村之内市之倉郷・同大畑郷、笠原村之内瀧呂郷・同平曾根郷・窯洞郷、下石村、高山村、久尻村之内高田郷、右五ヶ村焼物売捌取締所多治見村二相建、取締役同村円治相勤并村々世話人相建可申事、

但世話人人少之儀ハ、円治取計を以御支配江御届、其上相極、右セ話人給料之義ハ取締所方夫々相極遣し候事、

「(29)」

- 一、焼物根出方之儀ハ名古屋は勿論、諸国一統荷物送状二々取締所改判を以差送り可申事、

但改判無之荷物ハ篤と取調、不都合無之様村々世話人とも相心得、若不都合筋出来候節ハ、取締所立合取計可申事、

- 一、取締所諸雜費として、都而荷物代金之内惣高二而五歩も荷主方可相勤事、

但窯元方可相勤候而ハ、当時之振合二而八山元猥二売払、直段区々二相成、今般取締所江一手二引請取捌候ハ、直段も自然と相直り候上ハ、右之五歩相勤候様二可相成見込を以仕法相附、猶又不捌之品等之義ハ取締所方山元之者共江精々心添可申事

「

- 一、染付焼之義ハ定直段二も無之候故、山元締所江引請、直段仕切之節、諸雜用五歩懸り等も勘弁見込を以、直段相立可申事、

但後年二相成直段高下之節ハ、時々相場二准取計可申事、

「(30)」

一、本業焼染付焼徳利とも、江戸表江窯元方可直積之義ハ、是迄勢州桑名湊二而船積、尾州御蔵会所送り状を以積立罷在候処、已来ハ尾州名古屋・勢州桑名両所二而槎通宜敷方二而積立可申究、尤仕法試中之義二候得ハ、尾州表方可一手二積廻可申候、勿論桑名積之節ハ是迄之通尾州御蔵会所送状を以致船積候事、

但、是迄積入方両端二相成候而ハ、売方区二相成、自然と直段二拘り、直上ヶ懸合方も不行届、尾州表方可一手之積方二仕候ハ、直段懸合方も行届、自然と売上も出来可仕見込を以、熟談之上試として尾州表方可

「

一手積二仕、余計を以五歩ツ、差出候極、若積方仕法試中之内、尾州表二而差支

候節ハ、前頭之趣を以桑名湊方積立、差支無之様取計可申候、且野市場河岸より桑名湊江川下ヶ船賃并問屋場賃・荷包等諸入用、荷主方百箇二付金貳分相払来候、已来迎も右同様金貳分にて取締所江引請、窯元江余分相懸ヶ申間敷、且尾州

「(31)」

名古屋表江相廻、荷物一手積二相成候上ハ、尾州様御定之通、壹箇二付銀壹分ツ、山元荷主方相勤可申処、試中ハ取締所より荷物壳励、御上納方相勤、山元一同承知仕候上ハ、荷主方相勤可申究、

一、江戸表江山元直積荷物、名古屋二而積方出入之義二付、山元荷主共疑惑無之為取締所よりも馳出、双方申合取扱可申事、

一、下石・市之倉兩村方製焼出し候本業物之分ハ焼品数多、殊二下直之品二而、取締所江差越候而ハ駄賃二重二も相成、窯元為筋二不相成、何之一手取締名目二而改判を請、荷物送方ハ是迄之通取捌候事、

但尾州表江差送り不捌品有之節ハ、御蔵元江申出候ハ、其時々取締所江も及示談、夫々荷物引請方割賦、荷主立合直段等取極候ハ、兩村格別為筋二相成候付、五步差出候事、

一、取締所江取立候五步之義ハ、右を以無代御上納皿永々相納、且取締所并村々セ話人名古屋江往来諸雜費仕払、引残之分ハ

「(32)」

取締所相積之為積金二いたし候事、右之通尾濃申合規定仕候、若双方不槎通之義御座候節ハ、猶又熟談之上、槎通方取計可申対談、當時為試右仕法を以約定仕、然上ハ双方とも已来実意を以申合、窯元為筋專一二いたし、諸荷物壳捌方之義精々心配仕槎通相成候様可仕、為約定連印一札如件、

天保六年

未三月

前規定之趣、山元一同承知納得仕候処、猶前箇ヶ条之通試中山元身分二取不都合之筋出来候節、何時二而も弁利之方江取直シ可被下候、仍之調印差出候処仍如件、

多治見村本郷

未三月

嘉兵衛印

彦右衛門印

文十郎印

初右衛門印	庄兵衛印	平助印	定助印	伊助印	宇右衛門印	半右衛門印	半兵衛印	常藏印	七兵衛印	助吉印	政兵衛印	周八印	久助印	重右衛門印	彖右衛門印	惣右衛門印	伊藏印	源助印	順助印	嘉右衛門印	宇兵衛印	宇八印	利平印	京助印	新五印	繁八印	藤九印	為八印	利八印	忠八印	笠原村窯洞郷	作兵衛印	藤十印	佐右衛門印	文七印	民吉印	定七印	利兵衛印	嘉助印	同平曾根郷	豐平印	半重印	權藏印
-------	------	-----	-----	-----	-------	-------	------	-----	------	-----	------	-----	-----	-------	-------	-------	-----	-----	-----	-------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	--------	------	-----	-------	-----	-----	-----	------	-----	-------	-----	-----	-----

「(35)

「

「(34)

「

「(33)

源藏印

鐵藏印

周藏印

嘉藏印

庄兵衛印

幸助印

治右衛門印

嘉平印

同瀧呂郷

徳右衛門印

定助印

政藏印

源六印

喜兵衛印

与市印

清兵衛印

当蔵印

重兵衛印

富士印

勇七印

五助印

佐右衛門印

利助印

丈助印

半七印

五郎右衛門印

勘兵衛印

階ノ助印

源七印

嘉右衛門印

久尻村之内高田郷

甚左衛門印

弥右衛門印

增右衛門印

源藏印

常右衛門印

藤兵衛印

丹治印

永治印

与右衛門印

弥平印

伊八印

善七印

惣八印

L

$$\begin{pmatrix} 3 \\ 6 \end{pmatrix}$$

L

$$\begin{pmatrix} 3 \\ 7 \end{pmatrix}$$

小右衛門印
 富吉印
 流助印
 六右衛門印
 浅蔵印
 嘉平印
 新五印
 増蔵印
 藤左衛門印
 初右衛門印
 銀三郎印
 権平印
 三津蔵印
 善右衛門印
 藤吉印
 惣十印
 与蔵印
 仙次郎印
 源右衛門印
 伊右衛門印
 豊助印
 忠右衛門印
 勝蔵印
 弥兵衛印
 藤右衛門印
 平助印
 利兵衛印
 清左衛門印
 多治見村之内市之倉
 富蔵印
 嘉兵衛印
 庄兵衛印
 与市印
 半蔵印
 民蔵印
 治平印
 定助印
 勝助印
 直助印
 平六印
 与右衛門印
 林助印
 岩吉印
 直七印

┌

┌(39)

┌

┌(38)

┌

勘助印
 札助印
 安五郎印
 幸四郎印
 春蔵印
 嘉六印
 九平印
 佐蔵印
 利助印
 佐助印
 文右衛門印
 弥平印
 半兵衛印
 初右衛門印
 安兵衛印
 藤兵衛印
 助蔵印
 文蔵印
 重吉印
 広助印
 五郎助印
 和蔵印
 五郎右衛門印
 久蔵印
 富吉印
 和助印
 儀兵衛印
 喜助印
 多治見村之内大畑郷
 市蔵印
 半助印
 市助印
 儀平印
 高山村
 甚四郎印
 半治郎印
 小兵衛印
 下石村
 柳助印
 折右衛門印
 源蔵印
 千代助印
 貞助印
 勘兵衛印

└

└
(41)

└

└
(40)

作助印
甚右衛門印
磯吉印
磯右衛門印
左平治印
浅吉印
清助印
利兵衛印
長平印
常四郎印
甚七印
松蔵印
源右衛門印
嘉蔵印
市郎右衛門印
半蔵印
半兵衛印
角蔵印

「(42)」

美濃焼物売捌方取締役

多治見村

円治殿

「(43)」

『七』美濃焼物締拔荷物之儀二付笠松陣屋江差出候請書写

『七』美濃焼物締拔荷物之儀二付笠松陣屋江差出候請書写
差上申御請証文之事

濃州土岐郡多次見村外四ヶ村より焼出候
土器類江戸積之儀、尾州御国産焼物同様
一ツ手二積下之儀、天保六年中規定書も
御座候処、近年利欲勝手を以身元不慥之者江
相對二而猥り二売捌候二付、関東向江拔荷物等
有之、直段二も相響、竈職之者ハ勿論、差捌候
もの共一同相続方二も拘り及難儀候義二而、
売捌方等不取締之趣達御聞、右ハ尾州御国産
焼物類御締筋二も自然差響候儀二付、今般
私とも一同被召出、夫々御糺御取調之上、向後江戸表
并関東在々之者共江引合、相對を以直売ハ
決而不相成、諸国方竈元江立入候仲買共
之儀ハ都而多次見村取締役円治方江差遣、
同人方二而買先・積出先等得と承糺候上鑑札
相渡竈元江相廻候間、右鑑札所持之者とも
江は夫々売渡、鑑札所持不致物江は決而
売渡候儀不仕、諸事天保度規定書之趣

「(44)」

堅く相守、聊不取締之儀無之様可仕、万一心得違之者も有之、不慥成仲買江売渡候歟、其余猥之売捌方等仕拔荷取扱仕候ものも有之候ハ、取締役門治方其段訴上、其者ハ勿論村役人共二至迄急度御沙汰可有御座、右ハ竈元永統之基二付、心得違不仕正路之売買可仕旨、被仰渡一同承知奉畏候、仍御請証文差上申処如件、

当御代官所

濃州土岐郡

多次見村

竈元惣代

年寄

嘉永二酉年七月二日

嘉兵衛印

源右衛門印

市倉郷

年寄

富蔵印

沢右衛門印

村役人惣代

年寄

察助印

笠原村

下郷

竈元惣代

年寄

豊平印

上郷

年寄

藤十郎印

作兵衛印

滝呂郷

同

徳右衛門印

下石村

竈元惣代

由兵衛印

笠原村

役人惣代

同村

村役人惣代

庄屋

五郎右衛門印

高山村

┌

└ (45)

┌

└ (46)

竈元惣代

小兵衛印

村役人惣代

年寄

平七印

久尻村

高田郷

竈元惣代

弥右衛門印

甚左衛門印

村役人惣代

年寄

半七印

多次見村

竈取締役

加藤円治印

柴田善之丞様

笠松

御役所

「(47)

『八』本所相生町壺丁目遠州屋嘉兵衛方三州鷲塚

八次郎方江猶又申遣候手紙写

『八』本所相生町壺丁目遠州屋嘉兵衛方三州鷲塚

八次郎方江猶又申遣候手紙写

然ハ、去ル酉年中濃州焼物米屋弥兵衛江

買附為致候拙者荷物被差留候始末、御掛合

申入候処、尾州御屋形様方窯元買先其

名前相分候ハ、

尾州様方御解方二相成候趣二付、可申出返答二

候間、早速濃州表相調候処、

尾州様御領分之御品一切買入不申次第明細

申越候得共、元来先達而も申上候通、乍恐

重キ御主意から相弁、元方糶買不相成様

物価引下ケ之御趣意基本据、弥兵衛壺人江五ヶ年

以前買次為致代金相払候荷物、殊二拙者

先年御調之上瀬戸物問屋被 命御冥加

御上金迄被 仰付候儀二付、於貴地荷物

調請候而ハ問屋職分二も相障候儀二付、当地市谷

御館様御城使江御掛合、乍氣之毒貴公様

相手取奉御訴訟、

御公儀様決断所を以て寺社・町・御勘定三

御奉行御列席、御評定所二をいて荷物改請度

「(48)

候間、御返答次第第二而姓名書請取懸合人
相立候間、左之御返答可被下候、

一、多治見村円治と申者ハ、百姓か

尾州様御家人か、焼物取締人之由被仰越、其意
難相分身元承り度候事、

一、尾州御館様御領分二無之米屋弥兵衛義ハ、釜戸村
住人二而、馬場大助様御知行所之百姓二而、農間
家業當候者、殊二送り先ハ御府内御膝元町人二
有之候、其当名主江一応之不及問合、

尾州様御威光を以、他向方他向江引合之物を
被差留候始末、仮令

御公儀様御裁許者二而も、年月限も
有之事二而候処、四ヶ年も被差留候次第承り度
候事、

一、右円治同道

尾州様御役人方御姓名被仰越被下候様、度々
御達申候処、兎角御役人方御姓名不被仰越
如何之事二候哉、右御姓名相分不申内ハ当地
市谷

御館様御城使江懸合様も無之、右御姓名書
不被仰越候二をいてハ、貴公様円治馴合、江戸
問屋荷物四ヶ年も被相障候姿二而、不容易次第
存意承度候事、乍恐昌平之

御代、士農工商四民とも戸ざゝぬ奉仰

御国恩、別而御府内之町人ハ、御直御用并御三家・
国主・領主・地頭、夫々御館入いたし候事二而、拙者儀も

御勘定所御用、紀州・水戸御館入いたし候事二而、諸家御役宅江も
御館入罷在候、右様以 御威光不法被相募候而ハ、
強ひ者勝二而弱者ハ安住難成次第、治世之

御代二無之儀と奉存候、弥以難洪難捨置次第
に付、右三ヶ条御返答急速可被下候、尤貴公様
御領主様江ハ当地上屋敷御留主居方江

懸合可申候間、此儀御安心可被下候、先ツハ五月
朔日出之御報旁又候御返答承知致度候、恐々、

遠州屋

七月十三日

嘉兵衛判

片山八次郎充

「(49)」

「

「(50)」

「

「此十九日仮組引除申候

本所相生町壹町目弥三郎地借嘉兵衛

瀬戸物問屋仮組引除願

(朱書)『願之通仮組引除可申旨被仰渡

奉承知畏候

丑十一月十六日

』
館市右衛門

以書付奉申上候

一、本所相生町壹町目弥三郎地借遠州屋
嘉兵衛奉申上候、私儀諸商売手広中、
焼物類直引請仕候二付、瀬戸物問屋
仮組江御差加江被下置難有仕合奉存候、
然ル処、右焼物類直引請方相止候二付、
組合行事江も談合、仮組御引除一同
奉願上候、以上、

瀬戸物問屋仮組

本所相生町壹町目

弥三郎地借

遠州屋

嘉兵衛印

嘉永六丑年十一月

右組行事

本銀町貳町目

清太郎地借

西村屋勘兵衛印

同

靈岸嶋町

八兵衛地借

中沢屋藤兵衛印

館

御役所

下 ケ 札

「(51)

「(52)

下ケ札

本文嘉兵衛儀、仮組引除奉願候二付取調候処、尾州様御取締竈元焼物類不束之引受方いたし、

御屋形方御達相成、

播磨守様御番所御調請、

御屋形御掛向江も歎願仕候処、仮組引除御聞済相成候得は、

御屋形二而も御憐愍御沙汰可有御座趣二而、

行事共談合之上、本文之通申立候儀二

御座候、取調之趣申上候、以上、

諸色掛

丑十一月

名主共

ヒレ付

通例休業申立候者は、其旨御届書差上

名前相除申候、本文嘉兵衛儀ハ、当御番所

御調二も相成、尾州御屋形江相懸り、仮組引除

願出候始末、諸色懸名主共申立候二付、

則願書入御覽、願之通仮組引除可申哉、

奉伺候、

丑十一月

館市右衛門

（扉）

三州鷺塚村片山八次郎方瀬戸物問屋年

行事共江差越候返書并同人方同所

御領主様江差出候歎願書、且遠州屋嘉兵衛方

三州・濃州表江為差登候代人旅先方同人方江

差越候文通之写

瀬戸物問屋年行事

瀬戸物問屋行事共方三州鷺塚村

片山八次郎方江遣候文通之同人方

返書左二、

去ル四日御差出三日限之御状、同七日卯半刻

相達致拝見候、各様被成御揃愈御安全被成

御座、珍重之御事奉存候、然は濃州笠松

御支配所内二而焼出候瀬戸物類之儀は、従古来

尾州様一ト手御締二御座候所、今般問屋職二

無之仮組二罷在候遠州屋嘉兵衛殿方、去ル酉

年濃州釜戸村米屋弥兵衛殿買次を以

御地江積取可申郷組之荷物八俵、前顯

御締り内之荷物二付、御取調中拙者方江

御預ケ二相成候所、其頃は何等申出も無之、

当年二至り嘉兵衛殿方瀬戸物問屋之趣ヲ以

敵敷掛合有之、右書面之内、奉対

尾州御屋形様不敬至極、恐多キ文言等

相認、不容易義有之、今般

尾州様方町

御奉行所江御達二相成候二付、去月廿五日

嘉兵衛殿御呼出二相成、且瀬戸物問屋行事

衆も右始末御尋として 召出候所、

嘉兵衛殿、右書面之廉々御吟味二相成、一言

之申開も無之候二付、諸色御取締懸り名主衆

并各様俱々御心配当地江立飛脚を以

右荷物元方江操戻、其上

尾州様江御歎願申上、御吟味詰之儀

御達解御願被成度、依之右往返之日積

を以、十一月三日まで御日延御願置、今般嘉兵衛殿

方代人差立詫一札拙者方江向ケ被差出候

間、是迄手数迷惑相掛り候義可有之候得共、

右は申解一札二而勘弁、早速領主役場江

申立、

尾州様御役向江通達相成候様取計可申、

勿論御日延御日限も有之間、早速手順

可仕旨、御紙面之趣委細致承知候、右一条は

前顯被 仰越候通之次第二而、当年二相成、拙者

方二而荷物無謂差留置候様被申掛、拙者

相手取

公訴可被致忤、甚不筋千万之義、兩度迄

敵敷被申越、拙者義は素方

尾州様御締向等之儀委敷不相心得、

余り嚴重之掛合二仕得は、

尾州様御差留之御役人御手違歟共被存、

旁何分二も元々何事も不弁、廻船引請

迄二而、相手被取候而は必至難渋迷惑之次第

二付、其段領主役場得申立

尾州様御役向江役場方懸合二相成候

次第二付、又候右一件

尾州様方町

御奉行所江御達二相成候廉御解之儀

歎願仕候義は甚迷惑之筋合二候得共、嘉兵衛殿

方も詫一札迄被差越、其上御両所様方も

段々厚御頼被 仰越候義も有之候得は、御断

└

└ (57)

└

└ (58)

└

も申上兼、不取敢領主役場江も歎願仕候所、
於役場も、右は一旦

尾州様方

御奉行所江御達二相成候義を御達解
歎願仕候義、不容易義難取上旨被申渡候間、

再応取頻歎願、別紙写之通歎願書差

出候所、漸く預り二相成、於役場も種々評儀も
有之候所、何分遠路欠隔候事故、文通二而

も不行届可有之、殊二御先柄之事故

尾州表江出張、依之拙者代之者も召連

被罷出、

尾州様御役筋江拙者歎願之趣追々

被申立候所、右一条笠松

御陣屋江も

尾州様方夫々御掛合二相成居候御次第も有之、

且は江戸表二而被 仰立二相成候事故、御同所

江も御掛合二相成可申哉、何分二も即御挨

拶も難被成、夫々御調御評儀之上之

事ならてハ不相成候間、一旦引取申候様

被 仰聞候由、尤否追而御文通敷又は尾

州迄御出張之儀御欠合御挨拶可有之

旨二而、領主役人俱々拙者代人も引取候

間、御報旁是迄之手続可得貴意と存

居候所、昨十七日嘉兵衛殿代人并米屋弥兵衛殿

代拙宅江罷越、兼而預り有之候八箇之

荷物弥兵衛江相戻、同人方竈元江買為

戻度候間、相渡呉候様被申聞、前顯御

書状右同様荷物元方江操戻、其上

尾州様江御達解歎願仕候様御申越之所、

右荷物は

尾州様御役人中様御出張之上、御沙汰

有之候迄は船積不相成旨被仰越有之候

荷物之儀二付、拙者勝手二弥兵衛殿代人江

相渡候義難相成、此上

尾州様御役人中様方御差図次第元方へ

差戻可申旨、御差図無之候而は相渡兼候旨

二而、是迄最初方之始末委細相晰申候所、

尤之訳々二承知被致、一ト先江戸表江引返し

可申哉、又は文通二而可申遣哉、釜戸村江立帰

候上決心可致旨二而被引取候間、何れ右嘉兵衛

殿代人方も委細可申遣候間宜御承知

可被下候、是迄之手続等、今度嘉兵衛殿江は

拙者方別段文通不致候間、各様方宜

御通達可被下候、右貴答旁申述度如此

「(59)」

「

「(60)」

「

「(61)」

御座候、恐惶謹言、

十月十八日

片山八次郎

西村屋勘兵衛様

中沢屋藤兵衛様

貴答

尚々拙者方江嘉兵衛殿方差出候一札之義は、御番所御掛御役人中様江も写ヲ以御伺之上、御取扱被成候義二付、左様承知可致旨、被入御念候義致承知候、

一、本文一条は全躰去ル戌年船積御差留之節取締江掛合和談致候ハ、無子細事済二可相成候所、其儀も無之、其上当年二相成再応拙者方へ嚴敷欠合有之候故、甚心配仕、四月以来数度尾州表江代人等差出、当時勝手向不如意之拙者、領主方之手当二而漸く相続罷在候中、無人之事故差支候節は雇人等致尾州表江度々往返、其上長々同所江逗留致、種々歎願等致、雜費不少甚迷惑難渋仕候間、右入用は追而嘉兵衛殿江懸合候積り候二付、各様二も御含、同人江も御申諭置可被下候様奉願候、以上、

└ (62)

片山八次郎方同所御領主江歎願書、左二

乍恐以書付奉歎願候

去ル嘉永三戌年正月中、濃州釜戸村米屋弥兵衛と申者方、江戸本所相生町遠州屋嘉兵衛方江差送候焼物八箇、江戸表江船積之儀引請相預り置候所、其後右荷物之儀は瀬戸焼物二属シ、

└

尾州様二而御取調之筋被為在候間、追而御沙汰有之候迄、船積見合候様被仰渡候間、其段米屋弥兵衛方江申通、私方へ相預り置候所、当三月中再応右嘉兵衛方方種々不法之儀掛合申越候、右書状面二は奉対

尾州様江奉恐入候文言等有之、其上私相手取御奉行所江出願致候杯、不筋千万之義申越、其忸難打捨置、素方私義は何事も弁無之廻船引請候迄之儀二而、被相手取候而は必至難渋至極二付、右嘉兵衛方掛合候始末逸々奉申上、何卒右一件掛り合二不相成候様、尾州様御役人中様江御掛合被成下候様奉歎願候所、願之通御聞濟被下置、難有安心仕候、然ル所去ル七日遠州屋嘉兵衛并江戸表瀬戸物問屋年行事西村屋勘兵衛・同差添

└ (63)

中沢屋藤兵衛と申者方急便書状到来仕候間、
披見致候所、右一件今般

尾州様方町

┌

御奉行所江御達二相成候趣二而、去月廿五日
嘉兵衛御呼出之上、始末御吟味之上嚴敷蒙
御察当、奉恐入一言之申開も無之、全く其頃
逆上病氣二而不取留文通仕、今更後悔仕、
此上御吟味詰二相成候ハ、如何躰可被 仰付哉も
難計候間、是迄掛合文通之所相解、私方へ
預り置候焼物八箇は元方江差戻之義、
米屋弥兵衛方江申遣候得共、此上

└ (64)

尾州様御役人中様御差図次第、如何様
取計候而も一言之申分無之候間、何卒是迄
再応掛合之文通相解呉候様、詫一札
嘉兵衛方差越、右は瀬戸物問屋年行事
共方も嘉兵衛相歎候通同人御吟味詰之所、
尾州様方御達解相成候様私方奉歎願
呉候様只管頼越、右前頭之通私迷惑筋
不相成候様奉歎願候二付、町

御奉行所江

┌

尾州様方御達二相成候義奉恐入候義二御座候
得共、素方嘉兵衛意恨等有之候義二も無之、
全く同人心得違方事起り候義二而、自業自得
と乍申、先非後悔之旨別紙写之通申解、
詫一札差出候上は、私二おゐても俱々此上嘉兵衛
御吟味之所

御赦免二相成候様、於私も御慈悲之程
奉歎願度候間、何卒厚御賢察之上
可然御取計被成下候様奉願上候、右願之通被
仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永六癸丑年十月

└ (65)

鷺塚

大浜

片山八次郎

御役所

前書之通相違無之候二付、奥印仕候、以上、

右村

名主

善 八

同

組頭

喜 蔵

同百姓代

太郎右衛門

瀬戸物問屋仮組遠州屋嘉兵衛方方

┌

三州方濃州表江為差登候代人幾三郎
旅先方同人方江差越候文通、左二、
一筆啓上仕候、冷氣之節二御座候所先以
御家内様御揃益御安泰可被成由目出度
御義奉存候、随而私事道中服病いたし、殊之外
難渋仕、当十三日着仕候、御急便之所延着致
何共恐入次第御用捨可被下候、然ハ早速
弥兵衛殿江書状差出様子承り候得ハ、明日否
被仰下候由翌日二相成、委細御書中之趣
御承知之由被仰下、然ル所三州鷺塚表方
荷物末々着不仕候二付、十四日一日逗留いたし、
十五日早朝出立、一之倉竈本へ立寄、一寸
様子承り、鷺塚表江十七日五ツ時頃着仕、
荷物催促仕候所、片山八次郎殿手代衆被
仰聞候ハ、去ル七日江戸表方急便書状到来、
早速大浜御役所江奉伺候得ハ、手代差添
遣し候間、到来之書状持参同道二而、
尾州様御勘定所江御伺申上、御差図次第
いつれ共可取計旨被仰下、夫方御差添并片山
氏手代衆同道二而、

「(67)」

尾州様御勘定所江奉伺、兩日差扣罷在
候得ハ差急キ御沙汰之程難計、一先立歸り
可申旨御達差戻り、其後ハ何之御沙汰も
無之趣片山氏手代衆被 仰下、いつれとも
御達次第取計可申候間、夫迄ハ差戻シ
之義相成間敷由被申聞候、且一之倉竈
本二も笠松

「

御役所江相伺、其上取計可申由兩三日中二
此方方釜戸村迄御挨拶有之趣、竈焼
御一統被 仰聞候、左候得ハ
御奉行所様御日延之日切迄二形付候義
難計、殊二遠路と申、深く心配仕候二付、何卒
廿日之御日延御願済相成候様御取計
奉願上候、是方私事釜戸村弥兵衛殿江
罷越暫逗留致し、兩条之内否承り、
早速其御地江立戻り可申と奉存候、此外
種々申上度候得共、途中之事何事も
帰宅之上万々申上度、先ハ用事而已
早々如斯御座候、恐惶謹言、

「(68)」

十月十七日認

幾三郎

遠州屋

嘉兵衛様

尚々

「(69)」

(扉)

上

（3）

乍恐以書付奉願上候

一、本所相生町遠州屋嘉兵衛御締内
荷物買取、三州鷲塚片山八次郎方江
津出仕候所、御取調中不束之欠合文通
及ひ候二付、去ル九月廿五日南
御番所江御呼出二相成、右始末御糺
請候所、同人義申開キ無之、重々奉恐入、
御吟味詰之儀、諸色懸リ名主中并
問屋共を以御猶予奉願、右荷物元々江
操戻、以来仮組相止直引請不仕義二而
十月中歎願候所、当月十九日館御役所
仮組御帳面御引除相成、且今般右
荷物元々江操戻方行届候段、濃州
米屋弥兵衛方嘉兵衛方江急便を以申越、
猶亦濃州取締役加藤円治方方も右
操戻行届候旨

御屋形様

（5）

御国表御役所江申上候趣二付、何卒
嘉兵衛義、右始末御吟味詰之儀先月
中奉歎願候通、不敬至極之文言等相
認候義は、全其節逆上仕候折柄相認候
儀二而、何共可申上様無御座奉恐入候、何卒
格別之御憐愍を以御宥免被成下
置、其筋江御達解之程私共一同
奉願上候、以上、

嘉永六丑年十一月 今利屋嘉兵衛印

中沢屋藤兵衛印

西村屋勘兵衛印

瀬戸物

御取扱所

御取調方

（6）

乍恐以書付奉願上候

一、本所相生町弥三郎地借瀬戸物問屋
仮組遠州屋嘉兵衛奉申上候、濃州焼物
御締之儀更二不相弁、去ル酉年同国
釜戸村米屋弥兵衛方荷物買取、三州
鷲塚片山八次郎方江津出仕候所、御取調

（7）

中不束之欠合及文通候二付、去ル九月廿五日
南

御番所江御呼出二相成、右始末御糺請候
所、一言之申開無之重々奉恐入候、御吟味
詰之儀、諸色掛り名主中并問屋中を以
御猶予奉願、右荷物元々江操戻、以来
仮組相止メ、直引請不仕義二而、十月中
奉歎願候所、当月十九日則館御役所
仮組御帳面御引除相成候、就而は先達
仕立使を以、濃州釜戸村米屋弥兵衛
方江申達候所、則右荷物操戻し行届候
段申越候間、私義右始末御吟味詰之義
先月中奉歎願候通、不敬至極之文言等
片山八次郎書状江相認候義は、全其節
逆上仕候折柄相認候義二而、可奉申上様
無御座、深く奉恐入候、何卒格別之
御憐愍を以御宥免被成下置、以
御慈悲其御筋江御達解之程偏
奉願上候、以上、

本所相生町壱丁目

弥三郎地借

嘉永六丑年十一月

遠州屋

嘉兵衛引

尾州様

瀬戸物

御取扱所

御取調方

（9）

前書之通、私共方

尾州様御屋形江歎願書面奉差上候処、

御聞届二相成、右之段

御同所様方当

御番所様江御達被成下置候旨被 仰渡候、何卒

御達解二相成候ハ、当人嘉兵衛身分

御慈悲之御沙汰偏奉願上候、以上、

本所相生町壱丁目

弥三郎地借

嘉兵衛煩二付代

嘉永六丑年十二月五日

嘉 蔵 印

家主

弥三郎 印

五人組

伝次郎 印

本銀町貳丁目

清太郎地借

（10）

瀬戸物問屋
行事 勘兵衛印
靈岸嶋町
八兵衛地借
同 藤兵衛印
御番所様

〔11〕

〔池田播磨守

尾張殿御城付

尾州焼物と一手締相成居候美濃
焼物之内、馬場大助知行所美濃
釜戸村弥兵衛方本所相生町
弥三郎地借嘉兵衛江可差送積二而、
三州鷺塚村八次郎所二有之候荷物
尾州表方船積差留候付、嘉兵衛儀
前頭八次郎江不容易文通およひ候
次第二付、嘉兵衛江厳敷御申渡方等
之儀、先達而及懸合候処、同人御呼出
段々御取計被下候由、右は嘉兵衛方
八次郎江文通およひ候節は不快二而
悴嘉藏儀万端取計候処、嘉藏儀も
逆上罷在候折柄二而、心得違不容易
文言等も相認遣候儀恐入、一言之
申訳も無之由二而、濃州・三州表江は
代人為差登、八次郎所二有之候荷物ハ
弥兵衛江差戻候筈二取計、其上
嘉兵衛儀仮組渡世相止、前頭締筋之
荷物以来直引受不致趣を以、詫之儀
問屋共を以屋形江も申出、問屋共方も
俱々詫入、且八次郎所二有之候荷物
之儀も、順繰二竈元江差戻相済候段
国許方も申越、最早屋形おゐて
可申立筋も無之候間、以後決而荷物
積取間敷旨為入念嘉兵衛江御申渡
被下候上、最前及御掛合候趣ハ御下々
相成候様致し度、此段可及御掛合旨
役人共申候、

十二月

〔14〕

乍恐以書付奉申上候

一、本所相生町壺丁目弥三郎地借嘉兵衛煩二付

〔12〕

悴嘉蔵奉申上候、
尾州様御取締荷物之儀二付、当九月廿五日
当

「 (15)

御番所様江被 召出、御吟味請奉恐入
御猶予奉願、行事共を以、
御屋形様江御慈悲相願候処、御聞濟
相成候趣御達有之候二付、一昨九日被 召出、
以来御吟味之不被及御沙汰旨被 仰渡、
難有仕合奉存候、然ル上は以来
尾州様御取締荷物江一切携申間敷旨」
厳敷被 仰渡奉畏候、依之、御請書差上
申処仍如件、

本所相生町壹丁目

弥三郎地借

嘉兵衛煩二付悴

嘉永六丑年十二月十一日

嘉蔵印

家主

弥三郎印

五人組

新蔵印

「 (16)

御番所様

(朱書)

『是方別口也』

尾張殿国産瀬戸焼物属候
美濃焼物、抜荷物積取り方
相巧候本所相生町遠州屋

「 (17)

嘉兵衛事厳敷御取計被下
候様及御懸合置候処、段々御理解
被下、此節致落着候付、別紙ヲ以
一件御下ケ之義及御懸合候、然処
右嘉兵衛之外、左之通抜荷物
引受候者等有之候間、御呼出し
之上、以後不心得之義無之様
御申渡被下候儀致し度候、

元数寄屋町貳丁目

平三郎地借

米屋

久兵衛

「 (18)

右は去ル子三月中濃州多治見村
綿屋周助と申者方妻木民之丞
荷物と名目相付、尾州産物二
紛敷荷物積取候二付、問屋共方
相尋候処、申披無之旨を以以来

産物二差障候荷物一切取扱
間敷旨、別紙一二印之通一札
差出候処、其後も濃州地方焼出候
荷物直引受いたし候二付、猶又問屋
とも方心得方相尋候処、仮組二
有之候間、直引受いたし候而も不苦
段相心得罷在候由相答、既当十月
十一（朱抹）用「日」濃州脇之島村宅助と申者方
前頭同様荷物九拾俵余買取候
二付、再応問屋共方相尋候処、前
断之心得而已申答、一向取敢不申由、
右は去子三月別紙一札も乍
差出隠置全違却、右躰不埒之儀
申聞候段、以之外之次第二付別紙
一札面之至意を以嚴敷御理解
御申渡候様致度候、

甚左衛門町

善兵衛地借

中野屋

金兵衛

右は濃州表江罷越焼物箱入共
六拾俵余致隠買、三州平坂鍋屋
常蔵所継場二いたし、相州浦賀
大川治郎右衛門・大黒屋儀兵衛宛
に而積送、夫方前文万屋久兵衛江
積送候筈及引合候趣相聞候付、
金兵衛江問屋共方相尋候処、取
調相成候而は恐入候付、蛸殻町蔵屋敷
瀬戸物取拵所宛二而、積入方之儀浦賀
表治郎右衛門・儀兵衛江申遣荷物引
渡候間、勘弁致呉候様申立候得共、
以後締内之品猥二不引受様嚴敷
御申渡置被下候様致し度候、

南伝馬町三丁目

立花屋

文次郎

右は濃州脇之島村荷主宅助と
申者、年来懇意之者二而、右宅助方
美濃焼物九拾俵武州大森村
新助方江水揚之儀引合置候間、
新助方差送候ハ、引取呉候様申
聞候付、任其意引取候処、直組
出来兼候付是又前文万屋久兵衛江
差送候旨、尤新助方之送状は

文次郎宛二有之候旨申立候得共、
是又以後締内之品猥不引受様
厳敷御申渡置被下候様致度候、

八町堀金六町
近江屋
与兵衛

└ (22)

右は去子三月拔荷物積取候付、
品物取戻方及懸合候処、夫々
取捌品物無之二付、代金拾両三分
去子六月限差出候筈二而、別紙三印
之通一札差出候処、其後金子不
相納候付、追々及懸合候由候得共、
何方江成共申達候様不当之儀申立
不埒至極二付、証文面之通早々代金
相納候様厳敷御理解被下候上、以後
締内之荷物猥不引取様二との
趣も御申渡被下候様致度候、

└ (23)

右之通二而夫々相詫候者ともも
有之候得共、久兵衛・与平儀は以之外
不埒之次第二有之、其尽二差置候而は
委曲遠州屋嘉兵衛拔荷物二付
及御達候通、尾州表一手積之荷
物締筋二も差響候間、以後尾州表
締之荷物猥二引受候儀は不致様
御申渡被下、前頭兩人儀は厳敷
御取糺被下候様いたし度、此段も
可及御懸合旨役人共申候、

└ (24)

十二月

差上申一札之事

一、御料濃州多治見村外七ヶ村方
焼出候瀬戸物類、前々方尾州様一手之
御締二罷在、当地江積廻し候二おゐてハ
竈元取締役送状二而、御当地蛸殻町
瀬戸物御取扱所江積送可申処、
一己之存意方心取違仕、妻木焼
荷物買取、右二相紛レ
御屋形様御出入壳捌人之外江積送候段
奉恐入候、尤此度之荷物は妻木焼二
相違無之候得共、名目之儀二付間違
有之、其筋表立候而は容易不成

└ (25)

儀二付、万屋久兵衛を以御願申上候処、
格別之御取扱二而穂(〆)隠之御沙汰二
御取成被下、荷物万屋久兵衛江御渡
被下難有奉存候、就而已来 御領国は
勿論 御料・私領二不抱、

御屋形様御産物二御差障二相成候様
成積廻し方一切仕間敷候、万一向後
相背候ハ、何様御沙汰二相成候とも
一言之申分無御座候、仍而差上申一札
如件、

濃州多治見

綿屋

嘉永五年

当人 周 助印

子三月

万屋

詫人 久兵衛印

尾州様瀬戸物

御取扱所

御取調方

差出申一札之事

一、濃州御料所二而焼出候陶器類

前々方 尾州様一ト手之御締二

相成、御当地江御積廻し二成来候処、

此度勢州大嶋井沢屋五左衛門送状二而、

私方江積送り候荷物、妻木様

御荷物と名目有之二付、市ヶ谷

御屋形様方御出入売捌人を以、妻木」

民之丞様御屋敷江御尋二相成候処、

一切御存知無之趣、弥以紛敷二付御調二

相成候処、妻木二而焼出候品二而濃州

多治見村綿屋周助と申者買取、

私方江積送候、尤妻木様御荷物と

御名目相記并出所井沢屋五左衛門と

偽名仕候儀は、大嶋三輪孫右衛門書損二

有之候得共、只今差当申訳ケも

無御座、馴合之上偽名仕候様相聞江

不容易儀二付、各方方其御筋江御願

解被下度段、折入而御頼申上候所、今般之

儀は格別之御取扱を以穩便之御沙汰二

相成、右荷物は御渡シ被成下難有奉

存候、以来は市谷 御屋形様江

「 (26)

「 (27)

「 (28)

「 (29)

問屋方より御受書差上被置候御規定
之通、濃州・勢州・三州より積送り候
右躰之荷物、御料・私領二不拘、一切
引受申間敷候、万一相背候ハ、何様
被仰立候共一言之申分無御座候、依而
一札如件、

万屋

嘉永五子年三月 久兵衛印

瀬戸物問屋年行事

内田屋清右衛門殿

「 (30) 」

差上申一札之事

一、金拾両三分也

右は御国産瀬戸物御締洩二而、荷主
平助より私方江差送り参り候荷物、
御見留之上代品物御引戻し可相成筈
御談御座候処、最早不残売捌取集り
不申候二付、代金を以差出し御仕法相立候様
奉願上度段申立候得は御聞濟、
代金上納可仕趣承知仕候、然上は荷主
対談日限之通来六月晦日限り無相違
上納仕候、為後日差上置候証文仍而
如件、

八町堀金六町

近江屋

嘉永五子年三月 与兵衛印

下 ケ 札

「 (32) 」

尾州様

御取扱所

下ケ札

家主喜兵衛当時組合持店

「 (扉) 」

上

元数寄屋町

久兵衛

乍恐以書付奉申上候

「

一、元数寄屋町貳町目平三郎地借瀬戸物問屋
仮組渡世久兵衛申上候、私義
尾州様御国産一ト手之御締り陶器類
洩荷引受候趣、今般 尾州様方御達
相廻り候二付、被召出始末御糺二相成、猶委細之
儀左二申上候、

「 (33・34) 」

此段去子年三月中、勢州大嶋村
井沢屋五左衛門送状二而、私方江積送り候
瀬戸物荷物百四拾六俵、妻木民之丞様
御名目有之候二付、市ヶ谷 御屋形様方
御出入壳捌人ヲ以、妻木様江御問合二
相成候処、一切御存無之旨御返答二付、猶
御調御座候処、右は妻木様御知行所方
焼出シ候品二而、濃州多治見村綿屋周助義
買取、妻木様御名目相記、私方江積送候
儀二而、且送状二五左衛門と相認有之候得共、全
大嶋村三輪孫右衛門積出シ二而、書損等旁
紛敷相成不容易事故、私方方瀬戸物
問屋年行事湯嶋町内田屋清左衛門方江
書面差入、同人ヲ以其筋江夫々願解致、
以来御規定之通り、右様之荷物は一切
引受申間敷旨申立、穩便之御沙汰相成候
儀二御座候、

「

「 (35) 」

一、当丑十月中濃州多治見村宅助より
積出し荷物八十八俵、南伝馬町三町目
立花屋文治郎名宛送り状相添来り、
大森村新助方江水揚致候得共、文治郎共
直組出来兼候趣ヲ以、宅助義出府致居、
同人方私方江引受呉候様頼来候間、為念
文治郎方江承り合候処相違無之、勝手次第
引受呉候様、俱々申聞候二付引受壳捌申候、
一、同十一月中旬頃、三州平坂金屋伊三郎
積出し、甚左衛門町中野屋金兵衛買受荷物
五十六箇程、私名当二而送状添、品川沖迄
着船之趣船頭申来候処、私方注文之品二
無御座候間、着船次第 尾州様御扱所江
水揚致候様相断置候義二有之候処、其砌
右御扱所方私并二金兵衛儀も被相呼御調
受、右荷物は不残御同所江水揚二相成候
儀二御座候、

「 (36) 」

右之通り相違不申上候、全私義心得違仕、
御締り御座候荷物、外方方買求候段、重々
奉恐入候、此上御吟味請候而は奉恐入候間、以後
御締之御荷物等聊も紛敷引受方一切

「 (37) 」

仕間敷様可仕旨、問屋行事江相頼、
御屋形様江御慈悲奉歎願罷在候間、右
御詫中御猶予被成下置候様、此段
御慈悲之御沙汰奉願上候、以上、

元数寄屋町式町目

平三郎地借

嘉永六丑年十二月十日

家主

久兵衛印

平三郎印

御番所様

(38)

(扉)

上

南伝馬町三丁目

藤次郎店

文次郎

(39)

乍恐以書付奉申上候

一、南伝馬町三丁目藤次郎店文次郎奉申上候、

尾州御屋形様御産物瀬戸物類取扱候二付、

今般被召出御調請奉恐入候始末、左二奉申上候、

此段濃州脇之嶋宅助と申もの、私儀兼而

懇意仕候所、当十月中罷越申聞候ハ、瀬戸物類

品々八拾九箇余、武州大森村新助と申もの方二

相願置候得共、外売口無之候間、私方二而引取

呉候様相頼候二付、則任其意新助方右

荷物引取、宅助江直段及懸合候処、格外高

直二付及断候所、宅助儀則元数寄屋町

式丁目平三郎店久兵衛江懸合、同人方江売

渡候趣二而、私儀ハ一切買取不申候得共、右躰一旦

宅助江対談仕、引請候積二仕候段、重々奉恐入候、

右申上候通相違無御座候間、此上御吟味奉請候而ハ

奉恐入候間、早速仲間行事江相頼

御屋形様江歎願仕候間、何卒以

御慈悲、右御詫中御猶予被成下置候様

偏二奉願上候、以上、

南伝馬町三丁目

藤次郎店

嘉永六丑年十二月十一日

文次郎印

藤次郎印

御番所様

(41)

(扉)

上

甚左衛門町
源兵衛地借
金兵衛

（42）

一、乍恐以書付奉申上候

甚左衛門町源兵衛地借金兵衛奉申上候、私義瀬戸物
刺取渡世仕候処、美濃焼物直買致候段入御聴、
始末御尋二御座候、

此段当六月中美濃焼物類七拾三箇買請

候処、右之内五拾六箇は三州平坂湊金屋
伊十郎方^方積出、相州浦賀大川次郎左衛門方江
積送り、同人^方同所大黒屋儀兵衛江積送候
積引合置候処、前書伊三郎^方元数（寄脱）屋町
式丁目平三郎店久兵衛名宛之送り状二而積下シ
候二付、早速右之段

尾州様御取扱所御届奉申上候得は、右
荷物之儀は

御同所様御蔵屋敷江水揚二相成申候、右は
私心得違仕、
御取締御荷物外方^方買求候段、御調受重々
奉恐入候、此上御吟味奉請候而は奉恐入候間、以来
御取締之御荷物等、聊も紛敷引受方一切仕間敷
候様可致旨、問屋行事江相頼、

（44）

御屋形様江御慈悲奉歎願罷在候間、右御詫中
御猶予被成下置候様
御慈悲之御沙汰奉願上候、以上、

甚左衛門町
源兵衛地借

嘉永六丑年十二月十一日

金兵衛印

家主

源兵衛印

五人組

卯兵衛印

御番所様

（45）

（扉）
上

船松町寺丁目
孫兵衛店

乍恐書付ヲ以奉申上候

一、船松町壹丁目孫兵衛店正三郎後家きく方
同居与兵衛奉申上候、私義八丁堀金六町五人組
持店二住宅罷在、年来瀬戸物渡世仕罷在候
所、濃州中津川宿京助と申者去々亥年中
出府罷在、吳服町岡村屋清右衛門と申者
同国同宿出生之者二付、右方江旅宿罷在
私義兼而懇意二致居候二付、去子閏二月中
同国市之倉村釜焼主平右衛門と申者出府
仕、同人義右京助同道二而私宅江参り、
右平右衛門義中津川宿池田屋伊兵衛と申者之
由二而面会為致、此節少々指下り荷物等有之
候由二付、引取吳候様申候二付、随分引取可申候
得共、當時問屋再興之義茂も被 仰出
候二付、問屋中^方彼是之義二有之候而は不宜候二付、
此義申断候处、兩人申候二は、右荷物之義
両御丸御用達十軒店大和屋善兵衛方江

注文二而持下り御入用品相のそぎ、残り不用二相成候
品二御座候、右二付同国多治見村西浦五郎兵衛
と申者江戸積問屋二有之、右方江相届ケ、殊二
五郎兵衛義は當時御府内出店も有之候義
二而、何方^方も聊申分無之荷物二候間、
是非引取吳候様達而申入、右荷物二付若
彼是申者有之候ハ、私共兩人二而申開、少も
迷惑相懸掛ケ申間鋪由申之候二付、右荷物
引取候处、同年三月中横山町壹丁目大坂屋
又兵衛代小助と申者、私宅江参り、此度京助
より荷物引取候義 尾州様御領分
御締内之荷物、兼而乍心得引取候義不埒
二付、荷物早々相渡可申様被申聞仕二付、右荷物
義二付而は念入取引仕候儀二付、故障等無之筋、
殊二兩人之者申候義ハ笠松 御代官所
御支配二而焼立候品計持下り、荷主問屋江届濟
之由之上二付、買請候義二付、無筋荷物相渡
申候義難心得奉存候訳柄承り旁相答候处、
右小助申候二は、右之筋二は可有之候得共、
左候得而は京助義は 尾州様御領分二
住居罷在候者二有之候得ハ、右荷物勝手二
売捌候得は、売先二差構不申候得共、当人
国許江相歸り候上御咎二も相成候義故、其許江
は乍氣之毒、殘金之分は 御取扱所江

相納呉候様被申候間、右荷主兩人及難洪候
而は氣之毒之義、何れ江為相濟候而も不苦義二
御座候間、上納可仕旨一札差出し申候、然ル処
勘定日限二相成候而も、私義不如意二而行届兼候二付、
日延猶予申入候得共聞入不申、既に去七月中
家主・名主迄も被相届、甚難洪至極仕候間、
市ヶ谷 御館御勘定所江、書面ヲ以御日延
願出候処、追而沙汰可致旨被仰聞、一兩日
相立、 御勘定所御組頭加藤彦太郎様方
御手紙二而罷出候様御使二付、御勘定所江罷出候
処、御尋二付委細奉申上候処、右荷物代金
之義二付御館二而は差構無之候間、以来相對
掛合可致し旨被仰渡候間、掛合中二罷在候
所、今般御呼出し二相成、御吟味奉恐入候、
全前書之手続二付引請、売捌候而子細
有之間敷と心得違仕候段、今更御吟味之趣
重々奉恐入候、何れ二も御館様江御歎願仕、
早々埒明候様可仕候間、何卒以
御慈悲御猶予被成下度様偏二奉願上候、
以上、

孫兵衛店

きく方同居

嘉永六年 願人 与兵衛印
丑ノ十二月十一日 家主 孫兵衛印
五人組 藤 七印
御番所様

〔扉〕

元数寄屋町貳丁目万屋久兵衛歎願書

〔朱書〕

『丑十二月廿六日久兵衛外貳人呼出
以来吟味之不及沙汰旨、猶吟味所
申渡之』

乍恐以書付奉歎願候

一、元数寄屋町貳丁目平三郎地借久兵衛
奉歎願候、去子年三月中美濃焼物
百四拾三俵、偽名之送状二而荷受仕候
段、表立候而は不容易成所、瀬戸物
問屋中を以歎願仕候二付、御聞濟被成下
置候段、誠二難有仕合奉存候、然ル所当

十月御締内、濃州脇之島宅助荷物
八拾八俵買取候二付、此度御調二相成、是
亦奉恐入候、去子三月中美濃焼物一切
引請申間敷旨、書面差上乍置、又候
御締内荷物引受候段、不束之取計
二付、今般南
〔 (53) 〕

御番所江御達二相成、右廉々御吟味
奉請、一言之申開無之、重々奉恐入候、此上
御吟味詰奉請候ハ、如何様之御沙汰二
可相成も難計、左候時は必至と難渋仕候
二付、問屋中を以歎願仕候上は、以来
出所二不拘、御産物二紛敷品一切
取扱申間敷候間、何卒格別之御仁
恵ヲ以、今般御吟味詰之義御達
解被成下置候様、加判之者一同奉願上候、
然ル上は、向後御締内荷物は不及申、
買次人を以三州或は勢州湊・上方
筋方積廻し候紛敷荷物、聊たり共
取扱申間敷候、万一右躰之義御座候節は
何様被 仰立候共一言之申分無御座、其節
歎願之間敷義毛頭仕間敷候間、今
度之義は、厚御慈悲之御沙汰被成
下置度、偏奉歎願候、以上、
〔 (54) 〕

元数寄屋町式丁目
嘉永六丑年十二月廿日 平三郎地借
万屋

久兵衛印
右家主 平三郎印
右組合 庄三郎印

尾州様
瀬戸物
御取扱所
〔 (55) 〕

前書之通私共方
尾州様御屋形江歎願書面
奉差上候所、御聞届二相成、右之段
御同所様方当
御番所様江御達被成下置候旨
被 仰渡候、何卒御達解二相成候ハ、
当人久兵衛身分御慈悲之御沙
汰偏奉願上候、以上、
〔 〕

元数寄屋町式丁目
嘉永六丑年 平三郎地借
十二月廿三日 久兵衛印
家主 平三郎印

五人組 庄三郎^印

「 (56)

本銀町式丁目

清太郎地借

瀬戸物問屋

行事

勘兵衛^印

靈岸嶋町

八兵衛地借

同

藤兵衛^印

御番所様

「 (扉)

甚左衛門町源兵衛地借金兵衛歎願書

└

└ (57)

乍恐以書付奉歎願候

私義

一、

御料濃州笠松御支配所内二而焼出候

陶器類之義、往古方

御屋形様御産物御一ト手二相成、重キ

御締も有之候処、私義心得違致し、折々

濃州竈元江罷越、御締内荷物隠

買仕、三州湊江津出仕、夫方御当地江

積取可申手段仕候段、

└ (58)

御屋形様達 御聴、今般南

御番所江御達相成候二付、当月九日

我等御呼出之上御吟味奉請、一言之

申開も無御座奉恐入候、諸色掛名主中

并問屋行事中方御日延御猶予奉願

上候、此上御吟味詰相成候而は重々

奉恐入候間、何卒御憐愍之御沙汰

を以

└

御屋形様方御達解二相成候様、歎願

被成下度奉願上候、以来は御締内荷

物は不及申、都而紛敷荷物は一切

取扱申間敷、向後問屋二而仕入致、実

直二渡世可仕候間、御慈悲ヲ以御吟味

詰御達解之義、幾重二も奉願上候、

以上、

甚左衛門町

源兵衛地借

嘉永六丑年

中野屋

十二月

金兵衛印

前書之通恐入奉歎願候間、御吟味詰
之儀御達解相成候様於私共も奉願
上候、以上、

中沢屋藤兵衛印

西村屋勘兵衛印

尾州様

瀬戸物

御取扱所

前書之通私共方

尾州様御屋形江歎願書面奉

差上候所、御聞届二相成、右之段

御同所様方当

御番所様江御達被成下置候旨

被 仰渡候、何卒御達解二相成候ハ、

当人金兵衛義御慈悲之御沙汰

偏奉願上候、以上、

甚左衛門町

嘉永六丑年

源兵衛地借

十二月廿三日

金兵衛印

家主 源兵衛印

五人組 宇兵衛印

本銀町式丁目

清太郎地借

瀬戸物問屋

行事

勘兵衛印

靈岸嶋町

八兵衛地借

同

藤兵衛印

御番所様

（扉）

南伝馬町三丁目藤次郎地借文次郎

歎願書

（59）

（60）

（61）

（62）

乍恐以書付奉申上候

一、南伝馬町三丁目藤次郎地借文次郎
奉申上候、私義当三月中方瀬戸物渡世
相始、小前之身分二而直引請等は不相成
候所、当十月中濃州脇之嶋宅助荷物
八拾八俵積来り、買取呉候様申候二付、
買取可申心底二而、九拾俵余之荷物
私方江引取置直組仕候所、直段引合
不申候二付、右荷物は元数寄屋町貳丁目
万屋久兵衛江相送り申候得共、私義素方
問屋職二も無之、
御屋形様御締内之荷物直買可仕と
心組仕候段は重々奉恐入候、以来右様
不心得之義は勿論、御締内荷物二
紛敷品は決而買取申間敷候間、
今般之儀は、何卒格別之御憐愍ヲ
以、御吟味詰之義御達解之御沙汰
偏奉願上候、以上、

└ (63)

南伝馬町三丁目

嘉永六丑年

藤次郎地借

十二月

橘屋

文次郎印

前書之通恐入奉歎願候間、御吟味詰
之儀、御達解相成候様、於私共も奉願上候、
以上、

中沢屋藤兵衛印

西村屋勘兵衛印

└ (64)

尾州様

瀬戸物

御取扱所

前書之通私共方

尾州様御屋形江歎願書面奉差上
候所、御聞届二相成、右之段
御同所様方当
御番所様江御達被成下置候旨
被 仰渡候、何卒御達解二相成候ハ、
当人文次郎義御慈悲之御沙汰
偏奉願上候、以上、

南伝馬町三丁目

嘉永六丑年

藤次郎地借

十二月廿三日

家主

文次郎印
藤次郎印

五人組

伝助印

本銀町貳丁目

└ (65)

清太郎地借
瀬戸物問屋

勘兵衛⑩

靈岸嶋町

八兵衛地借

同

藤兵衛⑩

御番所様

「(66)

(朱書)

『丑十二月廿四日安井衛作を以御渡、同廿六日支配勘定組頭館久兵衛呼出、吟味下之趣申渡済之旨達之』

〔池田播磨守殿

尾張殿
御城付

「(67)

尾張殿国産瀬戸焼物二属候美濃焼物拔荷持引受候者共等御取糺方及御掛合置候内、元数寄屋町貳町目平三郎地借万屋久兵衛・甚左衛門町善兵衛地借中野屋金兵衛・南伝馬町三町目立花屋文次郎義は、以来締内之荷物は猥二取扱不申趣二而、侘之義瀬戸物問屋共を以屋形江も申出候間、以後心得違ひ不致様、為念御申渡被下候上、最前及御掛合候趣ハ御下相成候様いたし度、此段可及御掛合旨役人共申候、但八町堀金六町近江屋与兵衛義は、最前御掛合および置候趣を以、拔荷物代金早々納方之義、猶更厳敷御申渡被下候様致し度、此段も申添候、
十二月

「(68)

(朱書)

『寅三月十九日御渡、翌廿日船松町七兵衛呼出

以来吟味二不及沙汰旨申渡、尾張殿支配勘定組頭寺内 呼出、右申渡済之趣申達也、』

〔池田播磨守殿

尾張殿
御城附

元八町堀金六町二罷在候当時船松町

寺町目孫兵衛店与兵衛儀、尾州焼物と
一手締相成居候美濃焼物、抜荷物代

納方相滞候二付、御取(朱書)『立』方之儀、旧臘及御掛

合候処、与兵衛御呼出納方之義御申渡

被下候付、追々納方いたし、当時残金

三兩二相成候処、右之分八月々金壹分ツ、

十二ヶ月二割、来卯三月迄二相納候筈

証人相立申出候旨、瀬戸物取扱申付置候

者共方届出候二付、最早屋形をゐて

可申立筋無之候間、旧臘及御懸合候趣ハ

御下ケ相成候様いたし度、此段可及御掛

合旨役人共申候、

三月

「 (69)

「 (70)

④嘉永七寅年五月 薩州産薬種公儀御用二成候様致度旨奥御医師御膳番方願候義
二付御右筆方問合

（扉、小口見出し）

嘉永七寅年五月

薩州産之薬種

公儀御用二致旨奥医師御膳番方

願候儀二付御右筆方問合調

（朱書）『四』

┌

└（3）

（扉）

（朱書）

『寅五月廿六日御右筆方問合書、六月十一日向方方
来候書類添、加藤惣兵衛江於御殿御達相成、』

式三ヶ年跡歟

薩州産之薬種五品程

公儀御用二成候様致旨奥医師并御膳番

より願候節書面御下ケ御評議御書面留之

事

└（4）

近頃

薩州産薬種取調書留之儀申上候書付

町年寄

式三ヶ年跡歟

薩州産之薬種五品程

公儀御用二成候様致旨、奥医師并御膳番

より願候節、書面御下ケ御評議御書面之

事、

└（5）

右御右筆衆方御問合之趣被仰渡候間、私共
書面相調候処、右御問合二符合仕候儀ハ相見
不申候、去々子年十二月、香附子外五品薩州
国産之品有之候哉、薬種屋共御糺、国産
之品有之候ハ、品合をも承知致度候事と
申、石河土佐守殿方御書取御向様より
樽藤左衛門江御下ケ、取調別紙之通申上候、
則右調書其節之御問合書写入御覧、
此段申上候、以上、

└

寅六月

舘 市右衛門
喜多村彦右衛門
樽 藤左衛門

「(6)

仁杉八右衛門様

善村現左衛門

中田郷右衛門様

中嶋三郎右衛門

各様弥御安全被成御勤仕珍重奉存候、

然は薩州産物薬種之儀二付、御右筆

衆方之別紙問合書御渡相成候間、御取

調候処、其御方御留記差向御見当無之、右ハ

此方取扱もの二は無之候哉、「取調」否可申進

旨致承知、取調候処、去々子年十二月中石河

土佐守殿方別紙之通御問合有之候書留

有之候迄二而、其余精々穿鑿致し候得共

相見不申候、依之右書類相添、御報旁此段

得御意候、以上、

六月九日

(朱書)

『嘉永五子年十二月六日御向様方御下ケ』

「対馬守殿

土佐守

一、香附子

一、枳殻

一、枳実

一、金銀花

一、括婁実

一、巴豆

右薬種薩州国産之品有之候哉、薬種屋共御糺、
国産之品有之候ハ、品合をも承知いたし度候
事、

(朱書)

『子十二月十日於御殿達ス』

御書面相糺候処、別紙之通町年寄

申出候間、右書通差進此段及御挨拶候、

子十二月

井戸対馬守

「(9)

(朱書)

『嘉永五子年十二月九日御向様江差上候』

葉種之儀二付取調申上候書付
樽藤左衛門

御問合書之通

右石河土佐守殿方之御問合書御渡被成、取調可
申上旨被仰渡候、

「(10)」

本町組葉種問屋

大伝馬町組葉種屋

行事共

右之もの共申立候は、前書御品書之内、

一、香附子

一、枳殻

一、枳実

一、金銀花

一、括婁実

右五品之儀は、諸国方出候品故、薩州之産物直二
仕入候もの無御座、熟(ママ)も大坂表方引受候品二付、薩

州産と申儀、夫々見分ケ難申上、品合上下も有

之候得共、其品拝見不仕候而は何共難申立、薩州

表方直二御当地江相廻候儀は無御座、大坂表方

引受候品二御座候段、申立之候、

「(11)」

一、巴豆

右は唐方方外是迄取扱不仕、長崎表江相廻り

大坂表方引受候儀二而、和産之品取扱候儀無御座

候段申立之候、

右相糺候処前書之通御座候、則御渡之御問合書

返上仕、此段申上候、以上、

子十二月

樽藤左衛門

「

⑤嘉永七寅年十一月 革類払底二付弊牛馬皮在所穢多頭江相廻度旨、阿部播磨守家来伺

「(扉、小口見出し)」

嘉永七寅年十一月

革類払底二付弊牛馬皮

在所穢多頭江相廻度旨阿部

播磨守家来伺調

(朱書)『五』

┌

└ (12)

(朱書)

『寅十一月四日折右衛門を以御渡』

阿部播磨守家来

柴崎津右衛門

播磨守領分奥州白川下之町穢多頭

彦左衛門と申もの、革類払底二而自然

高料二相成候処、昨年来武器其外

稽古道具多分之入用有之差支

候二付、同州保原領分村々斃牛馬皮

城下穢多頭方江相廻候様相成候得は、

牛馬皮出方二随用皮二差出、其余稽古

道具等二相用候分下直二相成可申旨、

別紙之通願書差出申候、右は是迄

保原最寄板倉内膳正様御領分福

嶋町穢多小左衛門と申もの方江相

送来候処、白川城下穢多頭江為引受

候而も苦ケ「間」敷哉之段、別紙願書写

一冊相添在所役人共方申越候付、此段

奉伺候、

阿部播磨守家来

十一月三日

柴崎津右衛門

(朱書)

『寅十二月十九日家来呼出相達ス』

『附ケ札案』

書面之趣、穢多頭彈左衛門相糺候処、白川

下之町長吏之儀は、同人支配二候得共、福嶋町

之儀は支配外二付、差支有無睨と難申立段

申之、然レ共御領内斃牛馬之儀二付、武器

其外等二被用候儀は子細も無之儀二候処、兼而

他領穢多共引受来候由二而は、一領限之儀二も

└ (15)

無之候間、板倉内膳正方江掛合双方穢多共
示談行届候上は不苦儀二候事、

彦左衛門願書写

┌ (16)

乍恐以書付御内意奉伺候

去丑年以來御具足・御馬具御手入

御用、其外 御屋鋪様方御稽古

御道具等御用皮数多被

仰付候処、品不足二而直段等も追々

引揚、猶又御差支之程も難計奉存」

候付、去十一月中出府浅草弾左衛門

役所江罷出候砌り、白川

御領分保原

御陣屋附村々斃牛馬皮右村々小

屋番非人共剥取、

板倉内膳正様御城下福嶋「町」(朱抹)同職

小左衛門方江相送り来候処、当時武器

御手入御用皮類不足二付、以來

御領主様二而御用之皮二被 仰付、

右小屋番非人共方白川表江為相送

候様被 仰付候而も不苦儀二可有御座

哉之旨内々相伺候処、 御領分之内

古来方番非人御他郡穢多「頭」(朱抹)支配二而

斃牛馬皮相送来候共、改而

御領主様御用皮二被遊候儀無扨儀二而、

若右様二も相成、製手等被

仰付候は、右村々何程小屋何軒と

申儀取調可申聞旨被申付候付、村数

十七ヶ村小屋四軒、支配二無之、番人共

名前相知不申候付、弥被 仰付候ハ、

睨と相調差上可申旨認差出置申候、

右二付奉伺候は、右村々斃牛馬皮

御武器類御手入御用皮被 仰付、

製方被 仰付被下候は、駄賃其外

番人共江は定式酒代等は私方差出、

牛皮貳枚二壺枚、馬皮三枚二壺枚ツ、

右出方二賄製革二仕、

御用皮二差上候様可仕候、右様被仰付

┌ (18)

┌ (17)

被下置候は如何二も精々仕、
御屋鋪様方御稽古御道具御入用
無御差支、直段成丈々は下直二相成
候様可仕旨、何卒

御賢評被成下候様仕度、右之段
乍恐以書付御内意奉伺候、以上、

下之町

嘉永七年

頭

寅九月

彦左衛門印

御検断所様

「(19)」

「(20)」

一、浅草弾左衛門奉申上候、私支配

奥州白川下夕之町長吏小頭

彦右衛門義、御領主阿部播磨守

様方去ル丑年以來御具足革

御馬具御手入御用、其外

御屋敷様方御稽古道具等

御用皮数多被仰付候処、品不足

二而直段追々引上、尚又御差支之程も

難計候二付、同御領分保原御

陣屋附村々斃牛馬皮、右村々

番非人共剥取、板倉内膳正

様御城下福嶋長吏頭小左衛門江

從先年相送り來候得共、

播磨守様御用御差支二も

可相成哉二付、御領内番非人共

取入候牛馬皮之儀二付、以來長

吏小頭彦右衛門方江為相送、尤定

式酒代・駄賃錢等は同人方より

番(朱書)「非」人共江差出遣、牛皮貳枚二付

壹枚、馬皮三枚二付壹枚ツ、右出方二

随ひ製革二仕、御用皮差上

候様仕、尚又御屋鋪様方御稽古

道具御入用次第無御差支、直

段等も成丈下直二相成候様可仕候

間、右之段

御領主様江御伺申上度旨

去丑年十一月長吏小頭彦右衛門方

私方江差(朱書)「罷」出候序之節、内慮相同

候処、可然旨申聞候趣ヲ以、

「(23)」

「(22)」

「(21)」

御領主様方今般当

御番所様江御問合御座候由二而、御尋二付取調候処、口上ヲ以申立候義と

相見江、書留等無御座候間、睨と

相分り不申候得共、素々御領内之

斃牛馬ヲ番非人共剥取、右

長吏小頭彦右衛門方へ差出し、同

人方二而相製、夫々

御領主様御用皮相勤候義二付、

私方二而差支無御座、

御領主様御賢慮次第之義と

乍恐奉存候、尤前書福島長

吏小左衛門方江旧来送来候処、

改右長吏彦右衛門方江送候様

相成候而は、右小左衛門方義難洪申

立候哉、同人義私支配二無御座候間

存意相分り不申候、此上何卒

御賢慮之程偏二奉願上候、

右就

御尋乍恐以書附奉申上候、

以上、

浅草

寅十一月廿六日 弾左衛門印

┌

┌ (24)

┌

┌ (25)

┌

⑥安政二卯年八月 向方⁵内藤紀伊守殿領分焼酎売捌方之儀二付再掛合
(扉、小口見出し)

安政二卯年八月

向方⁵

内藤紀伊守殿領分焼酎売捌方
之儀二付再掛合調

(朱書)『六』

┌ (26)

甲斐守殿

池田播磨守

〔播磨守殿

跡部甲斐守

紀伊守殿領分越後国村上産焼酎

江戸廻し相成、出入町人鎌倉町甚兵衛

地借栄吉引請、売捌相成候積二付、下り

地廻酒問屋とも買請方可致旨、去辰

年四月中町年寄館市右衛門方二而

申渡有之候旨、其節届出候処、右越後

村上之義は下り酒御定十壺ヶ国外之

場所二も有之候間、浦賀押切帳等取調中

猶又右焼酎追年積下之節、売捌方

酒問屋共同出候旨、掛り組之者申立候処、

前書焼酎之義は貴様方御取扱之趣

二付、右御調之模様致承知度、依之

及御掛合候、

巳八月

┌ (28)

御書面之趣致承知候、則拙者方二而

取調候別紙書類写差進申候、此段

及御挨拶候、

巳九月

池田播磨守

御書面被遣候書類致一覽候処、諸家

産物入札払之振合を以御取調有之候趣、

致承知候、一躰下り酒之義は寛政四

子年中摂津国外拾ヶ国之外

江戸送致間敷旨御触有之、右国々

之外⁵積来候売酒之分は、其度々

伺之上積戻申付候仕来二而、尤此度

之義は焼酎之趣二候得共、酒も同様

之儀二有之、然ル処越後村上之儀は

右御定拾ヶヶ国之外二付、屋敷用酒

は格別、江戸売捌相成候而は、右仕来二も振れ、且は入津樽数改方二も差支候旨酒掛之者申聞候、右は御伺済又は先例等有之御取計被成候儀二候哉、致承知度、依之猶及御懸合候、
已九月 跡部甲斐守

「
(29)

「播磨守殿

跡部甲斐守

越後村上産焼酎江戸売捌いたし候儀二付、先達而及御掛合置候処、此節壹ヶ年入津樽数調組入方二差支候趣、酒掛り之もの申聞候間、否早々御挨拶有之候様致し度、依之猶及御掛合候、
已十一月

「
(30)

「備中守殿

石谷因幡守

紀伊守殿領分越後村上産焼酎江戸売捌之儀二付、当八月中及御掛合候処、未御挨拶無之、酒入津樽数調方二差支候旨、懸組之者申聞候間、早々御挨拶有之候様致度、尚又此段及御懸合候、
酉十一月

「
(31)

越後国村上領焼酎江戸廻御掛合之義取調
申上候書付

舘市右衛門

紀伊守殿御領分越後国村上産焼酎、江戸廻出入町人引請酒問屋売捌之儀二付、御向様方御掛合書御下ヶ被成候、
右は去辰年四月紀伊守殿御家来方村上領産物焼酎壹品取捌伺之節、酒問屋行事共取調候処、味淋・焼酎本直共酒問屋共持前二渡世仕候旨申之、右国産之焼酎素人売無之、下り・地廻両酒問屋江入札払相成候得は差障無之段申立、其旨申上候、今般御掛合寛政度下り酒拾壹ヶ国之御趣意、

「
(32)

何様焼酎之儀酒も同様之義二は御座候得共、元卜焼酎は酒粕を以相製候
「(33)」
壱品之由、先達而取調之節、問屋とも

寛政度御触等之儀も不申立、今般之義は去ル亥年問屋再興之砌、諸家国産之類問屋再興相成候分は、前々之通其筋問屋江可相弘旨御触有之、前条村上領国産壱品二付、御聞置相成申候、

「(34)」
右之通御座候、乍去酒も同様之義二付、一般之御取締可然思召二候ハ、以来焼酎・味淋共同断可相心得段、酒問屋共江も被仰渡、下々弁方可宜、去ル天保十四卯年問屋御差止中之儀二は候得共、下リ酒拾壹ヶ国之外江衆（朱書）「州」酒入津之節、名主共心得方相同、勝手次第取捌相成候時合等有之候由之

迷ひも相聞候間、猶又問屋再興之上ハ以来之儀御評議被成下度、村上領焼酎積廻之義は前書之通御座候、依之此段申上候、以上、

已十二月 館市右衛門

為御見合写奉入御覽候、
（朱書）

『寛政四子年十月町触写』
下リ酒之儀、山城・河内・和泉・摂津・伊勢・尾張・三河・美濃・紀伊・播磨・丹後拾壹ヶ国之外は、是迄江戸表江積送候儀無之候、然ル処去ル未年以来諸国三分一造被 仰出候上は、猶以是迄江戸送り不致国々方可積送筋は無之筈二候間、以来上方筋之儀は右拾壹ヶ国之外は江戸送致間敷候、若積送り候者も有之候ハ、其低積戻可申付候、
「(35)」
右之通東海道筋・中山道筋・五畿内・中国・四国、

御料は奉行代官、私領は領主・地頭方不洩様可触知者也、
十月 右之趣可被相触候、
「(36)」
右之通従町御奉行所被仰渡候間、町中不洩様入念早々可相触候、以上、
子十月

（朱書）
『嘉永四亥年十二月町触写』
去ル丑年問屋組合仲間等停止之節、菱垣廻船積来候諸品は勿論、都て何国より出候何品二而も、素

人直売買勝手次第たるへき旨触置候処、今般問屋調之上、再興相成候分ハ都て素人売買不相成候間、如前之可相心得候、

一、諸家国産之類、其外江戸表江相廻候品二も問屋二不限、銘々出入之者共等引請売捌候儀も、勝手次第之旨触置候処、是又調之上、問屋組合再興相成候分ハ、前々之通其筋問屋江相払可申候、右之通町中不洩様可被相触候、

十二月

右之通御書付出候間、町中不洩様入念早々可相触候、

十二月廿七日

(扉)

「(朱書付札)『靈岸嶋浜町名主太一郎差出』

天保十四卯年三月

上方拾壹ヶ国之外江州酒入津仕候二付
心得方奉伺候書付

酒入津取調懸

名主共

┌

└ (38)

下・地廻酒入津樽数取調方私共江被 仰付、下り酒之義は廻船屋共着船之節樽数取調御書上可仕旨被 仰付候二付、右取調方之儀二付、去三月中奉伺候廉之内、下り酒上方筋前々積下り候山城・摂津・河内・和泉・紀伊・播磨・丹波・美濃・尾張・伊勢・三河右拾壹ヶ国之外、是迄積送不申処方
積送来候分ハ荷元江可差戻旨、寛政四子年御触
御座候二付、此上右之分入津致候ハ、如何相心得可申哉、兼而伺置候様仕度段申上置候処、南新堀貳町目廻船屋井上重次郎方江、当月廿日左之通送状を以
浦賀御番所御割印済、江州酒入津仕候、
小西為十郎船

┌

└ (39)

酒荷物一紙之事

合酒U	貳拾樽	荷主江州大津津田屋武兵衛	壱人
		江戸豊嶋屋十右衛門	壱人
	送り状		壱通

右之通一船二積込差下候間、入津之砌御改御請取、夫々御振分可被成候、海上之義は可為定之通候、以上、

大津酒造稼惣代

卯三月

松屋助九郎印

江戸下り酒問屋惣代

鹿嶋庄助殿

「(40)」

右之通入津仕候処、江州酒之義は上方拾壺ヶ国外之
荷物二有之、兼而心得方之義奉伺候処、末々御下知無之候間、
右荷物取計方猶奉伺候、以上、

卯三月廿二日

酒入津取調懸

名主共

「

差上申御請書之事

(付札)

「貳拾樽之内一樽ハ痛樽ニ相成

拾九樽ハ水揚ニ相成候義ニ御座候」

一、上方拾壺ヶ国之外江州酒拾九樽、当三月中鎌倉町家持

豊嶋屋十右衛門方江入津候二付、右荷物同人方江相預ヶ置、

其段申上置候処、御取調之上、今般勝手次第第二壳捌候様早々

可申通旨被 仰渡奉畏候、依之御請書奉差上候、仍如件、

卯七月十日

源太郎

甚七

右御請書は酒造御掛様江差上申候、

「(41)」

⑦安政二卯年九月 二条殿領地方出来候瀬戸物売捌所引替之儀二付調
(扉、小口見出し)

安政二卯年九月

二条殿領地二而出来候瀬戸もの
売捌所引替之義二付調

仁杉八右衛門

(朱書)『七』

└ (42・43)

(扉)

(朱書)『緒付末二記』

二条殿領地瀬戸物売捌所之儀二付取調申上候書付

喜多村彦右衛門

└ (44)

覚

去天保五年正月廿一日、日本橋通巷丁目呉服町
新道難波屋卯兵衛宅

二条殿瀬戸物御売捌御用所二被相設候段、御用番松平
周防守殿江被 仰立置候処、右場所先年類焼以後
不都合二付場所替、今般深川相川町吉右衛門店利三郎宅
御用所二被相設候二付御届被 仰入候、以上、

卯七月

└ (45)

右二条殿御使塚田帯刀差出候書付并元済書類
写共御渡被成候間、取調左二申上候、

深川相川町

吉右衛門地借

利三郎

└

右利三郎儀は、浅草平右衛門町札差市右衛門支配人
利兵衛忤二而、父子共同人方江通勤罷在候もの二而、兼而
二条殿江立入仕、去寅十二月中領分瀬戸物売捌所之儀
利三郎江沙汰有之、取扱向之儀都而先年卯兵衛取計
候通可取扱旨申付候由、尤売捌所入口左右板
羽目敷台取付候迄二而、門玄関構等二仕候儀二而は無御座
候旨申立候、且又売捌所出来候共、於町内差支之筋
無御座候段、右町家主・五人組・名主申立候、

瀬戸物問屋

年行事

深川元町吉兵衛地借

権八

└ (46)

同

月行事

通壺丁目藤兵衛借地

善助

右二条殿領地瀬戸物類、天保五年正月呉服町新道
八郎右衛門地借卯兵衛宅売捌所二被相設候処、不都合二付、
今度深川相川町吉右衛門地借利三郎宅江場所替

└

相成候段、右は先前之通荷物問屋江引請候儀差支
無之哉之相尋候処、諸家産物振合通、問屋一手江引請
売払二相成候儀二候ハ、差支無之段申立候、

右は天保度元済は有之候得共、年数も相立問屋再興
後之儀二付、一応相尋候処、前書之通申立候間、請書写
入御覽申候、御聞済之上深川相川町町役人共并瀬戸物
問屋行事江之申渡案、外二天保度申渡書写相添
御渡被成候書類写返上、此段申上候、以上、

└ (47)

卯八月

喜多村彦右衛門

└ (48)

(扉)

「(朱書)『卯九月十九日上ル

鱒付』

書面 二条殿領地産物売捌所移替之儀、
元済書留帳二見合取調被 仰上案取綴奉
入御覽候、尤問屋共其外江之被仰渡方は此上
御下知次第尚取調候様可仕候、

卯九月

市中取締掛

└

└ (49)

上

瀬戸物問屋

行事

以書付御請奉申上候

一、二条殿御領地京焼物類、去ル天保五年年中

呉服町新道八郎右衛門地借卯兵衛方売捌所二被遊候所、

右は御不弁二付、今般深川相川町吉右衛門地借利三郎方

└ (50)

売捌所二被遊、私共仲間限御売払二相成候趣、差支有無
御尋二御座候所、天保十二丑年以前之書物焼失仕、

難相分御座候得共、

諸家様御産物御払之振合を以、御引請方可仕儀二

御座候ハ、聊差支無御座候、依之御請奉申上候、以上、

瀬戸物問屋年行事

深川元町吉兵衛地借

安政二卯年八月

丸屋

権八印

同

月行事

通壺丁目藤兵衛地借

美濃屋

善助印

喜多村

御役所

（51）

（朱書）

『天保五年二月館市右衛門掛リ二而、瀬戸物問屋共江申渡書写』

十組瀬戸物問屋行事

浅草茅町式丁目

藤七

同 月行事

霊岸嶋町

藤兵衛

外式人

去冬相糺候二条殿領地瀬戸物困品江戸廻し、

呉服町新道八郎右衛門地借卯兵衛宅を売捌所二

被相設、其方共問屋仲間江売払有之候筈、尤

糺之節申立候通、京都瀬戸物従来紀伊殿仕入

荷物并京都焼物問屋方引受来候分は、是迄之

通相心得可取扱、

右之趣相心得、且前書江戸廻し之儀、絵符差札

等は難相成、全売荷之心得を以取計候様、其筋江

被仰渡候段、従町奉行所被仰渡候間、前条之通

相心得、問屋一統得申通買受可致候、

午正月

右之通被仰渡奉畏候、為御請御帳二印形仕候、以上、

十組瀬戸物問屋年行事

浅草茅町式丁目

中沢屋藤七

煩二付代

清兵衛印

天保五年二月六日

同

湯嶋横町

内田屋清右衛門紀州

住宅二付店預り人

佐兵衛印

同

霊岸嶋町

中沢屋藤兵衛印

下ケ札

（52）

同
伊勢町
今利屋清右衛門濃州
住宅二付店預り人
利七印

下
ケ
札
本文江戸廻し之儀会蒔差札等は
難相成と申ケ条元済之節被仰渡も
相済居候義二付、今度之処別段被仰上
置候二も及ひ申間敷哉、猶市中取締掛江
勘弁被仰渡候様仕度奉存候、

二条殿領地二而出来候瀬戸物売捌所
引替之儀、取調候趣被仰上書案、御取調、
外書類とも致一覽候処、拙者儀何之
存寄無御座候間、右書類為持致返却候、
以上、

九月廿二日
井 対馬守
池播磨守様

(朱書)

『卯九月廿八日阿久沢丑輔を以上ル、同十月朔日渥美』

「大和守殿 『豊次郎を以御書取添御下、承付いたし、
同三日中村又兵衛を以返上、』

二条殿領地二而出来候瀬戸物売捌所
引替之儀取調候趣申上候書付
書面二条殿方御届之趣
御聞届相成候間、先例之通取計
可申旨被仰渡奉承知候、
卯十月朔日
「池田播磨守
町奉行

二条殿領地方出ル瀬戸物売捌所之儀、兼而呉服町
新道難波屋卯兵衛於宅取扱候処、此度深川
相川町吉右衛門地借利三郎宅江場所替之儀、
二条殿家司申上候書面被成御下ケ、取調可申上旨
被仰渡候、

此儀取調候処、去ル天保四巳年十二月、右領地二而
焼出候瀬戸物、御当地江相廻し、諸家国産
同様之振合を以、問屋共江弘二相成候様被
致度旨之書面、松平周防守殿先役共江
御下ケ有之、其砌取調之上、紀伊殿領分仕入
荷物并京都焼物問屋方差下シ候品二不

相障、二条殿囲荷物二限り江戸廻シ、其筋問屋共江被相払候儀は於町方差障候筋無御座、尤諸家国産売捌方之振合二准シ、江戸表江売捌所被相設、役人出張取扱候手続等又差障之儀無之旨申上候処、右瀬戸物江戸廻之儀、会符差札等は難相成、全売荷之心得を以被取計候ハ、不苦趣、二条殿家司江御挨拶御座候旨、其頃先役共江被仰渡候二付、其段問屋共江申渡置候儀二有之候、然処前書卯兵衛宅先達而類焼後取扱向不都合之趣二而、此度は場所替深川相川町利三郎宅江被引移候迄之儀と相聞候得共、町年寄共江も申付、猶差障有無取調候処、右は場所替一ト通之儀二而、先年二条殿家司江被 仰達候通、取扱方被据置候上は、於町方差障之筋無御座候間、此上御聞届之御沙汰次第、問屋共等江も申渡置候様可仕奉損候、

右取調候趣、書面之通御座御候、依之被成御下ケ候書面返上此段申上候、以上、

卯九月

井戸対馬守

池田播磨守

(朱書)

『卯十月朔日』

大和守殿、渥美豊次郎を以御渡』

覚

書面二条殿より届之趣承置候間、先例之通 (朱書) 「可」被取扱候事、

(朱書)

『卯七月廿六日』

大和守殿 安藤平左衛門』

覚

去天保五年正月廿一日、日本橋通
 吉丁目呉服町新道難波屋
 卯兵衛宅

└ (56)

└

└ (57)

└

└ (58)

└

└ (59)

二条殿瀬戸物御売捌御用所二被相
設候段、御用版松平周防守殿江被
仰立置候処、右場所先年類焼
以後、不都合二付場所替、今般深川
相川町吉右衛門店利三郎宅御用
所に被相設候二付、御届被
仰入候、以上、

二条殿御使

卯七月

塚田帯刀

松平周防守殿江御届之前例手扣

日本橋通壹丁目

稻荷新道

難波屋

卯兵衛宅

先達而被 仰立候瀬戸物御売捌
御用所二被相設候二付、御届被
仰入候、以上、

二条殿御使

午正月

根岸采女

前文之通、天保五年正月廿一日被
仰入候処、周防守殿御落手之上、町
御奉行所筒井伊賀守殿御調二而
無滞相済候、為念此段奉申上候、以上、

卯

二条殿御使

正月

塚田帯刀

初発被 仰入書面写手扣

天保四巳年十一月中、松平周防守殿江
被 仰入候御書取写

二条殿御領地二而旧来瀬戸物焼出候内、御囲二
被成置候品々御出入方、瀬戸物問屋京都二条
通池田屋友八・五条坂尼崎屋庄八・海老屋
藤助江從來為取扱、其向々江御払二相成
候儀二御座候、然ル処江戸向は京都瀬戸物
売捌方宜相聞候得は、當時は右瀬戸物類
積廻し候品払底二而、売買不弁利之由

二付、此度江戸表江御囲之品々相廻、問屋共江
御払二相成候様被成度、左候へは自然卜江戸

表於問屋共も弁利相成候趣相聞候、尤
捌方宜候時は、御領地之者共家別も
相直り、御年貢不納も無之様罷成、
御難迫必至御差支之御凌方二相成
候儀に御座候間、諸家国産同様之
振合を以、江戸表二而引受所被相設、御役人
共出張、其筋問屋共江御払被
仰付度候、御差支も無之次第二御座
候ハ、程能御取計相成候様被成度
思召候、以上、

二条殿御使

「(63)

巳

十一月

根岸采女

右之通被 仰入候処、同十二月廿七日、御用人
衆より御文通にて罷出候様御達有之、
則罷出候処御、聞濟二相成居候、此段も
為念奉申上置候、以上、

二条殿御使

卯

七月

塚田帶刀

「(64)

(朱書)

『安政二卯年十月二日申渡写』

申渡

瀬戸物問屋

行事

二条殿領地方出候瀬戸物売捌所、呉服町新道八郎右衛門
地借卯兵衛宅、先達而類焼後、取扱向不都合之儀有之、
此度深川相川町吉右衛門地借利三郎宅江場所替相成
候付、諸事天保五午年正月申渡之通相心得、問屋
一統江申通買請可致候、

深川相川町

名主

月行事

前書瀬戸物問屋共江申渡之趣相心得、夫々心附候様
可致、

卯

十月

右之通被仰渡奉畏候、為御請御帳二印形仕候、以上、

瀬戸物問屋

年行事

深川元町吉兵衛地借

安政二卯年十月二日

権 八印

同

月行事

牛込牡丹屋敷五人組地借

金右衛門店支配人久七煩二付

代利 七印

通壱丁目藤兵衛地借

善 助

代安兵衛印

深川相川町

月行事

銀 蔵印

五人組

与 七印

名主

新兵衛印

(朱書)

『卯十二月廿四日、東条平左衛門を以御渡、承付いたし、翌廿五日同人を以御返上』

卯十二月廿四日
池田播磨守承之

扣

大和守

二条殿家司江相達候趣

二条殿領地方出候瀬戸物売

捌所、此度深川相川町吉右衛門店

利三郎宅江、場所替被致候旨

御届被 仰入候趣、各承置候、尤

委細町奉行承合候様、二条殿

家司江相達候事、

(朱書)

『右は前二綴込有之候御書取写之通、御下知有之候節取計相済候処、猶又此写之通二付承附返上相成候事』

【第一了】

【第二】

①安政三辰年八月 日光御門之御領方出候産物売捌方之義、上野執当信解院位心院方申上

（扉、小口見出し）

「

安政三辰年八月

日光御門主御領方出候産物調

『巻』

稲沢弥一兵衛

「（9）

辰八月廿四日

日光御門主御領方出候産物之儀二付、御別当信解院外巻ヶ寺方差出候書付式通、右は向方御月番二而御取扱ものと被思召候由二而、勘右衛門を以御渡、先写致置候様可仕旨申上置候事、

「（10）

『辰八月廿四日』

覚

御門主御方御兼帯所浅草寺
寺院向、昨卯年地震之節
皆潰同様、其外御手限御普請
之御場所等及大破候二付、御入用材
木板類・家根板・杉皮等日光表方
御取寄、同寺水揚場方引入
御用途二被成、且日光御領方出候
産物類之内栗山蕎麦・同
桶類・蕃椒・女榧油・胡桃・勝栗・
干瓢・狗背・麻苧・寒晒粉類・
豆類・革類・塗物類、先当分
之処右之品々御取寄、御遣用二
被成、両様共御用御遣、残之分は
夫々問屋共江入札を以御払二
差出申度候、且又右之内女榧
之儀は沢山二生し候処、是迄年々
刈取候由、然ル処右実絞立油二

「（12）

製候得は、相応之御用途二
 相成候二付、生木為致候様兼而申
 渡置候処、当節頃方少々ツ、
 実乗可申趣、依之絞り立御遣
 用二相成候得は、從來御難渋之
 御勝手差向一廉之御潤助二
 相成、其上両三年も相立候得は
 追々致生木沢山二出来可申
 に付、是又御遣残之分上野
 近辺浅草寺地中之内取捌
 所御出来、直安二為売捌申度候、
 右は此節柄彼是被仰立候は
 御斟酌思召候得共、不一方御益
 筋二相成、自然御配下向助成
 にも相成候、旁前件之次第無
 御扱被仰立候間、何れ二も御廟（朱書）「願
 之通被 仰出候様被成度思召候、
 此段拙僧共方宜申上候様被仰付候、
 八月
 信解院
 住心院

「(13)」

御兼帯所浅草寺院向、昨
 卯年地震之節皆潰同様、其
 外御手限御普請之御場所
 及大破候二付、此度寺（ママ）奉行衆江、
 別紙之通、右御入用之材木類
 日光御領方御取寄御用途二被成
 度、且日光御領方出候産物類
 品々も御取寄御勝手御遣用に
 被成、両様共御用御遣残リ之
 分、素人売は一切不致、夫々問屋共
 江入札を以御払二差出申度候、且又
 女榧油之儀も、上野近辺浅草寺
 地中之内取捌所出来、御配下
 内限安直二為売捌申度、左候得は
 行々窮民共助成二も可相成儀二付、
 別紙之通被仰立候、右之御趣
 意二付、御取調之節は何分宜敷

「(16)」

御取扱之儀御頼被仰入候、以上、

日光御門主御内

八月

飯田司書

┌
└
(17)

②安政四巳年閏五月 向方相談廻 駿州村々茶売捌方之義二付、御勘定奉行同吟
味役申上調

「（扉、小口見出し）」

安政四巳年閏五月

向方相談廻

駿州村々茶売捌方之義二付

御勘定奉行・同吟味役申上調

『貳』

由比義三郎

「（18）」

『巳閏五月五日、勘右衛門を以渡』

「播磨守殿江相談もの」

「伊勢守殿

駿州村々茶捌方之義二付取調申上候書付

跡部甲斐守
町奉行

「（19）」

駿州安倍郡安倍・藁科両川縁山中
村々二而相製候茶捌方之義に付、御勘定奉行
并吟味役相伺候書付、御下ヶ被成勘弁
仕可申上旨被仰渡候二付、一覽仕候処、右
取調之趣ハ駿府茶商ひ之もの共、前々
自己二而問屋名目相唱候哉、三好

「

阿波守彼地町奉行勤役中、手限二而
問屋再興申渡候得共、文化已前山方
荷物一手二問屋共引受候と申的証も無之、
且問屋起立之義、駿府町奉行江掛合

候得共耽と不仕、下方自己之書物而已
を以手限申渡候義二有之、問屋共一手引
受候而は、売・買相成、自然御府内江之
出高相減、手を経候丈ヶハ高直二相成

「（20）」

手狭窮屈之自法に付、問屋取放可
然哉二候得共、左候而は土地奉行之威嚴
二も拘候間、駿府茶屋問屋ハ先其俤
差置、安倍・藁科両川縁村々

「

之義は前々之通勝手次第第二直捌
為致、御府内潤沢二相成候様可取計旨、
右村々惣代之もの共江可申渡と之見込二
御座候、然ル処文政九戌年駿州安倍
郡足久保村外百拾貳ヶ村惣代同郡

奈良間村九郎右衛門外右衛門方、駿府茶町寺町目万右衛門外七拾三人江相掛候横領出入之義、江戸茶問屋共江引合候

「(21)」

廉重モ之吟味二而、十組問屋定法二拘り候故を以、其節之御勘定奉行曾我豊後守方先役柳原主計頭方江引渡、右一件之義は、訴訟方村々ヲ生元并相手方ヲ中買と唱、生元二而製候茶を中買之もの共引受、荷物（朱書）「作」之上、江戸茶問屋一統江積送、又は中買

「

之手を不經、生元方右問屋共江直送をも致来候処、文化之度茶問屋とも之内式拾軒、菱垣廻船積十組仲ヶ間江加入致し候已来云々之趣意申争候処、追々吟味之上裁許状二も訴訟方

「(22)」

村々古来方茶作重二致し、生方と唱作出し、右ヲ買取江戸廻致ス相手方ヲ荷元と号候旨書載有之、問屋之唱無之儀は発輝と相分り、一躰問屋と唱候は、荷元方一手二引受売捌候もの二御座候処、駿府茶町之商人ハ仲買と相唱、既山方之もの共儀、右仲買二不限直二御当地茶問屋江も差送候仕来之趣二有之、然ル上は茶町之商人ヲ問屋とは難唱筋二而、前書裁許状文言之趣も有之、旁駿府町奉行二而問屋名目再興申渡候段於事実相当共

「(23)」

難申、奉行之威權二拘り候共、其低差置候而は自然一手引受之姿二成行可申哉も難計候間、此上問屋名目差止、前々之通兩手売捌方差支無之様申渡候方、御当地茶問屋共引受方も窮屈二不相成候間、今一応勘弁致し可申上旨、御勘定奉行并吟味役江被仰渡可然哉二奉存候、依之御下ヶ被成候別紙書付

已

跡部甲斐守

閏五月

池田播磨守

「(24)」

『巳五月晦日、樋口喜左衛門を以御渡』

「伊勢守殿

駿州村々茶捌方之儀二付相伺候書付

松平河内守

川路左衛門尉

立田岩太郎

塚越藤助

勝田次郎

設楽八三郎

福田八郎右衛門

駿州安倍郡安倍・藁科両川縁山

中村々之儀ハ、極辺鄙畑同様之

土地二而、霧深く諸作仕付候ても

実法不宜候二付、往古方茶製

第一二致し、右を以御年貢相納、其

外夫食等買入候儀二而、売捌之儀

ハ、右村々方御当地茶問屋直

宛之送状相添、駿州清水・

焼津両湊江津出之上、御当

地茶問屋江荷物差送、代金

右問屋共方荷主江受取候儀二

有之、尤天保度諸問屋停廃

以前ハ勿論、当時迄同様引続

取計、村々相続罷在候之处、

先般問屋組合再興被

仰出候二付、駿府町奉行所二おゐて

茶問屋共拾九人申付候二付、

問屋共一手二買受、外売不相

成旨等申聞候間、難儀之旨

掛合候得共、聞入不申候処、

山中方差出候荷物、問屋場々

相場相立、正路二売買可致旨

同所町奉行方触達等有之、

其上口銭等可差出旨問屋

共申聞、左候得は口銭利潤

丈ケハ村々百姓とも痛二相成、

必至と困窮二陥り、及退転候外

無之候間、前々之通売捌方致

度旨、駿州安倍郡足久保村

外六拾三ヶ村御料・私領惣代

大草太郎左衛門・御代官所問屋

「(25)

「(26)

「(27)

墨俣村名主助兵衛外式人之
もの共、石河土佐守御勘定奉行
之節願出候二付、追々糺之上

駿府茶問屋起立等、同所
町奉行江掛合候処、起立申渡
候書留ハ無之、問屋附込帳之
内ニ、駿府馬場町又右衛門外三人、
宝曆六子年十月茶問屋申

渡と而已有之、其余（朱書）「留」帳焼失

ニも可有之書類不相見、天保
度問屋停廃は勿論、再興

共相伺候儀無之旨申越

候二付、猶御当地町奉行所二

書留も可有之哉と懸合候得共、
是又書留無之、前々駿府茶

問屋并安倍・藁科川縁

村々江戸表茶問屋江荷

物取引致し候名前書付等、差

越候二付、勘弁評議仕候処、山方

之儀ハ、町奉行方差越候書付

之内ニも安永度方当時迄直

捌仕来候儀相違も無之、

駿府茶商ひ之もの共、前々

自己ニ而問屋名目相唱候哉、

三好阿波守駿府町奉行勤役

中、手限二而、問屋再興申渡

候得共、文化以前山方荷物一

手ニ問屋共引受候旨申的

証も無之、且問屋起立之儀

駿府町奉行江掛合候得共、

前書之通駢と不仕、下方自

己之書物而已を以手限申渡候

儀ニ有之、問屋共一手引受

候而ハ、売、買ニ相成、自然

御府内江之出高ハ相減、手を

経候丈ケハ高直ニ相成、手狭窮

屈之自法二付、問屋取放可

然哉二候得共、左候而ハ土地奉行

之威厳ニも拘り候間、駿府町

茶問屋ハ先ツ其俣差置、安

倍・藁科両川縁村々直捌

之儀ハ、前々之通勝手次第二

直捌為致、御府内潤沢ニ相成

候様可取計旨、右村々惣代

「
(28)

「

「
(29)

「

「
(30)

「

「
(31)

之もの共江申渡、其段駿府
町奉行江ハ私共方申遣候様可
仕哉と奉存候、此段奉伺候、以上、
巳五月

『巳七月朔日、備中守殿、樋口
喜左衛門を以御渡、同三日御同人江
同人を以返上』

一覽仕候、
巳
七月朔日跡部甲斐守
池田播磨守

駿州村々茶捌方之儀二付相伺候書付
書面都而伺之通可取計旨
被仰渡法承知候、
巳六月廿六日

松平河内守
川路左衛門尉
立田岩太郎
塚越藤助
勝田次郎
設樂八三郎
福田八郎右衛門

③安政四巳年八月 向方相談廻 松平薩摩守国産薬種類御当地并大坂表おゐて売捌候義二付大坂町奉行方懸合調

(扉、小口見出し)

「(朱書)

『安政四巳年八月』

向方相談廻

松平薩摩守国産之儀二付調

(朱書)『三』

由比義三郎

「(33)

以書状致啓上候、然ハ松平薩摩守国産薬種類六品

御用二付年々献上被 仰付、右

残薬、以来御地并当表二おゐて

売捌、尤素人江ハ直売不致、

問屋共江売渡度旨、去辰

二月中并戸对馬守勤役中、

同人御役所江届出聞届有之、

夫々売捌方致し候付而ハ、御用

薬種撰立、多分取集候儀二付、

御地而已二而ハ并利不宜候付、

当表おゐても売捌度段、

同十二月中薩摩守等表蔵

屋敷詰留守居役之もの、先役

佐々木信濃守御役所江届出候処、

右薩摩守国産物売捌方

之儀二付、文化八未年中先役

とも方長崎奉行江問合候ケ条

之内、枳実・枳殻之儀ハ漢種二相

紛唐方不断持渡品之由、香附

子・金銀花・括楼仁等漢種二相紛

品二而唐方持渡稀二付、琉球

産ハ漢種同然二而、難見命(朱書)『分』、

何レも於大坂売買有之候ハ、

差支之趣、長崎会所役人共

申立候義二付、其余之品伺之通

御下知を以承届、尤巴豆之儀ハ

其節申立無之、此度初而売出

候哉二も有之候付、猶其筋無急

度為相糺候処、香附子・金銀花・括

楼仁ハ和産二而、枳実・枳殻ハ

唐和共有之、巴豆ハ漢種

にも可有之哉二相聞、右先々

「(36)

「(35)

「(34)

和産之分当時諸国に積
登多有之、高価之品にも無
之由、当表二而売捌候而も差
支有之間敷候得共、当表之儀は
長崎表入札直段二も抱、不容
易故を以、前条之通伺之上
承届候儀二有之候得共、前条之
通、其御役所江届出候節、当表
之儀も御伺済二而御聞届相成
候儀哉、左候ハ、此上不及伺、右届
之趣承置可申と存候付、一応
及御問合候、否御報被御申聞候様
致し度、依之為御見合、薩摩守
留守居役之者差出候書付并
文化度書写相添、此段可
得御意如是御座候、以上、

六月十二日

戸田伊豆守^⑨

久須美佐渡守^⑨

跡部甲斐守様

池田播磨守様

(朱書)

『已七月廿七日水谷武治を以御渡』

〔播磨守殿江相談もの〕

御書状致拝見候、然は、松平

薩摩守国産薬種類御用二付、

年々献上被 仰付、右残薬、

以来御当地并其表おゐて売

捌、尤素人江は直売不致、

問屋共江売渡度旨、去辰

二月中先役并戸対馬守勤役

中、同人御役所江届出、聞届有之、

夫々致売捌方致候付而は、御用

薬種撰立、多分取集候儀二付、御当

地而已二而は并利不宜候付、其表お

ゐても売捌度段、同十二月中

薩摩守其表蔵屋敷詰留

守居役之者々、先役佐々木

信濃守御役所江届出候処、右薩摩守

国産物売捌方之儀二付、文化八未

年中御先役方々長崎奉行^々(朱書)「江」

問合ヶ条之内、枳実・枳殻之儀は

漢種二相紛レ唐方不断持渡品

┌

└ (37)

┌

└ (38)

┌

└ (39)

┌

└ (40)

之由、香附子・金銀花・括楼仁等漢種二相紛候品二而、唐方持渡稀に付、琉球産は漢種同然二而難見分、何しも於大坂売買有之候ハ、差支候趣、長崎会所役人共申立候由二付、其余之品伺之通御下知を以被聞届、尤巴豆之儀は其節申立無之、此度初而売出候哉二も有之候二付、於其筋無急度御糺有之候処、香附子・金銀花・括楼仁は和産二而枳実・枳殻ハ唐和共有之、巴豆ハ漢種二も可有之哉二相聞、右夫々和産之分、当時諸国方積登

「(41)」

多有之、高価之品二も無之由、当表二而売捌候而も差支有之間敷候得共、其表之儀ハ長崎表入札直段二も拘、不容易故を以、前条之通伺之上被聞届候儀二有之候得共、最前当御役所江届出候節、其表之儀も伺濟二而聞届相成候儀哉、左候ハ、此上不及御伺届之趣、御聞届可被成と之御見込を以、一応御問合之趣致承知、為御見合被御差越候薩摩守留守居役之者差出候書付并文

「(42)」

化度書写をも一覽致し候処、先役井戸対馬守方江届出候趣ハ、御当地江取寄候御用残を売捌候儀二付、外二故障無之候間、承届候儀二而、元来諸家国産之品於御当地売捌方届之儀は、其筋問屋共相糺、引受方等差支無之分ハ不及伺、手限二而承届候仕来二有之候、依之為御見合薩摩守家来方対馬守御役所江差出候書付写別紙沓冊相添、右御報可得御意如斯御座候、以上、

「(43)」

八月 日

池田播磨守
跡部甲斐守

久須美佐渡守様

戸田伊豆守様

猶以被御差越候書類は写之儀二付、

留置申候、以上、

「(44)

(朱書)

『写』

『○』松平豊後守領分産物於当表

売捌之儀申立候付伺書付

平賀信濃守

齊藤伯老(耆)守

松平豊後守領分之産物於当表

売捌候儀、宝暦年中取調之上、

其以来右家来之印鑑を御役所江

為差出置、当表江荷物着船之節ハ、

私共組同心差遣切手印鑑引合

相改、右切手之内途中二而相払

候品は、於其所買請候もの方手形

取之、切手二相添改候積御下知有之、

右之通、荷物改之上為売出来

候処、此度右領分産物は迄売捌

来候外百六拾四品、於当表売捌申渡

段、豊後守留守居役之もの別紙写

之通申立、品書箱詰雛形等も

差出候処、右品々之内上片腦・枝皮・

肉桂・山席(朱書)『帰』来・染木・大黃五品は此節

「(46)

当表二登合有之段、留守居役之者

申立候付、品為差出、唐薬問屋

薬種仲買年行事共江唐和之

差別相尋目利為致候処、右品々

於長崎表入札払二出候品二似寄、又ハ

唐方持渡同様之品二相見候段

申立候得共、当表二而八目利も難

致治定候付、長崎表薬種目利江

申付見極之否、且右品々為売捌

候儀、長崎二而差支有無をも申聞

候様、長崎奉行在勤曲渚甲斐守江

及懸合、手本薬種五種差遣候処、

於彼地薬種目利を初、夫々為致

見分候由二而否申越候は、上片腦

外四品之儀は唐物同品と見請

候段申立、黄芩外四拾壹種・

錫外四拾五種之儀未見分不致」

候得共、此節五種之手本二而相考

候得は、いづれも漢種二相紛候品二

可有之、右之内黄芩外四拾壹種

「(47)

之儀は、当時毎度持渡、錫并外
四拾五種之儀唐方より持渡候儀
稀二御座候得共、薩州領三ヶ国

「(48)

琉球之産漢種同様二有之、

難見分品合二候得は、此末唐方
持渡有之節唐物商売之差

支二相成可申旨申立、雌黄土外

八種、黄石・海亀甲・琉紙・香具類・

山薬・当薬・鹿皮外七種之儀は、

品柄不相分も有之、当時唐方

持渡之種類似寄候品も多分可

有之哉、右之内唐物二紛敷有之

候而は、是又差支二相成候品も有之

候間、手本之品々不致見分候而は

差支之有無難致治定段申立

楠皮外四種七品は和産之雜物類と

相見候間、当表二而見分之上、銘書

之通和産二無相違候ハ、差支之儀

無之旨、右之通廉を分商人并会所

調役・町年寄・会所役人共儀も一同、

品々差支之儀評議之趣申出」

候由、右之通二而唐蛭同銘之品

当表おゐて売捌候儀は、いつれ二も

差支候儀二候得共、桁（折力）々々条之内手

本不致見分候而は差支之有無

難申出趣申立候分、追而糺方之

模様次第口々手本差廻候ハ、猶又

見分申付委細可及掛合、和産

之雜物類と相見候分ハ、当地二而見分

之上、銘書之通和産二相違無之

候ハ、彼地二而差支候儀無之段、甲斐守方

申聞候儀二御座候間、上片腦外四種・

黄芩外四拾壹種・錫外四拾五種、

都合九拾三種之儀は、長崎二而差支

有之品二付、於当表売捌候儀不

及沙汰、雌黄土外八種・黄石・海亀甲・

琉紙・香具類・山薬・当薬・鹿皮外

七種、都合式拾三種之儀は、追而手本

差出可申、其節於長崎目利并

差支之有無糺之上可及沙汰、

楠皮外四拾七品之儀も、於当表

是又手本を以相改候上、売方之

儀可及沙汰旨、豊後守留守居役之

者江申渡候様可仕候哉、依之右留守居

「(51)

「(50)

「(49)

差出候書付・品書并甲斐守方之返書・長崎会所役人評議書共写巻冊相添、此段奉伺候、以上、
(朱書)

『文化八年』

未十一月

平賀信濃守
齊藤伯耆守

└ (52)

『○』口上覚

豊後守領分薩隅日并琉球国産之内四拾品、宝曆年中御届申上差登来候、其後追々植蒔と致生立候品も有之候二付、国用之外余分も有之候ハ、多少二不限御当地江差登度候、尤是迄迎も御届申上置候品、不残年々罷登候と申二も無之候、且又右宝曆之度御届申上置候外之品、折々は到着仕、御奉行所之御苦勞二罷成、御糺之上右荷物積戻二罷成不行届仕合恐入候、右二付而は国産荷主共江甚手支難渋仕候儀二御座候、尤此度御届申上候菓種之分ハ外々菓種と紛候而も如何二奉存候間、別紙雛形之通箱詰二いたし、御当地唐菓問屋之内江差出申度奉存候、勿論菓種之分は中途売は決而不為仕候、御改之節之印鑑は先年差出置候印鑑御用被下度候、依之別紙品書并雛形差上此段申上候、以上、

└ (54)

午十一月 松平豊後守留守居

田中藤左衛門

└

(朱書)

『○』薩州・隅州・日州并琉球国

産物品書

覚

一、黒砂糖	一、生蠟	一、菜種
一、胡麻	一、鬱金	一、桂辛
一、伊豆宿砂	一、柴胡	一、莪木
一、茯苓	一、紫根	一、松煙
一、揚梅皮	一、海人草	一、明礬
一、硫黄	一、煙草	一、木海月

└ (55)

一、苧	一、芭蕉苧	一、布類
一、綿実	一、紙	一、鯉節
一、貝類	一、玉子	一、牛馬皮
一、牛角	一、鉄	一、焼物類
一、蕎麦	一、小麦	一、椎茸
一、つく綱	一、鳥もち	一、椎実
一、椎皮	一、材木類	一、焚炭
一、松櫨		

合四拾品

右は宝暦九卯年、国産之品当

表江差出売方為致候儀、御届申上

置候分二御座候、

一、黄芩	一、白木	一、阿仙薬
一、山帰来	一、大黄	一、茴香
一、延胡索	一、良姜	一、白豆蔻
一、白芷	一、砂仁	一、木瓜
一、麻黄	一、烏薬	一、大楓子
一、滑石	一、木香	一、遠志
一、雌黄土	一、覆盆子	一、蒼木
一、黄石	一、枝皮肉桂	一、染木
一、海亀甲	一、青石粉	一、藿香
一、知母	一、上片腦	一、蓬砂
一、琉紙	一、虫糸	一、楠皮
一、樟腦	一、紅花	一、密
一、松脂	一、錫	一、山欝金
一、根皮	一、枳実	一、蠟石類
一、枳殼	一、木附子	一、瓜呂根
一、澤瀉	一、当帰	一、半夏
一、芍薬	一、香附子	一、車前子
一、葛根	一、天門冬	一、川芎
一、独活	一、防風	一、天爪粉
一、山薬	一、黄栢	一、鍾乳石
一、厚朴	一、羌活	一、山梔子
一、沙参	一、龍胆	一、地骨皮
一、木通	一、地黄	一、薏苡仁
一、蓮肉	一、金銀花	一、紫蘇
一、葛花	一、三稜	一、青葙子
一、防己	一、白扁豆	一、桔梗
一、蔓荊子	一、前胡	一、薄荷
一、拘把子	一、桑白皮	一、当薬
一、烏頭	一、湯ノ花	一、瓜呂仁
一、苦参	一、黄精	一、威靈仙
一、麦門冬	一、澤朮	一、草決明
一、菴孫子	一、山慈姑	一、蛇床子

└

└
(58)

└

└
(57)

└

└
(56)

一、柯首烏	一、天南星	一、山査子	┌ (59)
一、小人参	一、寒水石	一、草蓂	
一、香貝類	一、升麻	一、塩魚	
一、干魚	一、干鰯	一、麻ノ皮	
一、牛馬爪	一、実粒	一、川粒	
一、茶	一、琉球芋	一、大豆	
一、小豆	一、毛綿	一、古地金	└
一、種子油	一、油粕	一、魚ノ油 (朱書)『△』	
一、焼酎	一、梔粉	一、梔皮	
一、柴油	一、薪	一、竹	
一、塩辛類	一、密蠟	一、餅栗	
一、栗	一、かち栗	一、黒柿	
一、黄揚木	一、櫛木類	一、植木類	┌ (60)
一、胡桃	一、文豆	一、蒲葵葉笠 ^{ヒヨウ}	
一、藍	一、あいす	一、ひろう皮	
一、はせ実	一、椿実	一、鯉ノ煎	
一、紬類	一、へご	一、扇子	
一、やすの灰	一、花乳石	一、塗物類	
一、泡盛	一、鳥類	一、線香	└
一、花輪	一、恙次	一、水晶	
一、呉座類	一、青貝	一、甕菜	
一、布苔	一、檀姜	一、棕呂皮	
一、落花生	一、堆金堆朱器物		

合百六拾四品

右、百六拾四品之儀は、折節国方方
差登候得共、是迄御届外之品二付、
向後右之分差登、自然唐蛸方

┌ (61)

持渡同銘之品二而、末々至り売捌方
相紛レ候儀無之ため、向後初而差登
候度每手本差出御改を受、別紙

└

雛形之姿二箱詰・名書いたし、売出
為致候積二御座候、尤右数品之事故
不残当時差登候訳二は無之、追々

差登可申と見込、前以御届申上置、
於初而差登候砌は、其段訳て尚又

申上候積二御座候、勿論右は屋舗
表用物限り取扱候儀二而、薬種之分ハ

┌ (62)

薩州問屋・小問屋江向ケ差登取扱
為致候儀二は決而無之候付、手本御改
相済候後は、蔵屋舗諸役人共改

売出し為致、壹ヶ年壹品限斤数
相改、其年末二至り明細斤数御届
申上候様可仕候、尤其余之品は問屋・

└

小問屋江も差登候儀も御座候、右は

商荷物二御座候間、先達而差出置候
印鑑御用被下度候、右之趣を以
御聞濟御座候様仕度、櫃詰雛形別紙
相添、此段申上候、以上、

松平豊後守留守居

午十一月

田中藤右衛門

(朱書)

『此種子油并油粕之儀、拾五年以前

巳年油稼之儀二付御下知有之、撰河泉

三ヶ国之外は諸国手作手絞は格別、其余

△絞草之分等表江差廻可申儀二付、追而和産

之雜物類壳捌方之儀相達候節、右被仰渡シ

有之種油粕之儀は、絞草二而差廻可申

二付、国元二而絞候上差登候儀は不及沙汰旨

申渡候積御座候、』

『文化九申年四月朔日御渡』

『○』御書付写

松平豊後守領分産物百六拾

四品、於此地壳捌之儀二付、各方

被差出候書付帳面共老衆江致

進達候処、右之内上片腦其外共

五品、黄芩方花輪迄四拾貳品、錫より

錫より花輪迄四拾貳品、錫より

草發迄四拾六品之分ハ、長崎

商売之差障二相成候間、此地二而

壳捌候儀不及沙汰、雌黄土方

山鬱金迄九品并黄石・海亀甲

琉紙・香具類・山薬・当薬之

六品、鹿皮方紬類迄八品とも合

貳拾三品は、追而手本差出候節

長崎江相廻し、差支之有無糺之上

可及差図、且楠皮方棕呂皮迄

四拾八品は、町奉行所二而相改、全和産二

相違無之候ハ、売出し之儀可及

差図旨、豊後守家来江申渡候様

江可申渡段、老衆方申

来候間、可被得其意候、

四月

(朱書)『写』

一、香附子 拾斤

一、巴豆 壹斤

一、枳実 拾斤

一、枳殼 五斤

一、金銀花 三斤

└ (63)

└ (64)

└

└ (65)

└

一、栝楼仁 五斤

┌ (66)

右は国産和薬種御用候間、年々
差上候様、去ル寅年七月阿部伊勢守様方
御達御座候付、年々献上仕来申候、
依而右差上残之薬種、以来江戸
表并当御地二而売捌候様仕度、尤素人江
直二売捌候儀は決而不致、右問屋共江
及通達売捌候儀之旨、当二月町
御奉行井戸对馬守様江御届申達
候処、御取調之上御聞届二相成候間、
於江戸表二八、夫々売捌方仕候筈二
御座候、一躰右御用薬種撰立候二付
而八、多分之品取集候間、残之分江戸
表而已二而は弁利不宜候付、於当御地も
売捌申度、此段御聞置可被下候、以上、

┌ (67)

松平薩摩守留守居

辰十二月

徳尾藤左衛門

(朱書)

『安政三辰年二月、井戸对馬守御役所江差出

△』

松平薩摩守内

早川五郎兵衛

一、香附子 拾斤

一、巴豆 壹斤

一、枳実 拾斤

一、枳殼 五斤

一、金銀花 三斤

一、栝楼仁 五斤

右は国産和薬種御用候間、年々
差上候様、去寅七月阿部伊勢守様方
御達御座候二付、年々献上仕来

┌

申候、依而右差上残之薬種、以来
御当地并大坂表二而売捌候様仕度
奉存候、尤素人江直二売捌候儀は
決而不致、右問屋共江及通達
売捌候儀二、大坂表之儀は同所
御奉行所江申立候積二御座候、
此段御聞置可被下候、以上、

┌ (69)

松平薩摩守家来

二月

早川五郎兵衛

(朱書)

『附札』

書面之趣、問屋行事共
相糺候処、素人売は決而不致、
問屋共江及通達、定法之通
入札払相成候上は、差障
筋も無之段申立候間、書面
之趣承置、猶問屋共江可被申
合候、

「
(70)
」

④安政四巳九月 紀伊殿領分産物売捌之義調
(扉、小口見出し)

「(朱書)

『安政四巳九月』

紀伊殿領分産物売捌之
儀二付調

(朱書)『四』 荻野政七調」

「(71)

(朱書)

『巳九月十日、武治を以御渡』

「

「町奉行衆江

紀伊殿
御城附

紀伊殿領分諸産物左之通

此節(朱書)「表」江取寄セ、深川佐賀町家持
五左衛門と申もの取扱人二申付
素人直売は不為致、夫々御府
内諸問屋共江入札払二売捌セ
候筈、此段御達申置候様役人共
申候、

「(72)

九月

諸産物之品

「

一、木綿紋羽并糸

一、蠟燭、生蠟

一、棕呂皮

一、沙糖

一、葉種類

「(73)

一、勢州川上茶

右之通、

「

上

乍恐以書付奉申上候

一、深川佐賀町家持五左衛門、勢州

「(74)

住宅二付店支配人新兵衛奉申上候、
今般

紀州様御国産市中江御積廻シ

問屋二限り入札私取扱方候儀二付、
当御役所二而御調二付、問屋共江弘方
仕法向銘々問屋方之存寄承、右之趣
御屋鋪江私方申立候得は、右仕法を
御国元其筋江御達有之候上、治定
之儀私方問屋方江示談仕候様にと之趣
二付、右御答来月廿四日迄御猶予
奉願上候、以上、

深川佐賀町家持

五左衛門勢州住宅二付

店支配人

安政四巳年九月

新兵衛印

喜多村

御役所

┌
(75)
└

└

⑤安政四巳年九月 寄合妻木民之丞陶器類売捌之義調
(扉、小口見出し)

「(朱書)

『安政四巳年九月』

寄合

妻木民之丞⁵届

陶器類売捌之儀二付調

(朱書)『五』

中田郷左衛門

(朱書)

『巳九月廿七日折右衛門を以御渡』

寄合

御届書

妻木民之丞

一、私知行所濃州土岐郡妻木村

二而焼立候陶器、於御当地売捌

之儀、深川佐賀町木嶋屋嘉十郎

と申者江蔵元申付、市中瀬戸物

問屋共江差向市売為仕候段、先達而

御届申上置候処、不行届之儀二有之

候二付、同人引請之儀差止、活鯛屋敷

鈴木屋次郎右衛門と申もの江申付

是迄之通為売捌申候、此段

御届仕候、以上、

寄合

巳九月廿七日

妻木民之丞

「(扉)

濃州妻木村産物陶器類引請人

替り之儀二付取調申上候書付

書面伺之通可申渡旨

被仰渡奉承知候、

已

十一月十日

喜多村彦右衛門

一、私知行所濃州土岐郡妻木村二而焼立候

陶器於御当地売捌之儀、深川佐賀町

木嶋屋嘉十郎と申者江蔵元申付、市中

瀬戸物問屋共江差向市売為仕候段、

先達而御届申上置候処、不行届之儀も

「(76)

「(77)

「(78)

「(79)

有之候二付、同人引請之儀差止、活鯛屋敷
鈴木屋次郎右衛門と申者江申付、是迄之通
為売捌申候、此段御届仕候、以上、

巳十月廿七日

右寄合妻木民之丞差出候願書被成
御渡、取調被仰渡候間、夫々相糺候処左之通
御座候、

瀬戸物問屋行事

坂本町貳丁目

伝右衛門地借

久三郎

同

靈岸島町

八兵衛地借

藤兵衛

右は濃州妻木村産物陶器類、深川
佐賀町紋吉地借嘉十郎、武州住宅二付
店支配人義助引請、着荷之分瀬戸物
問屋二限り市売仕、代金之儀は蔵元江納
方之儀、去辰三月中当御役所より私江取調
被仰渡、差障有無相糺申上置候、然ル処
右嘉十郎差支有之候二付、今般活鯛屋敷
喜兵衛地借治郎左衛門跡引請、取極之通
産物陶器類着荷之節は同人より瀬戸
物問屋行事江達次第市売仕、代金納方
等之儀、猶同人江示談致差支無御座候旨、
右行事共并諸色掛名主共申立之候、

活鯛屋敷

喜兵衛地借

藤三郎事

治郎左衛門

巳三拾八歳

右之者養父治郎左衛門儀は、武州橘樹郡
長尾村百姓二而三百石程所持致し、農間
醤油造家二仕候処、天保九戌年中活鯛
助成金下貸附取扱方被仰付、其後長
尾村住居は養子藤助と申者相続為致、
治郎左衛門は当所二別宅御当地定住二相成、
右下貸附取扱武家方勝手向江用立金等
致し罷在、前書藤三郎儀は深川永代寺
門前東仲町家持金兵衛次男二而、弘化三年
中次郎左衛門養子二相成、下貸附取扱方見習
罷在候処、当六月中養父治郎左衛門病死致
候二付、右藤三郎事治郎左衛門と相改、引続

「(80)

「(81)

「(82)

助成金下貸附取扱罷在、尤居宅之儀は
間口六間・奥行四間半平屋建二而、家内其
身夫婦・妹壻人・忤三人・娘壻人・召仕男式人・
女式人・下代壻人、都合拾式人暮二而、是迄蒙
御咎等候儀無御座候旨、組合坂本町名主新助
申之候、

「(83)」

右取調之趣、前書之通御座候、此度前書産
物次郎左衛門引請、売捌方等問屋共示談も
行届、外差障等も無御座候間、引請方御聞濟
相成候ハ、次郎左衛門并瀬戸物問屋江其旨申
渡候様可仕哉、依之申渡案相添、御渡候書
付返上此段申上候、以上、

巳十月 喜多村彦右衛門

「(84)」

「申渡伺案文」

申渡

瀬戸物問屋行事

「(85)」

坂本町式丁目

伝右衛門地借

久三郎

同

霊岸嶋町

八兵衛地借

藤兵衛

活鯛屋舗

喜兵衛地借

引受人 次郎左衛門

「

右之者濃州妻木村産物陶器

売捌之儀、深川佐賀町紋吉

地借嘉十郎店支配人儀助引受

候積之處、不行届之儀有之、同人

引請相止、活鯛屋舗喜兵衛

地借次郎左衛門跡引受、取極候通

陶器類着荷之節は同人より瀬戸

物問屋行事江達次第、市売致、

代金納方等示談いたし、差支無之旨

申立之趣、御奉行所御聞被置候

事、

「

「(86)」

右之通申渡間、其旨可存、
已十月

└ (87)

(朱書)

『已十一月十二日申渡写』

申渡

瀬戸物問屋行事

坂本町式丁目

伝右衛門地借

久三郎

同

靈岸島町

八兵衛地借

藤兵衛

活鯛屋鋪

喜兵衛地借

引受人 治郎左衛門

└ (88)

右は濃州妻木村産物陶器売捌之儀、
深川佐賀町紋吉地借嘉十郎店支配人
儀助引請候積之處、不行届之儀有之、同人
引受相止、活鯛屋鋪喜兵衛地借治郎左衛門
跡引請、取極之通、陶器類着荷之節は
同人方瀬戸物問屋行事江達次第市売
致し、代金納方等示談致し、差支無之旨
申立之趣、御奉行所御聞被置候事、
右之通申渡間、其旨可存、

已十一月

右之通被仰渡奉畏候、為御請御帳二印形仕
置候、以上、

活鯛屋鋪

喜兵衛地借

安政四巳年十一月十二日 引受人 治郎左衛門印

└ (89)

家主 喜兵衛印

右組合

坂本町

名主 新助印

瀬戸物問屋行事

坂本町式丁目

伝右衛門地借

久三郎印

同

靈岸嶋町

八兵衛地借

└

諸色掛り

堀江町

名主

熊井理左衛門印

藤兵衛印

┌
(90)

⑥安政五年四月 加藤大蔵少輔領分国産蠟売捌之義調
(扉、小口見出し)

『安政五年』四月

安政五年四月

加藤大蔵少輔領分国産蠟
売捌方之義調

『六』

┌

└ (3)

〔美作守殿江返却もの〕

『午四月十八日、福住省三を以御渡』

加藤大蔵少輔家来
三橋藤蔵

大蔵少輔領分予州新谷領産物蠟、先
般御触達之趣も御座候付、江戸表二而為売
捌度候付、旧来致出入候浅草誓願寺門前
勘七地借幸助江引受方申付、右之者より
夫々問屋共江売捌候儀二御座候、此段御届申上
候、以上、

└ (4)

加藤大蔵少輔家来

午四月十七日

三橋藤蔵

『午五月二日御向御相談と、同四日御相談済、同六日附札御渡之積、
福住省三を以被仰渡候、其段館市右衛門江達ス』

『附札案』

書面之趣、幸助より素人直売等決而不致、
荷物着次第蠟問屋共江及通達、時相場
を以売掛相成候得は、差障之筋無之候二付
承置候、

└

加藤大蔵少輔国産蠟取捌之儀取調申上候書付

館市右衛門

加藤大蔵少輔領分予州新谷領

産物蠟、先般御触達之趣も御座御候二付

江戸表二而為売捌度候付、旧来

致出入候浅草誓願寺門前勘七

地借幸助江引請方申付、右之

└ (5)

ものより夫々問屋共江売捌候儀二
候段、同家来三橋藤藏御届書
御下ヶ被成取調被仰渡候間、左二申上候、

蠟問屋行事

田所町家持

駿河屋助右衛門代

権三郎

元大工町家持

山鹿屋喜三郎

幼年二付後見

紋吉

一、予州新谷領産物

蠟

右産物蠟、町方江直売捌候儀無之、
前書出入町人浅草誓願寺門前幸助
引受、蠟問屋仲間二限時相場を以
買受候儀二御座候得は、差障候儀無
御座候旨申之候、

右取調候処、書面之通御座候、出入町人
幸助引請方被申付、蠟問屋仲間二
限り時相場を以被売払候得ハ、是迄
諸家国産「物」売捌例も有之、於町方
差障無御座候、依之御渡被成候御届書
写返上仕、去ル亥年御触写相添、此段
申上候、以上、

下ヶ札

但、御聞濟之上は蠟問屋共治定
心得方申渡候様可仕候間、猶又
其節御沙汰被成下候様仕度
奉存候、

(朱書)

『例

去々辰年池田播磨守殿御勤役中、
酒井修理太夫領分若狭国并越前国
敦賀領産物拾壹品、出入町人引受
町方直売捌不致、荷着次第
問屋江通達いたし売捌候積、同家来
伺書差上、同十月中御聞置相成申候、』

午四月

館市右衛門

下ヶ札

本文浅草誓願寺門前勘七地借幸助、
町内相尋候処、本書国産蠟引請
蠟問屋限売捌之儀、於所差障候儀
無御座候旨、同所町役人共申之候、

(朱書)

『嘉永四亥年十二月廿七日町触写』

去ル丑年問屋組合仲間等停止之節、菱垣廻船二積来候諸品は勿論、都て何国より出候何品も素人直売買勝手次第たるへき旨触置候処、今般問屋調之上再興相成候分は、都て素人直売買不相成候間、如前々可相心得候、

一、諸家国産之類其外江戸表江相廻候品々も、問屋二不限

銘々出入之者共等引請売捌候儀も勝手次第之旨触

置候処、是又調之上問屋組合再興相成候分ハ、前々

之通其筋問屋江相払可申候、
右之通町中不洩様可被相触候、

十二月

右之通御書付出候間、町中不洩様入念早々可相触候、

十二月廿七日

シレ付

加藤大蔵少輔国産蠟引受人相代り候御届之儀取調申上候書付

館市右衛門

加藤大蔵少輔在所予州新谷領産物
蠟、江戸表二而為売捌度伺済之上、浅草

誓願寺門前勘七地借幸助江、是迄引請

方申付、右之ものより夫々問屋共江為売捌

候処、不都合之義も御座候二付、以後蠟問屋

之内、大坂屋孫八・駿河屋喜平次、右兩人之

もの江引受方申付為売捌候段、同家来

鈴木直江御届書御下ヶ被成候、

此段当四月当御役所御掛、右産物

蠟出入町人浅草誓願寺門前幸助引受、

夫々問屋共江売捌之義、同家来

三橋藤蔵御届書差上、私取調、蠟問屋

仲間二限り時相場を以売払候義二

候得は、差障無之趣申上、同五月御聞置

相成候、然ル処右引受人幸助不都合

之義有之候二付、以来幸助義は差止、

蠟問屋之内大坂屋孫八・駿河屋喜平次

兩人江引受、売捌方被申付候二おゐてハ、

右兩人并蠟問屋仲間一同差障候義

無御座候旨、同問屋行事差添申之候、

「(10)」

「(11)」

「(9)」

右之通有之、孫八・喜平治引受、故障相聞
不申候間、前書御届之趣御聞置可被成下
候哉、尤先達而取調之節、浅草誓願寺
門前幸助町内相尋候廉も御座候間、
以後右孫八・喜平治引受申付之義、屋敷
御届書差出候趣、町役人共江申渡候様
可仕哉と奉存候、依之御渡被成候書付返上仕、
此段申上候、以上、

札 ケ 下

午九月

館市右衛門

下ケ札

本文之趣御聞濟相成候ハ、蠟問屋并
浅草誓願寺門前町役人達方可仕
候間、其砌御沙汰被成下候様仕度奉存候、

ヒレ付

書面館市右衛門取調申上候通り、
差支之筋も無御座候間、被御聞置、
大蔵少輔家来江も其段被仰渡
可然哉二奉存候、

午九月

市中取締掛

(朱書)

『午十一月六日』

書面加藤大蔵少輔国産蠟引受人
代合之儀、御向方類役取調申上候通
被仰渡可然哉二奉存候、

午十月

北 市中取締懸

(朱書)

『御附札』

産物蠟売捌方引請人代り申付候段
届之趣承置候、

加藤大蔵少輔家来

鈴木直江

大蔵少輔在所予州新谷領
産物蠟、江戸表二而為売捌度
伺済之上、浅草誓願寺門前勘七
地借幸助江是迄引受方申付、右之
ものより夫々問屋へ為売捌候処、
不都合之義も御座候二付、以後蠟
問屋之内大坂屋孫八・駿河屋喜平次
右兩人之もの江引受方申付為

壳捌申候、此段御届申上候、以上、

加藤大蔵少輔家来

九月朔日

鈴木直江

┌
(15)
└

⑦安政五年四月 酒井左衛門尉領分羽州庄内二而造込候酒江戸廻し致勝手遣二
相用候義二付達書

（扉、小口見出し）

「

安政五年四月

酒井左衛門尉領分羽州庄内二而

造込候酒、江戸廻し致勝手遣二相用候

義二付達書

但向方江本紙相廻ス、

（朱書）『七』

┌

└（16）

（朱書）

『安政五年』

午四月七日、本紙向方江遣ス、

┌

「町奉行衆

土岐撰津守

酒井左衛門尉領分羽州庄内二而

造込候酒、江戸表より下直二付、

三斗入五百樽江戸廻し二致シ、

勝手遣二相用度旨、右家来

申立候処、去巳年此度同様之儀

申立、江戸廻し為取計候義も

有之、寛政度被仰出候下り酒拾

壺ヶ国之外二候得共、売酒とは

訳違ひ、全自分遣用之儀二付、

当年之儀も申立之趣承届、

其段大和守殿江申上置候間、此段

及御達候、

午四月

┌

└（18）

└（17）

⑧安政五年六月 井伊掃部頭殿国産陶器外七品売捌方之義調
(扉、小口見出し)

「 安政五年六月

井伊掃部頭殿国産陶器外七品
売捌方之義二付調

(朱書)『八』

」

「 (19)

(朱書)

『午六月六日、福住省三を以御渡』

井伊掃部頭内

武藤信左衛門

井伊掃部頭、廻米其外荷物運送之為メ

手船被致所持、尤此節柄之儀、海上浦々為懸

念家来之者為乗組、江戸・大坂・長崎・松前・其

外之湊江も所用相兼通漕、且国用融通等二も

相用申候段、当二月九日御用番脇坂中務大輔殿二

御届相済申候二付、追々右船二而別紙之品々日用二

積寄、遣残二相成候分日本橋品川町裏河岸

伊勢屋平作と申者江引受申付、尤町方直売ハ

一切不致、右之者より夫々問屋江為売捌候而も苦ケ

間敷哉、此段奉伺候、以上、

井伊掃部頭内

六月

武藤信左衛門

(朱書)

『前書伺書二添、掃部頭殿家来より出』

覚

一、陶器

一、呉服

一、絹糸・真綿

一、畳表

一、茶

一、材木

一、炭

一、薪

右之外二も日用之品取寄、遣ひ残之分は為売
捌度奉存候事、

「 (21)

「 (20)

六月

(朱書)

『午六月八日差出、同十日挨拶来』

「美作守殿江返却もの

拙者儀何之存寄

無御座候、

午六月 石谷因幡守

(朱書)

『附札案

午六月十一日家来呼出、達ス』

書面産物引受人共方夫々示談之上、其筋

問屋江相払候得は差支無之候事、

「(22)

掃部頭殿国産之儀二付取調申上候書付

喜多村彦右衛門

井伊掃部頭廻米其外(朱書)『前書同様二付略之』、

右井伊掃部頭殿家来差出候書面・品書共被成

御渡、取調被 仰渡候間、夫々相糺候処、陶器外七品

取扱候問屋行事呼出、引受人平作江為致示談

候処、町方直売不致問屋江売渡候儀二付、差支

無御座候間、夫々問屋行事共申之候、依之被成御渡候

書類返上、此段申上候、以上、

午六月

喜多村彦右衛門

「(23)

⑨安政五年六月 神田小柳町三町目代地市兵衛箱館産物御用皮類手当方申渡候
義二付、箱館奉行方懸合調

（扉、小口見出し）

「

安政五年六月

神田小柳町三町目代地市兵衛箱館

産物御用皮類手当方申渡候義二付

箱館奉行より懸合調

（朱書）『九』

└

└（24）

（朱書）

『安政五年

午六月廿七日、向方より相談廻し、大津源蔵を以御渡

翌廿八日挨拶繕付出』

└

「町奉行衆

箱館奉行

神田小柳町三町目

代地

市兵衛

└（25）

右之もの箱館産物御用皮類手

当方取扱可申渡と存候、此段及

御掛合候、

午五月

└

「因幡守殿江返却もの

拙者儀何之存寄

無御座候、

午六月 美作守

（朱書）『下ヶ札案』

御書面之趣致し承知候、本文市兵衛儀

御用皮類手当方いたし候迄二而、

一手二引受売捌方等致し候義二

無之候得は、差支之筋無之候、

午六月

伊沢美作守

石谷因幡守

└（26）

└

神田小柳町三町目代地市兵衛
箱館産物御用皮類手当方取扱御掛合之趣
取調申上候書付

館市右衛門

神田小柳町三町目代地
市兵衛

右之もの箱館産物御用皮類手当方
可申渡と存候、此段及御掛合候旨、箱館奉行衆より
被仰越候、

右先月跡部甲斐守殿御勤役中取調
被仰渡候間、相調候趣左二申上候、

神田小柳町三町目
代地

喜平次地借

一、市兵衛

右は箱館産物御用皮類手当方
取扱之儀相尋候処、右御用之儀は
箱館産物会所江罷出相勤、御用は
らッコ皮重モ二有之、尤被仰付次第諸
皮手当相心得候旨御品之儀、時候等二
寄手当御預りもの有之候得は、宅江
相下ヶ候儀は御座候得共、細工仕候は、右
会所江罷出相勤、宅二而は取扱不仕候
旨申之候、

一、市兵衛身元之儀、町役人江相尋候処、

当午五拾三歳罷成、古道具渡世

仕、年来町内二罷在、甲冑・馬具等

取扱、其身夫婦・忒夫婦・孫式人・召仕

男女六人、都合拾式人相応二相暮、

尤所持地面等は無之地借二而、間口

三間半・奥行拾壹間余、自分建

家作住居仕并土蔵壹ヶ所有之、

是迄蒙御咎等候儀無御座、今般前書

御用皮類手当取扱被仰付候而も、

於町内差障候儀無御座候旨、右町役人共
申之候、

右取調候処、書面之通御座候、市兵衛
渡世向古道具屋二候処、同人皮類手当
細工相心得、前書申立之如く箱館
産物皮類御用手当方之儀、右産物
会所江罷出細工相勤、御品預り候共
宅二而は取扱不仕、全会所江出勤

「(27)」

「(28)」

「(29)」

御用相勤候上は、差響并同人身元
不慥二も不相聞、御掛合之通被仰付
可然哉二候得共、一躰皮類之儀は穢多頭
彈左衛門持前、且市中渡世向も有之、
右手当取扱之外市兵衛所置有之
候而は差支候趣、御挨拶被成置被下
候様仕度奉存候、依之御渡被成候御掛合
書返上仕、此段申上候、以上、

午六月

館市右衛門

┌
(30)

└

⑩安政五年八月 堀江町三町目庄助蝦夷地昆布直売願之義二付箱館奉行方懸合
(扉、小口見出し)

┌

安政五年八月

堀江町三町目金兵衛地借庄助蝦夷地

昆布直売願之義二付箱館奉行より

掛合調

(朱書) 『十』

└

└ (31)

(朱書)

『午八月六日福住省三』

└

└

「美作守殿

石谷因幡守

堀江町三町目金兵衛地借庄助儀、蝦夷地江
相越昆布直買願之儀二付、箱館奉行より懸合
有之候間、館市右衛門江相下候処、右庄助添翰
願は、貴様御役所二而御取扱、其上塩干
肴御用高納人惣代之ものより、先達而願書
御取調中之廉も有之趣、市右衛門より別紙
之通申立候間、貴様方二而挨拶振御取調有之
候様致度、別紙書類相添、此段及懸合候、

└ (32)

午七月

└

『御挨拶案』

御書面被御申越候塩干肴御用納人其外
願書取調之廉は、箱館産物会所
御取建二付、彼地江之仕入金繰戻方、又は
以後之引受方等之儀二而、今般之庄助願二
拘り候筋二無之、右同人願添翰差出候迄二而、
拙者方持受と申二も無之候間、市中差障
有無之儀、今一応町年寄御糺之上、挨拶
振貴様方二而御取調有之候様致度、依之
書類返却、此段及御挨拶候、

└ (33)

午八月

伊沢美作守

└

「町奉行衆

堀織部正

先達而御達有之罷出候堀江町三町目金兵衛
地借庄助儀、於会所昆布刻立売捌相成
候ハ、御益可有之旨二而、先同人儀蝦夷地江
罷下り手金を以昆布買取、江戸表江相廻

└ (34)

御試製致度段相願候二付、右は沙汰難及筋二付、其段申渡候処致承服、別紙之通願書引直差出候間、蝦夷地江罷越昆布直買之儀、願之通申渡候而も市中故障之儀無之哉、願書写相添此段及御問合候、

午五月

堀江町三町目金兵衛地借庄助

蝦夷地江罷下り昆布直買願之儀御問合二付

取調申上候御書付

館市右衛門

先達而御達有之罷出候堀江町三町目金兵衛地借庄助儀、於会所昆布刻立売捌候ハ、

御益可有之旨二而、先ツ同人儀蝦夷地江罷下り、手金を以昆布買取、江戸表江相廻、御試製

致度段相願、右は難及沙汰筋二付、其段申渡候処致承服、別紙之通願書引直差出候間、蝦夷地江

罷越昆布直買之儀、願之通申渡候而も市中故障之儀無之哉之旨、堀織部正殿御問合書・願

書写、当五月中跡部甲斐守殿御勤役中

御下ヶ被成、取調被仰渡候間、其筋商売人共相調候処、左之通御座候、

塩干肴御用三手納之内

松前最寄納人惣代

本材木町壱町目

伝兵衛地借

次右衛門

外 式人

右次右衛門外式人申立候は、松前昆布東海廻り之分引受方、天保十一子年右組合并乾物問屋

出入濟口差上、両組二而引受候儀二付、此度願人庄助蝦夷地江罷越、直買御免直捌取扱候而は、両

組引受二相拘り難儀仕候、且去巳年七月箱館会所御取建、彼地産物不残右会所御取捌

相成、入札之節諸商人被召出御払被 仰付候二付、私共追々南御番所江奉歎願候旨、申立候、

（朱書）『下ヶ札』

本文南御番所江歎願之儀ハ、

塩干肴惣鉢二相懸候趣二御座候、

但、一鉢昆布御用納之儀私共方は東海廻引受之

昆布を以御肴役所江相納、乾物問屋共儀は

大坂製昆布御青物改所江相納候旨、申之候、

乾物問屋行事

室町寺町目半兵衛地借

源助

外言人

右源助外言人申立候は、前書松前最寄納人共
申上候通、東海廻昆布両組引受来候処、去巳年
七月箱館産物会所御取建、彼地産物入札諸
商人被召出御払被 仰付、昆布之儀も私共二不限
市中望之者罷出入札候得共、右会所は別段之
御儀、今般願人庄助蝦夷地江罷下り直買并
願書二而は矢張製法相合候哉、御当地市中
直売買出来候而は、乾物問屋持前二差障難儀
仕候、製昆布納之儀は、同問屋より御青物役所江
相納候段申之候、

右取調候処、書面之通夫々申立候、尤箱館・松前・
蝦夷地之産物入津之節は、新大橋際会所江相達
差図受候様、兼而相触置候処、越後国新潟其外
湊々二而買取候品、陸地又は川船等二而差送候而も、矢
張同様相心得、荷物着次第会所江申立差図受

候様可相心得旨、先日猶町触も有之候処、今般
御問合之儀は、江戸町人蝦夷地江罷下り昆布直
買御免相願候、右願人堀江町三町目庄助と申者
裏住居之もの、刻昆布製法之儀は手覚有之
哉二候得共、身元小前二付、遠国引合等身分慥
成ものとは難申上、市中故障有無御問合之上は、
其筋渡世人共苦情も有之、彼是故障無之とは
申上兼候、且松前最寄納人共、去巳年南御役所江
願出候始末は、右御役所江御掛合之上、御挨拶被成
下候様仕度奉存候、依之御渡被成候御問合書并願
書写返上仕、為御見合先日町触写相添、此段
申上候、以上、

(朱書)

『一、本文堀江町三町目庄助願之義は、当二月南

御役所御月番之節、箱館奉行衆江御添翰

奉願候旨、同町組合名主申之候、』

午七月

館市右衛門

(朱書)

『午七月十三日町触写』

箱館・松前・蝦夷地之産物入津之節は、新大橋際
会所江相達差図受候様、兼而相触置候処、越後
国新潟其外湊々二而買取候品、陸路又は川船等二而
差送候而も、矢張同様相心得、荷物着次第会所江
申立差図受候様可相心得もの也、

午七月

右之通従町御奉行所被仰渡候間、町中不洩様

「(37)

「(38)

「

「(39)

早々可相触候、

七月十三日

乍恐以書付奉願上候

堀江町三町目金兵衛地借庄助奉申上候、
一、先般御沙汰と相成候蝦夷地出産之諸品、御国
益二可相成儀、何品二不拘其筋江可願出旨御触
面二付、今般昆布御直断御製方之趣意、巨細
書を以奉願上候処、御沙汰難被及旨被 仰聞
奉畏候、依之於御当地二私儀試製方仕度奉存
候付而は、諸廻船從彼地買入、爰許江着仕候
荷物相用候而は、何分高直二相当、私願之筋難
相叶奉存候二付、右出産之品於彼地相当之直合
を以買取為積登仕度候間、箱館御役所様より、
御場所江相当之直段を以売渡候様、御沙汰被成
下置度奉願上候、左候得は彼地江罷下り買取
沖之口御定法之通上納可仕候、御当地着之節御定
法之通上納可仕候、製方之儀は其筋
御沙汰を受製方仕度候間、格別之以 思召
御仁恵之御沙汰御聞濟之程、偏奉願上候、以上、

堀江町三町目

金兵衛地借

安政五年年三月

願人

庄 助印

家主

金兵衛印

箱館

御奉行所様

「(41)」

「町奉行衆

堀織部正

先達而御達有之罷出候堀江町三町目金兵衛
地借庄助儀、於会所昆布刻立売捌相成候ハ、
御益可有之旨二而、先同人儀蝦夷地江罷下り、手金
を以昆布買取、江戸表江相廻御試製致度段
相願候二付、右は沙汰難及筋二付、其段申渡候処
致承服、別紙之通願書引直差出候間、蝦夷地江
罷越昆布直買之儀、願之通申渡候而も市中故障
之儀無之候哉、願書写相添、此段御問合およひ候、

午五月

「(42)」

(朱書)

『午十一月四日(アキママ)を以御渡、』

拙者儀何之存寄

播磨守殿江相談もの

無御座候、

午十一月

播磨守

御書面之趣致承知、別紙願書写をも一覽

致し候処、願人庄助儀於箱館表買入候昆布
御当地着之上製方致し、新大橋際会所江差
出、諸産物捌方同様之御仕法二候ハ、市中差障
之筋無之候得共、同人直捌いたし候様相成候而は
自余之差響二相成候間、今一応御糺之上被
御申聞候様存候、依之別紙は写之儀二付留置
此段及御挨拶候、

「(43)」

午十一月

池田播磨守
石谷因幡守

「

御下ケ札を以御問合之趣、致承知候、
庄助製方致し候昆布之義、最前ハ
差出諸産物捌方同様之仕法相願
候処、右は難相成、勝手次第売捌
候様兼而申渡置候得共、今般
御問合二付猶相糺候処、乾物問屋
拾五人・海藻問屋九人之内江壳渡
素人売不致心得之旨申立候、
此段及御挨拶候、

「(44)」

未正月

箱館奉行

「

(朱書)

『申閏三月廿四日御渡、翌廿五日水谷武治を以返上、』
「播磨守殿江相談もの
拙者儀何之存寄
無之候

申閏三月 播磨守

再御下ケ札之趣致承知、猶
相糺候処、箱館会所附問屋共
差支有之候由、別紙之通申立
候間、今一応御取調之上否被
御申聞候様存候、此段御挨拶旁
及御懸合候、

申閏三月

池田播磨守
石谷因幡守

「(45)」

「

乍恐以書付奉申上候

一、箱館方御会所附塩干肴問屋一同
奉申上候、堀江町三町目金兵衛地借
庄助義、蝦夷地江罷下り、昆布
買取製昆布二仕、御当地江相廻し、
乾物問屋并仮組之もの二限り売
渡度段、去々年年中箱館方江
奉願上候二付、塩干肴三手納人
之内、松前最寄納人共并乾物
問屋共江差障有無御尋有之、町
年寄館市右衛門方二而取調中、

「(46)」

私共儀は松前最寄三手納入
之内、箱館方御会所附塩魚
問屋と被仰付、諸御産物類御会

所御差図受、取扱罷在候二付、庄助願筋御聞
濟二相成、自俣二昆布類御当地江積廻相捌候而ハ、
私共御会所附問屋被仰付候詮も無御座候間、兼々
奉申上候通、東海廻昆布之儀二付、縱令製昆
布二候共荒葉昆布同様以、箱館御会所江
積付候上、御会所御差図ヲ受取扱候様仕度
此段御聞濟被成下置候様偏奉願上候、以上、

箱館方御会所附問屋

北鞆町四郎左衛門地借

吉左衛門幼年二付

万延元年閏三月廿二日

後見 伝 七印

本材木町老町目

伝兵衛地借

次右衛門煩二付代

順 蔵印

深川木場町家持

角兵衛紀州住宅二付

店支配人太七煩二付代

茂兵衛印

小舟町貳町目

和右衛門地借

卯兵衛煩二付代

藤兵衛印

同町三町目

金五郎地借

長兵衛印

北新堀町家持

富之助煩二付

文太郎印

安針町嘉右衛門地借

平右衛門煩二付代

啓 蔵印

元四日市町

利兵衛地借

庄兵衛印

青物町次兵衛地借

又右衛門印

奉行所宛

乍恐以書付奉願上候

堀江町三町目金兵衛地借庄助奉申上候、

一、先般御沙汰と相成候蝦夷地出産之諸品、御国益

、
(47)

、
(48)

、
(49)

可相成儀、何品二不拘其筋江可願出旨、御触面二付、
今般昆布御直断製方之趣意、巨細書を以
奉願上候処、御沙汰難被及旨被 仰聞奉畏候、依之
於御当地二私儀試製方仕度奉存候付而は、諸廻船
從彼地買入、爰許江着仕候荷物相用候而は何分
高直二相当、私願之筋難相叶奉存候二付、右出産之
品、於彼地相当之直合を以買取、為積登仕度候間、
箱館御役所様より、御場所江相当之直段を以売渡
候様、御沙汰被成下置度奉願上候、左候得は彼地江
罷下り買取、沖之口御定法之通上納可仕候、御当地着
之節、御定法之通上納可仕候、製方之儀は其筋
御沙汰を受、製方仕度候間、格別之以
思召 御仁慮之御沙汰
御聞濟之程偏奉願上候、以上、

堀江町三町目

金兵衛地借

安政五年三月

願人 庄 助印

家主 金兵衛印

箱館

御奉行所様

└ (50)

堀江町三町目庄助蝦夷地江罷越昆布
直買願問合之趣再応申上候書付

館市右衛門

└ (51)

堀江町三町目金兵衛地借庄助儀、蝦夷地江罷下り
昆布直買願之儀、箱館奉行衆御問合二付、取調候処、
塩干肴納人之内、松前最寄惣代并乾物問屋共
苦情、且松前最寄納人共、箱館会所産物御払
之儀、去巳年南御番所江歎願候候由申立二付、右
御番所江御懸合被成下候処、塩干肴御用納人其外
願出、御取調之廉は箱館産物会所御取建二付
彼地江之仕入金操戾方、又は以後引受方等之儀二而、
今般之庄助願二拘候筋二無之旨、御挨拶二付、今一応
市中差障有無取調可申上旨、被仰渡候、

塩干肴御用納人

松前最寄惣代

本材木町寺町目伝兵衛地借

次右衛門煩二付

代 由兵衛

乾物問屋行事

外式人

└ (52)

室町寺町目半兵衛地借

源 助

外 唄 人

右再応相調候処、箱館会所御取建、右会所
御所置之儀は別段之御儀ニ御座候、御当地市中二而
上方下り昆布之儀、乾物問屋共引受、松前最寄
東海廻り之儀は、塩干肴御用松前最寄納入并
乾物問屋兩組二而引受候商法ニ有之、今般願人
堀江町三町目庄助儀、蝦夷地江罷越、昆布直買
仕、御当地手捌被致候而は、兩組渡世ニ差障、且同人
別紙願書ニ而は矢張製法相合、市中売買仕候
而は、別而乾物問屋共渡世向差響難渋仕、此段
御憐愍奉願候旨、右問屋行事惣代共申之候、
右取調候処書面之通御座候、兼而御触有之候新
大橋際箱館松前蝦夷地之産物会所御所置ニ
御座候得は、歎願可仕筋無御座奉存候、今般御問
合之儀は、願人有之、蝦夷地江罷越、昆布直買
市中直売可相成筋、其筋商人共苦情無余
儀相聞、全市中故障無之とは申上兼候、依之
御渡被成御問合書・願書写返上仕、当七月
御触写相添、此段申上候、以上、

午九月

館 市右衛門

┌ (53)

┌ (54)

⑪安政五年十月 小舟町耆町目太助外式人砂糖問屋仲間取極冥加金上納願并右
太助紀伊殿国産物糖引受候義二付調
(扉、小口見出し)

「(朱書)

『安政五年十月』

小舟町耆町目太助外式人砂糖
問屋仲間取極冥加金上納願并
右太助紀伊殿国産砂糖引受候
義二付調

(朱書)『十一』

中田郷左衛門

」

」(55)

午二月廿日源蔵を以御渡

「美作守殿

跡部甲斐守

去ル寅年十一月中、池田播州御先役之節、砂糖
屋惣代小舟町耆町目家持太助外式人儀、右
問屋仲間取極度旨、願出候一件、此程大和守殿
御差図之通、拙者方二而取調候二付、右一件二付諸色
懸名主共見込之趣、其外書物類不洩様御取纏
御引渡有之候様致し度存候、此段及御懸合候、

午二月

御書面之趣致承知候、砂糖屋惣代方右問屋
仲間取極度旨願出候一件、書類御引渡申候、
尤去ル寅年十二月中、井戸対州御先役之節
出訴致し候、橘町三町目源七地借平六郎外
三人方太助式人江相懸候渡世差障出入、并
翌卯年正月先役池田播磨守方江出訴
致し候、太助式人方平六郎外三人江相懸り候
難渋出入、当時御吟味中二付、是又貴様方二而御吟
味被成候儀と存候、右書類共差進、此段及御挨拶候、
午二月 伊沢美作守

」

」(57)

「播磨守殿

井戸対馬守

池田播磨守

小舟町太助外式人方砂糖積方
之儀二付、去ル十一月中拙者方江
願出候二付、当時取調中二有之候所、
橘町平六郎外三人方右太助江
相懸渡世差障出入申立、貴様方江
及出訴、旧臘御留守中二付、

」(58)

拙者方二而公事合承り、御引渡申候、然ル処、右出入之起発は、太助外壱人方願出候方事起り候儀と相聞、束而可及吟味と存候処、御存寄も無之候ハ、御引渡有之候様致し度存候、依之及御懸合二候、

卯正月

「(59)」

御書面御懸合之趣致承知候、被御申越候平六郎外三人より太助江相懸候出入は、一事之儀と相聞候間、一件一同明廿一日御引渡可申候、依之訴状・返答書相添、此段可有御挨拶候、

正月廿日

井戸対馬守

「(60)」

(朱書)

『安政元寅年十一月廿七日、播磨守殿目安方高崎伝吉を以御渡』

乍恐以書附御訴訟奉申上候

一、小舟町壱丁目家持太助外式人奉申上候、私共儀旧来砂糖荷物諸国直仕入仕罷在候、同渡世之もの式拾七人有之候処、御当地江安住仕候儀、偏二広太之 御国恩と、冥加至極難有仕合奉存候、乍恐今般御願奉申上候砂糖之儀は、手広御散シ之品二而、直仕入勝手次第可致旨先年

「(61)」

御触流し御座候二付、商売筋は勿論素人迄、大坂其外国々迄
多人数二而直仕入いたし候間、元方次第買流行仕入方高直二
相成候二付、売直段二相響キ高直二相当り候故、端々小前
之もの迄難儀仕候、右は全く多大多数二而致仕入候間、自然と
元方糴上ヶ仕候儀二御座候、且唐物砂糖之儀は、於長崎表二
御入札御払二相成、和製之儀は国々御国産并製作仕候
荷主共方御当地直送り仕候荷物共、私共式拾七人のもの江
仕入引受取捌方被 仰付被下置候得は、元方買流行不仕、糴上ヶ等
一切為致間鋪様仕、尤作方豊凶二寄直段高下仕候共、
実直二仕入方仕候得は、不時荒高下等無之様相成可申儀二而、
末々小前之商人共迄安心二取扱相成、自然と荷物潤沢
仕候儀と乍恐奉存候、

一、乍恐奉申上候儀は、近来異国船度々渡来仕候二付、万民
為安住、海防御手当新規御台場御築立被為有、其外
引続種々御物入等莫太之御儀、難有奉恐入候、私共御府内
御膝元二安住仕、産業相営ミ候儀、偏二
御国恩広大之御仁恵二而、無勿体御儀と奉存候間、私共
願人一同之もの方為 御備金と、壱ヶ年金千両ツ、永年
御上納仕度奉存候、何卒御用度御端呉二も御取用
被成下候得は、乍恐難有仕合二奉存候、何卒御聞置被下置候様

「(62)」

奉願上候、

一、砂糖荷物之儀は重目之品ニ御座候間、廻船積入船足ニ
相成、仕建方弁利宜敷御座候二付、上方直積之内重積
渡世九店之内ニ砂糖店相加里、積含仕渡世相営ミ居候儀ニ
御座候間、何卒砂糖之儀は唐物砂糖始メ、薩州御産物
黒砂糖并ニ国々御産物砂糖共、諸国同渡世之もの共より
引受、尚又近国より御当地江直送り荷物共、前書奉申上候通
私共貳拾七人のもの江引受取捌方、被 仰付被下置度奉
願上候、左候得は、元方糶上ケ買流行不仕様仕法取極メ、廻船
積入方等、過積不致荷物潤沢仕候様、且難破船有之節は
私共明白ニ取調仕、実直ニ産業相守リ置段、引下ケ方
專一二相心懸ケ、末々小前渡世筋之もの迄弁理宜敷様
仕度奉存候間、何卒以
御慈悲前書之始末被為 御聴召訊ケ、右引受問屋
取捌方御免被 仰付被下置候様奉願上候、以上、

諸国砂糖直仕入仕候もの

貳拾七人惣代

小舟町壱丁目

家持

嘉永七寅年

願人

太助印

十一月廿六日

五人組

岩蔵印

田所町

茂八地借

同

武兵衛印

家主

茂八印

通貳丁目庄次郎地借

同

武兵衛印

家主

庄次郎印

御奉行所様

本文奉願上候願人三人之外貳拾四人名前

新和泉町又兵衛地借

孫左衛門紀州住宅二付

店預り人 晋兵衛

本町三丁目喜右衛門地借

九郎兵衛

同町四丁目家持

長左衛門

同町三丁目利兵衛地借

利左衛門

堀留町壱丁目家持

喜三郎

伊勢町庄五郎地借

五左衛門

┌

└ (63)

┌

└ (64)

┌

└ (65)

小網町三丁目五兵衛地借
儀兵衛

小伝馬町貳丁目勘兵衛地借

平六

横山町壹丁目家持

又兵衛

本町四丁目伊兵衛地借

清左衛門

神田鍛冶町壹丁目家持

儀兵衛

本町三丁目喜兵衛地借

利八

同町同人地借

弥七

通四丁目家持庄六

江州住宅二付店預人

治兵衛

大伝馬町壹丁目亦七地借

喜平治

通壹丁目又右衛門地借

藤兵衛

小舟町壹丁目藤次郎地借

仁兵衛

小網町壹丁目卯兵衛地借

喜兵衛

小舟町壹丁目久兵衛地借

宗右衛門

同町貳丁目栄蔵地借

徳治郎

小網町貳丁目

治助地借文助阿州住宅二付

店預り人 清助

伊勢町伝兵衛地借

利兵衛

本船町金三郎地借

清右衛門幼年二付後見

平兵衛

佐内町儀兵衛地借

茂右衛門

右貳拾四人名前奉申上候、

小舟町壹丁目

家持

太助

田所町茂八地借

嘉永七寅年十一月廿六日

└ (67)

└ (66)

御奉行所様

武兵衛
通貳丁目庄次郎地借
武兵衛

(朱書)

『文化五辰年十二月十日、小田切土佐守殿於御白洲被仰渡候写』

申渡

大伝馬町貳丁目庄助店
勘 兵 衛

外五拾壹人

其方共之内勘兵衛外拾六人之者共相願候は、古来より砂糖類

「 (68) 」

上方直積荷物引請問屋同様致来候処、近年和製砂糖

多く国々より御当地江積送り、外商売之もの共專引請、不当之

仕切等差出シ、殊二和製砂糖之儀は、遥二甘味劣り、上菓子類二

遣候而は、品二寄間二合兼候儀二有之候得共、形子は同様二付、持渡り

砂糖入用之所江和製を売遣し、又は唐和を交セ遣候而も相

分り兼、其上持渡砂糖之相場聞合候者も、和製之直段を

申聞候儀も有之、直達二成、高直之売方致候哉相聞、持渡砂糖

捌方不宜、必竟外商売人共紛敷売買も致し候故、持渡砂糖

「

仕入注文二響、格別仕入高相減、専商売致候もの共衰微致し

及難義候間、拾七人之者共砂糖問屋二申付有之、外々二而直引請

不致候様致度、願之通相成候ハ、持渡・和製上中下廉直二品分ケ

致し、下直二売捌、為冥加年々金千兩宛永々上納可致旨願出、

追々相糺候処、砂糖直積致来候薬種問屋・大伝馬町組薬種(問力)屋

両組不残并問屋触下と唱候もの共差加江願人一同、都合

五拾貳人江砂糖問屋申付候様相願、冥加金之儀は割合上納

可納旨、熟談之上願人共一同申立、差支之筋も不相聞候間、

「 (69) 」

願之通、其方共五拾貳人一同江砂糖問屋申付候、然ル上は随分

下直二売捌、冥加金千兩之儀は五拾貳人江割合、年々相納候様

可致、

右

家主
五人組
名主

右之通申渡候間、其方可存、

辰十二月

(朱書)

『文政三辰年樽吉五郎方日記之内写』

砂糖問屋御差止め之事

正月十九日

一、左之通被仰渡候段届来、此方掛二候得共、一向御沙汰無之、追而子細可相分事、

以書付申上候

一、十組薬種問屋行事・大伝馬町組薬種問屋行事一同

申上候、私共儀今日

主計頭様御番所江被 召出候、猶又

伊予守様御番所江可罷出旨、三好助右衛門様被仰渡候二付、

一同罷出候処、伊予守様被 仰渡候は、

『。』大伝馬町式丁目

庄助店

勘 兵 衛

外式拾弍人

其方共儀、文化五辰年砂糖問屋株申付、年々為

冥加金千両宛上納いたし来候処、右問屋之儀二付株式

差止候、尤冥加金上納不及候、

一、其方共申合、寄合所相建候而荷物引請候由、右は

問屋株申付候節申渡候儀二も無之、其後訴も不致、右躰

申合而已二而寄合所相建候段不埒二付、一同急度叱置、

右之通被仰渡奉畏候、仍如件、

前書被仰渡候二付、砂糖問屋一同御請御帳面江印形仕候、依之

此段御届申上候、以上、

薬種問屋行事

本町三丁目

伊勢屋宇兵衛

代 清八印

大伝馬町組

薬種問屋行事

南伝馬町壹丁目

大坂屋庄三郎

代 宗右衛門印

町年寄衆

御役所

(朱書)

『文政三辰年正月廿八日』

榊原主計頭殿江罷出候処、稲村義平太を以御渡

被 仰渡は、先達而於御役所相済候旨、同人申聞候、

問屋共江相渡置候焼印札は、此方江相納候様申渡、

樽吉五郎江

文化五辰年砂糖問屋株申付、為冥加金千両ツ、
年々上納致来候処、右株式差止メ冥加金不及
上納旨申渡候間、其通可心得事、

(朱書)

『文政三辰年六月十六日』

榊原主計頭御渡、砂糖問屋共并組々年番名主并肝煎
名主共江申渡、

樽吉五郎江

砂糖問屋冥加金并寄合所御差止二相成候後も、以前之姿二
不立戻、其上方砂糖問屋共申合、素人江直仕入差障、并
問屋共砂糖沢山所持いたし候節は、上方問屋江申遣積下し差留」(73)
船間と唱高直二売捌、且唐和砂糖切交、唐砂糖之
名目二而売出候趣相聞候間、先達而取調申付候通、元
砂糖問屋并町々名主共江別紙之通申渡候様可致候、
六月

『。』

申渡

去ル文化五辰年砂糖問屋株被 仰付、冥加金千両宛上納
仕来候処、当正月中右問屋名目并冥加金共御差止二相成候上は、
以前之姿二立戻り、素人共直仕入は勿論、都而売買手広二相成
不融通二無之筈之処、素人共より上方表仕入注文申遣候土付「而も」、砂糖屋共
上方仕入先と馴合、彼是差拒候哉二相聞江、不埒之至二候、且又
砂糖屋共売買二おゐてハ、唐和砂糖之性合吟味いたし、正路二
渡世可致筋二有之処、中二は心得違之ものも有之、唐製砂糖之
名目二而、和製切交不正取計いたし候ものも有之趣風聞有之、
甚以不埒之事二候、尤右躰之儀有之候而は、御趣意二も相振、不容易
儀二付、急度御吟味も可有之処、格別之以 御憐愍、先
此度は不被及其御沙汰間、以来江戸・上方表申合、不融通成
仕法二相工ミ候歟、又は唐和砂糖切交不正之売買いたし候もの
於有之は、急度曲事二可被 仰付間、砂糖屋共一同心得違
無之正路二渡世可致候、

辰六月

「(75)」

諸国砂糖直仕入候者

貳拾七人之内

小船町壱丁目

家持

願人 多 助

田所町

茂八地借

同 武兵衛

通壱丁目

正次郎地借

去六ヶ年已前寅年十二月廿六日当
御番所様御訴訟申上候得は訴状
上置候様被渡候、
一、砂糖問屋名目願

同 武兵衛 ㄥ (76)

去六ヶ年已前寅年十二月十七日北 本町組薬種問屋
御番所様江御訴訟申上候得は 橘町三丁目源七地借
同月廿六日公事合二一同被召出、卯年 願人 平六郎
正月廿一日当御番所様江御引渡 本町三丁目
相成申候、 伝蔵地借
一、渡世差障出入 同 金兵衛
大伝馬町組薬種屋
本町四丁目作兵衛地借

ㄥ (77)

同 孫太郎
同町多助地借
同 喜兵衛
小舟町壺丁目
家持
相手 多助
田所町茂八地借
同 武兵衛
通式丁目
正次郎地借

ㄥ (78)

田所町茂八地借 武兵衛
通式丁目正治郎ノ地借 武兵衛
去六ヶ年已前寅年十二月廿三日 右兩人旅行二付代兼
御訴訟奉申上候得は、卯年正月 小舟町壺丁目
廿三日御裏書相付、公事合之上 家持太助煩二付代
三口束御吟味相成申候、 願人 伊兵衛
一、難渋出入 本町組薬種問屋
橘町三丁目源七地借
相手 平六郎
本町三丁目
伝蔵地借
同 金兵衛
大伝馬町組薬種問屋
本町四丁目佐兵衛地借
同 孫太郎
同町太助地借
同 九左衛門

ㄥ (79)

右出入三口共束御吟味中、去午正月廿九日薬種問屋
橘町三丁目源七地借平六郎外三人方、渡世問屋向差障出入
北御番所様江御訴訟申上、同二月五日砂糖問屋小舟町

壹丁目家持太助外式人々、当御番所様江追願御訴訟
奉申上候得は、訴状上置候様被仰渡、其後御沙汰無之処、
同二月十七日、前書太助外式人宅江北三御廻り方様
御出有之、太助所持之諸帳面不殘御調之上、同三月
朔日、北 御番所様江太助外式人被召出、追々御吟味之
上、同四月九日一同被召出、太助外式人は江戸払被仰渡候、
当御番所様方北 御番所様江、太助其外之もの共
御引渡相成候、日限之儀は無之儀二御座候、
右取調奉申上候、以上

未三月

┌

┌ (80)

午十一月九日出

〔因幡守殿

池田播磨守

紀州日高郡製作之砂糖売捌之儀、
大坂屋太助退身跡太郎治と申
もの江申付、掛札為致候段、紀伊殿
御城附より達有之候付、町年寄共江
申渡為取調候処、別紙之通申聞、砂糖
之義は問屋組合相立候渡世筋二も
無之（朱抹）『候間』、太助義江戸払相成候二付、
紀伊殿より悴太郎治江、改而売捌
申付候（朱書）『儀二付』（朱抹）『共全跡相続為致候趣意
とは相聞不申候間』、天保度之
振合を以、樽藤左衛門方二而達之趣、
夫々江為申渡置候様可致哉と存候、
依之書類相添此段及御相談候、

午 月

┌ (82)

（朱書）

『午十月五日大津源藏を以御渡』

〔町奉行衆江

徳川賢吉殿

御城附

紀州日高郡製作砂糖売捌申付有之候
大坂屋太助と申者江、砂糖売捌所と申懸
札致させ候段、天保八酉年中達有之処、太助儀
退身致し候付、右跡太郎次と申者江売捌
申付掛札致させ申候、此段申達置候様役人共
申候、

┌ (83)

午十月

紀州日高郡砂糖売捌所掛札之儀二付申上候書付

樽藤左衛門

紀州日高郡製作砂糖売捌申付

有之候大坂屋太助と申者江、砂糖

売捌所と申懸札致させ候段、

天保八酉年申達有之処、太助儀

退身いたし候二付、右跡太郎次と申者江

売捌申付掛札致させ候段、徳川

賢吉殿

御城附衆より之御達書御渡取調可申上旨

被仰渡候、

小舟町寺町目家持

大坂屋

太郎次

右太郎次義は前書太助忤二而、太助義

当四月中北御役所御懸二而、江戸払御仕置

被仰付候処、諸事地面并家作・家財共

別段御沙汰無御座候二付、右太郎次義同様

砂糖渡世罷在候間、売捌所と申掛札

差出候而も、於町内差支無御座候段、町

役人共申之候、

但、太助儀は大伝馬町組薬種問屋江加入

罷在、其後休業、太郎次義は砂糖

一方之渡世二有之候、

右之通御座候、天保八酉年御達有之候節は、

所町役人・両組薬種問屋行事共江申渡

候間、此度も右之振合を以、別紙案之通

申渡候様可仕候哉、依之御渡書写返上仕

此段申上候、以上、

午十月

樽藤左衛門

申渡伺案文

申渡

紀州日高郡製作砂糖売捌申付有之候

大坂屋太助と申者江、砂糖売捌所と申懸札

致させ候段、天保八酉年申渡候処、太助儀
江戸払被仰付候二付、同人忤太郎次と申
もの江、改而売捌申付懸札為致候段、紀伊殿
御城附衆より御達二付申渡、
右之通被仰渡奉畏候、為御受御帳二印形
仕置候、以上、

小舟町壱町目

月行事

名主

本町組

大伝馬町組 薬種問屋

行事

└

└
(86)

⑫安政六未年三月 細川越中守産物売捌方之義二付調
(扉、小口見出し)

「 安政六未年三月

細川越中守産物売捌方
之儀二付調

(朱書)『十二』

中田郷左衛門」

「 (3)

(朱書)『未三月廿二日、折右衛門ヲ以御渡』

「

細川越中守家来
清田新兵衛

越中守国許産物類、是迄之振合専ら
国用限り之手当二付、他邦江は数量多分二
差廻候儀無御座候処、以来は国用外可
成丈仕入高相増候様取計候而、御当地江
差廻、北八町堀屋鋪前河岸添地内二おゐて
売捌、且出入町人深川南松代町代地
卯兵衛地借久兵衛江為取扱申度、尤素人
直売は不致、其筋問屋共江相払候積
御座候、依之別紙品書相添此段御届
仕候、以上、

細川越中守家来

三月廿二日

清田新兵衛

「 (5)

「

品書

- 一、生蠟
- 一、烟草
- 一、葛
- 一、紙類
- 一、明礬
- 一、砂糖
- 一、氷砂糖
- 一、和菓種
- 一、布苔
- 一、茶
- 一、穀類

「 (6)

「

一、	木綿織物類	
一、	カンテン	
一、	搗刷木綿	
一、	目透織	
一、	椎茸	
一、	川股差物	
一、	矢部椀	
一、	山鹿団扇	
一、	瓢細工	
	以上	「

（朱書）

『未四月二日出ス、此本帑差戻ス、十一月十二日差出候書面也、

写二用ル』

品書

一、	生蠟	
一、	烟草	
一、	葛	
一、	紙類	
一、	明礬	
一、	砂糖	
一、	氷砂糖	
一、	和菓種	
一、	布苔	
一、	茶（朱抹）「一、穀類」	「
一、	木綿織物類	
一、	カンテン	
一、	搗刷木綿	
一、	目透織	
一、	椎茸	
一、	川俣差物	
一、	矢部椀	
一、	山鹿団扇	
一、	瓢細工	
一、	紫根	
	以上、	「（9）

（朱書）

『十一月十二日出ル

右は穀類之儀差障有之、最初差出有之候

書面と引替願出候二付、今般差出候書面と照合

朱二而加除致し置候事、

但当中差出有之候書面、中田氏方御下ケ之事、』

「

細川越中守国元産売捌之儀取調申上候書付
館市右衛門

細川越中守国元産物、御当地江差廻し、北八町堀屋敷前河岸添地二おゐて内捌、且出入町人深川南松代町代地卯兵衛地借久兵衛江為取扱、尤素人直売は不致、其筋問屋共江相払候積、品書相添同家来清田新兵衛御届書御下ヶ被成、取調被仰渡候処、明礬之儀は会所御触有之候二付末文二申上、其外相調候処、左之通御座候、

品書式拾壹品之内

一、生蠟

右は蠟問屋仲間限引受之積、

一、煙草

右は堀留組・畳表荒物問屋煙草取扱之もの引受之積、

一、葛

右は乾物問屋并両組薬種問屋共引受之積、

(朱書)

『但両組之儀は本町組薬種問屋・大伝馬町組薬種屋二有之、』

一、帋類

右は帋問屋仲間限引受之積、

一、和薬種

右は両組薬種問屋共引受之積、

一、布苔

右は通町組小間問屋之内、丸合組并住吉組荒物問屋之内、絵具・染草取扱之もの、且両組薬種問屋共、三手引受之積、

一、茶

右は壺番組茶問屋仲間限引受之積、

一、穀類

右は下り米問屋関東米穀三組問屋
地廻米問屋、脇
米仲買 店八ヶ所組米屋 共引受之積、

一、木綿織物類

右は両組木綿問屋共引受之積、

(朱書)

『此両組之儀は大伝馬町組・白子組と唱申候、』

「(10)」

「(11)」

「

「(12)」

一、カンテン

右は乾物問屋仲間限引受之積、

一、搗刷木綿

右は前書両組木綿問屋共引受之積、

一、目透織

右は呉服問屋仲間限引受之積、

一、椎茸

右は乾物問屋仲間限引受之積、

一、川股差物

右は塗物問屋・通町組
内店組小間物問屋

并丸合組小間物問屋共三手引受之積、

一、矢部椀

右は塗物屋仲間限引受之積、

一、山鹿団扇

右は団扇問屋并通町組
内店組小間物問屋、

丸合組小間物問屋共三手引受之積、

一、瓢細工

右は通町組
内店組小間物問屋并丸合組小間物

問屋共引受之積、

一、紫根

是は山根二候得は、両組薬種問屋共
引受、里根二有之候得は紫根問屋共
引受之積、

小以 $\times$ 拾八品

右は都而素人直売無之、夫々問屋様

被相払候得は、於町方二差障候義無御座候、

一、砂糖

一、氷砂糖

右貳品之義、両組薬種問屋共専ら取扱
候得共、砂糖之義は仲間相立不申、手広
売々之品二付、何方江直払相成候而も
差障無御座候、

一、明礬

是は唐和明礬会所再興之義、御勘定方
御調之上、安政三辰年大坂住居五郎兵衛と
申もの豊後国野田山明礬其外西国筋
出明礬引受、大坂江会所相立、芝西応寺町
半七は薩州明礬引受、江戸・京・大坂・堺江会所

相立、本石町要右衛門は信州并東国筋出
明礬引受、江戸江会所相立、唐明礬之儀は
右三人二而割合買受、卯方已迄三ヶ年会所二
おゐて売買、山方之分夫々会所江売渡し
可申旨御触有之、尚当未正月年限
午方卯迄拾ヶ年継年季御触有之候品之
義二付、明礬取捌之義は御勘定御奉行衆江
相伺候様御差図可被成下候哉、則両度町触
写奉入御覽候、

下
ケ
札

「(15)」

右取調候処書面之通御座候、生蠟
其外拾七品之儀は、夫々問屋共江売払
候得は差障無之、砂糖・氷砂糖之義は
仲間相立不申、勝手次第被取捌不苦、
明礬之義は御勘定方江伺出候様被仰渡
可仕被下哉奉存候、依之被成御渡候御届書・
品書返上仕、此段申上候、以上、
但右之通夫々御指図相濟候ハ、拾八品
買受候問屋共心得方申渡候様可仕候間、
尚又其節御沙汰被成下候様仕度奉存候、

(朱書)

『例』

安政三辰年酒井修理太夫殿領分
若狭国并越前国敦賀領産物、葛其外
拾品出入町人引受申付、町方直売不仕、
諸家産物入札払之振合ヲ以、夫々問屋共江
売捌候積、同家来方当御役所江伺書
差上、私取調、同年十月御写置相成申候、』

「(16)」

未四月 館市右衛門

「

下
ケ
札
本文出入町人深川南松代町代地宇兵衛
地借久兵衛町内相尋候処、同人本書国産
取扱被申付、町内二おゐて差障候義無御座
候旨、町役人共申之、且穀類之義久兵衛江
相尋候処、大豆・小豆・麦等之雜穀二有之、
米は相交り不申旨申之候、

「(17)」

(朱書)

『安政三辰年八月五日町触写』

唐和明礬会所再興之儀、近江屋五郎兵衛大
坂住居二付代兼西河岸町正三郎・芝西応寺町半七・
本石町吉町目要右衛門相願、吟味之上左之通申付候、
一、右五郎兵衛は豊後国野田山明礬其外西国筋出

明礬引請大坂江会所相建、半七は薩摩明礬引請、江戸・京・大坂・堺江会所相建、要右衛門は信州并東国筋出明礬引請、江戸江会所相建、唐明礬之儀は右三人二而割合買請、去卯方来已迄三ヶ年之間銘々会所おゐて令売買、向後人数之増減可為勝手次第旨前々相触候趣相心得、山出之分夫々会所江売

「(18)

渡可申候、

右之通可被相触候、

八月

「

右之通御書付出候間、町中不洩様入念早々可相触候、

八月五日

(朱書)

『安政六末年正月朔日町触写』

唐和明礬会所再興之義、近江屋五郎兵衛は豊後刻野田山明礬其外西国筋明礬引請、大坂江

「(19)

会所相建、半七は薩州明礬引請江戸・京・大坂・堺江会所相建、要右衛門は信州并東国筋出明礬引請江戸江会所相建、唐明礬之儀は右三人二而割合買請

方、去ル卯年方去巳年迄三ヶ年季申付、其旨相触置候所、年限二付当年方来ル卯年迄十ヶ年繼年季申渡間会所におゐて令売買、向後人数之増減可為勝手次第旨、前々相触候趣相心得、山出之分夫々会所江売渡可申候、

「

右之通可被相触候、

十二月

右之通御書付出候間、町中不洩様入念早々可相触候、

正月朔日

「(20)

(朱書)

『北御役所御掛』

未五月九日館市右衛門方申渡写』

水戸様御国産杉山大豆、本所一ツ目石置

場二おゐて入札御払之砌取引方之儀、先達而

喜多村御役所二而御尋二付、私共方申上候二は、其

筋問屋共限入札之上、三十日目限荷物引取代金

相納可申、且御払方御見合二相成候節は、何ヶ

度も再入札致し候積二御座候、然ル所今般右

杉山大豆、本所一ツ目石置場二おゐて売捌方之儀は

「(21)

不苦候、尤問屋共多人数入込入札為致、代金日延

二而取引致し候儀は御無用之段、右御屋形様令

御達被為在候二付、私共儀も其段相心得可罷在旨、被

仰渡奉畏候、此段御請書奉申上候、以上

関東米穀三組問屋行事

堀江町四町目彦太郎地借
久住屋伝吉勢州住宅二付
店支配人伊助煩二付代
未
五月九日
嘉 七印

小網町壹町目家持
丸屋勝次郎煩二付代
源 七印

米仲買行事
本所船町五人組持地借
白子屋
喜兵衛印

同町同地借
伊勢屋与兵衛煩二付代
清三郎印

乾物問屋行事
鎌倉横町南側代地家持
板見屋
善 助印

地廻米穀問屋行事
神田久右衛門式町目蔵地

東兵衛地借
上総屋
惣兵衛印

神田佐久間町三町目家持
伊勢屋
八左衛門印

館
御役所

(朱書)
『右は細川越中守国産取調二付、心得之為メ
館市右衛門方差出候間綴込置、』

(ヒレ)
「済 勘左衛門
済 次郎兵衛
済 新五郎
済 弥一兵衛
奉 郷左衛門」

(朱書)
『附札案』
書面国産之内、砂糖之儀は問屋名目無之二付、
勝手次第売『払』不苦、明礬之儀は御勘定
奉行江申立、差図受可申候、其余之品は
久兵衛方素人江直売不致、荷物着次第

(朱抹) (朱書)

未『其』筋問屋江売払候儀二候得は『於町方』差障無之候

(朱抹) (朱書)

未 五『十一』月

(朱書)

『右附札致し、未十一月廿二日水谷勘右衛門方細川越中守家来清田利兵衛名代岡部善之允江相達、尤朱書之趣御達いたし候趣勘右衛門申聞候事、』

└ (25)

(朱書)

『細川越中守家来方差出候書面之内、

北八町堀屋敷前河岸二而売払候と申文言

有之候二付、取調候処、天保十四卯年、松平和之進

領分水油於屋敷出入之町人二売捌度旨申上

候節、可成丈水油渡世之もの江売渡候様可致旨

之御書取も有之候間、屋敷二而入札払之儀は差支

有之間敷、尤右廉は文段江認入候迄二而、町

奉行所江伺候筋二は無之候間、附札江は売捌方

差支有無之儀而已相認候旨、右書面相渡候節

同家来江相達候積』

(付札、朱書)

『十一月十二日引替之

趣二而差出し、』

└ (26)

細川越中守内

里内官右衛門

└ (27)

越中守国産之品々、御当地江指廻、

捌方出入町人江為取扱、其筋問屋

ども江相払申度段、当三月委細

書面并品書相添奉伺置候処、

右品書之内穀類之儀は差障

之儀御座候付、相除申度奉存候、

依之品書認直、別紙差上申候間、

最前差上置候書面と御引替

被下候様仕度、此段申上候、以上、

└

細川越中守内

十一月十二日

里内官右衛門

└ (28)

(朱書)

└

『未六月五日勘左衛門ヲ以御渡』

〔播磨守殿

石谷因幡守

〔因幡守殿

池田播磨守

別紙細川越中守国産売捌方之儀二付、御附札案・其外書類為御相談被成御廻

「(29)

一覽いたし候処、売捌品之内穀類之儀町年寄共取調之趣二而は、其筋渡世之もの引受候得は、差支無之由二候得共、一体穀類江戸廻し之儀は、御勘定奉行取扱向ニも拘候儀二有之候間、一応同方江御打合之上、御承届相成候方可然哉と存候、依之書類返却いたし候、

「

未

六月

「(30)

(朱書)

『向方へ

未十一月十四日差遣ス、

下ヶ札』

御書面産物品取調中、穀類は

相除候旨、越中守家来方引替書面

差出候付、別紙附札致し可相達と

存候、依之書類相添、猶此段及

御相談候、

未

十一月

池田播磨守

「(31)

御下ヶ札之趣致承知、穀類相除候上は、拙者儀何之存寄無之候、書類返却此段尚及御挨拶候、

未

十一月

石谷因幡守

「

『附札案』

書面国産之内、砂糖之儀は問屋

名目無之二付、勝手次第売払

不苦、明礬之儀は御勘定奉行江

申立差図請可申候、其余之品は

久兵衛方素人江直売不致、荷物
着次第其筋問屋江売払候
儀二候得は、於町方差障無之候、
未
十一月

┌
(
33
)

┌
(
32
)

⑬安政六末年四月 向方相談廻 濃州村々々焼出候陶器類売捌方之義、大沢豊後守方問合

「(扉、小口見出し)」

安政六末年四月

向方相談廻

大沢豊後守方問合

濃州村々々焼出候陶器類売捌

方之義調

(朱書)『十三』

中田郷左衛門」

「(33)

(朱書)

『未四月廿日、折右衛門を以御渡、鰭付致し、翌日郷左衛門方折右衛門を以上ル』

「石谷因幡守殿

大沢豊後守

濃州村々々焼出候陶器類、焼元方方御府内問屋共引受、市中又は方江も売捌候哉之処、問屋之外御府内

「(34)

市中并関内外在方之もの共、右元方方直引受いたし、売捌候而も差支候儀無之筋二候哉、右二付問屋共商法規則も有之候ハ、承知致し度、此段及御問合候、否早々御挨拶有之」

未四月

「(35)

ヒレ付

「因幡守殿江返却もの

(朱書)

未四月 播磨守

『未四月廿日折右衛門を以御渡、』

御書面之趣致承知、取調候処、濃州村々々

焼出候陶器類、御当地江着荷之分は

瀬戸物問屋共一手二引受売捌候儀二而、

右問屋之外市中之者は勿論、関内外

在方之者は、元方方引受候品御当地二而

「(36)

〔掛紙、朱書〕『問屋之外江売捌候』

売捌之義は差支有之候、此段御挨拶
およひ候、

未四月

石谷因幡守

『西六月廿八日、御勘定奉行一色山城守殿方内御問合之由二而、
長江淳右衛門を以御渡、別紙書取相添、即刻同人江差出ス、』

山城守

私知行所濃州土岐郡妻木村二而焼
立候瀬戸物、收納江差加へ江戸表江相廻、
問屋共二売捌為致候儀は、去未年中
町奉行窺相済、是迄其通売捌

「(37)」

仕来候处、問屋者不正之筋二も有之候哉、
逃札等多分有之、損毛相立甚難渋
仕候、右二付江戸廻し仕候荷物、其俣私
屋敷江積置、屋敷二おゐて、問屋とも
売捌為致候而は如何可有之哉、然ル上は
問屋共不向之品、又は端夕荷、或は
私用二解崩候品等、残リ之分望之
もの御座候節は、売払遣度奉存候、
且又私家来由緒之もの二而、日光
街道宿場之内、瀬戸物渡世仕候者
御座候由、右之方江折々少々之荷物
差送遣度由、其節矢張家来
名之差札候而積送り候而も不苦
候哉、右両様伺済二可相成哉之儀
御内慮奉伺度候、以上、

「(38)」

御書院番

徳永伊予守組

西六月

妻木伝兵衛

〔朱書〕

『書取下書』

別紙産物屋敷二おゐて問屋共江入札払二
いたし候儀は差支無之、其外不向之品、又は
私用遣残リ之類望之もの江売払候儀
并在方商人方へ差遣「送」候儀「等」は、何れも素人
売買之筋二相聞候間「当り候間」、可然とは難申候事、

「(39)」

⑭安政六未年五月 二条殿産物売捌用所之義二付調
(扉、小口見出し)

「(朱書)

『安政六未年五月』

紀伊守殿御下々

二条殿産物売捌人之儀調

(朱書)『十四』

蜂屋新五郎

」

「(40)

(朱書)

『未五月廿九日』

紀伊守殿、佐山八十次郎を以御渡』

先般御届済二相成候

二条殿御領内御産物売捌御用所、青山

御掃除町御掃除組頭湯川重助拝領町屋敷

内江、昨年中御聞届二而、御取建二相成居候処、御不

弁二付場所柄見立中、此度牛込御細工町西丸

奥坊主組頭内田由宜拝領町屋敷家主

徳次郎地面江、当分売捌方仮御用所二

被遊度、此段御届被 仰入候、以上、

二条殿御使

五月廿七日

多賀田主税

二条殿御使持参之書付

「(42)

石谷因幡守殿

松平右京亮

「寺社奉行衆

石谷因幡守

浄土宗

芝増上寺末

四谷伊賀町続

了学寺二近宿罷在候

持明院家々来

今井主税

右は私方江召捕候神田鍛冶町壺丁目

惣兵衛店当時病死常次郎儀、右

「(43)

持明院家筆道之儀二付如何之取計

致し候一件二付呼出相糺候処、右主税儀は尾張殿家来今井佐助二男二而、同人方二罷在候節、二条殿家来峯村市正方

持明院家筆道御当地江相広り候様

世話致し呉レ候様頼受候二付、上京之上同家々来二相成、帰府之上、右常次郎は

町方人別之もの二候処、兼而市正より右筆

道之用向并二条殿用達申付、紋付

又は御用と記候挑灯絵符其外相渡

有之候故、子細も有之間敷と存、改主税方

持明院家用達申付、是又挑灯并入木

道条目帳と記候同家押切印有之候」

帳面其外相渡、名字をも差免、同人

召連市中手跡指南之もの方江、右帳面

相配り、弟子共清書を京都江為差登

可否之沙汰有之候様可致旨申聞相廻り

候儀二有之、其後同人儀、右二付失脚も

相掛候間、存寄次第可差出旨申、

町方所々二而錢欺取候儀は不存候得共、

用向申付候は、主税一己之存附二無之、

持明院家おゐて被差免候旨申立候間、

右市正呼出可相糺処、同人儀は松平豊前守殿

御同勤之節、同人方二而揚屋入被申付候由、

右吟味之始末は難相分り候得共、主税

申立候趣二而は、前書之通最初市正方

常次郎江二条殿并持明院家用達をも

申付有之候故、猶主税方改申付候儀と

相聞、突合相糺不申候而は難相決、前科

之次第二而は、自然市正取計方事起り

候儀とも相聞候間、右次第をも束ね御手前様

方二而、御吟味御座候方二も可有之哉、此段御相談

旁御懸合仕候、

未五月

御書面之趣令承知、本文峯村市正は

松平豊前守同勤之節、下総國中根村

源兵衛外壱人領主役場江無沙汰二、二条殿

家来二相成候一件引合として呼出、吟味中

揚屋江差遣し、当時拙者掛り二有之候間、

御申聞之趣を以勘弁致し候処、本文

常次郎、二条殿用達申付受候儀、

同人存命二而右廉御咎相成候上は、自然

市正突合吟味之上二無之候而は難決候得共、

┌

└ (44)

└ (45)

┌

└ (46)

┌

└ (47)

最早常次郎病死致し、當時今井主税
而已二候得は、同人儀市正方持明院家
筆道御当地江相広候様世話致し呉候様
頼受候而も、右は主税上京之上、同院
家来二相成候上、持明院家用達申付候
上は、右市正相頼候有無二、強而可拘筋にも
有之間敷候間、市正突合吟味二無之
候而も相分り居候儀二付、常次郎江二条殿
用達申付候廉は引分、拙者方二而
市正吟味詰候様可致候間、主税不埒
之廉は、貴様方二而御吟味有之候方二は
有之間敷哉、猶御勘弁有之候様存候、
此段御挨拶旁及御懸合候、

六月
松平右京亮

(朱書)

『未六月廿八日、水谷武次を以御渡』

二条殿御領内御産物売捌御用所、
青山御掃除町二御取建二相成居候处、
御模様替中牛込御細工町御同朋格
御用部屋御坊主内田由宜拝領町屋敷内
家主徳次郎地面内江、当分売捌方
仮御用所二相成候間、此段御届御頼被
仰入候、以上、

二条殿御使
六月廿八日
多賀田主税

二条殿御領内産物売捌御用所
御届之儀取調申上候書付
館市右衛門

先般御届済二相成候
二条殿頃湯内産物売捌所、青山御掃除町
御掃除組頭湯川重助拝領町屋内江、昨年中
御聞届二而取建二相成居候处、不弁二付場所柄
見立中、此度牛込御細工町西丸奥坊主組頭
内田由宜拝領町屋敷家主徳次郎地面内江、当分
売捌方仮御用所二被成度御届被仰入候趣、右二条殿
御使多賀田主税差上候御下ヶ書付写、御渡

被成、取調被仰渡候間、相調候趣左二申上候、

一、青山御掃除町名主相尋候処、右町御掃除之

もの組頭湯川重助拝領町屋敷家守桑次郎

差配地面明地、去々巳年同町家主清兵衛

口入、二条殿産物取扱所補埋度旨申込、

同御家来峯村市正江も引合、清兵衛

地受人二相立、地所貸遣用所補埋候処、去年年

六月寺社御奉行松平豊前守殿御勤役中、

家守桑次郎御呼出し有之、地所貸付候節

手続御尋二付、前書之次第申上、市正身分之

儀は清兵衛江御尋被下候得は相分候旨

申上、追而御沙汰之趣被仰渡、同七月清兵衛

御呼出、市正江如何之懇意二而地受人二相立、

地面貸遣候哉之旨御尋二付、清兵衛儀春米

渡世仕、白米売先二而右市正地所被相尋候二付、

売場相増可申と何弁も無之、右地面桑次郎江

申込地請人二相立貸遣、地証人二相立候段申上

候処、同十一月清兵衛御呼出、同日峯村市正儀も

御呼出相成、同人御吟味中揚屋入被仰付、

清兵衛儀は追而御沙汰之旨被仰渡候、然ル処

今般右用所不弁二付模様替、家作引払度旨、

二条殿御家来吉田隼人之助方、右清兵衛・桑次郎江

申聞候処、前段御調之儀も有之候間、当五月

寺社御奉行松平右京亮殿御役所江、清兵衛・

桑次郎相伺候処、引払候而も不苦旨被仰渡、

右用所引払候旨、右町名主隼之助申之候、

一、牛込御細工町町役人相調候処、当五月中町内

御同朋格御用部屋坊主内田由宜拝領町

屋敷家守徳次郎地面内江、二条殿産物用所

取建度旨、御同所御内多賀田主税・竹原太郎兵衛と

申仁方、町役人江達シ、御同所役人中定詰無之二付、

取極候借主名前難差出旨ヲ以、町内升酒商売

仕候吉兵衛と申もの、御同所用達相勤候由二而、

右吉兵衛儀地所借主二相成、本郷春木町

三町目五人組持地借伝蔵地受人二相立、先月

五日徳次郎地面内貸渡候、此節普請之模様

二而は、門構玄関様之作事二付、弥右様之

建方二相成候ハ、其節御訴可申上心得之旨、

右家主徳次郎五人組名主申之候、

右取調候処、書面之通夫々申立候、青山

御掃除町之方は、寺社御奉行所二而、二条殿

御家来御吟味筋并家主共御尋請、尤今般

用所引払之儀は、寺社御奉行・松平右京亮殿

御役所江伺之上、不苦旨被仰渡候趣、町役人

下ケ
△ 札

（52）

下ケ
□ 札

（53）

（54）

申立「二は」候得共、夫而已二而は据り兼、此旨右京亮殿江御問合被成下度御儀、且又牛込御細工町地面之儀は、前書之通町人名前二而被借請、二条殿用所二

被相用候儀は御届二反し、尤御届書仮用所二

被成度と之文意二は候得共、事実齟齬

仕候次第二付、一応二条殿御使多賀田主税

御呼出御尋之上、否御答被仰上被下度御儀二

奉存候、依之、御渡被成候御届書返上仕、

此段申上候、以上、

未七月

舘市右衛門

「(55)」

下

△ケ

札

書面之外、神田鍛冶町耆町目惣兵衛店紺屋職
常次郎と申もの、堂上方家来馴合之儀、且二条殿
国産物捌方有之候二付、同家来峯村市正方追而
右取扱之儀被頼、御用高張弓張挑灯等受取候趣、
本文寺社方御吟味御引分、北御役所御懸、右常次郎
入牢御吟味中之旨二御座候、

下

□ケ

札

本文御届書二は、西丸奥坊主組頭内田由宜と有之
候処、右は書面之通御同朋格御用部屋坊主之旨、
町役人申之候、

(朱書)

『未七月四日御向江遣入、』

秋山

高橋

山崎

中次

蜂屋

前文略之、

右ハ神田鍛冶町耆町目惣兵衛店紺

屋職常次郎と申もの、堂上方家来馴合

及不届、「又は」二条殿国産もの捌方二付、同

家来峯村市正と申もの、御用高張

挑灯等受取置候一件二而、其御掛当

時御吟味中之由、町年寄方取調方申立候

書面之内二有之、右廉入用二有之旨

御吟味之廉委細被仰遣候承知致度、

乍御世話丰御「取」調被仰遣候様奉頼候、

此段被為御念如斯御座候、以上、

「(57)」

山崎 助左衛門様

中村 次郎八様

蜂屋 新五郎様

秋山 久 蔵

高橋 吉右衛門

御紙面拝見、各様弥御安全被成御勤
珍重奉存候、然は神田鍛冶町耆町目
惣兵衛店常次郎儀、二条殿国産物
捌方二付、同家来峯村市正方御用挑灯等
受取候一件、此方吟味中之由、町年寄方
申立候二付、右吟味之始末委細可申進旨
被仰越、承知致し候、右は常次郎儀峯村
市正方二条殿領知国産物御当地二而
売捌二付、用達相勤候様申渡受、二条殿
御用と認、又は紋附候挑灯・鑑札・絵府
其外受取、又は持明院家用達相成、
同家来今井主税申合、町々手跡指南
之もの方江罷越、相对勸化同様之所業
およひ候一件、此方吟味中常次郎八病死
致し、今井主税其外八当時吟味中二而
右市正ハ外悪事有之、松平右京亮殿
掛二而吟味中之由二有之候、依之別紙御同人江
懸合書写差進申候、委細右二而御承知
可被成候、此段御報可得御意如此御座候、以上、
七月五日

〔池田播磨守殿 松平右京亮
〔松平右京亮殿 池田播磨守

二条家領内産物売捌用所、青山
御掃除町家主条次郎地守致し候
地面二有之候処、模様替中牛込御細工町
家主德次郎地守致し候地面江、右用所
場所（朱書）『替』相成候と之御届書、紀伊守殿御下ケ
被成候間、町方差支之有無、年寄
とも江申付為相糺候処、不都合之廉も
相聞、其上同役石谷因幡守方二而
神田鍛冶町耆町目惣兵衛店当時病死
常次郎儀、二条殿家来峯村市正方
二条家用達申付、紋附又は御用と記候
挑灯・絵府相渡候一件吟味二付、右市正
儀は、其節御手前様方御吟味中
揚屋入相成居候二付、因幡守方御問合
仕候趣も有之候処、右件二今般場所替
届被致候産物売捌用所二拘り候御吟
味二而、容易二場所替等被致候儀は難
相成筋二御座候哉、承知仕度、依之別紙
写相添、此段御懸合仕候、
未七月

〔（58）
〔（59）
〔（60）
〔（61）

(朱書)

『未八月十日、坂本折右衛門を以御渡』

御書面之趣令承知、別紙をも一覽致し候処、峯村市正は、下総国中根村源兵衛外吉人、領主役場江無沙汰二三条家家来二相成候一件引合として呼出、揚屋入申付、当時吟味中二有之候処、先達而石谷因幡方懸合有之候神田鍛冶町吉町目惣兵衛店常次郎儀も、右市正より二条家用達申付、挑灯・絵府等相渡候趣二付、是又右一件江相束、拙者方二而吟味致し候見込を以、当時懸合中二有之候得共、素より産物売捌用所二拘り候儀二は無之候間、場所替相成候而も拙者方おゐて差支之筋無之候、被差越候別紙は写之儀二付留置、此段及御挨拶候、

未八月

松平右京亮

山崎助左衛門様

秋山久兵衛

中村次郎八様

高橋吉右衛門

各様弥御安全被成御勤仕珍重奉存候、然は二条殿領内産物売捌所場所替之儀二付、先達而同家来方当御役所江届書差出候処、右は其御役所方館市右衛門江取調被仰付候筋も有之候由、右取調之模様二寄、当御役所江差出候届書は差戻候方二取計可申哉と存候、此段及御問合候、右得御意度如斯御座候、以上、

十月三日

高橋

山崎

秋山

中村

御紙面拝見、各様弥御安全被成御勤珍重奉存候、然は二条殿国産売捌所場所替届書差出候義二付、被仰越候趣致承知候、右は当五月中同家来方申立候書面、紀伊守殿御下被成候二付、取調「方」館市右衛門へ被申渡、当時調中二有之、其次第寄猶御打合相成度と存候間、右之趣を以其御役所へ御家来差出候届書は御差戻可然哉と奉存候、此段一報可得御意如此御座候、以上、

十月四日

└ (62)

└ (63)

└

└ (64)

└

「

池田播磨守

二条殿家来へ相尋度義御座候間、
当時出府致居候者言人、明日「何時」
私御役所へ御差出御座候様致度、
此段御懸合仕候、

「
(65)

」

(貼紙)

「御右筆衆へ」

「
(66)

御談手覚

二条殿領内産物売捌所
用所場所替之儀二付、右家司方
別紙之通申立候書面、当月
中紀伊守殿御下ヶ被成候処、
去年年中申立用所取建候
節は、寺社奉行江取調方
被仰渡候儀二有之候哉、其節之
書類一覽致し度、御引合申候、

未十月

池田播磨守

「
(67)

⑮安政六末年九月 松平左衛門尉領分産物七嶋筵印銘之儀二付調
(扉、小口見出し)

(朱書)

「『安政六末年九月』

松平左衛門尉家来方届

領分産物七嶋筵印銘

之儀二付調

(朱書)『十五』

稻沢弥一兵衛

」

「(68)

(朱書)

『申閏三月十八日御渡』

松平左衛門尉家来

瀧山 正

左衛門尉領分豊後国府内産物七嶋筵、
年来大坂表江積出売捌仕来、同所御奉行

「(69)

所江は印銘等御届申上置候得共、去ル天保十一
子年奉願江戸積廻、此表二而は印銘御届も
可申上処、去春似寄之印銘荷物有之、右産
物之儀は他所荷物等買入候儀二無御座、全領分
限出来候品を取扱来候処、右様紛敷相成候而は
御役筋思召之処も奉恐入、且又産物之儀差支二も
相成申候、既天保十五辰年三月、兵庫木綿屋
太兵衛と申者、本銘印紛敷品物取扱候二付、
其節大坂西御奉行所久須美佐渡守様

」

御勤役中御届申上、右太兵衛御呼出相成候二付、
達而詫罷出候間書面取之、内済仕候儀も御座候
事故、昨年之儀も似寄印銘取扱候元方江
及懸合候処、不心付取扱候趣二而、以後相用申間敷旨
申聞候間、相济候得共、以後又々右様之儀等仕候もの
有之節は、次第二寄産物差支二も相成候間、
無余儀奉願候儀も難計二付、是迄相用来り候
印銘、別紙之通去未九月七日当御役所江御届
進上置候処、此節在所表方文字書振雛形
三枚差立候間、又々御届申上置候間、御聞置被成下
置候様奉願候、以上、

松平左衛門尉家来

閏三月十八日

瀧山 正

「(71)

覚

豊後国府内産物極上之処相用候印本銘と
唱候分、

」

青頭稀一
なかのや
ときわや

七越屋

司屋

万代

豊崎屋

右品方少々劣別格并新銘と唱候分、
別格

鎮西極一

万屋

むらや

豊

国

新銘

福寿仙草

弥生

菖蒲

七夕

喜久

右之通御座候、尤文字書振雛形は別二三通
認申候、

(朱書)

『一、七嶋蒔印銘書振雛形三通略之、』

『附札案』

書面豊後国七嶋蒔印銘之儀相糺候处、
兼而聞置相成候深川上大嶋町弥兵衛
引受、問屋共江相払候儀二付、印銘届無之候共
差支無之候、

申閏三月

松平左衛門尉殿領分

豊後国府内七嶋蒔印銘御届之儀取調申上候書付

館市右衛門

松平左衛門尉家来吉田小太郎申上候、

左衛門尉領分豊後国府内産物

七嶋蒔、年来大坂表江積出

売捌仕来、同町御奉行江は印鑑

御届申上置候得共、天保十一子年

奉願江戸積廻、此表二而は印鑑

御届不申上候所、当春似寄之印

荷物有之、既天保十五辰年三月

「(72)

「

「(73)

「

「(74)

「

「(75)

「

大坂表二而売捌中、兵庫木綿屋
太兵衛と申もの、本銘印紛敷品物
取扱候二付、其節同所西御奉行所江
御届申上、太兵衛御呼出相成、達而
詫罷出書面取之、内済仕候儀も
有之、此度之儀も似寄取扱候

「(76)」

元方江及懸合候所、不心付候趣二而
已後相用申間敷旨申聞候間、
此度之儀は相済候得共、已後
又々右様之儀等仕候もの有之は、
次第二寄奉願候儀御座候も難計二付、
是迄相用來候印鑑御届申上
置候間、御聞置被成下候様奉願
候旨并別紙、

「

豊後国府内産物極上之品
相用候印本銘と唱候分、

青頭稀一 なかのや ときわや
七越屋 司屋 万代

「(77)」

豊崎屋

右品方少々劣別格并新銘と唱候分、
別格

鎮西極一 万屋 むら屋

豊 国

新銘

福寿仙草 弥生 菖蒲

七夕 喜久

「

右書類御下ヶ被成候間、相調候所、
嘉永五子年閏二月、遠山左衛門尉殿
御勤役中、右七嶋薙之儀問屋
再興被 仰出、菱垣一方積危踏
積方并御当地売捌之儀は素人
売不仕、深川上大嶋町家持

「(78)」

弥兵衛引請、其筋江相払候旨、
松平左衛門尉殿家来御届申上、
取調中、遠山左衛門尉殿御病氣
御退役二付、同四月当御役所江取調書
差上、同九月留守居江御口達之趣、
七嶋薙船積并水揚所之儀、
大坂町奉行江引合之儀被申立候
趣は、諸問屋組合再興調済、
都而之廻船取締方及沙汰候儀二付、
艮「即」今之難及挨拶候、国産売払
方之儀、天保十一子年附札を以
申達候儀二有之、今般問屋再興之上は

「(79)」

御触面之通弥被相心得、素人直売不致、
深川上大嶋町弥兵衛引受、其筋問屋江
入札申付被相払候得は差障無之旨
御書取案、私共江も御下ヶ被成、御当地
売捌方御聞置二付、今般印銘御届之儀
其筋取調候処、左之通御座候、

表店組置表青莚問屋

堀留組置表荒物問屋

新堀組置表荒物問屋

住吉組置表荒物問屋

一、右 行事共

右は、松平左衛門尉殿御領分豊後国
府内七嶋莚似寄之銘印取扱候二付、
元方江掛合之上、已後相用申間敷旨二而
相済候得共、為已後之是迄相用來候
印銘御奉行所江御届申上度段、右屋敷方
被申立候二付、私共差障有無御尋
御座候処、府内産物七嶋莚之儀、
前書印銘三廉共、先年方右印銘二而
引請来候儀二御座候間、今般御届相成
候共差障候義無御座、尤（朱書）『他』領（朱抹）「地」方出候
青莚之内、同銘之品大坂表方積参
無之とも難申上候得共、品柄之儀は
印銘二不拘上品・下品見分仕、時之
相場ヲ以買取候義二付、於問屋業体
差障り候義無御座御候旨、申之候、
右取調候処、書面印面御届之儀、
御当地置表問屋共おみて差障

相聞不申候得共、併家来願意之儀
已後印銘似寄取扱候もの次第二寄、奉願候
儀御座候も難計、印銘御届申上と候有之、
左候得は次第二寄、屋敷方願出候ハ、
御吟味可被及哉、已後御番所御所置
可相成義二付、御向様江も御掛合之上

御沙汰可被成下御儀二奉存候、且又青莚之義
問屋共大坂方積取候向々之内、前書
申立候ことく、他領之品同銘無之とも
難申、筋合二寄候而は窮屈之儀も
出来可仕哉、大坂町御奉行所江前々
御届申上候は格別、御当地新規御届之儀
更二可然とは難申上、若不正之品
取扱候もの有之候ハ、御当地之義は、
兼而取捌引受人申立有之候深川
上大嶋町家持弥兵衛方、相手取可願出旨

被仰渡、届書之義は御受取無之方と
奉存候、依之御渡被成候願書并別紙
返上仕、此段申上候、以上、

未十一月 館市右衛門

(朱書)

『未九月六日、武治ヲ以御渡』

松平左衛門尉家来

吉田小太郎

左衛門尉領分豊後国府内産物

七嶋莖、年来大坂表江積出売捌

仕来、同所御奉行所江は印銘等御届

申上置候得共、去ル天保十一子年奉願

江戸積廻しいたし、此表二而は印銘

御届も不申上候処、当春似寄之印荷物

有之、右産物之儀は他所荷物等買入

候儀二無御座、全領分限り出来候品ヲ

取扱来候処、右様紛敷相成候而は

御役筋思召之処も奉恐入、且又産物

之儀差支二も相成申候、既二天保十五

辰年三月、大坂表二而売捌中、兵庫

木綿屋太兵衛と申もの本銘印紛敷

品物取扱候二付、其節同所西御奉行所

久須美佐渡守様御勤役中御届申上、右

太兵衛御呼出相成候二付、達而侘罷出候間、

書面取之、内済仕候儀も御座候事故、

此度之儀も似寄印銘取扱候元方江及

懸合候処、不心付取扱候趣二而、以後

相用申間敷旨申聞候間、此度之儀は

相済候得共、已後又々右様之儀等仕候者

有之候ものは、次第二寄産物差支二も

相成候間、無余儀奉願候儀御座候も

難計二付、是迄相用來候印銘御届

申上置候間、御聞置被成下置候之様

奉願候、以上、

松平左衛門尉家来

九月六日

吉田小太郎

覚

豊後国府内産物極上之处相用候、

印本銘と唱候分

青頭稀一

なかの屋

ときわ屋

「(83)

「(84)

「(85)

「(86)

「(87)

七越屋

司屋

万代

豊崎屋

右品方少々劣り別格并新銘と
唱候分

別格

鎮西極一

万屋

むら屋

豊

国

新銘

福寿仙草

弥生

菖蒲

七夕

喜久

(朱書)

『丑三月十九日差出、

同廿四日御向御相談済、』

〔御附札案

書面豊後国七嶋莚印銘之儀、相糺

候処、兼而聞置相成候深川上大嶋町

弥兵衛引受、問屋共江相払候儀二付、

印銘届無之候共差支無之候、

申閏三月

└

└ (88)

└

└ (89)

⑩安政六末年十一月 細川越中守領分生蠟売捌方之義調 ★

(扉、小口見出し)

(朱書)

『安政六末年十一月』

細川越中守領分生蠟売捌方
之儀調

(朱書)

『十六』

中田郷左衛門

└ (3)

(朱書)

『安政六末年十一月晦日、水谷勘右衛門を以御渡』

細川越中守内

里内官右衛門

越中守領分産物之内、生蠟紙類等江戸

運送之儀二付而は、鳥居甲斐守様御勤役

中、天保十五年二月御達之趣御座候付、右御主

意二基キ、年々領分より生蠟数多運送

致し来候処、近来問屋共入札格外之安直二而、

遠境運送仕候詮無之、長崎或は大坂表江

差上候得は、当節之双場格外高直二而、第一

運送之入費薄ク、加之難破船之懸念も無之

候処、畢竟前文御主意之趣等閑二難仕

候間、無扨入費并懸念之廉をも不顧、運

送仕候次第二御座候、然ル処、前文問屋共取計方

探索仕候処、入札安直二而買受、地懸蠟問屋二は

格外高直二売渡候趣二相聞、左候而は上下之

為合二は不相成、問屋共一己之利潤二相成候

而已二而、御主意二基キ取計候詮も無之、就而は右之

事情を申上、以往は江戸運送見合申度段、

役人共内評仕候処、兼而生蠟捌方取扱せ候深川

南松代町代地卯兵衛地借久兵衛申聞候は、右

品廻着之節々、半方は問屋江相渡、半方は

地懸問屋共江直売仕候様御座候ハ、問屋共

不正之取計は仕間敷と見込候由申出候、此儀は

御規格も可有御座候得共、右之廉御聞濟

被下候ハ、相応国益二も可相成候間、是迄運送

之外猶斤数多分二相増候様可仕、左候ハ、第一御主

意二相叶、上下之弁利二も可相成と奉存候間、右之

都合取計方、何分御聞濟被成下度、若又

右之都合難相整候ハ、無扨前条長崎又は

└ (6)

大坂表江悉皆差上、江戸運送は差止候心得御座候、此段伺旁申上候、以上

細川越中守内

十一月晦日

里内官右衛門

書面国産生蠟着荷之半高、地懸蠟燭屋共江相払候儀取調候処、問屋共敢而直安二入札致し候様二も相聞不申、勿論品二寄直段甲乙も可有之哉、諸雜費又は市中相場之儀は、兼而相分居候儀二而、問屋再興可申渡候二付而は、都而国産品取締二も拘り、地懸蠟燭屋共江半高直払之儀は、差障有之候間、難承届候事

細川越中守殿国産生蠟入札払之儀取調申上候書付

館市右衛門

細川越中守家来差出候書面二付略之

蠟燭問屋行事

通四町目家持長兵衛

京都住宅二付店預り人

喜平次煩二付代

又兵衛

堀江町四丁目万兵衛地借

庄左衛門大坂住宅二付

店預り人

庄兵衛

右申立候は、前書細川家御国産江戸運送之儀、天保十五辰年御調有無之儀は、其頃諸問屋仲間御差止之

砌二付、帳面書留等相分り不申候得共、時々右御国産生蠟御払二相成、入札

以買請候所、近來問屋共入札直安二致し売買高価之趣御尋請、何共迷惑

仕候、右蠟之儀は多分中蠟二有之、入札直段之儀は、問屋共大坂表仕入もの

生し、其余は御当地有荷物多少等に而高下銘々見込入札仕候、勿論相場

之儀二付、取極候儀二は無之候得共、凡月々御番所江書上候市中相場二見競、

金壹両二付目方百匁前後之口銭位、直安二相当り、凡三四歩之売徳有之、

且右御払蠟之儀は、代金引替二相納、問屋手元は夫々懸売等二も相成候

得共、業体出精致し入札仕候、前来
┌ (10)

諸国蠟荷物一円二引請候渡世向二付、
今般細川家御国産品「廻」着、半方地廻
蠟燭屋江御直払相成候而は、問屋作法
相崩、必至難儀仕候、右之趣被為訳
聞召、是迄之通入札被仰付度奉願、
半方御直売之義は、何分御差障、右二而
江戸運送御差止相成候而も無是非
義と奉存候段、申之候

右取調候所書面之通有之、廻着半方
地掛蠟燭屋江直売之儀、問屋作法相崩、
難儀仕候段、無余儀相聞申候、且は嘉永
四亥年問屋再興之砌、諸家国産之類
┌ (11)

其外江戸表江相廻候品々も、問屋組合
再興相成候分は、前先之通其筋問屋江
可相払旨、町触御趣意二も相響候儀二
奉存候、細川家生蠟捌方為取扱候町人、
以後問屋書上直段相調、口銭差引相試
候ハ、可然哉、尤国産品被相払候儀二付、
直段不引合二而、江戸運送被差止候程は
無是非次第二候得共、可相成候ハ、御当地
品潤沢之ため、是迄之通差廻し、蠟問屋
共江入札払有之度儀二奉存候

但前文細川家来申上候、天保十五辰年
鳥居甲斐守殿御勤役中御達之趣は、
┌ (12)

私共方書留相見不申候、
去未年三月、右細川家国許産物
御当地江差廻し、北八町堀御岸屋敷
前添地内二おゐて売捌、且出入町人
為取扱、素人直売は不致、其筋問屋
共江相払候積、品書相添同家来
┌
清田新兵衛申上書、当御役所方御下ケ
被成候品書之内、生蠟其外品々同
四月取調書差上候所、其後御沙汰無
御座候

右依之御渡被成候書付写返上仕、嘉永度
町触写相添、此段申上候、以上
┌ (13)

申
三月 館市右衛門

┌
(朱書)

『嘉永四亥年十二月廿七日町触写』
今朝相触候問屋組合再興二付素人直売買不
相成、且国産之儀御触書奥文言相直り并朱書

入候通、早々可相触候

去ル丑年問屋組合仲間等停止之節、菱垣廻船

積来候諸品は勿論、都而何国より出候何品二而も、素人

直売買勝手次第たるへきより触置候処、今般問屋

┌ (14)

(朱書)『組合』調之上、再興相成候分ハ、都而素人直売買不相成候間、

如前々可相心得候

一、諸家国産之類其外、江戸表江相廻品々も、問屋二不限、

銘々出入之者共等引請、売捌候儀も勝手次第之旨触置

候処、是又調之上、問屋組合再興相成候分は、前々之

通其筋問屋江相払可申候

右之通町中不洩様可触知者也

亥十二月

┌

右之通從町御奉行所被仰渡候間、町中不洩様入念早々

可相触候

十二月廿七日

┌ (15)

⑰万延元申年閏三月 伊達遠江守領分国産蕨縄売捌方之義届 但書面差戻相成候事

(扉、小口見出し)

(朱書)

「『万延元申年閏三月』

伊達遠江守領分国産蕨

縄売捌方届

(朱書)『申十一月七日、願之通書面差戻

相成候事』

(朱書)『十七』

「 (16)

(朱書)

『申閏三月廿八日、水野勘右衛門を以御渡
尤御月番江も相届候趣二付、此方二而は
猶以取調二不及旨被仰渡』

伊達遠江守内

柳田内蔵治

遠江守宇和嶋国産之蕨縄、爰許江為
積登、堀江町四町目榎並屋庄兵衛と

申もの江為引受、売捌申付候間、此段御届
仕候、以上

伊達遠江守内

閏三月廿八日

柳田内蔵次

伊達遠江守内

八木志津馬

遠江守宇和嶋国産之蕨縄、爰許江

為積登、堀江町四丁目榎並屋庄兵衛と

申者江為引請、売捌申付候之旨、

当閏三月廿六日御届仕候処、右之者引受并

致入札候而は差支筋有之二付、外町人江

申付候様、過日六日御達之趣も御座候付、

外出入之町人共吟味仕候処、引請売捌

仕候者無御座候、右二付兼而差出置候

御届書御下被下度、此段申上候、以上

十月廿日

伊達遠江守内

八木志津馬

秋山久蔵様

山崎助左衛門

高橋吉右衛門様

中村次郎八

服部孫九郎様

中田郷左衛門

各様弥御安全珍重奉存候、然ハ
伊達遠江守国産之蕨縄、堀江町
四町目榎並屋庄兵衛江為売捌候旨、
当閏三月廿六日同家来届書差出
候処、其御方御月番二而委細申立
候趣二付、追而御相談可有之と浮置候処、
此程孫九郎様方御申渡之趣も有之
候間、右書面下戻之義、尚又同家来
申出候、右ハ如何様之御達振相成候哉、
当御役所之方江も届出有之、下ケ戻
候而も御差支無之哉、致承知度、此段
一応御問合可得御意如斯御座候、以上

十月廿五日

山崎助左衛門様

秋山久蔵

中村次郎八様

高橋吉右衛門

中田郷左衛門様

服部孫九郎

御手紙致拝見候、各様弥御安全
珍重奉存候、然ハ伊達遠江守

国産蕨縄、堀江町四丁目榎並屋
庄兵衛江為売捌候旨、当閏三月

廿六日同家来届書差出候処、此方
月番二而委細申立候趣二付、追而

御相談も可有之と御浮置有之候処、
此程孫九郎方申渡候儀も有之候間、

右書面下戻之儀、尚又同家来
申出候二付、達振御承知被成度段、

御問合之趣致承知候、右ハ不行届
之儀有之、下ケ戻度旨申立候得共、

未タ下ケ戻之書面差出不申候得共、
差出候ハ、下ケ遣候心得二有之、其

御方江不行届之趣を以、書面差出候ハ、
御同様御下ケ二遣候儀と奉存候、

右御報可得御意如斯御座候、以上

十月廿五日

伊達遠江守内

柘植万作

宇和嶋国産之蕨縄、爰許江為積登

堀江町四丁目榎（ママ）屋庄兵衛と申者江
為引請、売捌申付候旨、当閏三月

御届仕候之処、右ハ全取調方不行届

義有之御届仕候儀二付、右御届書并先月
廿日差出候紙面両通共、何卒御下ケ

「（22）」

「（21）」

「（20）」

「（19）」

被下度、此段申上候、以上

伊達遠江守内

十一月七日

柘植万作

(朱書)

『右書面差出候二付、向方之模様相尋候処、同方江ハ書面
引替相願候由、最前方此方ハ非番之儀二付、不及届二
处、間違二而届出候義二付、書面下ケ戻申立候義之旨、
相答候間、然上ハ向方二ハ不拘、式通共用部屋江差戻
候積

江談、書面差出』

┌

└

⑮万延元申年八月 伊豆国島々産物売買町触之義調
(扉、小口見出し)

「

(朱書)

『万延元申年八月』

伊豆国嶋々産物売買

町触之儀調

(朱書)『十八』

」

」(23)

(朱書)

『申八月廿二日、勘右衛門を以御向御相談廻二上ル
同九月七日辰ル』

御書面伊豆国附嶋々産物売買等町触

之儀、取調候処、寛政度町触之廉留記差向

不相見候間、御差越町触案聊加除致し、

懸紙之通町触差出可申と存候、依之御挨拶

旁此段及御懸合候

申八月

池田播磨守

石谷因幡守

」(24)

(朱書)

『申九月十一日、重太郎を以御渡』

御下ケ札之趣致承知候、右は

別紙御加除之通御触渡相成、

差支無之候、此段及御挨拶候

申

九月

御勘定奉行

」

(朱書)

『申

九月十四日』

(朱書)

『「大和守殿江御直上ル』

伊豆国附嶋々産物取締筋之儀二付

并触差出候儀申上置候書付

池田播磨守

町奉行

伊豆国附嶋々産物交易之儀、

追々流弊致し、不取締之儀相聞候二付、

尚又町触之儀、御勘定奉行方談

御座候間、別紙之通再触仕候二付、

此段申上置候、以上

申

九月

池田播磨守

」(25)

町触

伊豆国附嶋々困窮御救として、嶋方
産物交易之儀、旧来は江戸鉄砲洲
会所二おゐて一式取扱、外々二而交易は
たとへ聊之品たり共堅不相成、若
嶋方之もの心得「違」いたし、交易之儀
強而相頼候とも、決而売買致間敷
段、相模・伊豆・駿河・安房・上総・下総
国并江戸海辺附町々江相触置候間、
外町々二而も前書之趣相心得、
以来嶋々産物相對二而売買之
儀は勿論、金銭借貸之儀も決而
致間敷旨、文政二卯年触置候処、
追々年数相立流弊致し候付、
不取締之趣相聞候間、尚又近国
村々江相触候付、右触面之趣
無意失相心得、嶋方之もの鉄砲洲
十軒町嶋宿之外止宿為致間敷候、
右之通町中不洩様可相触候
申九月

「(26)」

「(27)」

「(28)」

町触写

伊豆国附嶋々困窮御救として、嶋方産物
交易之儀、以来江戸鉄砲洲会所二おゐて
一式取扱、外々二而交易は、たとへ聊之品たり共
堅不相成、若嶋方之者心得違致し、交易
之儀強而相頼候とも、決而売買致間敷旨、寛
政八辰年、相模・伊豆・駿河・安房・上総・下総
国并江戸海辺附町々江相触置候処、外町々
二而も前書之趣相心得、以来嶋々産物相對
にて売買之儀は勿論、金銭借貸之儀(朱書)「懸紙」
(朱書)「懸紙」(朱梓)決而

「(28)」

致間敷候

(朱書)

『文政二』

卯七月

（朱書）

（朱梓）

『懸紙上』

且嶋方之者共、鉄砲洲十軒町嶋宿庄次郎
之外止宿之儀、決而為致申間鋪候

「（29）」

伊豆国附嶋々産物売買町触之儀

御掛合二付取調申上候書付

館市右衛門

御勘定奉行掛合書二付略之

右、依之私共書留取調候処、寛政八

辰年之方触書相見不申、文政

二卯年之儀は御触留之内、別紙御写

之如く、同年十月町触有之候、御写

之方月付、文政二卯七月と有之候処、

書面之通、同年十月七日町触二御座候、

則町中触書写差上申候、此外差当

日記帳相見兼、御掛御役所等相知

不申候、依之、御渡被成候御掛合書・別紙

とも返上仕、此段申上候、以上

申

八月

館市右衛門

下ケ札

本文御掛合御文意二も、寛政

八辰年之儀、江戸深川鉄砲洲

辺方近国村々江先役共方触

置と有之、文政二卯年尚相触、

其砌御府内町々江も触渡之儀、

御先役方江被仰渡と有之上は、

寛政八辰年之儀は、深川

鉄砲洲辺と其筋方之触達二而、

惣町触二は相成不申哉共、相聞

申候

伊豆国附嶋々困窮御救として、嶋方産物

交易之儀、以来は江戸鉄砲洲会所二おいて一式

取扱、外々二而（朱抹）之交易は、たとへ聊之品たり共

堅く不相成、若嶋方之者心得違致し、交易

之儀強而相（朱抹）願（朱書）「頼」候共、決而売買致間敷旨寛（朱書）「段」

政八辰年相模・伊豆・駿河・安房・上総・下総国

（懸紙）

「と文政二卯年触置候処、追々年数相立流弊

致し候付、不取締之趣相聞候間、尚又近国村々江

下ケ札

「（30）」

「（31）」

「（32）」

相触候付、右触面之趣無意失相心得、嶋方
之もの、鉄砲洲十軒町嶋宿之外止宿為致
間敷候

右之通町中不洩様可相触候

申八月

┌
(33)

并江戸海辺附町々江相触置候処、外町々二而も
前書之趣相心得、以来嶋々産物相对与売
買之儀は勿論、金錢借貸（朱抹）等之儀、決而致間敷候

卯十月

右之通町中不殘可相触候

十月七日

┌

（朱書）

『申八月廿一日、水谷勘右衛門を以御渡』

〔町奉行衆

御勘定奉行

伊豆国附嶋々産物売買之儀二付、寛政
八辰年御改正被 仰出候節、伺之上別紙之通

┌
(34)

江戸深川鉄砲洲辺より近国村々江、先役共方
触置、其後年数相立、不取締之趣相聞

候二付、文政二卯年猶相触、其砌御府内

町々江も触渡之儀、御先役方江被仰渡候儀之処、
当時触面之趣流弊致し、自然不取締

┌

之趣相聞候間、猶亦此度近国村々等江触
達可致と存候、且嶋方之者共、嶋宿之外国地二而

猥二止宿致間敷筈之処、是又近年猥二相成

候哉二付、此度は其趣書加、村々江相触候間、
御府内町々江も、懸紙之通御書加江御触有之
候様致度、此段及御懸合候

申八月

┌
(35)

①9 万延元申年八月 一条殿産物売捌之儀調
(扉、小口見出し)

〔朱書〕

『万延元申年八月』

一条殿産物売捌之儀被仰立儀二付調

(朱書)

『十九』

奉 中村次郎八

└ (36)

(朱書)

『申八月十日、折右衛門ヲ以御渡』

八月九日

紀伊守殿

片山与八郎

一条殿御使椿蔵人持参之

書付

└ (37)

一条殿御領内百姓共、年々農隙
手業ニいたし候産物類、御年貢ニ
代江從來相納候品々御用残之内、
且山城国木津鹿背山之産

焼物等、関東筋江向宜分是迄

最寄々ニ而為取捌置候処、夫ニ而は

手数雜費而已多く、聊之品数ニは

御座候得共、御不益ニ相成、兼而

御薄禄之儀故、御迷惑ニ被思召候、

右は元来 御城江例歳年頃、

亦是臨時御使被差向候節ニて、

御手宛方ニ候得は、向後御使向之

旅宿ニおゐて堅取締為致、自他之

差障曾而無之様、其筋勘弁

いたし候御出入町人共江厚世話為

致可申、尤右荷物道中筋伝馬等

申付候儀ニは無之、船運送ニて

取扱候儀ニ御座候、此段御届可申旨

被仰付越候、以上

申

一条殿

六月

御使

椿蔵人

└ (39)

下ケ札

└

下ケ札

└ (38)

書面之趣取調候処、一条殿領地産物類
取捌方之儀、右は領地百姓共、農隙手業二
いたし候産物類、且山城国産焼物等
関東筋江向宜分、是迄最寄二而為取捌
候由之処、手数雜費而已多く不益
相成候二付、向後御使向之旅宿二おゐて、
其筋相心得候出入町人共江厚世話為
致可申、尤船運送二而取扱候と之趣二
有之、右は去ル子年問屋組合再興
被 仰出候節、是迄諸家国産之類
其外江戸表江相廻候品々、向後素人
直売買不相成、前々之通其筋
問屋江相払可申旨、御触之趣も有之候間、
是迄最寄々江売捌候産物、御府内
旅宿二おゐて、出入町人江世話為致候とも
素人江直売買無之、其筋問屋江
相払候儀二候ハ、不苦儀と奉存候、左候ハ、
其段被仰達可然奉存候

「(40)」

申

八月

松平式部少輔

松平出雲守

塚越大蔵少輔

勝田次郎

設楽八三郎

福田八郎右衛門

御勘定方

「(41)」

(掛紙)

「播磨守殿江返却もの」

(朱書)

『申九月廿日、紀伊守殿江恩田友之助を以上ル』

「(42)」

書面一条殿領内産物之儀、百姓共
農隙手業致し候産物類、且山城国
木津麻沓山之産焼物等、関東筋江
向宜分、向後御使旅宿二おゐて出入
町人共江厚世話為致候と有之計二而、
何々之品柄被相払候哉、巨細之義
相分兼候間、右御家来相尋候処、
右は前書産物之内、先ツ焼物之分
差向廻シ方致し、其余之出産品は
取調、追而被申立候と之趣二付、町年寄共江
申渡、瀬戸物問屋共をも為相糺候処、
兼而御触面之通、素人江直売不致
候得は、出入町人共最寄瀬戸物
問屋之内江相對二而被相払候共、差障
筋無之段申出候付、右之趣二被仰達

「(43)」

可然奉存候
申
池田播磨守
九月
石谷因幡守

「(44)」

(朱書)

『申八月十二日、坂本折右衛門を以御渡』

御届書

一条殿御産物類取扱候者共

浅草新鳥越町貳町目

常七

霊岸嶋東湊町壹町目

佐吉

浅草東平右衛門町

徳右衛門

右は

当御方御領内百姓共御年貢二

代相納候御産物類、是迄最寄々々二而

為取扱候之处、雜費而已多御小益二

相成、且御薄禄之儀故、御迷惑

思召候、元来 御城江年頭臨時

御使被差向候御手宛方二御座候得は、

右御進物万端御取扱候御用所、下谷

池之端七軒町二相構、則御使等

旅宿二御座候、向後右二おゐて堅

取締致し、捌方之儀は、自他之

差障曾而無之様、其筋勘弁候

御出入町人共江厚世話為致可申旨、

当六月中 御用番御老中方江

御届申上候、取扱候者共御支配二付、

御届可申様被 仰付越候、以上

一条殿

御使

八月

椿蔵人

「(47)」

(朱書)

「

『申八月廿二日、坂本折右衛門を以御渡』

御届書

靈岸嶋東湊町町目

佐吉

右佐吉儀急病二而死去仕候間、以来御産物類取扱方同人代親類之者、左二申上候

浅草東平右衛門町

徳右衛門

右徳右衛門儀、此節大病之趣二而御免願出候二付、相除申候

浅草新鳥越町貳町目

常七

八町堀長沢町

庄三郎

右常七・庄三郎兩人二而以来御産物類取扱申候、此段御届申上候

一条殿御内

八月
椿蔵人」

「(49)

品覚

品覚

当御方御領内山城国木津鹿背山村

産焼物類、関東江向宜分御廻方等御届

申上候、猶此外御領内産物も有之御用

御遣残之分、追々御廻相成度

思召候、右等帰京取調、追而申上候様可致候、

此段御尋二付申上候

一条殿御内

八月
椿蔵人

「

別紙御産物御扱方之儀は、入札無之、

最寄問屋共之内相對二而相払度、

素人売曾而為致間敷心得之事二

御座候

「(51)

(朱書)

『申九月五日差出入』

一条殿御領内焼物類江戸廻最寄
問屋払之儀取調申上候書付

館市右衛門

一条殿御領内山城国百姓共農隙手
業二致し候産物類御用残之内、且

└ (52)

山城国木津鹿背山之産焼物等、

関東筋江向宜敷間、向後御使向之

旅宿二おゐて、其筋勘弁致し候御出入

町人共江厚世話為致可申上旨、御届二付、

猶当御役所御調之節、御同家御内

椿蔵人差出候品覚・御領内山城国

└

木津鹿背山村焼物類御廻、此外

御遣残之分帰京取調可申上段、并

御扱方之義は入札無之、最寄問屋共

之内相對二而相払、素人売曾而為致

間敷趣、取扱人名前書共御下ケ被成、

差当瀬戸物問屋共取調可申上旨、被仰渡候

└ (53)

瀬戸物問屋行事

南新堀壺町目五人組持地借

一 藤右衛門

差添同問屋

坂本町貳町目由兵衛地借

久三郎

右は、此度一条様御領内山城国木津

鹿背山村産焼物類、御当地御廻

└

相成、向後御使向之旅宿二おゐて

御取締被仰付、御出入町人浅草新

鳥越町貳町日常七・八町堀長沢町

長三郎取扱、右御扱方之儀入札無之、

最寄瀬戸物問屋共之内相對二而

被相払、素人売曾而無之儀二御座

└ (54)

候得は、問屋仲間二おゐて差障無

御座候旨申之候

右取調候所、書面之通申立御扱方前書

之通二而、其筋問屋共差障無御座候、弥

御聞濟二相成候ハ、其旨為心得問屋共江

申渡候様仕度奉存候、尤取扱人御出入

町人之義は、彼方二而被御申付候儀二付、

別段身元等取調不申候、依之御渡被成候

書類返上仕、此段申上候、以上

下ケ札

申九月

館市右衛門

下ケ札

本文産物取捌方之儀、御勘定方
御下ケ札二も素人直売買無之、
其筋問屋江相払候儀二候ハ、不苦旨
相見、且為御見合嘉永四亥年
十二月問屋再興之節、諸家国産
之類御書付出町触写差上申候」

「(55)

(朱書)

『嘉永四亥年十二月廿七日町触写』

今朝相触候問屋組合再興二付、素人
直売買不相成、且国産之儀御触書
奥文言相直り并朱書入候通、早々
可相触候

「(56)

去ル丑年問屋組合仲間等停止之節、
菱垣廻船積来候諸品は勿論、都而
何国より出候何品二而も素人直売買
勝手次第たるへき旨触置候所、今般
問屋組合調之上、再興相成候分は、
都而素人直売買不相成候間、前々
ごとく可相心得候

一、諸家国産之類其外江戸表江相廻候

「

品々も問屋二不限、銘々出入之者共等
引受売捌候儀も勝手次第之旨
触置候処、是又調之上、問屋組合再興
相成候分は、前々之通其筋問屋江
相払可申候

右之通町中不洩様可触知もの也

「(57)

亥

十二月

右之通從町御奉行所被仰渡候間、町中
不洩様入念早々可相触候

十二月廿七日

「

(朱書)

『嘉永四亥年十二月廿七日町触写』

今朝相触候問屋組合再興二付、素人直売買不相成、且
国産之義御触書奥文言相直り、并朱書入候通、早々可
相触候

去ル丑年問屋組合仲間等停止之節、菱垣廻船積来
候諸品は勿論、都而何国より出候何品二而も、素人直売買
勝手次第たるへき旨触置候所、今般問屋(朱書)「組合」調之上再興」

(58)

一、相成候分は、都而素人直売買不相成候間、如前々可相心得候
諸家国産之類其外江戸表江相廻候品々も、問屋二不限、銘々
出入之者共等、引請売捌候儀も勝手次第之旨触置候処、

是又調之上、問屋組合再興相成候分は、前々之通其筋
問屋江相払可申候

右之通町中不洩様可触知もの也

亥

十二月

右之通從御奉行所被仰渡候間、町中不洩様入念早々
可相触候

十二月廿七日

└ (59)

(朱書)

『申十月五日御渡』

御届書

先般御届申候、当

御方御産物一件、去ル廿三日内藤

紀伊守殿方別紙写之通御書面

御渡二相成申候、御出入之もの共

御支配之義二付、此段御届申候、

以上

一条殿御内

申九月

椿蔵人

└

書面産物類御府内旅宿二

おゐて素人江直売不致、出入

町人共江世話為致、最寄問屋

之内江相払候義は不苦候事

└ (61)

根津門前町

常七

馬喰町壱町目

家主藤兵衛同居

金蔵

飯田町

利兵衛

右は先般御届申置候御産物

└ (62)

取扱候御出入之者共之内、類焼二付
転宅仕、病氣二而差支候ものも
有之、旁以来右名面之者へ被仰付度
儀二御座候、此段御含被成下、尚右之
者共厚心得大切二可取扱旨、被仰渡
候様御願申上候

└ (63)

一条殿御領内産物取扱人厚
取扱申渡候趣申上候書付

館市右衛門

一条殿御領分産物類、御当地御廻し、
御使向之旅宿二おゐて、御出入町人共
世話為致候御届、当御役所御調之節、
御同家御内椿蔵人差出候品覚・
御領内山城国木津鹿背山村焼物
類御廻し、此外御遣残之分并御扱
方之儀は入札無之、最寄問屋相對
に而売払、素人売曾而致間敷趣、并
取扱人名前書御下ケ被成、差当
瀬戸物問屋共取調可申上旨、当
八月中被仰渡、瀬戸物問屋行事共
取調差障無御座候段、同九月中
申上候

然ル処此節右御産物類御府内

└ (65)

旅宿二おゐて、素人江直売不致、
出入町人共江世話為致、最寄問屋
共之内江相払候儀は不苦候旨、
御下知相済候段、椿蔵人御届、并
先般御届申上候出入之もの内類
焼二付転宅、病氣等二而差支
候もの有之、旁以来右名面
之者江被仰付候儀、猶右之もの共
厚心得大切二可取扱旨被仰渡候様
仕度、書付差上候

名前

根津門前町

常七

└ (66)

馬喰町壱町目

家主藤兵衛同居

金蔵

飯田町

利兵衛

右書類御渡当人共江可申渡旨、
被仰渡候間、今日呼出し伺置候、
別紙之通厚相心得可取扱段、
差当木津鹿背山焼物二候
但書致し、申渡候

一、且又瀬戸物問屋共江も、右之趣
心得、且先達而申聞候取扱人
相替り、右当名前之もの之儀申渡候
右則別紙申渡書写相添被仰渡
被成候書類返上仕、此段申上候、以上

申十月 舘市右衛門

(朱書)

『申十月七日、舘市右衛門方申渡仕候写』

申渡

根津門前町

常七

馬喰町壱丁目

家主藤兵衛同居

金蔵

飯田町

利兵衛

其方共一条殿江出入いたし、今般御同家産物、御当

地御使旅宿二おゐて、素人売不致、最寄

問屋共之内江被相払候段、御聞濟二付、其方共江

取扱被申付候由、旅宿之儀二も有之候間、取締方

其外とも厚相心得取扱、問屋共引合向等不

都合之儀無之様可致

但差当り御領内山城国木津鹿背山村焼物

二候、瀬戸物問屋江引合可申候

右町御奉行所御沙汰二付、此旨申渡

申十月

右之通被仰渡奉畏候、以上

根津門前町

家持

常七印

五人組

卯兵衛印

名主

兵蔵印

馬喰町壱丁目

家主藤兵衛同居

金蔵

煩二付

代 政七印

五人組 徳右衛門印

「(68)

「(67)

「(69)

悴	名主	家主	忠助店	元飯田町	代	名主
五郎吉印	煩二付	五郎兵衛	忠助印	利兵衛印	嘉兵衛印	吉左衛門

└

②0 万延元申年十月 佐竹右京大夫酒井雅樂頭松平隠岐守国産売捌之義二付調

(扉、小口見出し)

「(朱書)

『万延元申年十月』

佐竹右京大夫

酒井雅樂頭

松平隠岐守

国産売捌之儀二付調

(朱書)

「二十」

安藤源五左衛門」

「(4)

(朱書)

「申

四月廿九日差出、其後町年寄調書差出、問屋共

差支に無之由、然処酒井雅樂頭方別紙

之通申出候二付、尚又右京大夫家来相尋候処、当時

木綿之儀者土産方も格別二無之差障候而も、更二

差支無之趣を以、書面引替之儀申立候二付、則

別紙品書之内木綿之廉相除、引替内差出

其余之分へ別紙附相付ケ、同六月十一日為聞ケ

勘右衛門方達ス、向方へ者市中取締懸方及演舌候事

右京大夫領分産物類追々御当地江
相廻申度之处、其筋問屋共江

「(5)

入札払相成候仕来之趣承知仕候、

然ル処、遠路之海上差廻候二付、運賃

其外懸増二相成、且難船等之患も

有之、以前方御当地方差出不申候得共、

近来外国交易二付、諸色払底之

折柄故、以後相廻候ハ、自然市中

潤沢可相成哉奉存候、乍去是迄

之通問屋共入札払二相成候而は、

前書申上候通之次第二付、元直段

引合兼候間、何卒姫路木綿其外

家別引受之御振合二被成下度、

別紙品書相添、此段奉願候、以上

「(6)

四月

佐竹右京大夫家来

高橋鉄之助

一、呉服（朱抹）**木綿織物**

一、糸類

一、種油荏油之類

一、瀬戸物類

一、塗物類

右之通追々差廻し申度候

（朱書）

『申六月十一日、

佐竹右京太夫家来江達入』

付ケ札案

書面国産素人売不致、其筋

問屋江相払候儀二候得は、入札二

無之、家別二売渡候共差支無之

候事

「（8）」

（朱書）

『申六月二日差出入』

佐竹右京太夫領分産物江戸廻

問屋家別売之儀取調申上候書付

館市右衛門

佐竹右京太夫領分産物類、追々御当地江

相廻度之処、其筋問屋共江入札払相成候

仕来之趣承知仕、然ル処、遠路之海上

差廻し候二付、運賃其外掛増二相成、

難船等之患も有之、以前方御当地江

差廻不申候処、近來外国交易二付、

諸色払底之折柄故、以後相廻し候ハ、

自然市中潤沢可相成哉、乍去是迄

之通問屋共入札払相成候而は、前書

申上候通之次第、元直段引合兼候間、

何卒姫路木綿其外家別引受之

御振合二被成下度、別紙品書相添奉願

候旨、右京太夫殿家来高橋鉄之助

申上候

品書

一、呉服木綿織物

「（10）」

一、糸類

一、種油荏油之類

一、瀬戸物類

一、塗物類

右之通追々差廻申度候

右書類御下ヶ被成、其筋取調可申上旨
被仰渡候間、左二申上候

一 呉服織物

一 是は呉服問屋其取扱

一 木綿

一 是は大伝馬町組白子組両組木綿
問屋共取扱

一 糸

一 是は糸問屋共取扱

一 瀬戸物

一 是は瀬戸物問屋共取扱

一 塗物

一 是は塗物問屋共取扱

一 種油荏油

此油之儀、奥州船積又は陸荷
に而相廻候分は、地廻油問屋引受、
廻船二而積廻し浦賀改受入津
致し候分は、下り油問屋引受候
仕来二有之候処、是迄佐竹領方
之出油無御座候間、今般御当地江
差廻し方、右兩様二寄両問屋之
内持前之方江仕来通引受候儀二
御座候、

右品二、今般佐竹家領分産物

御当地江御差廻し問屋入札払二無之、

勿論素人売は一切不被致、問屋

内家別引受被相払候得は、差障

無御座候旨、夫々問屋行事共申之候

右取調候処、書面之通差障候儀無御座、

姫路木綿之儀は、先前之振合二而、

木綿両組問屋限望之者江売捌相成、

小網町彦町目小嶋屋彦兵衛と申もの

取扱仕候由、大伝馬町名主勘解由申之候、

依之、御渡被成候書付式通返上仕、問屋共

差出し候返答書六冊相添、此段申上候、以上

申五月

下ヶ札

「 (13) 」

下ヶ札

「

「 (12) 」

「

「 (11) 」

「

本文之趣御聞濟相成、佐竹家来御挨拶
被成下候次第第二候ハ、其段問屋共心得
申渡候様仕度奉存候

「(扉)

上

呉服問屋

行事共」

佐竹右京太夫様御領分御産物

一、呉服織物

右之通、追々当地江相廻り候節、問屋共入札
払無之、問屋家別引請相成候而差支無之哉
之旨、御尋二御座候

此儀素人壳無之、問屋内江御払相成候得は
差障無御座候、此段申上候、以上

呉服問屋行事

本町壱丁目仁平地借

松屋又兵衛

京都住宅二付

店支配人利兵衛煩二付代

伊三郎^印

申五月

通油町家持

大黒屋吉右衛門

江州住宅二付

店支配人利七煩二付代

久兵衛^印

佐竹右京太夫様御領分御産物

一、糸物

右之通、追々御当地江相廻り候節、問屋共
入札払無之、問屋家別引受相成候義差支
無之哉之旨、御尋二御座候

此儀素人壳無之、問屋内江御払二相成候得は
差障無御座、此段申上候、以上

申ノ五月廿日

糸問屋行事

本石町十軒店

久野屋

善助^印

通旅籠町

丁子屋

清兵衛

代善次郎^印

「(扉)

上

下り油問屋
地廻油問屋」

「(17)

佐竹右京太夫様御領分御産物

一、種油荏油

右之通、追々御当地江相廻り候節、問屋共
入札払無之、問屋家別引受相成候而差支
無之哉之旨、御尋二御座候

此儀、素人売無之、問屋内江御払二相成候
得は、差障無御座候、此段申上候、已上

下り水油問屋行事

堀留町壱丁目家持

升屋平次郎代

申五月

佐吉印

小舟町貳丁目市右衛門借

丸屋仙太郎代

文兵衛印

深川熊井町平兵衛地借

大和屋伴次郎代

清吉印

地廻水油問屋行事

通四丁目家持

駿河屋長兵衛京都住宅二付

店預り人喜平次代

宗七印

浅草駒形町五人組持地借

山本屋藤右衛門代

栄蔵印

下
ケ
札
(割印)

油之儀は、下り油并地廻油引受方
両問屋御座候処、是迄佐竹様
御領分方之出油無御座候間、今般
御当地江御差廻方二寄、両問屋共
持前を以引受可申候

下ケ札

「(20)

佐竹右京太夫様御領分御産物
一、瀬戸物類

右之通、追々御当地江相廻り候節、問屋共
入札払無之、問屋家別引受相成候而差支
無之哉之旨、御尋二御座候

此儀、素人売無之、問屋内江御払相成
候得は、差障無御座候、此段申上候、以上

瀬戸物問屋行事

南新堀壺丁目五人持地借

藤右衛門煩二付代

申五月 久之助^印

「(21)」

「(扉)

上

塗物問屋

行事」

「(23)」

佐竹右京太夫様御領分御産物

一、塗物類

右之通、追々御当地江相廻り候節、問屋共

入札払二無之、問屋家別引受相成候而

差支無之哉之旨、御尋二御座候

此義素人売無之問屋内江御払二相成候得は、

差障無御座、此段申上候、以上

塗物問屋行事

申五月廿日 伊束町清助地借

敷地屋亀五郎^印

青物町五人組地借

会津屋徳兵衛^印

「(24)」

(朱書)

『亥十二月廿七日、館市右衛門江相渡』

町触

去ル丑年間屋組合仲間等停止之節、

菱垣廻船二積来候諸品は勿論、都而

何国方出候何品二而も、素人直売買勝手

次第たるへき旨、触置候处、今般問屋

組合調之上、再興相成候分は、都而素人

直売買不相成候間、如前々可相心得候

「(25)」

一、諸家国産之類、其外江戸表江相廻し候品二も、問屋二不限、銘々出入之もの共等引受売捌候儀も、勝手次第之旨、触置候処、是又調之上問屋組合再興相成候分は、前々之通其筋問屋江相掛可申候右之通町中不洩様可触知もの也

亥十二月

「(26)」

(朱書)

『申六月 日、水谷勘右衛門を以御渡、取調中、佐竹右京太夫方木綿之廉引除品書引替差出候二付、然上は、別段取調之廉無之二付、其段申聞、同十二日水谷勘右衛門方雅楽頭家来之書面差戻ス』

書取

酒井雅楽頭家来
宮地加兵衛

雅楽頭領分播州姫路国産木綿

之儀、江戸表江相廻し小網町寺町目

利右衛門店小嶋屋彦兵衛并同三町目

次兵衛店宮嶋屋政蔵方二而引受、

夫方問屋共家別相對之上引請

為仕候、右は文化七年年七月町

御奉行根岸肥前守様江御届申上、

御聞濟二而相廻来候後追々取組、猶又

文政六末年二至、町御奉行筒井

伊賀守様御役所江申上、双方熟談

之上議定書為取替、以後益手堅く

申付候、右国産木綿之儀は、年来

領中之者江多分之手当をも差遣、

国益不少儀二御座候付、先年

晴光院様 御入興先後莫大之

物入二御座候得共、領中之者共出精

仕候付、御用途も不差支、且右国

益之力を以

晴光院様御賄筋も年来無滞

取続来候儀二御座候、然処、別紙之通

去ル天保二卯年松平右近将監様方

被仰立御座候節、御勝手御掛水野

出羽守様・町御奉行榊原主計頭様江、

右之趣意申上御聞濟二而、右近将監様

御方江は御差留二相成申候、其後

「(27)」

「

「(28)」

「

天保十亥年、松平三河守様姫路

国産同様之姿二御内願有之候節、

問屋共御請不仕候旨申出候付、当家

よりも、筒井紀伊守様江前々之次第

申立候処、是又御聞濟二而、三河守様

御国産品之内木綿之儀は、家別

相對売は不相成、入札払二可致旨、

御達二相成申候、右御両家之外、是迄

諸家より御願立も有之候節、問屋共

言上二而御断申来候処、此度外様方

姫路国産取組之通、問屋共家別

に而引請之儀、御願も有之哉二付而、

其筋より問屋共江、右家別引受

之儀、御請仕候様被申談候由之処、

先々之儀も有之候付、一応御断申上

候由、然処再三被及御利解候趣二而、

無余儀、奥州筋は木綿払底之

場所故、差障二も相成申間敷旨

存候而御請申上候旨、問屋共申出候、

元より銘々国産壳体之儀、如何様

類例有之候共、於一領貪着仕候筋

勿論無之候得共、雅楽頭領分取組

之儀、前々御役所格別之御取扱を以、

五十年来双方和熟無異儀連綿

仕来候処、右様類例も多く相成候而ハ、

引請候問屋共迷惑も仕候上、向後

産物不捌二も成行候而は、多年

莫大之雜費も不顧、十分之手当

致置候詮も無之儀二相成、領中衰微二も

相及、第一

晴光院様御賄筋二も眼前差支

候様相成可申候間、家別引請之儀は、

類例出来不仕候様仕度、別紙之通

先例も有之候訳柄二御座候付、右之

趣意厚御含御取扱被成下候様

仕度御座候事

六月

（32）

書付

天保二卯年五月廿四日、町御奉行榊原

（30）

（31）

（29）

主計頭様江、左之書付差出申候

└ (33)

文化七午年根岸肥前守勤役中
申達候拙者領分播州姫路国産

木綿等江戸表江相廻し来候分、小網町

寺町目利右衛門店小嶋屋彦兵衛并

同三町目次兵衛店宮嶋屋政蔵方

に而為引受、夫々問屋共江相渡為売捌候、

右問屋共之内、木綿問屋共之儀、

廿二ヶ年前より追々取組、文政六未

年二至、猶又筒井伊賀守御役所江

申達、双方熟談之上議定書為

取替候、以後益手堅く申付領分之者

致出精、近年漸木綿反数も相増、

別而貧民共渡世之助二も相成候

儀二有之候、右は全領内取立之為

申付仕法二而、内実は種々致手当、

年々数万金之貸金等致遣、専ラ

国益而已之含二而、右二付運上等取立候

訳合二毛頭無之、可成丈元付引下ケ

正路実意ヲ以、永久相続致し候様

嚴重二申付候義二有之、問屋共二おゐても

多年右之趣意得と相心得、益手堅く

申談、追々融通宜方之儀二候得共、

此上引受方手広二相成候而は、双方共

捌方差問候趣二付、其後諸方方

以相對談合候儀候而も、家別引受

之義は堅く相断来候由二候処、此度

他方拙者領分取組之通、問屋共

家別二而引受方之義申談候筋有之

由二而、右家別引受之義難渋申立候処、

御役所二おゐても再三利解二被及候由、

問屋共方申出候、元方銘々国産

売体之義如何様類例有之候共、

於一領貪着致筋勿論無之儀二

候得共、拙者領分取組之儀は、前々

御役所御扱ヲ以、貳拾余年来双方

追々致和熟、全永久国益之為多年

莫大之雜費も不相顧、十分手当も

致置候儀二候処、類例多罷成候而は、

第一引受候問屋共迷惑仕候由二

候得は、向後産物不捌二も成行候

而は、是迄之手当も無詮義二相成、

小民共折角之渡世二も相離、領中

困窮二及、手元之儀益差問候儀

└ (36)

└ (35)

└ (34)

二も成行、往末

喜代姫君様御賄筋等も弥以行届兼
可申哉と、不一方致痛心儀二候、元来
拙者勝手向不如意之上、近年打続
重キ御用向相勤差当

姫君様御入興前

御住居御普請向等、不少物入も差集候
時節、右等之仕法を以、領中之者
一統存入厚致出精、積金仕法等ヲ以、
是迄は拝借金等も不奉願相凌

来候儀二も候故、何卒此上領中之者
困窮二不及様致し遣度折柄、右

問屋共二おゐても前段難渋之

趣意二付、是迄後入之口二は諸方共
堅く相断来候儀二も候処、此度二
至り引受候而は、是迄相断候向々
江も、尚更難申披筋も可致出来、

旁以、向後之儀迷惑可仕旨申儀二候、
併銘々壳体之儀、固方一領之

得失ヲ以可申出義二無之、殊更御役所方
取分被及御沙汰候義二も候ハ、勿論、
申迄も無御座候得共、但相對之廉ヲ以
利解筋之御扱二も候は、目前一領

衰微之兆二も可相成儀故、無扨

此旨趣申達候、何分二も手前之儀は
諸家方先々熟談相調、数十年相続
致し来、他家とは前後始末之差別も
有之訳合、不惡御勘弁被置候様致度、
此段以使者申達候

酒井雅樂頭使者

五月

庄野慈父右衛門

同年六月二日御勝手御掛り水野出羽守様江
同様之趣書付差出置候処、同月廿八日左之
御書付被成御渡候事

書面領分産物売捌方之儀、

松平右近将監之方者相止可申段、同人
家来可相達旨、町奉行榊原主計頭江
相達候間、其段相心得可申事

書付

「 (37) 」

「 (38) 」

「 (39) 」

「 (40) 」

天保十亥年四月十四日、町御奉行
筒井紀伊守様江左之書付差出申候
雅楽頭領分播州姫路国産

「(41)

木綿之儀江戸表江相廻し、小網町
吉町目利右衛門店小嶋屋彦兵衛并
同三町目次兵衛店宮嶋屋政蔵方
に而引請、夫より問屋共家別相對
之上引請為仕候、右は年来追々
取調、尚又文政六未年二至、筒井
伊賀守様御役所江申上、双方
熟談之上、議定書為取替、以後
益手堅申付候、右国産木綿之
儀は、年来領中之者江多分之
手当をも差遣、国益不少儀二
御座候付、先年

喜代姫君様御入興先後莫大
之物入二御座候得共、領中之者共
出精仕候付、

「(42)

公辺拝借も不奉願、此節二至候而ハ、
喜代姫君様御賄筋二も仕置候
儀二御座候間、他家類例多相成
候而は捌方不宜、問屋共も迷惑
仕、且領中衰微之基二も相成候
儀二御座候、已二去ル天保二卯年
松平右近将監様より被仰立御座候
節も、御勝手御掛り水野出羽守様・
町御奉行榊原主計頭様江も、右之趣
意申上御聞濟二而、右近将監様御
方は御差留二相成申候、右之次第
にも御座候間、此度他家二而同例
出来仕候は、又々右近将監様御初
御願立之御方々様多く相成可申、
左候は益木綿捌方不宜様相成、
喜代姫君様御賄筋二も差支候間、
家別引請之儀は、外二類例出来
不仕様仕度、尤問屋共入札二而
引請候儀は差支無御座候、右之趣
意宜敷御含御取扱被成下候様
仕度御座候事

「(43)

七月九日松平三河守様江、町御奉行
御同所様より左之通御達有之候由
書面国産之品問屋共相糺候処、
木綿類之儀は問屋家別相對

売二は不相成候間、不残行事共
方江差出、入札払二致し、其外之
品共、都而問屋定法之通取扱、着船
之節不残問屋共江売捌、洩荷二
不相成候得は差支無之二付、被申立候
趣承届候間、夫々及対談差障
之筋無之様、問屋共其外諸事
申合取計候様、三次郎店支配人
正三郎江可被申含候

「(44)

書面申上候趣を以、雅楽頭殿江御挨拶
御座候処、右二而差支無之旨、猶雅楽頭殿方
御挨拶御座候旨被仰渡承知奉畏候、依之
問屋共江此度申立候通、御聴被置候旨申
渡置候様可仕候、以上
未七月十六日

「(45)

(朱書)
『文政撰要集産物町触之部方
書拔』

「

姫路国産木綿荷物問屋共引受之儀二付取調申上候書付

喜多村彦右衛門

姫路国産木綿之儀、文化七午年根岸

「(46)

肥前守殿御勤役中、問屋共御糺之上、木綿

問屋両組二限り引受申度、問屋共申立

其旨御挨拶二相成有之、然ル処其後

姫路方相廻り候木綿類問屋共入札

に而買受可申段申立、右二而は品々

差支有之候由、去ル午年問屋共

申立候、振合等取調可申上旨被仰渡

候間、左二申上候

「

一、右相糺候処、去ル午年以来廻り荷物
無之候処、去々巳年方荷物相廻り候由、
荷物入札二而買受可申旨、問屋共一同

之存寄二御座候旨申立候間、左候而は
去ル午年差上置候書面二相背候様
当リ候旨を以、名主共方追々利解申聞、
則一同熟談仕、右産物引受、売捌人共、
双方打合規定書為取替、以来差支無之
取引可仕段、兩組問屋行事并右
産物引請人共連印之書面差出
申候、然上は去ル午年御趣意通り二
奉存候間、右旨を以猶御掾(朱書)「挨」掇可有御座
哉二奉存候
「(47)」

右取調候処、前書之通御座候、則御渡
被成候書面式通り返上仕、并産物引受
人為取替規定書式通り連印書写、入
御覽、此段申上候、以上
「(48)」

未七月 喜多村彦右衛門
以書付申上候
「(49)」

一、酒井雅楽頭様御領分播州姫路木

綿類御当地木綿問屋江売渡之儀、
拾四ヶ年以前文化七午年六月中
根岸肥前守様御勤役之筋、御調之上
御聞濟二相成申候、然ル処右木綿
荷物小嶋屋彦兵衛宮嶋屋政蔵
兩人方問屋方江売渡之砌、是迄入札
に而引請候処、右入札者相止申度、以来
問屋之内より之もの江、夫々売渡
趣二付、猶追々御調有之、双方篤と対
談仕候、依之別紙之通議定致熟談
仕候、右議定書写相添一同、此段申上候、
以上
「(49)」

木綿問屋行事
大伝馬町壱丁目
綿屋清兵衛勢州
住宅二付店支配人
善 八印
外五人印
名前略之
「(50)」

文政六未年七月

喜多村

御役所

姫路国産引請人小嶋屋彦兵衛

宮嶋屋政蔵方木綿問屋江相渡候証文

写

証文之事

一、播州姫路木綿類之儀、御当地木綿問屋中二限り取引仕、其外無株之者は勿論、何方江も決而直売仕間敷候

一、右木綿類之儀、全く酒井雅楽頭様御領分限二候儀二而、御他領之品一切取扱候儀無御座候、大坂は勿論中国・四国・西国筋之障二相成候儀者一切不仕候

一、右木綿荷物積下り候節、手板并送状、何反入何箇其御仲間江無間違差出、両組行事改印ヲ受候上二而、水揚為致可申候、右改印無之品一切取扱申間敷候

一、右荷物各方問屋中家別二相對を以売捌候節、右売先名前及数書相届可申候

一、右木綿金高壹分五厘之割合を以、口錢御仲間江差出可申候

右箇条之趣急度相守可申候、若相違之儀御座候得は、何様御申立被成候共、其節一言之儀申間敷候、為後日議定仍如件

姫路国産会所

文政六末年七月

小嶋屋彦兵衛印

宮嶋屋政蔵印

木綿問屋

行事衆中

木綿問屋方姫路産引受人小嶋屋彦兵衛宮嶋屋政蔵江相渡候証文写

証文之事

木綿問屋江差出候文言

前々有之通二付略

前書之趣熟談致候処、相違無御座候、以上

木綿問屋

文政六末年七月

行事印△

小嶋屋彦兵衛殿

宮嶋屋政蔵殿

下ヶ札

△

此印形之儀は、木綿問屋両組行事と相認有之、大伝馬町組・白子組木綿問屋惣一体之儀二相用申候

「(51)

「(52)

「(53)

酒井雅楽頭使者
高須七郎太夫

文化七午年根岸肥前守勤役中
御届申達候、拙者領分播州姫路国産
木綿之儀、江戸夫々問屋江相渡為売捌
候処、入札二相成直段殊之外下直二而、
領分之者致難渋候付、去ル午年
問屋共申立通、問屋共江相對之上
為売捌候様致度、今一応御糺被下
候様頼入候処、御調之上以來入札者
相止、問屋共之内望之もの江売渡、
熟談二而為売捌候様相成候付、
小嶋屋彦兵衛・宮嶋屋政蔵并江戸
木綿問屋共与差出候議定書之趣二而、
差支無之候、右為(朱書)「御」挨拶可得御意以
使者申達候

七月
酒井雅楽頭使者
高須七郎太夫

┌
(55)

乍恐以書付申上候
一、木綿問屋惣代之者共奉申上候、酒井
雅楽頭様御国産木綿御当地江御積
下り、一同売捌之儀差障無之哉、御尋二
御座候処、右木綿荷物之儀は、私共
仲ヶ間木綿問屋二限り引受申度
奉存候間、何卒御慈悲を以御聞濟
被下置候様奉願上候、以上

┌
(56)

文化七午年六月

木綿問屋行事
大伝馬町壱丁目清兵衛店
六兵衛勢州住居二付糸ひすや
代 善兵衛印
家主 清兵衛印
五人組 幸 助印
同町七兵衛店次左衛門
勢州住宅二付田畑屋
代 万兵衛印
家主 七兵衛印
五人組 長左衛門印
本町四丁目六左衛門店
孫右衛門京都住宅二付栢屋
代 磯兵衛印
家主 六左衛門印

五人組 惣右衛門印
通旅籠町茂兵衛店
正右衛門京都住宅二付大丸
代 伝 八印
家主 茂兵衛印
五人組 平兵衛印

御番所様

酒井雅楽頭領中産物

文化七午年六月廿八日根岸肥前守様
御勤役中御役所江御届申上候書付写
雅楽頭領分播州姫路領国産木綿・
鉄物類・晒下り革類、是迄江戸表江
相廻来候分、兼而雅楽頭方江出入致
来候神田関口町越前屋小一兵衛儀、
小網町壺丁目利右衛門店二而為引受、
尤本町小嶋屋彦兵衛儀は証人二
相立、右国産之品二世話為致、勿論
町方江直二売捌候儀二は無之、右
小一兵衛方江戸夫々問屋共江相渡
問屋共方為売捌候儀二有之候、此段
御届申上候、以上

酒井雅楽頭家来

六月廿八日 庄野慈父左衛門
雅楽頭領分播州姫路領国産之
品は、江戸表江相廻候儀、手船又は
雇船二而も相廻申候、此段も御届申上置
候、以上

酒井雅楽頭家来

六月廿八日 庄野慈父左衛門
同年七月四日、根岸肥前守様より
御呼出二付、留守居庄野慈父左衛門罷出
候処、去月廿八日御届申候国産
為売捌候儀、御聞置被成候旨、御用人
宮下貢右衛門方を以被仰候

一、文政五午年閏正月廿二日御役所江
御届申上候書付写

文化七午年根岸肥前守様御勤

役中御届申上候、雅楽頭領分播州
姫路国産木綿・鉄物類・晒下り
革類、是迄江戸表江相廻来候(朱書)『り』

候分、兼而雅楽頭方江出入致来候、
神田関口町越前屋小一兵衛儀、
小網町壺丁目利右衛門店二而為引受
候処致病死候付、証人本町四丁目
小嶋屋彦兵衛引受、利右衛門店二而
為捌来候、此節追々荷数も相増
手廻り兼候付、利右衛門店は其儘差置、
猶又深川下佐賀町宮嶋屋与兵衛
方二而も同様為引受、右万事は迄
之通江戸夫々問屋共江相渡為売捌
申候、此段御届申上候、以上

「(61)

酒井雅楽頭家来

閏正月廿二日 田中平馬

一、同年四月十日御役所江御届申上候
書付写

当閏正月廿二日御届申上候、深川
下佐賀町宮嶋屋与兵衛儀、只今迄
之場所二而は弁利悪敷御座候付、
伊勢町大和屋新三郎店江転宅
仕、右与兵衛儀老衰仕候付、悴政蔵江
相続仕、是迄之通雅楽頭領分播州
姫路国産木綿・鉄物類・晒下り
革類為売捌申候、此段御届
申上候、以上

「(62)

酒井雅楽頭家来

四月十日 田中平馬

一、先達而相伺候上御差図被下候、
雅楽頭領中産物之品、追々
相廻、木綿・鉄物等夫々問屋共江
為掛合売捌差支も無御座趣候処、
近頃二相成、木綿之荷口捌方、彼是
差支候趣も相聞候二付、右産物引
請人小嶋屋彦兵衛・宮嶋屋政蔵江
相尋候処、左之通書付差出申候、
則書面之儘入御披見候

「(63)

以書付奉申上候

御国産之儀、文化七午年七月
四日南御番所様御届済二相成、
則木綿問屋共方引請売捌可
仕旨御受書、御番所様江差出置候、
其後外品者追々相廻り候得共、
木綿類は文政三辰十一月中、初而

「(64)

御積（朱書）『積』入着船仕候付、木綿問屋之内江

相對ヲ以売捌仕来候、差支無御座

候処、追々荷支二も相成候間、一統江

売渡し可仕心得罷在相掛合候処、

入札之外相對買受候儀、中間一同

申合二而、表立買請致兼候趣二付、

巳年十一月六日木綿式拾箇入札二

差出候処、直段下直二候得共、始而之

事故売払二相成、尤金百兩二付

金三兩之割合を以、口錢差出候、又候

同月十二日拾八箇入札二差出候処、

格外二直段相違仕候付、右荷物御

払見合可申段申入候処、問屋共申聞

候は、入札仕候荷物見合可申儀は

不被相成中間仕来候間、不引合二而も

荷物相渡し候様申立候得共、直段

大相違之事故押而掛合、荷物

引取申候処、一旦入札仕候故、中間

定口錢差出し可申旨申候間、懸合

之上、金貳兩口錢差出申候、右入札二

致候得は、直段格外相違仕候間、

相對を以売渡段落及懸合候処、

一統買請不申候、尤中間内二も

買取候者も有之候得共、中間

一統表立買受不被相成仕来之

趣二而、売捌方手狭二罷成候間、一同

表立買受候様、度々及掛合候処、

中間仕来申立不承知二御座候、尤

昨年九月中、行司共申立候二は

趣意付候儀も有之候得は、追而

相談二可及旨申候付、任其意当

三月中問屋方江口錢差出可申旨

掛合仕候処、此節二至中間仕来り二

御座候間、入札之外銘々買受候儀

出来不申段断り申立候、御尋二付、

此段奉申上候、以上

文政六未四月

小嶋屋

彦兵衛

宮嶋屋

政蔵

（扉）

（67）

（66）

（65）

上

┌

└ (68)

諸家様御国産其筋問屋入札二無之、相对家別
売之類例御尋二御座候

文化七午年

一、酒井雅楽頭様御国産姫路木綿、其筋問屋家別売
致来候

同十四丑年

一、相馬大膳亮様御国産奥州相馬陶器、其筋問屋二

限り売捌相成候

└ (69)

文政元寅年

一、大村丹後守様御国産瀬戸物、其筋問屋二限り売捌
相成候

嘉永六丑年

一、松平左衛門尉様御国産七嶋蕨、其筋問屋二限り
家別売、又は引受人与問屋行事相对売捌、尤

家別売之分八代金滞、其もの相对取立、行事引合
之分八仲間惣受二而、勘定相立候積

安政四巳年

一、戸田綏之助様御国産野州高原山材木、其筋問屋二
限り売捌相成候

安政五年年

一、井伊掃部頭様御国産材木炭薪、其筋問屋江
相对売捌相成候

└ (70)

同年

一、松平土佐守様御国産炭、川辺問屋之内江相对売捌
相成候

右荒増取調仕候、大概是問屋入札払通例二御座候、
御尋二付奉申上候、已上

大伝馬町

申六月

名主 勘解由

新乗物町

同 三郎右衛門

村松町

同 源六

└ (71)

(朱書)

『申六月十六日差出ス』

佐竹右京大夫殿国産売捌之儀其筋問屋江
申渡候趣申上候書付

舘市右衛門

佐竹右京太夫領分産物、其筋問屋江家別
売之儀、先日取調問屋共返答書
┌ (72)

差上、去ル十一月右国産素人売不致、
其筋問屋江相払候義二候得は、入札二無之、
家別二売渡候共差支無之旨、右京大夫殿
家来江御達相済候旨被仰渡候間、其旨
為心得、同十三日呉服問屋・糸問屋・塗物
問屋・瀬戸物問屋・下り地廻両油問屋行事江
申渡、請印有之候、則御渡被成候家来江
御達写、返上仕、此段申上候、以上
并其節御渡被成候品書返上仕候
申

六月 館市右衛門
┌ (73)

山崎助左衛門様 秋山久蔵
中村次郎八様 高橋吉右衛門
各様弥御安全被成御勤仕珍重奉存候、
然は、先達而相談有之候佐竹右京太夫
領分産物之内木綿相除候書面、同家来
より差出候処、御廻し二相成義とは存候得共、
差向右書面相見へ不申候間、毎度乍御面
倒御書拔御貰ひ申度候間、此御使へ
御渡御座候様いたし度、此段得御意候、以上
八月二日
┌ (74)

(朱書)
『申十月十五日』
┌ (75)

〔大和守殿(朱書) 〔江 御直上之〕
酒井雅楽頭家来方御勝手江差出候領分
木綿売捌方之儀二付見込之趣申上候書付
池田播磨守
石谷因幡守

別紙酒井雅楽頭家来方御勝手江差出候
書類一覽仕候処、同領国産之木綿類、
従来問屋共江家別売仕来候得共、此上
諸家同様之取扱相成候而は、品々差支
候筋も有之、殊二諸家二而同様之取扱は
不相成事二取極候先例も御座候二付、
此上外々江不押移様仕度、此段御厚含
┌ (4)

被成下度旨二有之、右申立之趣無余儀
筋二も被思召、見込をも一応可申上旨被仰渡候、
一体諸家国産売捌方之儀は、奉行所江
届済之上、於問屋共故障無之候得は、其品二
寄家別売并入札払両様共、都合

「(5)」

次第二売捌方仕、必入札払二無之候而は、
不相成と之規則は無之候処、木綿類二
限り、雅楽頭領産姫路木綿之外は、
家別売は不相成様、前々方之仕来
二而数年之間済来候義二有之、既二
雅楽頭家来方申上候、書面之通り
天保度松平右近将監・松平三河守
両家方同様之振合ヲ以、国産売捌
度旨申立候得共、右近将監之方は相止
可申段御下知有之、三河守方は木綿類
入札払二可致旨、奉行所方申達候儀二而、
且市中問屋共おゐても古来方之

「(6)」

取極相崩、自然相底(朱書)『庭』二も差響候故、
木綿類二限り、家別売之儀は彼是
苦情申立、素直二は引受方不仕哉二
兼々承知仕居候義二御座候、然処
此程紀伊守殿江、松平隠岐守方領内
国産之嶋木綿類、市中問屋共江
売捌度旨申上、右書面御下ケ有之

「

(朱抹) 当時取調中工御座候間、右等之義ヲ
及承、雅楽頭方書面差上候儀と
相見、尤隠岐守書面之内二、家別売
入札払、孰之方二而売捌方仕候と申儀は
無之、只其筋問屋江売捌度と計り
御座候間、(朱抹) 此上問屋共取調候小、(朱書) 「町年寄江申付問屋共為相糺
候得は」、隠岐守

「(7)」

領産之木綿も、家別売之儀は、極而(朱書)『品々』
故障申立相整申間敷(朱書)『不申趣二御座候(朱抹) 二付』先例は有之
候得共、売捌方御差止相成候も不穩
哉二付、天保度之松平三河守江相達候、
振合二准シ、入札払之積御下知御座候ハ、
敢而雅楽頭方二而差障候筋は有之
間敷候間、其段(朱書)『今日』紀伊守殿江申上候(朱抹) 様可仕と
奉存候、依之御下ケ之書類三通返上
見込之趣申上候、以上

九月

池田播磨守
石谷因幡守

「(9 錯簡)」

(ヒレ)

「別紙酒井雅樂頭国産木綿
捌方之儀申上候、書面貴様方江御下
二付、申上案并外書類共一覽致
候処、拙者儀何之存寄無之、尤
同家来方拙者方江も書面差出
候処、同様之品二付浮置申候、依之
被下置候書類返却致し候
申十月 因幡守

「(8 錯簡)

別紙酒井雅樂頭国産木綿
捌方之義申上候、書面貴様方江
御下ケ二付、申上案并外書類共
一覽致候処、拙者儀何之存寄
無之、尤同家来方拙者方江も
書面差出候処、同様之品二付浮置
申候、依之被遣候書類返却
致し候
申

「(10)

十月 因幡守

「

(朱書)

『酒井雅樂守家来勝手方

内意申聞候書付三通 大和守』

酒井雅樂守家来
神戸四方之助

雅樂頭領分播州姫路国産

「(11)

木綿之儀、江戸表江相廻し、小網町
壱丁目利右衛門店小嶋屋彦兵衛
并同三町目次兵衛店宮嶋屋政蔵
方二而引受、夫方問屋共家別相對
之上引受為仕候、右は文化七午年
七月町御奉行根岸肥前守様江御届
申上御聞濟二而相廻来候後、追々
取組、尚又文政六未年二至町御奉行
筒井伊賀守様御役所江申上、双方
熟談之上議定書為取替、益
手堅申付、右国産木綿之儀は、
年来領中之もの江多分之手当ヲも
差遣、国益不少儀二御座候付、先年
晴光院様 御入興先後莫大之
物入二御座候得共、領中之もの出精
仕候付、御用途も不差支、且右
国益之力を以

「(12)

晴光院様御賄筋も年来無滞

取続来候義二御座候、然ル処別紙之通、

去ル天保二卯年松平右近将監様方

被仰立御座候節、御勝手御掛り

水野出羽守様・町御奉行榊原

主計頭様江右之趣意申上、

御聞濟二而、右近将監様御方江は

御差留二相成申候、其後天保十

亥年松平三河守様姫路国産

同様之姿二御内願有之候節、

問屋共御受不仕旨申出候付、当家

よりも筒井紀伊守様江前々之

次第申立候処、是又御聞濟二而

三河守様御国産品之内（朱抹）木綿

木綿之義は、家別相對売は

不相成、入札払二可致旨御達二

相成申候、右御両家之外、是迄

諸家方同様之筋御願立有之、

問屋共江御尋之節、不都合之趣

申立御断申来候処、尚又此度

外様方其筋御願立も有之候由、

問屋共申出候、然ル処元方銘々

国産壳体之義、如何類例有之

候共、於一領貪着仕候筋勿論

無之候得共、雅楽頭領分取極

之義、前件之通格別之御取扱ヲ以、

五十年来双方和熟無異議

連綿仕来候処、右様類例も多く

相成候而は、引受候問屋共迷惑も

仕候上、向後産物不捌二も成行

候而は、多年莫大之雜費も

不顧、十分之手当致置候詮も

無之儀二相成、領中衰微二も相及

第一 晴光院様御賄筋

二も眼前差支候様相成可申候間、

無拠此旨奉申上候、別紙之通り

先例も有之候訳柄二御座付、

幾重二も右之趣意厚御含二而、

類例出来不仕（朱書）『候』様、御差図被成下

候様仕度御座候事（朱書）『奉存候、此段各様迄可申上旨雅楽頭申付候、以上』

九月

（朱書）

（朱書）『酒井雅楽頭家来

「九月十五日」

神戸四方之助』

「（16）」

「

「（13）」

「

「（14）」

「

「（15）」

「

書付

天保十亥年四月十四日町御奉行
筒井紀伊守様江左之書付差出
申候

「(17)

雅楽頭領分播州姫路国産木綿
之義、江戸表江相廻し、小網町壺町目
利右衛門店小嶋屋彦兵衛并同三町目
次兵衛店宮嶋屋政蔵方二而引請、
夫より問屋共家別相對之上引受
為仕候、右は年来追々取極、猶又
文政六末年二至、筒井伊賀守様
御役所江申上、双方熟談之上議定
書為取替以後、益手堅申付候、右
国産木綿之義は、年来領中
之もの江多分之手当をも差遣、
国益不少儀二御座候付、先年
喜代姫君様 御入輿先後莫
大之物入二御座候得共、領中之者共
出精仕候付、

「(18)

公辺拝借も不奉願、此節二至候而者、
喜代姫君様御賄筋二も仕置候義二
御座候間、他家類例多相成候而は、
捌方不宜問屋共も迷惑仕、且
領中衰微之基二も相成候（朱抹）『之』儀二
御座候、已二天保二卯年松平右近將監様方
被仰立御座候節も、御勝手御掛り
水野出羽守様・町御奉行榊原主計頭様江も
右之趣意申上、御聞濟二而右近將監様
御方は御差留二相成申候、右之次第二も
御座候間、此度他家二而同例出来仕候ハ、
又々右近將監様御初御願立之（朱粹）御方
御方々様多く相成可申、左候は益
木綿捌方不宜様相成、
喜代姫君様御賄筋二も差支

「

候間、家別引請之儀は、外二類例
出来不仕候様仕度、尤問屋共入札二而
引請候儀は差支無御座候、右之
趣意宜敷御含御取扱被成下候様
仕度御座候事

「(20)

七月九日松平三河守様江町御奉行

御同所様方左之通御達有之候由

書面国産之品、問屋共相糺候処、

木綿之儀は、問屋家別相對売二は

不相成候間、不残行事共方江差出

入札払二致し、其外之品共都而

問屋定法之通取扱、着船之節、

不残問屋共江売捌、洩荷二不相成

候得は差支無之二付、申立候趣承届

候（朱抹）『之』間、夫々及對談差障之筋

無之様問屋共其外諸事申合

取計候様、三次郎店支配人正三郎江

可被申含候

書付

天保二卯年五月廿四日町御奉行榊原
主計頭様江左之書付差出申候

文化七午年根岸肥前守勤役中

申達候、拙者領分播州姫路国産

木綿等江戸表江相廻し来候分、小網町

壱町目利右衛門店小嶋屋彦兵衛并

同三町目次兵衛店宮嶋屋政蔵方

に而為引請、夫々問屋共江相渡為

売捌候、右問屋共之内木綿問屋共

之儀、廿二ヶ年前より追々取組、文政

六末年二至、猶又筒井伊賀守御役所江

申達、双方熟談之上議定書為取替候、

以後益手堅申付、領分之者致出精、

近年漸木綿反数も相増、別而

貧民共渡世之助二相成候儀二有之候、

右は全領分取立之為申付候仕法二而、

内実は種々致手当、年々数万

金之貸金等致し遣、専ら国益而已之

含二而、右二付運上等取立候訳合二毛頭

無之、可成文元付引下ヶ、正路実

意を以永久相続致し候様、幾重二申

付候儀二有之、於問屋共も多年右

之趣意得と相心得益手堅く申談、

追々融通宜方之儀二候得（朱抹）『は』

引受方手広二相成候而は、双方共捌方

差問候趣二付、其後諸方方以相對

談合候儀候而も、家別引受之儀は

堅く相断来候由二候処、此度他より

「（23）」

「（22）」

「（21）」

拙者領分取組之通、問屋共家別二而引請方之儀申談候筋有之由二而、右家別引受之儀難渋

「(24)

申立候処、於御役所も再三利解二被及候由、問屋共方申出候、元より銘々国産壳体之儀、如何様類例在之候共、於一領貪着致筋勿論無之儀二候得共、拙者領分取組之儀ハ、

前々御役所御扱を以、廿余年来双方追々致和熟、全永久国益

「

之為、多年莫大之雜費も不相顧、十分手当も致置候儀二候処、

類例多罷成候而は、第一引受候問

屋共迷惑仕候由二候得（朱抹）『共』（朱書）『は』、向後

産物不捌二も成行候而は、是迄

之手当二も無詮議二相成、小民共、

折角之渡世二も相離、領中

「(25)

困窮二及、手元之儀益差問候

儀二も成行、往末

喜代姫君様御賄筋等も弥以

行届兼可申哉と、不一方致痛心

儀二候、元来拙者勝手向不如意

之上、近年打続重キ御用向

相勤差当リ

「

姫君様 御入輿前

御住居御普請向等、不少物入も

差集候時節、右等之仕法を以領中

之もの一統存入厚致出精、積金

仕法等を以、是迄は拝借金等も

不奉願相凌来候儀二も候処「趣」、何卒

「(26)

此上領中之者困窮二不及様

致し遣度折柄、右問屋共二おゐても

前段難渋之趣意二付、是迄

後入之口二は諸方共堅く相断

来候儀二も候処、此度二至り引受候

得は、是迄相断候向々江も猶更

「

難申披筋も可致出来、旁以

向後之儀迷惑可仕旨申儀二候、

併銘々壳体之儀、固より一領之

得失を以可申出儀二無之、殊更

御役所より取分被及御沙汰候儀

にも候は、勿論申迄も無御座候得共、

但相對之廉を以利解筋之

御扱とも候は、目前一領衰微之

兆二も可相成儀故、無拠此旨趣
申達候、何分二も手前之儀は諸
家方先二熟談相調数十年
相続致し来、他家とは前後
始末之差別も在之訳合、不悪
御勘弁被置候様致度、此段以
使者申達候

酒井雅樂頭家来

五月 庄野慈父左衛門

同年六月二日御勝手御掛り

水野出羽守様江同様之趣、書付

差出置候処、同月廿八日左之

御書付被成御渡候事

書面領分産物売捌方之儀、

松平右近将「監」之方は相止可申段、

同人家来江可相達旨、町奉行

榊原主計頭江相達候間、其段

相心得可申事

申八月廿八日、对馬守殿片山与八郎ヲ以御渡

松平隠岐守家来勝手迄内意申聞候書付

紀伊守

隠岐守領分二而織出候縞木綿

御当地江積廻、其筋問屋共売捌仕度、

此段各様迄御内慮奉伺候、以上

松平隠岐守家来

七月十二日 安東収蔵

下ケ札

下ケ札

書面松平隠岐守御内慮相伺候趣

取調候処、右は領分二而織出候縞木綿

江戸積廻、其筋問屋江売捌度と

之儀、去ル亥年諸家国産売捌

御触之趣江差障候儀も無之候間、

伺之通、同人家来江被仰渡可然奉

存候

申八月 松平式部少輔

松平出雲守

塚越大蔵少輔

勝田次郎

設楽八三郎

福田八郎右衛門

舘市右衛門様

山崎助左衛門

（27）

（28）

（29）

（30）

安藤源五左衛門

此間御渡相成候、松平隠岐守領内
国産売捌之儀、御急之旨、武次を以
被仰渡候間、其御積二而御調出来候ハ、
御手廻し之上、早々御差出可被成候、
此段申進候、已上

九月廿日

酒井雅楽頭家来

神戸四方之助

「(31)」

雅楽頭領分播州姫路国産木綿之儀、

「(32)」

江戸表江相廻し、小網町壺町目利右衛門
店小嶋屋彦兵衛并三町目次兵衛店
宮嶋屋政蔵方二而引受、夫方問屋共
家別相對之上引受為仕候、右は文化
七年七月町御奉行根岸肥前守様江
御届申上御聞濟二而相廻来候後、追々
取組、尚又文政六未年二至、町御奉行筒井
伊賀守様御役所江申上、双方熟談之上
議定書為取替益手堅申付、右国産
木綿之儀は年来領中之者江多分之
手当をも差遣国益不少儀二御座候付、
先年 晴光院様 御入輿先後
莫大之物入二御座候得共、領中之もの出精
仕候付、御用途も不差支、且右国益之
力ヲ以 晴光院様御賄筋も年来
無滞取続来候儀二御座候、然処別紙之
通、去ル天保二卯年松平右近将監様江
被仰立御座候節、御勝手御掛り水野「
出羽守様町御奉行榊原主計頭様江、
右之趣意申上御聞濟二而、右近将監様
御方江は御差留二相成申候、其後天保
十亥年松平三河守様、姫路国産
同様之姿二御内願有之候節、問屋共
御受不仕候旨申出候付、当方方も筒井
紀伊守様江前々之次第申立候処、
是又御聞濟二而、三河守様御国産
品之内木綿之儀は、家別相對売は
不相成、入札払二可致旨、御達二相成申候、
右御両家之外、是迄諸家方同様之
筋御願立有之、問屋共江御尋之節
不都合之趣申立御断申来候処、尚又此度
外様方其筋御願立も有之候由、問屋共

「(34)」

「(33)」

申出候、然処元方銘々国産壳体之儀、如何様類例有之候共、於一領貪着仕候筋勿論無之候得共、雅楽頭領分取組之儀、前件之通格別之御取扱ヲ以、五十年來双方和熟無異議連綿仕來候処、右様類例も多く相成候而は、引受候問屋共迷惑も仕候上、向後産物不捌二も成行候而は、多年莫大之雜費も不顧、十分之手当致置候詮も無之儀二相成、領中衰微二も相及、第一
晴光院様御賄筋二も眼前差支候様相成可申候間、無拠此旨趣奉申上候、別紙之通先例も有之候
訳柄二御座候付、幾重二も右之趣意厚御含二而、類例出來不仕候様御差図被成下候様仕度御座候事、
九月」

「(36)

書付

天保二卯年五月廿四日、町御奉行榊原主計頭様江左之書付差出申候、

「(37)

文化七午年根岸肥前守勤役中
申達候、拙者領分播州姫路国産木綿等江戸表江相廻來候分、小網町壱町目利右衛門店小島屋彦兵衛并同三町目次兵衛店宮島屋政藏方二而為引受、夫々問屋共江相渡為売捌候、右問屋共之内木綿問屋共之儀、貳拾貳年前より追々取組、文政六未年二至、猶又筒井伊賀守御役所江申達、双方熟談之上議定書為取替候、以後益手堅申付領分之者致出精、近年漸木綿反数二相増、別而貧民共渡世之助二相成候儀二有之候、右は全領分取立之為申付候仕法に而、内実は種々致手当年々数万余之貸金等致遣、専ら国益而已之含二而、右二付運上等取立候訳合二毛頭無之、可成文元付引下ケ、正路実意を以、永久相続致候様嚴重二申付候儀二有之、於問屋共も多年右之趣意得と相心得、益手堅申談、追々融通宜方之儀二候得は、此上引受方手広二相成候而は、双方とも

「(38)

捌方差問候趣二付、其後諸方より以相對
談合候儀候而も、家別引受之義は堅く
相断来候由二候処、此度他より拙者領分

┌ (39)

取組之通、問屋共家別二而引受方之義、
申談候筋有之由二而、右家別引受之義
難渋申立候処、於御役所も再三利解二
被及候由問屋共より申出候、元より銘々
国産壳体之儀、如何様類例有之候とも
於一領貪着致筋勿論無之儀二候得共、
拙者領分取組之儀は、前々御役所御扱
を以、貳拾余年来双方追々致和熟、
全永久国益之為、多年莫大之雜費も
不相顧、十分手当も致置候義二候処、類例多
罷成候而は、第一引受候問屋共迷惑仕候由二
候得共、向後産物不捌二も成行候而は、是迄
之手当二も無詮議二相成、小民共折角之
渡世二も相離領中困窮二及、手元之
儀益差問候儀二も成行、往末
喜代姫君様御賄筋等も弥以行届兼
可申哉と、不一方致心痛儀二候、元来拙者
勝手向不如意之上、近年打続重キ御用向
相勤、差当

┌

姫君様 御入輿前

御住居御普請向等不少物入も差集候
時節、右等之仕法を以、領中之もの一統存入
厚致出精、積金仕法等を以是迄は
拝借金等も不奉願相凌来候儀二も候故、
何卒此上領中之者困窮二不及様致遣

┌ (41)

度、折柄右問屋共二おゐても、前段難渋之
趣意二付、是迄後入之口々は諸方共
堅相断来候儀二も候処、此度二至引受
候而は、是迄相断候向々江も、猶更難申披
筋も可致出来、旁以向後之義迷惑可仕旨
申儀二候、併銘々壳体之義固より一領之
得失を以可申出儀二無之、殊更御役所より
取分被及御沙汰候義二も候は、勿論申迄も無
御座候得共、但相對之廉を以利解筋之
御扱二も候は、目前一領衰微之兆二も可相成義故、
無拠此旨趣申達候、何分二も手前之義は
諸家より先々熟談相調数十年相続
致来、他家とは前後始末之差別も有之
訳合、不惡御勘弁被置候様致度、此段
以使者申達候

┌ (42)

五月

酒井雅楽頭家来

同年六月二日、御勝手御掛水野出羽守様江」

同様之趣書付差出置候処、同月廿八日

左之御書付被成御渡候事

書面領分産物売捌方之儀、松平

右近将監之方は相止可申段、同人

家来江可相達旨、町奉行榊原主計頭江

相達候間、其段相心得可申事

「 (43)

書付

天保十亥年四月十四日、町御奉行

筒井紀伊守様江左之書付差出申候、

雅樂頭領分播州姫路国産

木綿之儀、江戸表江相廻し、小網町

壱町目利右衛門店小嶋屋彦兵衛并

同三町目次兵衛店宮嶋屋政蔵方二而

引受、夫より問屋共家別相對之上

引請為仕、右は年来追々取組

猶又文政六末年二至、筒井伊賀守様

御役所江申上、双方熟談之上議定

書為取替、以後益手堅申付候、右

国産木綿之儀は、年来領中之

者江多分之手当をも差遣、国益

不少儀二御座候付、先年

喜代姫君様 御入輿先後

莫大之物入二御座候得共、領中之

者共出精仕候付、

公辺拝借も不奉願、此節二至候而は、

喜代姫君様御賄筋二も仕置候儀二

御座候間、他家類例多相成候而は

捌方不宜、問屋共も迷惑仕、且領中

衰微之基二も相成候之儀二御座候、

已二天保二卯年、松平右近将監様より

被仰立御座候節も、御勝手御懸水野

出羽守様・町御奉行榊原主計頭様江も、

右之趣意申上御聞濟二而、右近将監様

御方は御差留二相成申候、右之次第二も

御座候間、此度他家二而同例出来

仕候は、又々右近将監様御初御願立

之御方々様多く相成可申、左候は、

益木綿捌方不宜様相成、

喜代姫君様御賄筋二も差支候間、

「

「 (46)

「 (45)

「

「 (44)

「

家別引請之儀は、外二類例出来
不仕候様仕度、尤問屋共入札二而引受
候儀は差支無御座候、右之趣意
宜敷御含御取扱被成下候様仕度、
御座候事

七月九日松平三河守様江町御奉行

「(47)」

御同所様より左之通御達有之候由
書面国産之品問屋共相糺候処、
木綿之儀は問屋家別相對売二は
不相成候間、不残行事共方江差出
入札払二致し、其外之品共都而問屋
定法之通取扱、着船之節不残問屋共江
売捌、洩荷二不相成候得は差支
無之二付、申立候趣承届候之間、夫々
及対談、差障之筋無之様、問屋共
其外諸事申合取計候様、三次郎
店支配人正三郎江可被申含候

「(48)」

(朱書)

「申十月十五日、紀伊守殿江返上」

松平隠岐守家来勝手迄内意申聞候書付
紀伊守

隠岐守領分二而織出候縞木綿
御当地江積廻、其筋問屋共江売捌

「(49)」

仕度、此段右様迄御内慮奉伺候、以上

松平隠岐守家来

七月十二日

安東收蔵

(下ケ札)

下ケ札

書面松平隠岐守御内慮相伺候趣

取調候処、右は領分二而織出候縞

木綿江戸積廻し、其筋問屋江売捌度と

之儀、去ル亥年諸家国産売捌

御触之趣江差障候義も無之候間、

伺之通同人家来江被仰渡可然奉存候

申八月

「(50)」

松平式部少輔

松平出雲守

塚越大蔵少輔

勝田次郎

設楽八三郎

福田八郎左衛門

〔付札〕

「播磨守殿江返却もの」

〔朱書〕

「申十月十五日北角十郎兵衛を以上ル」

書面松平隠岐守御内慮相伺候、同領
国産之嶋木綿、御当地其筋問屋江
売捌方之儀、町年寄江申渡為取調
候処、素人売二無之、前々仕来之通、
其筋問屋江入札相成候儀二候得は
差障候筋無御座、家別売等二相成
候而は相庭二も差響差支候旨

「(51)」

申立且此度大和守殿方外国産「候間」
木綿類売捌方之儀二付御尋有之
前々方之仕来取調申上候趣も有之
弗右国産之嶋木綿は、其筋
問屋共江入札二取計候様、隠岐守
家来江被仰渡可然奉存候

申九月 池田播磨守

石谷因幡守

「(53)」

書面松平隠岐守御内慮相伺候同領
国産之嶋木綿、御当地其筋問屋江
売捌方之義、町年寄江申渡為取調候
処、素人売二無之、前々仕来之通、其
筋問屋江入札相成候義二候得は、
差障候筋無御座、家別売等二相成候
而は、相庭二も差響差支候旨申立、
且此度大和守殿方外国産木綿類売捌
方之儀二付御尋有之、前々方之仕来
取調申上候趣も有之、旁右国産之
嶋木綿者其筋問屋共江入札〔朱書〕「札」二取計
候様、隠岐守家来江被仰渡可然奉存候

「(54)」

〔朱書〕

「申八月廿八日、対馬守殿片山与八郎を以御渡」

「松平隠岐守家来勝手迄内意申聞候書付

紀伊守

隠岐守領分二而織出候縞木綿、御当地江
積廻、其筋問屋共江売捌仕度、此段
右様迄御内慮奉伺候、以上

「(55)」

下ケ札

七月十二日

松平隠岐守家来

安東収蔵

「

下ケ札

書面松平隠岐守御内慮相伺候趣取調
候処、右は領分二而織出候縞木綿江戸
積廻、其筋問屋江売捌度との儀、去ル
亥年諸家国産売捌御触之趣江
差障り候儀も無之候間、伺之通同人
家来江被仰渡可然奉存候

申八月

松平式部少輔
松平出雲守
堀越大蔵少輔
勝田次郎
設楽八三郎
福田八郎左衛門

└ (56)

松平隠岐守殿国産縞木綿其筋
問屋売捌之儀取調申上候書付

館市右衛門

松平隠岐守領分売出縞木綿、御当地江
積廻、其筋問屋共江売捌仕度旨、

└ (57)

同家来安東収蔵御内慮伺書写

御渡被成取調被仰渡候間、左二申上候

大伝馬町組木綿問屋行事

大伝馬町壺町目

卯兵衛地借武右衛門

勢州住宅二付店支配人

一

和七

白子組木綿問屋行事

本石町四町目

家持三郎兵衛京都

住宅二付店支配人

治兵衛

右取扱候木綿之儀は、国々買次職
之もの有之、融通宜渡世仕候間、通例
之如く、右隠岐守様御国産縞木綿
御当地江御積廻、素人売無之兩組
木綿問屋二限入札払相成候得は、差障
候儀無御座候

└ (58)

但、姫路御国産木綿之儀、問屋家別
直引合前々仕来二付、別格二有之、
是迄外様二は無之候、家別売二而は
国々木綿買次職之もの取引等（間脱力）敷、
自今外様二而右様之御取扱、別而

└

上方筋御領国之儀は、自然大坂出
荷物二も相響、同所買次職之もの共
難渋至極仕候旨申之候

「(59)

右取調候処、書面之通御座候、今般
隠岐守殿国産綿木綿、江戸廻素人
売無之、両組木綿問屋江入札払相成
候儀二御座候得は、差障候筋無御座候、
家別売取計二而は差支、其筋問屋共
苦情申立候、依之被成御渡候伺書写返上
仕、此段申上候、以上

申九月

館市右衛門

「

〔大和守殿

酒井雅楽頭家来方御勝手江差出候
領分木綿売捌方之義二付申上見込之趣申上候書付

「(60)

別紙酒井雅楽頭家来方御勝手へ差出候
書類一覽仕候処、同領国産之木綿類、
從來問屋共家別売仕来候得共、此上
諸家同様之取扱相成候而は、品々差支
候筋も有之、殊二諸家二而同様之取扱は不相
成事二取極候先例も御座候二付、此上外々江不
押移様仕度、此段御厚含被成下度旨二
有之、右申立之趣無余儀筋二も被思召、見込
をも一応可申上旨被仰渡候、一体諸家国産
売捌方之義は、奉行所へ届済之上、於問屋共
故障無之候得は、其品二寄家別売并

「

「(61)

入札払同様共都合次第二売捌方仕、必
入札払二無之候而は不相成と之規則は無之
候処、木綿類二限り、雅楽頭領産姫路木綿
之外は、家別売は不相成様前々方之仕来
二而、数年之間済来候義二有之、既二雅楽頭
家来方申上候書面之通、天保度松平右近将監・
松平三河守両家方同様之振合を以、国産
売捌度旨申立候得共、右近将監之方は
相止可申段御下知有之、三河守方は木綿類
入札払二可致旨、奉行所方申達候義二而、且市
中間屋共おゐても木綿類二限
中間屋共おゐても(朱書)『古来方之取極相崩、自然相庭二も差響候故』木綿類
二限家別売之

「

儀は彼は苦情申立、素直二は引受方不
仕哉二、兼々承知仕居候義二御座候、然処此程

紀伊守殿江松平隠岐守方領内国産之島
木綿類市中問屋共売捌度旨申上、右
書面御下ケ有之、当時取調中二御座候間、
右等之義を及承、雅樂頭方書面差上候
儀と相見、尤隠岐守書面之内二、家別売・
入札払執之方二而売捌方仕候と申義は
無之、只其筋問屋江売捌度と計り御座
候間、此上問屋共取調候ハ、隠岐守領産之
木綿も、家別売之儀は極而故障申立、相整
申間敷、先例は有之候得共、売捌方御差止
相成候も不穩哉二付、天保度之松平三河守へ
相達候振合二准シ、入札払之積御下知御座
候ハ、敢而雅樂頭方二而差障候筋ハ有之
間敷候間、其段紀伊守殿江申上候様可仕と
奉存候、依之、御下ケ之書類三通返上、見込之
趣申上候、以上
九月 日
池田播磨守

〔朱書〕
『西六月廿三日、淳右衛門を以御渡』
備中守殿江相談候もの

拙者儀何之存寄
無御座候
西六月 備中守

〔大和守殿〕
国産木綿類売捌方其筋問屋共江
申渡候儀申上候書付
石谷因幡守
黒川備中守

酒井雅樂頭領分産物白木綿類、
其筋問屋共江家別売之仕法同様、
追々他領国産之木綿類家別売
相増候而ハ、買下直段糴上ケ、自然
相庭合二も差響可申哉二付、向後
白木綿類ハ、永年仕来候儀二付、
雅樂頭方二限取捌、其余諸家
国産之品は家別払難相成旨、問屋
共江申渡置候様可致、且松平隠岐守
領分産物縞木綿は、品柄も違ひ
候二付、家別払御聞置相成候得共、
以来は国産木綿類取捌方、右

同様之仕法不相殖様相心得可取扱旨、御書取を以被仰渡候趣、且御別紙松平

「(65)」

隠岐守、酒井雅楽頭江御挨拶書
式通御下ケ二付、一覽仕奉承知候、其段
因幡守御役所江木綿問屋共呼出
申渡候様可仕候、依之御書付三通
返上仕、此段申上候、以上

西六月

石谷因幡守

黒川備中守

市中取締掛方為申渡候手形案

大伝馬町組

木綿問屋行事

白子組

木綿問屋行事

酒井雅楽頭領分産物白木綿類

「(66)」

其筋問屋共江家別売之仕法

同様、追々他領国産之木綿類

家別売相増候而ハ、買下直段糶上、

自然相庭合二も差響可申哉二付、

向後白木綿類ハ永年仕来候儀二付、

雅楽頭方二限取捌、其余諸家国産之

品者は家別弘難相成候間、其旨可存

但、松平隠岐守領分産物縞木綿ハ

品柄も違ひ候二付、家別弘聞届

候得共、以来は国産木綿類取捌方、

右同様之仕法不相殖儀と可心得

右之通被仰渡奉畏候、仍如件

月 日

「(67)」

(朱書)

『西六月廿二日』

(朱書)

『大和守殿、片山与八郎を以御渡』

「町奉行江

覚

酒井雅楽頭領分産物白木綿類、

其筋問屋共江家別弘之仕法

同様、追々他領国産之木綿類家別

売相増候而ハ、買下直段糶上、自然

相庭合二も差響可申哉二付、向後

白木綿類ハ永年仕来候儀二付、

雅楽頭方二限取捌、其余諸家国産之

「(68)」

品は家別払難相成旨、問屋共江
申渡置候様可被致候、且松平隠岐守
領分産物縞木綿は、品柄も違候二付、
家別払承置候得共、以来八国産木綿類
取捌方、右同様之仕法不相殖様相心得
可被取扱候事

「(69)

(朱書)

『酉六月廿二日』

大和守

覚

(朱書)「本ノマヽ」

松平隠岐守領分之縞(木綿、脱力)家別払之儀
内意

「(70)

挨拶

書面領分産物之縞木綿、其筋
問屋共江入札払二無之、家別払
売捌之趣、酒井雅楽頭方二而永年
家別払仕来候白木綿類とは、品柄も
違ひ差支之筋も不相聞候間承置候、
且向後白木綿類は雅楽頭方二限
取捌、其余諸家国産之品者家別払
難相成旨、町奉行所二おゐて問屋共迄
申渡候様相達候間、右白木綿類二不
相混様可被取計候事

「(71)

大和守

覚

酒井雅楽頭領分之白木綿家別
払類例出来不致様内意

「(72)

挨拶

書面内意之趣、向後白木綿類其筋
問屋共江家別払之儀は、永年
仕来候儀二付、雅楽頭方二限取捌、
其余諸家国産之品は家別払
難相成旨、町奉行所二おゐて、問屋共江
申渡候様相達候、且今般松平隠岐守
領分産物之縞木綿ハ品柄も違ひ

「

候間、問屋家別弘之儀承置候、尤
白木綿類二不相混様可取計旨、隱岐守
方江申達候間、其段相心得候様可仕
候事

【第二了】

┐
(73)
└

【第三】

①万延元申年十二月 松平佐渡頭領分出産之延鉄売捌方之義調
(扉、小口見出し)

「

(朱書)

『万延元申年十二月』

松平佐渡守家来小沼祖左衛門

主人国産売捌之儀二付調

(朱書)

「書」

福沢弥一兵衛

」

「(7)

(朱書)

『申十二月廿三日、水谷武次を以相渡』

松平佐渡守家来

小沼祖左衛門

「(8)

佐渡守領分出雲国能義郡・飯石郡
両郡之内従旧来鎌鍛冶二而出来仕候
延鉄

御当地江相廻、兼而出入之岩井町上納地二
罷在候紀伊国屋甚兵衛と申もの引受、
其筋問屋共之入札を以為売捌度
奉存候、此段奉伺候、以上

松平佐渡守家来

十二月廿三日

小沼祖左衛門

「

松平佐渡守領分出産之延鉄御当地江相廻し

其筋問屋入札払之儀取調申上候書付

館市右衛門

「(9)

松平佐渡守領分出雲国能義郡・飯石郡
両郡之内旧来鎌鍛冶二而出来候延鉄
御当地江相廻し、兼而出入之町人岩井町
上納地二罷在候紀伊国屋甚兵衛と申もの
引受、其筋問屋共之入札ヲ以為売捌度
旨、佐渡守家来小沼祖左衛門伺書
御下ヶ被成取調被仰渡候間、左二申上候

釘鉄銅物問屋行事

宇田川町

林兵衛地借

与兵衛煩二付

「

代 新助

外舌人

右は前書佐渡守殿御領分出雲国能義郡
飯石郡兩郡之内二而、旧來出產之延鉄

御当地江御廻し引受人岩井町上納地紀伊国屋

甚兵衛取扱、私共問屋仲間限入札払

相成候得は、差障候義無御座候旨申之候、

右之通二付、前書甚兵衛ヲも相尋候處、

兼而佐渡守殿屋鋪江出仕、此度右領分

書面兩郡之内鎌鍛冶二而出來候

延鉄御当地江被相廻、私引受素人売不仕、

其筋問屋共江入札払取扱候義差支無之旨、

町役人差添申立之候

但右甚兵衛住宅町銘之義、柳原ヲ冠リ柳原

岩井町上納地と相唱、并甚兵衛義家主

相勤候旨、同人并町役人申之候

右取調候處、書面之通御座候間、伺之趣

其筋釘鉄銅物問屋限入札払相成

素人売無之、甚兵衛取扱候得は差障

候義無御座候、右御聞届相成候ハ、

其旨為心得右問屋共江申渡候様

仕度奉存候、依之、御渡被成候佐渡守

家來伺書返上仕、此段申上候、以上

西二月 館市右衛門

ヒレ付

書面館市右衛門様伺申上候通、差支之筋も

無御座候間、松平佐渡守家來江其段

被仰渡可然哉二奉存候

西二月 市中取締掛

〔 12 〕

（朱書）

『西二月廿三日 ヲ以上ル』

御付札案

書面甚兵衛方素人売不致、其筋

問屋限入札を以為売捌候儀は、差障無之

候事

書面松平佐渡守国産延鉄入札

払之儀、御向方類役申上候通被仰渡

可然哉二奉存候

北

西二月 市中取締掛

〔 13 〕

（朱書）

『西二月廿七日、小沼祖左衛門病氣二付

名代永田三千太之助江達之
附札

書面甚兵衛方素人売不致、
其筋問屋限入札を以為売捌
候儀は、差障無之候事

┌
(14)

②万延元申年十二月 尾張殿国産洪扇問屋限売捌候儀二付調
(扉、小口見出し)

「
(朱書)

『万延元申年十二月』

尾張殿国産洪扇問屋限

売払候儀二付調

(朱書)

『貳』 安藤源五左衛門」

「
(15)

(朱書)

『申十二月廿日武治ヲ以御渡、尤向方江差出候儀二者候得共、

月番もの之儀二付、此方二而取調候様同人ヲ以被仰渡候事』

「石谷因幡守殿

尾張殿御城附

尾州国産之洪扇御当地江相廻、用達

町人四ッ谷塩町五人組持居武蔵屋

勝五郎・尾張町壺町目相模屋

富五郎・新革屋町伊勢屋金三郎へ

取扱申付、尤素人売ハ不為致、問屋二
限り為売払候積二有之候、此段御承知
被置候様致し度候事

十二月

書面尾州国産洪扇之儀、四谷

塩町五人組持居勝五郎外二人取扱被

申付候共、素人売ハ不為致、問屋土限為

売捌候義二候ハ、差支之筋無之候、右ハ

因幡守方へ御懸合二候得は、拙者方月番

中之義二付、此段為御挨拶候

西十一月

黒川備中守

(朱書)

『酉二月七日差出ス』

尾州御国産二洪扇御当地江相廻、其筋

問屋御払之儀、取調申上候書付

館市右衛門

尾州国産之洪扇御当地江相廻し、

用達町人四谷塩町五人組持居

武蔵屋勝五郎・尾張町壺町目相模屋

富五郎・新革屋町伊勢屋金三郎江

取扱申付、尤素人売ハ不為致

問屋二限為売捌候積二有之候、此段

「
(18)

「
(16)

「

「
(17)

「

御承知被置候様致し度事

申十二月

右尾張屋御城附書面御下々被成
取調被仰渡候間、左二申上候

通町組

内店組小間物問屋行事

通油町家持

炭屋喜右衛門京都

住宅二付店支配人

善兵衛

外傭人

通町組之内

丸合組小間物問屋行事

通油町武右衛門地借

炭屋彦兵衛代

徳兵衛

外傭人

右は、尾州洪扇之儀は名古屋扇と
唱、是迄私共両組二而元方仕入

取扱来候二付、此度御直廻し相成、

前書名前之もの取扱、素人

直売は無之、両組仲間江御弘二

相成候得は、差障候儀無之旨申之候

右之通有之、尤前書用達町人四谷

塩町勝五郎外式人相尋候処、兼而

尾州御出入仕、御屋敷方も御沙汰有之

相心得、右取扱故障之義無御座候旨

申立、夫々於町内も差障候儀無

御座候段、町役人共申之候間、御城附

書面之趣、御聞届被成下候而可然哉、

御挨拶相済候ハ、其旨為心得問屋共江

申渡置候様仕度奉存候、依之御渡

被成候書付返上仕、此段申上候、以上

酉二月

館市右衛門

└

└ (19)

└

└ (20)

└

└ (21)

③文久元酉年二月 松平因幡守領分国産品売捌方之義調
(扉、小口見出し)

「
(朱書)

『文久元酉年二月』

松平因幡守領分国産品

売捌方之儀二付調

(朱書)

『三』

安藤源五左衛門」

「(22)

(朱書)

『酉二月二日

大和守殿、片山与八郎を以御渡』

松平因幡守家来勝手より

内意申聞候書付

大和守

因幡守様御領分二而織出候、花
色絹并縞太織其外大豆・小豆・

「(23)

漆・紙・炭煙草之品々、御当地江積
廻、其筋問屋共江被成御売捌度思召候、
不苦儀二可然御座哉、此段各様迄
御内意奉窺候様被仰付候、以上

松平因幡守様御家来

九月六日

竹中十左衛門

「

書面松平因幡守御内慮相伺候趣
取調候処、右は国産之花色絹并縞太織
其外大豆・小豆・漆・紙・炭煙草、右
品々江戸積廻、其筋問屋江売捌度
と之義、去ル亥年諸家国産売捌
御触之趣江差障候義も無之候得共、
一応町奉行江も御下ケ之上、御差図
御座候方可然奉存候

「(24)

酉正月

松平出雲守

小笠原長門守

竹内下野守

塚越大蔵少輔

設楽八三郎

勝田八郎右衛門

高橋平作

立田禄助

「

(朱書)

『西三月より、本紙江下ケ札致し
折右衛門ヲ以返』

書面松平因幡守御内慮相伺候、
知行国産之花色絹・縞太織・大豆
小豆・漆・紙・墨・多葉粉御当地江
積廻し売捌度と之儀、町年寄江
申渡為取調候処、右品之何連も
其筋問屋共江入札払相成候得は、
差支候筋無之旨申立候間、右之趣
因幡守家来江被仰渡可然奉存候

西三月

池田播磨守
石谷因幡守

松平因幡守殿国産御当地江相廻し、
其筋問屋払之儀、取調申上候書付

館市右衛門

松平因幡守国産之花色絹并
縞太織其外大豆・小豆・漆・紙
炭・煙草右品々江戸積廻し、其筋
問屋江売捌度旨、御内慮奉伺候
書付写、御勘定方下ケ札付御下ケ
被成取調可申上旨被仰渡候

此段国所認無之候得共、右は
松平因幡守殿当時大番頭御勤
在所下総国香取郡飯笹国産
之心得を以、夫々問屋共取調、左二
申上候

一、花色絹
一、縞太織

右は今般御当地江御積廻し
素人直売不仕、呉服問屋共江
入札払相成候得は、差障候儀
無之

一、大豆
一、小豆

右前同断素人直売不仕、関東
米穀三組問屋地廻米穀問屋
米仲買江入札払相成候得は、
差障候儀無之

一、漆

右前同断、素人直売不仕、漆
問屋共江入札払相成候得者、差障
無之

┌ (25)

┌ (26)

┌

┌ (27)

┌

┌ (28)

一、紙

右前同断、素人直売不仕、紙問屋共江入札払相成候得は、差障候儀無之

一、炭

右前同断、素人直売不仕、川辺炭薪問屋共江入札払相成候得ハ、差障候儀無之

一、煙草

右前同断、素人直売不仕、堀留組奥表荒物問屋之内煙草

渡世人共江入札払相成候得ハ、差障候儀無之

右之通夫々問屋行事共申立候、則

御渡被成候書付写返上仕、此段申上候、以上

西三月

館市右衛門

(朱書)

『西三月晦日

西三月晦日

池田播磨守

一覽仕候

石谷因幡守

大和守殿、恩田友之助承付候様御渡、承付致し、翌月朔日直二返上』

大和守

松平因幡守

因幡守様御領分二而織立候花色絹并
縞太織、其外大豆・小豆・漆・紙炭・煙草
之品々御当地江積込、其筋問屋共二被成
御売捌度思召候、不苦儀二可有御座哉、
此段各様迄

御内慮奉伺候様被仰付候、以上

松平因幡守様御家来

九月六日

竹中十左衛門

右挨拶

覚

内意之趣不苦候、尤其筋問屋共江
入札払二可仕候事

(朱書)

『〇』松平出雲守其外方申上、下ケ札前

同文言二付略之

(朱書)

『△』両御奉行方申上、下ケ札前同文言二付

略之

〔朱抹〕

〔31〕

〔御書面御覚書之趣、因幡守
家来江被仰渡候段奉承知候

〔朱書〕『止方不用』

酉三月晦日 池田播磨守

石谷因幡守

┌

〔朱書〕

〔酉三月廿五日、御右筆

方受取〕

覚

松平因幡守領分ニ而織立候花色絹
并縞太織其外大豆・小豆・紙其外
問屋共江売捌方之義書面一通、
右之書面、此節御下々有無之事

三月

┌ (32)

┌

④文久元酉年四月 紀伊殿国産江戸問屋口銭相除度旨御城付方懸合調
(扉、小口見出し)

「
(朱書)

『文久元酉年四月』

紀伊殿

御城附方

国産物江戸問屋口銭相除度旨

掛合有之候付調

(朱書)

稲沢弥一兵衛

『四』

「
(33)

(朱書)

『未五月十九日武治を以御渡』

池田播磨守様

寺内藤次郎

以手紙致啓上候、薄暑之節御座候処、
弥御安全被成御入玆重御儀二奉存候、
然ハ別紙之趣可及御談旨、其筋役人共
申聞候間、右書通差出申候、厚御取扱
有之様致度候、依之、如此御座候、以上

五月十九日

「

「
(34)

紀伊殿

「池田播磨守殿江

御城

紀州海士郡在々百姓共作間稼二
宝永之頃方塗物・蠟燭・傘其外
出来之品々、此表船積問屋まで
送り越、御府内并近在商人共江
聊充売捌渡世致させ、收納之一助二
相成候処、去ル卯年諸株再興以來
近郷江商ひ候品は、都而問屋口銭
金高二三分五厘充可差出旨、左之
もの共申聞候付、無抛其節方口銭
差出商ひ候得共、近年諸物元仕込
高直難引合趣二而、次第二産物
出劣り二相成、百姓共難渋、自然
收納江も差響心配被致候、右は元來
田畑少作間稼二聊充出来之品を
取集送り越候事二而、至而細き品
に付、問屋送り等取計候而は難引合、
無余儀種々働を以近在江二も売捌

「
(36)

漸商ひ二相成候事候処、右之通段々
掛り物多相成候而は、弥難引合、
此上出劣り二可相成、全国産品二而
纔之儀二付、右問屋口錢相除候様
致度、此段厚御申見させ、問屋共江
可然御申渡有之様致度、訳而可及
御談旨、役人共申候

未五月

問屋仲間年行事

室町三町目

木屋

九兵衛

小網町壱町目

大坂屋

茂八

村松町

三河屋

仁兵衛

右之通

書面御領分百姓共塗もの其外
御府内江積廻、且近在商人共江売
捌候と之儀は、先達而申進候通口錢
減少可致旨申立候二付、其段御挨拶
およひ候処、一兩年口錢減少之処二而
可立斷「行」見留無之、御收納方江差響
候訳を以、猶御申越之趣も有之候間、
其筋問屋共呼出、再々応申諭
候処、別紙之通夫々承伏いたし候旨、
書面差出し候二付、差遣し申候間、右之趣
二而御申聞候様いたし度存候事
酉六月 黒川備中守

(朱書)

「天保十亥年」

町奉行衆
御勘定奉行衆

紀伊殿
御城附

紀伊殿勢州領分二而作立候菜種
并絞立候水油、此表江積下シ屋形
入用二取計を遣ひ、残不用之分は
油問屋共江売捌せ申度段、天保
二卯年六月申達候処、右遣ひ残
不用之分は、水油寄所江差出

「(39)」

「(38)」

「(37)」

候様との御事二付、取扱振彼是
及評議候処、雜費等相懸取扱候
領分油屋共難渋之筋も有之、

取調中、当時油会所々（朱書）『者』御引払二
相成候趣二付、卯年申達候通

勢州白子湊方国船ヲ以積下シ、

浜町蔵屋敷江水上ヶ之上、屋形

入用二取計遣ひ、残不用之分は

水油問屋共江売捌セ申度、

若船間二而差支之節は、右於

場所順用買入をも申付度候、

此段申達候様役人共申候

五月

（朱書）

『弘化四未年四月廿日』

尾張殿
御城附
「鍋嶋内匠頭殿

国産物類之内水油之儀、是迄蛎殻町蔵屋敷江
積下り、油屋共江相渡来候処、差定り候ヶ所而已江

相渡候而は不模（力）通二付、右蔵屋敷おゐて入札

払二取計候儀も可有之候、右は海上等二有之分

致入札候訳二は尤無之、着船之分入札払取計

候儀二候処、右入札二付而は油屋共品二寄人数

多罷出候儀も可有之哉二付、此段御届申達置

候様、其筋役人共申候

但、本文水油之儀一ヶ月九拾樽程宛積下

入札払等二致し候積二有之候事

未四月

紀州海士郡出稼之もの問屋口銭
御掛合之儀取調申上候書付

館市右衛門

紀州海士郡在々百姓共、作間稼二
宝永之頃方塗物・蠟燭・傘其外

出来之品々、此表船積問屋迄送越、

御府内并近在商人共聊宛売捌

渡世為致、收納之筋二相成候処、去ル卯年

諸株再興以来、近郷二商ひ候品は

都而問屋口銭金高二三分五厘ツ、可

差出旨申聞候付、無拋其節方口錢
 差出商ひ候得共、近年諸向元仕入
 高直難引合趣二而、次第二產物出劣り二
 相成、百姓共難渋、自然收納江二差響
 心配被致候、右は元来田畑少なく
 作間二稼聊ツ、出来之品を取集
 送越候事二而、問屋送等取計候而は
 難引合、此上出劣り二可相成、全国産
 品二而わつか之儀二付、右問屋口錢相除
 候様致し度、此段厚御申見させ、
 問屋共江可然御申渡有之度、訳而
 可及御談旨

問屋年行事

室町三丁目

木屋

九兵衛

小網町壱丁目

大坂屋

茂八

村松町

三河屋

仁兵衛

右紀伊殿御城附御掛合書御下ケ
 被成、取調被仰渡候間、夫々問屋行事共
 呼出相調候處、左之通御座候

下り蠟燭問屋

室町貳丁目

家持九兵衛代

平右衛門

一蠟燭

右組行事

本町四丁目

家持孫左衛門

京都住宅二付

店支配人

彦七代

徳三郎

右下り蠟燭之儀、古来方私共問屋
 家業取締宜渡世仕候處、天保度

一旦問屋御停止被仰出、其砌方専ラ
 紀州出稼之もの荷物持下り、御府内
 并近国近在江売捌候趣、嘉永四亥年
 問屋再興被仰付候間、古復仕問屋江
 可使所、兎角直売不相止、同七寅年
 六月江戸内引合、奥川筋船積屋小舟町

下ケ札

「(46)」

「(45)」

「(44)」

寺町目小左衛門外式人方江、関東筋打越
通荷物入津致し、当御番所江出訴仕
御吟味相成、追々引合之上は被 召出、

荷物之内紀州御定用は差戻、其余者
問屋入札払二仕、右小左衛門外式人江積
送候荷物荷主共儀も出府之上、御当地
打越荷物差下し候段、心得違之旨

相詫、荷物は又入札払二仕、出入熟談
仕、同年八月御吟味下ヶ相願、相手夫々
町人紀州海士郡浜中村同州有田郡

湯浅村百姓都合三人代兼浜中村

百姓平兵衛一同濟口証文差上申候、其後
出稼之者共追々及示談、皆無近在」

送相止候而者難渋之趣相歎、已後
近国近在江差送候分、下り蠟燭問屋

荷物相改打越不相成様、金高三歩
五厘口錢可差出対談二候所、彼は苦情
申聞、中々歩合通二者差出不申、専ラ

懸合候儀二御座候、御国方持下りと申
もの之、右は紀州出稼之者売品二

有之、商人共同士取引之儀は商法
御聞濟奉願候旨、申之候

塗物問屋行事

村松町

家持仁兵衛代

一塗物

忠兵衛

伊勢町

清兵衛地借

亀五郎

右塗物之儀、古来方私共問屋家業

取締宜渡世仕候所、前書同断天保度

一旦問屋御停止二付相乱レ、紀州出稼之

もの直売仕候哉、嘉永四亥年問屋

再興被仰付候間古復仕、近在送更二

差止可申処、左候而は右出稼之もの

手狭窮屈之由相歎、問屋趣意として、

口錢三步五厘可差出示談相背、其御筋江

無口錢相願候而は、同屋渡世立行不申候、

且是迄迎も苦情申シ中々対談通

歩合二は差出不申、当時専ラ懸合

中二御座候、前同様商人同士取引之儀ハ、

商法御聞濟奉願候旨申之候

通町組小間物問屋之内

丸合組傘取扱候者行事

└

└ (47)

└ (48)

└

└ (49)

└

本町四町目

家持庄右衛門江州

住宅二付店支配人

庄助煩二付代

一下り傘

藤助

室町壹町目

家持四蔵煩二付代

庄兵衛

右下り傘之儀は、私共并荒物問屋

之内三組紙店組都合五組取扱当行事

に付、惣代私共申上候、一体右品前々

無数、凡式拾ヶ年来追々同国下り傘

持下り手広二商ひ、天保度一旦（朱抹）停止（朱書）

『問屋』

御停止二付、其内直売仕候哉、嘉永四亥年

問屋再興被仰付、都而前同断示談之

振合を以、当分之内下り傘拾本二付、

口銭銀四分五厘ツ、但シ傘拾本直段

上中下平均銀拾八匁積、右四分五厘之口

銭元直二割合候得は、式歩五厘相当申候、

前同様商人同士取引之儀は、商法御聞濟

奉願候旨、申之候

右取調候処、書面之通申立候、右は其御国方

出産二候共、商人持下り之上は通例之売品二

有之、前書三品之儀、勢州出稼之もの持下り

商人同士取遣り二付、無口銭近在廻有之候而ハ、

其筋問屋共渡世行立不申、難儀仕候趣、

無余儀相聞申候、御当地問屋家業困窮

仕候而は、矢張市中融通二相拘り候間、穩二

出稼商人共折入問屋共江遂示談候様、

被仰付被下度儀二奉存候、依之、御渡被成候、

御掛合書返上仕、此段申上候、以上

未七月

館市右衛門

下ヶ札

此九兵衛儀御掛合書二は、室町

三町目と有之候所、本文之通

式町目二御座候

（朱書）

『未十月廿三日、坂本折右衛門を以御渡』

〔池田播磨守殿江

紀伊殿 御城附

紀州海士郡在々百姓共、作間稼二宝永之頃方

塗物・蠟燭・傘、其外出来之品々御当地江積

送り、御府内并近在商人共江聊宛売捌渡世

└（50）

└（51）

└（52）

└

└（53）

致させ候処、先頃諸株再興以来、近郷江商ひ候品は、都而金高二三步五厘問屋共ト口錢可差出との事二付、無扨口錢差出商ひ候得共、近年諸物元仕込高直難引合、次第二産物出劣り

百姓共難渋、就而は自然收納方江も相響、心配致候付、右品々纔之儀二も候付、問屋口錢相除候様致度との儀、先頃及御談候処、町年寄江御申渡、為御取調被下候処、御当地入津荷物之儀二付而ハ、前々方商法有之、去ル寅年諸問屋組合再興以来は、諸家国産二而も素人直売買不相成段、

被 仰出候儀二而、既二紀州下り蠟燭、関東筋打越

通荷物入津之儀二付、去ル寅年右問屋共出訴御吟味之上、入札払相成候儀も有之、御当地入津

之売荷物無口錢等之儀は、諸下り荷物江も

差障候付、御申付難相成旨、御附札を以御挨拶之趣承知致し、諸問屋組合再興二付而は、御申

渡之次第も有之、御挨拶之趣御尤二御座候付、此上

強而難及御談、種々申見させ候得共、前以及御談

候通、田畑無數之場所二而難立行、至而細キ

業二は候得共、兼々厚ク世話振をも為取計、

御当地并種々働を以、近郷江も売捌ヶ成

商ひ二相成候程之事二而、引合兼候儀は相違も

無之、諸株組合御解放中は勿論、其以前

組合相立有之節二而も、多年之間口錢等不

差出商ひ来候処、再興後右様口錢差出

候様相成候而は、実二引合兼候趣二而、右品々

年々二出劣り候方二而難渋弥増、竈数も

次第二相減、世話振取計候詮も無之、自然

收納向之差支二相成、迷惑被致候、問屋共

規則も有之、諸下り荷物取締二も

差支候儀二候ハ、着船之節二送り状

ヲ以相届させ候様二も為致可申候間、

前々方数年無口錢二而仕来り候

儀二も候付、何分二も今一応厚御評議、

仕来通二而相済候様致度、此段分ヶ而

御再談および候様、其筋役人共申候

未

十月

(朱書)

『未八月十五日持参は内藤次郎江達し』

書面紀州海士郡在々方出候塗物・蠟燭・傘其外

近年元仕入高直難引合次第二而、出高相劣り、

問屋送等取計候而は引合兼候付、問屋口錢相除

候様致度旨、御申越之趣、町年寄共江申渡為取調

「(54)」

「(55)」

「(56)」

「

候処、御当地入津荷物之儀二付而は、前々より夫々
商法有之、去ル亥年諸問屋組合再興以来は
諸家国産二而も、素人直売買不相成段、被

「(57)」

仰出候儀二而、既紀州下り蠟燭関東筋打越通荷物
入津之儀二付、去ル寅年六月右問屋共及出訴吟味
之上、入札払相成候儀も有之、御当地入津之売荷物
無口錢等之儀は諸下り荷物江も差障候二付、其筋江は
難申付候事

「

紀州海士郡出稼之もの

問屋無口錢再応御懸合之儀二付取調申上候書付

館市右衛門

紀伊殿御城附御懸合

紀州海士郡在々百姓共、作間稼二宝永之頃方
塗物・蠟燭・傘其外出来之品々積送、御当

「(58)」

地并近在商人共江売捌渡世為致候所、先
頃諸株再興以来近郷江商ひ候品は、都而
問屋口錢金高二三步五厘ツ、可差出旨申聞、
右所々纔之儀二も候付、問屋口錢相除候様致度旨、
去末年御懸合之節、夫々取調候処、無口錢
差障、諸下り荷物二も相障候二付、難被仰付趣
御挨拶被成下候処、猶又御談之意味諸株組合
御解放中は勿論、其以前組合相立候節込も、
口錢等不差出商ひ来候処、再興後右様差
出候而は、元方引合兼候趣、問屋共規則も有之、
諸下り荷物取締二も差支候儀二候ハ、着船之節二
送状を以相届させ候様二も可為致候間、今一応
厚御評議、仕来通二而相済候様致度旨、被申越候、
書面御下ヶ被成取調被仰渡候間、左二申上候

「(59)」

下り蠟燭問屋

塗物問屋

通町組小間物問屋之内

丸合組傘取扱候もの

右行事引合之者

「

右之内、下り蠟燭問屋共申立候は、紀州蠟燭荷物
纔之儀二は無御座、当時右出稼之もの三拾人余も
有之、其内松田屋万助と申もの杯は、壹ヶ年凡
貳百箇余位積下し、多人数追々荷高二有之
候段申之、塗物問屋共申立候は、是以出稼之
もの荷物纔之儀二無御座、平均凡壹ヶ年荷数
高千三四百箇積送候旨申之、下り傘取扱候もの
申立候は、天保四巳年紀州御屋形浜町御屋敷二而
御世話有之候砌、問屋仲間二限御渡二相成候、当時ハ
直二出稼之もの持下り、荷物壹ヶ年凡六百籠程

「(60)」

有之候旨申之、右何レも少分之儀ニて無御座候、既ニ諸

家方御国産江戸廻し品々、其筋問屋限御払ニ
相成難有渡世仕候、紀州出稼商人共着船相改

候規則而已、無口銭ニ而近在江売捌候而は、御当地

問屋共渡世行立不申、右三手問屋ニ不限、諸問

屋一統江相響、難渋至極仕候、御国産之訳候ハ、

諸家方御同様御屋敷方問屋共江御払可相成哉、

前条之儀は、出稼商人共売々荷物、商人同士

取引之儀ニ付、問屋商法之通、口銭御聞濟奉願候旨、

一同申立之候

右取調候処、再三故障歎願仕候、右三品共凡荷

高之儀は、書面之通申之、尤多少ニ不寄、問屋無

口銭ニ而近在江被売捌候而は、御当地問屋職業

相潰レ難渋仕候段、何様右三品ニ不限、国々諸品ニト

相響、御府内問屋一統之差障及難儀候次第、無

余儀相聞申候、再々御談之儀ニは御座候得共、問屋無

口銭之儀は難被仰付哉、先調ニも申上候商人

同士引合之筋と奉存候、依之御渡相成候御懸合

書返上仕、此段申上候、以上

申聞三月

館市右衛門

「(62)

「(扉)

上

「(63)

紀州海士郡在々百姓、作間稼二宝永之頃方塗物・蠟燭

傘仕出し、御当地并近在商人江売捌来候処、去ル亥年

問屋再興、已来近郷江商ひ候品、金高二応シ三步五厘之

口銭問屋江差出候間、元方引合兼候ニ付、無口銭ニ而

問屋再興已前之通稼方いたし度旨、海士郡百姓共

歎願仕候ニ付、其御筋方御掛合有之、御調被為在候処、

無口銭ニ而、御当地打越近在江被売捌候而ハ、問屋ども

難渋差障り申上候ニ付、右之通難渋相唱候内実之

意味御尋ニ付取調候趣、左ニ奉申上候

一、問屋共御当地打越通荷物ヲ難渋申立候訳は、諸色共

江戸近在奥筋は問屋共得意場之所、上方筋方

諸品持下り商人ニ直売被致候而ハ、荷物捌高相減シ

家業相続ニ拘り差障候筋ニ有之、一体御当地江

相掛り候荷物ハ、問屋共一旦買取、近在奥筋江売捌

売徳取渡世仕候義ニ而、口銭ヲ取荷物相通し候筈ハ

無之候得共、一概ニ問屋共買受荷物代金仕切候而ハ、

「

「(64)

「

江戸問屋共安直段二買取、格外利潤ヲ取候様、荷主共
苦情相唱候向も相聞候二付、品二寄相応之口銭受取
荷主直売為致候仕様二有之、尤諸色とも御当地
「 (65) 」

入津高御調之節、問屋共手ヲ経不申候而ハ、相洩れ
御用弁二拘り、且下り蠟燭之義は、享保十一年五月中
取締被仰渡候日用十五品之内二有之、勿論送状ヲ以
問屋方江荷高為相届可申との御掛合も御座候得共、
送状ヲ以荷高取調候二ハ、送状江裏書致シ、問屋
「 」

手元帳面江も控置候義二而、手数相掛候間、無口銭二而、
此失費問屋共持出し候義は不相当二有之、且又
海士郡百姓共申立方二不都合之廉々左二

一、問屋再興已後口銭差出、其已前ハ数年来無口銭
之趣申立候、然ル所文政二卯年下り蠟燭問屋
勘定帳二、紀州産之蠟燭箇数相記シ、口銭受取候
「 (66) 」

口々控有之、此帳面書抜写別冊二而入御覧候、此外
帳面焼失相見江不申候得共、右筆記ヲ以勘弁仕候処、
問屋御停止已前も、口銭差出候義と相聞江申候、
但、口銭之義、問屋御停止已前ハ、蠟燭直段下直之頃二而、
式三步位不日受取来候処、再興已後嘉永七寅年

八月中、紀州蠟燭御当地相越荷物問屋共見留
当 御番所株江御訴訟申上、御吟味之上、不正荷物
入札払いたし、夫々当人共方詫書取之内済
「 」

济口証文差上、此頃方蠟燭直段已前と見合
高直二相成候間、海士郡之もの示談之上、向後壹箇
二付三步五厘之口銭可差出旨、安政四巳年中

約定取極候後、去未年八月中海士郡日方衛
万助と申もの通荷物取扱候ヲ、問屋共差押
「 (67) 」

掛合之上詫書差入、万助方三步五厘之口銭相払
候由

一、下り傘口銭之義は、二拾五本入壹籠百本二付、代銀
凡式百目位、此口銭銀四匁五分受取、歩合式歩五厘
程二相当いたし候由「

一、塗物口銭之義は、折敷壹箱二付代銀五拾匁位、此
口銭銀五分受取、歩合壹歩二相当いたし候由

右之通右三品とも口銭三步五厘之趣申立候得共、事実ハ
蠟燭而已二而、傘・塗物之口銭ハ実々薄口銭二有之、

口銭之厚薄ハ商人共相对次第、勘弁方も可有之、
何れ二も無口銭二而は御当地問屋共難渋而已二も無之、
自然洩れ荷之調方二差障可申義と相聞江申候、
「 (68) 」

右御尋二付内調仕奉申上候、已上
申六月
村松町
名主 源六
「 」

(扉)

「文政二卯年
下り蠟燭問屋勘定帳書拔」

「(4)

(朱書)

『天保九成年』
十二月廿四日
一、金四兩三朱ト八拾貳文

加田長百八十箇
口錢

(朱書)

『同十亥』
四月
一、金三分

井関善兵衛出
紀州蠟燭十五箇
武州本庄宿升屋武右衛門行
伊東藤七口錢取

同五月十日
一、金貳分

井関屋善兵衛出
升屋武右衛門行
口錢受取

「(5)

同二月四日

一、銀拾四匁

木印方田倉行
蠟燭拾箇
加田長世話料引

同

一、金四兩三分壹朱ト貳匁七分七厘

田倉行蠟燭
百廿壹箇
半箇貳分ツ、
小網町世話料引

同十一月

一、銀五拾貳匁八分

田倉行
口錢受取

(朱書)

『天保十一子年』
八月

一、金壹兩壹分一朱ト貳匁八分五厘

田倉行
蠟燭口錢

同十月

一、金壹兩三分貳朱ト百四拾文
(朱書)

田倉行
貳ッ割壹分

『同十一子年』
閏正月七日

一、金貳分三朱ト貳百拾文

キ州拾四箇
口錢⑦方入

(朱書)

『同十二年』

三月廿八日

通荷

一、金貳兩貳分貳朱ト三拾貳文

口錢受取

(朱書)

『同丑』

田倉行荷物

加田長分

七月二日

六十七箇口錢

一、金貳兩貳分貳朱ト三百八十壹文

尤兩組貳ッ割壹ト分

」(6)

(朱書)

『天保八酉年』

紀州無株行

五月

梶本方受取

一銀三拾匁

」

(朱書)

『申八月十一日、折右衛門ヲ以御渡し』

紀伊殿

「池田播磨守殿江

御城附

紀州海士郡在々之儀、田畑無數百姓共
作間稼二宝永之頃方塗物蠟燭傘

其外出来之品々、御当地江積廻し御府内

并近在商人共江聊ツ、売捌渡世致させ、

尤先年問屋共冥加上納致候節二而も、

往古方無口錢二而売捌来候処、近年諸株式

再興之節方、問屋共江口錢差出候様申聞、

當時口錢差出、商ひ候事候得共、元代等

高直引合兼、甚難渋二付、前々之通

無口錢二而捌方相成候様、問屋共江御利害

御座候様との儀、昨未年以来再応委細

御談申達有之事、右は御申見させ中之

義二は可有御座候得共、前段在々之儀当夏

以来度々之強風雨、其上高汐押寄せ、

田畑共ハ勿論、家宅江も汐打込、下地難渋之上、

弥困窮二差迫、段々救方は取計候得共、

多人數之儀、行届兼備と難立行、當時

格別米価高直、人氣も不宜、彼是申見

中二有之、此上產物仕込等取計遣稼済

取計セ可申外無之候得共、何分諸物元仕込

高直二相成難引合、自然產物書劣り二

相成、難渋弥増、收納方江差図迷惑

被致候間、各問屋口錢先年之通無口錢

之儀、追々及御達候通、早々宜御取扱

御座候様致度、尚又訳ケ而御談申達候様、

」(7)

」(8)

」

役人共申聞候

申八月

「(9)

「(扉)

上

「

「(10)

紀州海士郡在々百姓、作間稼二塗物・蠟燭・傘仕出し、
右品々御当地并近在江売捌候処、問屋再興已来、近在江
商ひ候品は、都而問屋口銭金高二応シ、三步五厘ツ、可
差出旨、対談有之候処、海士郡之義八田畑無數二而、百姓
作間稼重二いたし取続候者共、殊二右品々纔之義二も候間、
問屋口銭相除候様いたし度との義、其御筋より御懸合
有之御調被為在候処、無口銭二而近在江被売捌候而は、品々
多少二不寄、諸国出產之諸荷物江差響、御当地問屋
家業二相障、一統難義および候趣を以、御挨拶被為在候後、
猶再応御懸合之趣も有之、右之品々二不限、諸色之内
何問屋二而も無口銭二而取扱候品無之哉、得と入念取調
可申上旨、御沙汰二付、諸向問屋共精細相調候処、無口銭二而
近在江下り荷物直売為致候類例無御座、其段先達而
奉申上候処、再度御懸合之御趣意相立、問屋とも
商談二も不相障様之仕方勘弁可有之哉之旨、御尋
御座候二付、思熟仕候処、海士郡之もの近在江之売高
纔之由、御懸合之内二も被 仰越候趣二付、是まで
忝ヶ年之捌高

「(12)

塗物

一、何十箇

内何十箇在方売之分

蠟燭

一、何程

内何程右同断

傘

一、幾籠

内何程右同断

右之通、在方売之分多数二無之候ハ、荷高を定メ
是迄海士郡之もの方直売、凡直段承り、不相当二
無之候ハ、右直段不滅様、御当地問屋江買取仕切
代金相渡シ遣し候ハ、問屋売徳無之、迷惑之筋二ハ
候得共、商法二ハ相障不申、海士郡之ものハ在方直売
直段不滅候得は、御当地打越持出し候程之失費、都而
徳付御懸合之御趣意相立、尤問屋共売徳無之、

「(13)

取扱候義二付、荷嵩二而は難決可仕筋二付、纔之荷高二
睨と取極不申候而は、示談行届兼可申、此義全見込迄
二付、可然筋二も被思召候ハ、一応問屋共存寄をも
承り取候上奉申上度、再応之御沙汰二付、存寄候趣、
御内慮奉伺候義二御座候、以上

申

九月

村松町

名主 源六

「(14)」

「(扉)

上

塗物問屋」

「(15)」

以書付奉申上候

一、塗物問屋行事尾張町寺丁目新地佐兵衛地借

万屋文次郎外売人奉申上候、紀州海士郡村々百姓、

(ママ)濃間稼二塗物類其外積下シ、関東筋在々江売々仕

来り候所、右品々金高二応し口銭差出候処、迷惑之趣二而、

右口銭三分五厘差除二相成候様、其御筋方御掛合被為

在候趣、是迄度々被仰聞候間、其時々廉々行事共方

館 御役所江御答奉申上候通り之儀二而、外二勘弁方

も無御座候、尤御当地打越、在々直売一切相止メ

候上は、右出稼荷物黒江田方方是迄引請候、

直段之格合を以、不残問屋共江買取、口銭之義は

受取不申候間、此段御聞届被成下置候様

奉願上候、以上

尾張町寺丁目新地佐兵衛地借

申

万屋

九月

文次郎^印

青物町五人組持地借

会津屋

徳兵衛^印

「(17)」

「(扉)

上

下り傘問屋」

「(18)」

以書付奉申上候

一、通町組小間物問屋之内、丸合組傘取扱候は、行事

本町四丁目家持庄右衛門江州住宅二付、店支配人庄助
煩二付代藤助室町壺丁目家持円蔵煩二付代庄兵衛
奉申上候、紀州海士郡在々百姓共作、間稼二持下り候
「(19)

商法相立不申差障之趣、去ル末年六月中
館御役所江奉申上候処、亦々十一月中出稼之者共、
御当地問屋江口銭差出候而は、自然御收納方江も
相図キ難洪之趣申出候二付、厚勘弁可致旨被仰聞
候得共、其時々廉々御答申上置候通り、外二勘弁方
一切無之、此上何ヶ度御尋御座候共、前同様二御座
候間、此段偏二御聞濟奉願上候、以上

通町組小間物問屋之内
丸合組傘取扱候者行事
万延元庚申年
九月十日
本町四丁目家持庄右衛門
江戸住宅二付店支配人
「(20)

庄助煩二付代
藤助㊦

同
室町壺丁目
家持円蔵煩二付代
庄兵衛㊦
「

「(扉)
上
下り蠟燭問屋
行事」
「(21)

以書付奉申上候
一、下り蠟燭問屋行事通壺町目家持庄右衛門
江州住宅二付店支配人惣兵衛外壺人奉申上候、
紀州海士郡村々百姓、(ママ)濃間稼二蠟燭其外
積下し、御当地并閑東筋在々江も売々
仕来候処、去ル嘉永四亥年中諸問屋
御再興被仰付候、已来は右品々金高二
「(22)

応口銭差出、迷惑之趣二而、右口銭三分五厘
差除相成候様二と之其御筋方御懸合被為在候
旨、是迄度々被仰聞候間、其時々廉々
行事柏屋孫左衛門・木屋九兵衛方館
御役所へ御答申上置候通之義二而、外二勘弁方
無御座候、此上御尋御座候共、前同様二御座候、尤
御当地打越在方直売一切差止候上は、
右出稼荷物時之相場を以、不殘問屋江

買取、口錢之義は受取不申候間、右御聞濟
奉願上候、以上

下り蠟燭問屋

「(23)

行事

通壹町目家持庄右衛門

江州住宅二付

店支配人

惣兵衛印

万延元申歲九月十日

通油町金助地借

嘉左衛門勢州住宅二付

店支配人

七兵衛印

(朱書)

『申十二月十日重太郎ヲ以御渡』

紀伊殿

「池田播磨守殿

御城附

紀州海士郡在々之儀田畑無數、
百姓共作間稼二、宝永之頃方塗物・

「(24)

蠟燭・傘其外出来之品々、御当地江
積廻し、御府内并近在商人共江

聊ツ、売捌、渡世致させ候処、

近年元仕込高直難引合出劣り二

相成難渋致し、自然收納方江

相響迷惑被致候、夫二付以前之通

問屋共口錢相除候儀、昨未年方

再三訳ヶ而申達御座候処、未御挨拶

無之、然ル所當時米穀其外

諸色高直、小民共誠二困窮二

相迫り難立行候付、何分追々

申達候通、近在江商ひ候品々

「(25)

問屋口錢相除候様、尚訳ヶ而

可申達旨、国元方申越候、右は

無御如才御申見中之儀二可有之、

度々御談申達候儀、甚斟酌二

被存候得共、時節柄二も及び候儀、

此節早々御取扱相済候様致度

御座候、国許方者先年方仕来之通、

無口錢二相成候様、訳ヶ而御談

可申達旨、申越候得共、若又御規則二も

相崩御差支二而、いづれ二而も

御取扱難被及儀二候ハ、以来壹歩

口錢差出させ候様二も可致候間、
此所二而厚御評議、何分早々
御取扱相済候様致度、尚又訳而
御談可申達旨、役人共申候

申

十二月

(朱書)

『酉二月十九日寺村重太郎ヲ以御渡』

池田播磨守様

寺内藤次郎

以手紙致啓上候、追々春暖二相成
候処、弥御安全被成御入珍重御儀二
奉存候、然は別紙之趣、猶又御談
可申達旨、其筋役人共申聞候間、
右忝通差出申候、早々御取扱相済
候様仕度奉存候、早々如此御座候、
以上

二月十九日

(朱書)

『同断』

紀伊殿

〔池田播磨守殿江

御城附

紀州海士郡在々之儀田畑無數

百姓共作間稼二、宝永之頃方塗物・

蠟燭・傘其外出来之品々、御当地へ

積廻し、御府内并近在商人共江聊ツ、

売捌、渡世為致候処、近年元仕込

高直難引合、出劣り二相成難渋相増、

自然收納江も相響キ迷惑被致候

義二付、以前之通、問屋口錢相除候様、

去々末年方再三申達、兼無口錢

之儀ハ御規則二も相振レ、御取扱難被

及候儀二候ハ、諸品割否を以、口錢為差出

候様、去申十二月委細申達候儀二

御座候、右評議中二可有之、此上

強而御談申達候儀、何共斟酌二

被存候得共、追々諸品高直小民共

困窮二相迫、実々難立行義は

相違も無之儀二付、此段厚御評議

何分旧臘申達候、諸品割合口錢

「(26)

」

「(27)

」

「(28)

」

「(29)

為差出候処二而、此節早々御取扱
相済候様致度、猶又訳而御談可
申達旨、役人共申候

西二月

「(30)

(朱書)

『申十二月十九日、折右衛門ヲ以御渡』

紀伊殿

「池田播磨守殿江

御城附

紀州海士郡在々産物之内、塗もの・
蠟燭・傘近在江商ひ候分、問屋とも
無口錢之儀、昨年来再三申達、兼

「(31)

御取扱難相済候ハ、壹歩口錢差出
可申哉と之儀、当月書取を以御談
申達御座候、然二壹歩口錢と相極り
候而ハ、直段高下之節々相狂ひ手数
にも可相成哉、就而は元直段高下二
不抱、荷数二而口錢御取扱被下候ハ、
都合も宜御座候付、此程申達候、書取と
別紙と御引替、何分早々宜御評議
御座候様致し度、此段御談申達候様
役人共申候

申十二月

「(32)

紀伊殿

「池田播磨守殿江

御城附

紀州海士郡在々之儀田畑無數、百姓共
作間稼二宝永之頃方塗物・蠟燭・傘
其外出来之品々、御当地江積廻し、
御府内并近在商人共江聊ツ、売捌、
渡世致させ候処、近年元仕込高直
難引合、出劣り二相成難渋致し、自然
收納方江相響迷惑被致候、夫二付
以前之通問屋共口錢相除候様、昨未
年方再三訳ケ而申達御座候処、
未々御挨拶無之候処、当時米穀
其外諸色高直、小民共誠二困窮二

「(33)

相迫り難立行候付、何分追々申達候通、近在江商候品々、問屋口錢相除候様、猶訊ヶ而可申達旨、国許方申越候、右ハ

無御如才御申見中之儀ニ可有之、

度々御談申達候儀、甚斟酌ニ被致候得共、時節柄二も及ひ候儀、此節早々御取扱相済候様致し度御座候、国許よりは

先年方仕来之通無口錢ニ相成候様、

訊ヶ而御談可申達旨申越候得共、若又

御規則も相崩御差支ニ而、何れ二も

御取扱難被及儀ニ候ハ、以来左之通

口錢差出させ候様二も可致候間、此所二而

厚御評議何分、此節早々御取扱

相済候様致し度、猶又訊ヶ而御談可

申達旨、役人共申候

「(35)」

申十二月

一、蠟燭小箱貳拾箱入 壹箇二付

此問屋口錢 壹匁貳分

一、傘貳拾五本入 壹籠二付

同 四分

一、椀三十人前入 壹箱二付

同 七分

一折敷類壹箱二付 三分

同 三分

右之通

「(36)」

書面御領分百姓共塗もの、其外御府内江積廻、且近在商人共江売捌候と之儀は、

元来御当地打越荷物ニ相当り候間、

都而御府内江持込候分は、其筋問屋江

可為売渡筋二有之候へ共、追々御申越之

趣も有之、問屋江無沙汰ニ取計候訊二も

無之二付、其筋之もの呼出、再応得と

申諭候処、別紙之通夫々書面差出し、

此節諸色高直ニ而、兼々諸品「御府内」潤沢方

申渡置候折柄、問屋共申立之趣も無余儀

訊ニ相聞候二付、先ツ「別紙写三通差遣候間」今一応得と御勘考

之上被御申聞候様いたし度存候事

西三月 池田播磨守

「(38)」

「(扉)」

「

上

塗物問屋

行事」

」(39)

乍恐以書付奉申上候

一、塗物問屋行事青物町五人組持地借

徳兵衛外売人奉申上候、紀州海士郡村々

百姓農間稼二塗物其外持下り、御当地

打越通荷物問屋口銭差出候而者、自然

御收納方二相響難渋之趣申出候趣、其

御筋方御懸合被為在候段、是迄再度

御利解有之、其時々御答申上置候処、

猶又此度厚 御利解被仰聞、一同

奉承伏候、然ル処先前申上候通、荷調

諸懸り候二付、三分と七分二而は、余程

足金二相成、難渋至極仕候得共、前書

御利解二相泥、今明歳式々年之間、

七分三分宛受取、是迄之通

荷物取扱可申候、尤翌亥歳正月方

荷物元銀高二而、三分五厘宛請取

申度奉存候間、何卒以

御慈悲前段之始末御聞濟被成下

置候様、奉願上候、以上

塗物問屋行事

青物町五人組持地借

徳兵衛^印

通油町八右衛門地借

新助^印

御番所様

」(42)

万延貳酉歳二月廿七日

「(扉)

上

下り蠟燭問屋

行事」

」(43)

乍恐以書付奉申上候

一、下り蠟燭問屋行事室町貳丁目家持九兵衛

外売人并老分之者本町四丁目家持孫左衛門

京都住宅二付店支配人彦七一同奉申上候、

紀州海士郡村々百姓、農間稼二蠟燭

其外持下り、御当地打越関東筋、
〔 (44) 〕

其外二売々之品々、問屋口錢元銀
高二而三分五厘宛受取来候処、向後
蠟燭壹箇二付、口錢銀壹匁貳分宛
請取可申旨、其御筋方御懸合被為
在候段、是迄も再々応被仰渡、尤其
時々難渋之趣、歎願書を以御答申上
置候処、猶又此度厚 御利解

被仰聞、然ル処兼而先前方数度
申上置候通、荷調諸懸り、壹箇二付銀
貳匁七八分程宛相懸り、然を問屋共方
足銀仕候は、何共難渋至極仕候得共、
〔 (45) 〕

右御利解之趣、一同奉承伏候二付、今明
歳貳ヶ年之間、蠟燭小箱貳拾箱詰
壹箇二付、銀壹匁貳分宛請取、先規
之通、右荷物取扱可申候、尤翌亥歳
正月方紀州荷主共方江最秋約定
之通、元銀高二而三分五厘宛受取
申度奉存候間、何卒以 御慈悲、
右之段御聞濟之程、奉願上候、以上
下り蠟燭問屋

行事

室町貳丁目家持

九兵衛煩二付代

万延貳酉歳二月廿七日 平右衛門 〔 (46) 〕

通油町

金助地借

嘉右衛門勢州住宅二付

店支配人

七兵衛 〔印〕

本町四丁目家持

孫左衛門京都住宅二付

店支配人彦七煩二付代

老分之者 卯兵衛 〔印〕

御番所様 〔 (47) 〕

〔 (扉) 〕

上

下り傘問屋 〔 (48) 〕

乍恐以書付奉申上候

一、住吉組荒物問屋之内傘取扱候は、行事小網町
壱町目太兵衛地借大坂屋茂八煩二付代宗次郎・

甚左衛門町与兵衛地借万屋吉兵衛煩二付代元七

奉申上候、紀州海士郡在々百姓共、作間稼二

持下り候傘、御当地打越、通り荷物問屋口銭

三分五厘可受取之处、当分之内傘百本二付、銀四匁五分ツ、

受取来候处、右口銭差出候而ハ、自然御收納方二相響キ

難渋之趣申出、傘貳拾五本入壱籠二付、銀四分ツ、

口銭可差出旨、其御筋方御掛合被為在候段、

是迄度々御利解被仰聞、其時之御答奉申上置

候处、先前奉申上候通り、諸懸り雜費傘廿五本入壱籠二付、

銀壱匁程ツ、相懸り候、右ヲ銀四分二而相賄候而ハ、問屋共

足銀仕候義、何共難渋至極仕候得共、再応御利解二付、

今年年式々年之間、傘廿五本壱籠二付、銀四分ツ、

請取、荷物先規之通取扱可申候、尤翌亥年方は

最初荷主共と再度約定仕候通、口銭受取申度

奉存候間、何卒以

御慈悲ヲ、右之段偏二御聞濟被成下置候様奉願上候、以上

万延二辛酉年二月廿七日

住吉組荒物問屋之内

傘取扱候者行事

小網町壱丁目太兵衛

地借大坂屋茂八

煩二付代

宗次郎[㊦]

同

甚左衛門町

与兵衛地借万屋

吉兵衛煩二付代

元七[㊦]

通町組小間物問屋之内

丸合組傘取扱候者

本町四丁目家持庄右衛門

江州住宅二付店支配人

庄助煩二付代

老分

善兵衛[㊦]

御番所様

〔扉〕

〔49〕

〔50〕

〔51〕

〔52〕

乍恐以書付奉申上候

下り蠟燭問屋行事尾張町式丁目家持八郎左衛門京都住宅二付店支配人又左衛門外
 宅人奉申上候、紀州海士郡村々百姓、
 農間稼二蠟燭其外持下り、御当地
 打越、関東筋二江売々之品、問屋為
 口錢金高三分五厘宛受取来候処、
 向後、蠟燭小箱式拾箱詰壹箇二付、
 問屋口錢銀壹匁式分宛請取、是迄
 之通取計候様、其御筋方御懸合
 被為在候段、被仰渡奉畏、仲間一統江
 申聞候処、兼而昨歳中也度々書入
 面を以、館御役所江も御答奉申上候
 通、古来方受取諸事相賄来候処、
 今更相減候は、何共迷惑仕候得共、
 今般厚 御利解之趣相弁、
 一同承伏仕、速二御受申上度奉存候
 得共、右荷物入津之節々、送状
 調并藏敷車力其外共、蠟燭
 壹箇二付、時々増減は御座候得共、
 凡式匁七八分位宛入用相懸候
 間、問屋口錢壹匁式分二而は、全壹匁
 五分余不足仕、右を問屋共方
 弁銀仕候は、何共難渋至極仕候間、
 右入用丈は受取不申候而は行
 届不申、此段御賢察之程奉
 願上候、且又問屋共義は、上方筋
 其外方諸荷物買取、関東奥羽
 筋、其外国々江商ひ、売徳取之候
 業体御座候処、前書打越荷物
 相嵩候而は、往々諸問屋共及衰
 微候は眼前二而、何共歎々敷次第二
 奉存候間、右相越蠟燭荷物之
 義は、壹ヶ歳三百箇限と箇数
 錠取極約定仕度奉存候間、何卒以
 御慈悲前段之始末御聞濟之上、
 私共問屋無難二永続相成候様、
 被仰付度奉願上候、以上

L

(54)

L

(55)

L

(56)

L

下り蠟燭問屋
行事

尾張町式丁目家持

八郎左衛門京都住宅二付

店支配人又右衛門煩二付代

万延元申歲十二月廿五日

小右衛門[㊦]

「(57)

小船町三丁目

権右衛門地借

伊助紀州住宅二付

店支配人半兵衛煩二付代

庄兵衛[㊦]

御番所様

「(扉)

上

下り傘問屋」

「(58)

乍恐以書付奉申上候

一、住吉組荒物問屋之内江傘取扱候は、行事小網町

壺丁目太兵衛地借大坂屋茂八煩二付代宗次郎・甚左衛門町

与兵衛地借万屋吉兵衛煩二付代元七奉申上候、紀州

海士郡在々百姓共、作間稼二持下り候、御国産傘御当地

打越、通り荷物無口錢二而ハ、問屋共一同差障二相成候趣、

去末年六月中再度

「(59)

館御役所江、先行事近江屋庄助・遠州屋円藏方、

其時々御答奉申上、右御調中去十月中、亦々出稼

商人共方示談之通口錢可受取一札取之対談行届候処、

猶亦今般

御館様方御当地問屋共、傘貳拾五本入壺籠二付、

銀四分ツ、口錢可差出旨、御掛合被為在候二付、勘弁

可致旨、御利解被仰聞、問屋共一同承伏奉畏候、然ル処

廻船度々送り状改漏ケ、舟ちん・車力・藏敷、其外

諸入用、傘貳拾五本入壺籠二付、銀壺勿余相掛り

候間、銀四分二而相賄候義ハ、何共迷惑仕候間、入用相懸り

候文ケ、右荷主共方請取度奉願上候、且厚御諭シ

「(60)

被為在候、御府内品潤沢直段引下ケ方御趣意相

守り、問屋共一同丹精仕候処、出稼商人共山方

糴買致候趣、彼地江戸積仲間方申来、問屋共

一同心痛仕候、右出稼商人共多分持下り、奥筋近国

御当地問屋共売先々糴売致候而ハ、自然

問屋共衰微二相成難渋至極仕候間、出稼商人共

壺ヶ年傘貳拾五本入壺籠五百籠限員数

相定候様奉願上候、左候ハ、御府内品潤沢仕、直段

引下ケ方二基付、問屋共一同安居仕候間、何卒

御慈悲ヲ以前書申上候通、偏二御聞置被成下置候処、

奉願上候、以上

「(61)

住吉組荒物問屋之内

下り傘取扱候者行事

小網町壺丁目太兵衛地借

万延元庚申年

大坂屋茂八煩二付代

十二月廿五日

宗次郎印

同

甚左衛門町与兵衛地借

万屋吉兵衛煩二付代

元七印

〔貼紙〕

「本文之訳抱二付貳拾五本入壺箇二付、
銀壺勾之歩合二取極候ハ、御受
可申上候」

御番所様

「(62・63・64)

〔扉〕

上

塗物問屋

行事」

「(65)

乍恐以書付奉申上候

一、塗物問屋行事青物町五人組持地借会津屋

徳兵衛煩二付代佐兵衛外壺人奉申上候、紀州海士郡

百姓、農間稼二塗物類閑東筋在々江売捌候

塗物荷物、江戸問屋共江引請売渡口錢を以、

「(66)

示談行届罷在候処、一昨年中方右荷物無口錢

二而荷物打越度旨、度々御談被為在候得共、其時々

再三書面ヲ以奉申上置候、然ル処此度被

仰渡候二は、丸荷壺箇二付銀七分、折敷荷壺箱

二付銀三分、右之口錢ヲ以承知可致旨、今般厚

御利解被 仰渡、一同奉承伏、速ニ御請奉申上度

印

候得とも、右荷物入津之砌は、廻船問屋共方行事方江

送り状改、其外共諸雜費等相懸候二付、手柄二寄

荷物増減は有之候得共、七分二三分二而は、余程之

印

不足二茂相成、乍恐難渋至極仕候間、此段被為

「(67・68)

〔下ケ札〕

「 椀入丸荷坪平付本椀三拾人前入

壺箇二付九分

同 四拾人前入

壺箇二付壺勾貳分

木具膳入箱

壺箇二付五分

右之通請取候而茂、荷物増減二寄、年分二は余程之

不足相立候得共、右歩合二而御請仕度奉存候」

聞候訳、当九月中以書面奉申上候通、格別之以御慈悲御聞濟被下置候様、偏二奉願上候、以上

塗物問屋行事

青物町五人組持地借

万延元年

会津屋

十二月廿五日

徳兵衛代

佐兵衛印

通式丁目家持

藤木屋うめ

大坂住宅二付

店支配人

喜兵衛代

善右衛門印

〔貼紙〕

〔濟〕 太郎右衛門

濟 郷左衛門

濟 源右衛門

濟 助左衛門

濟 八右衛門

弥吉兵衛

〔朱書〕

『酉四月四日、問屋共差出候書付三冊添、寺村重太郎ヲ以御渡』

池田播磨守様

寺内藤次郎

以手紙致啓達候、向暑之節之処、

弥御安泰被成御入珍重御儀二奉存候、

然ハ別紙之趣、猶又可及御談旨、其筋

役人共申聞候間、右書通差出申候、

宜御取扱有之候様致し度候、且此程

御渡し別紙三冊返却仕候、依之

如此御座候、以上

四月四日

池田播磨守殿江

紀伊殿

御城附

紀州海士郡在々百姓共、作間稼
塗物・蠟燭・傘其外出来之品々、
御当地江積廻候内、近在商人共江

「(69)

「(70)

「(71)

「(72)

「(73)

聊ツ、為売捌候筋、元仕入高直
難引合、近年別而出劣リ二相成、
収納江差響迷惑被致候付、問屋共
口錢相除候様と之品、一昨未年以來
度々及御談御申見中、皆無口錢

に而ハ、御規則も相崩、且問屋共雜用
等も相掛リ、難渋可致儀も可有之
哉与申見、口錢減少致し相渡させ
可申候付、右之趣を以問屋共江御申渡二
相成候様、去申十二月中訳ケ而御談

申達候処、御府内江持込候分、近在江
売捌候儀ハ、打越荷物二相当候得共、
追々及御談候趣も有之、問屋とも
御呼出再応為御諭候処、雜用も相掛
足銀取計候儀難渋二付、当年來年
式ケ年之間申達之通可取計旨、

問屋共申出候、別紙之通御差越委細
御申聞之趣承知致し、問屋共申立
之趣も一ト通無捌儀二可有之候得共、
先頃中、数度訳ケ而及御談候通り、
近年何品二不限元仕込高直、小民
とも実々難渋二差溜リ難立行候二付、
以前之通無口錢二相成候様、御談
およひ候事二御座候得共、問屋とも
雜費之処も相察、右之通乍聊
口錢為差出候談（ママ）及御談候儀ハ、精々
申尽候上之儀、一兩年口錢減少

之処二而、可立行見留有之候ハ、新
御手数相掛申間敷候得共、実々
収納方江差響、無詮方段々訳ケ而
及御談候儀二有之、問屋共足銀相掛リ
難渋と之申立二候得共、運送入用等
国許二而相凌、外二別段多分入用
相掛リ候訳二も無之様被致候間、一昨
年來度々及御相談候趣厚く
御汲分、何分二も以來左之通口錢
にて相済候様、問屋共江御申渡二
相成候様致し度、此段厚御評議、
早々御取扱御済候様致し度、御答
旁、猶又訳ケ而可及御談旨、役人とも
申候

西

四月

一蠟燭小箱式拾箱入

壺箇二付

「
(75)
」

「
(74)
」

「
(76)
」

此問屋口錢	壹匁貳分	
一傘貳拾五本入	壹箱籠二付	
同	四分	└ (77)
一椀三拾人前入	壹箱二付	
同	七分	
一折敷類	壹箱二付	
同	三分	
右之通		└

(朱書)

「酉六月八日森鉄蔵を以御渡」

紀伊殿
御城附
「黒川備中守殿江

紀州海士郡在々百姓共作間稼二、宝永之頃方
塗物・蠟燭・傘其外出来之品々、此表船
積問屋迄送越、御府内并近在商人共江
売捌渡世為致、收納之一助二相成候処、去ル
卯年諸株再興以来、近郷江商ひ候所は
都而問屋口錢可差出旨、問屋共申聞、其節方
口錢差出商ひ候得共、近年諸物元仕込
高直難引合次第第二、産物出劣り相成、百姓共
難渋、自然收納江も相図心配被致候付、右
口錢相除候様、問屋共江御申渡御座候様、一昨
未年四月中、池田播磨守殿江委細御達
申候処、諸問屋組合再興以来、御当地入津
之売荷物無口錢之儀は、諸下り荷物二差障り
問屋共江御申渡難相成旨、御挨拶有之、御尤二は
候得共、右産物は至而細キ業二候得共、田畑
無数百姓共難立行場所二付、兼々厚世話
為致仕込をも取計遣、漸相稼せ来り、尤往古方
諸株組合相立

└ (79)

公辺冥加上納取計候節二而は、右品者は口錢二而、
近郷江商ひ来り候処、組合御解放再興」
問屋共冥加上御用捨之趣二候処、再興以来
前段之通口錢差出候様相成、兼而引合
兼候、所々江右様段々諸入用相懸り候而は、誠に
難渋弥増竈数も次第二相減、世話振取計
遣候詮も無之、收納江相響迷惑被致候、問屋共
規則は可有之候得共、前々方数年無口錢二而
商ひ来候儀二付、何分二も今一応厚御評議
御座候様被致度段、同年十月再応及御談

└ (80)

候儘二付、其後度々訳ケ而申達候得共、御挨拶無之、定而御評議御六ヶ敷儀二可有之哉、強而同様之儀被申達候儀も、斟酌被存夫々付、仕込方等猶種々申見させ、此上手厚世話致し遣、

諸入用聊二而も相減させ、稼方取続せ度、就而ハ無口錢之儀、何れ二も難相整儀二候ハ、以来左之通口錢差出させ候様二も可致候間、右之処二而御取扱相济候様、昨半十二月申達候処、問屋共江

再応御理害御座候処、今年式ヶ年之間、右之割合二而請取、亥年方者三分五厘宛受取

度段、問屋共申出候書付御差越、得と勘考之上可申達旨、当酉三月御申聞御座候処、一昨

未年以來数度及御談候通、極々難洪村二而難立行候処、当時諸物仕込殊之外高直、別而難洪相陥り、前々方は家数等多分二相減、無扨、強而及御達候程之儀、一兩年之間、口錢減少之処二而、立行見留有之候ハ、斯段二御手数相懸申間敷候得共、実々約（力）以收納方江相響、難

黙止訳二而、数度及御談候儀二付、以来左之通口錢二而相济候様、当四月猶又御答旁委

細申達候、右之通段々申達御座候有之趣、御取調難洪之次第厚御汲分、当時仕込時節二も有之、諸物高直日々二難洪相陥り候儀二付、何卒早々相济候様致度、此段尚訳ケ而可及御談旨、役人共申候

西六月

一、蠟燭小箱貳拾箱入 壹箇二付

此問屋口錢壹匁貳分

一、傘貳拾五本入 壹籠二付

右同四分

一、椀三拾人前入 壹箱二付

右同七分

一、折敷類 壹箱二付

右同三分

右之通

「(81)

「(82)

「(83)

⑤文久元酉年五月 向方相談廻 松平隠岐守領分織出候縞木綿問屋家別払売捌調
(扉、小口見出し)
(朱書)

『文久元酉年五月』
向方相談廻
大和守殿御下ケ

松平隠岐守領分織出候縞木綿
問屋(朱抹)『故』(朱書)「家」払売捌調

(朱書)

『五』

中村次郎八

└ (3)

(扉)

上

塗物問屋

下り傘問屋

下り蠟燭問屋

└ (4)

差上申御請書之事

一、塗物問屋行事青物町五人組持地借徳兵衛外売人、
住吉組荒物問屋之内下り傘取扱候者行事鎌倉町
又兵衛地借伝兵衛江州住宅二付店支配人六右衛門外売人、
下り蠟燭問屋行事本町四丁目家持孫左衛門京都住宅二付
店支配人彦七外売人一同奉申上候、紀州海士郡村々
百姓農間稼二塗物・傘・蠟燭持下り、御当地打越
關東在々江売々之品々、是迄世話口錢元銀高二
三步五厘宛受取来候処

塗物碗三拾人前詰壺箇二付

問屋世話口錢

銀七分

└

同折敷壺箇二付

同

銀三分

下り傘式拾五本入壺箇二付

同

銀四分

下り蠟燭小箱式拾箱詰壺箇二付

同

銀壹匁貳分

└ (6)

右之通之口錢二相改度段、海士郡商人共相願候二付、
其御筋方御懸合被為在候段被仰渡候間、仲間共
打寄相談仕候処、口錢三步五厘方相減シ候而は、外二
取引江も差響キ旁々以難渋仕候段、乍恐再応
奉申上候処、海士郡より出候右三品二限格別之訳柄
且々厚御利解之趣一同奉承伏、向後書面之

口錢二而、是迄之通差支無之様取扱可仕候、依之
御受書差上申処、仍而如件

文久元酉年五月廿日

塗物問屋行事

青物町五人組持地借

徳兵衛^印

└ (7)

通油町

八右衛門地借

新助^印

住吉組荒物問屋之内

鎌倉町又兵衛地借

伝兵衛江州住宅二付

店支配人六右衛門煩二付代

嘉七^印

└

室町三丁目

正助地借市右衛門

煩二付代

宗次郎^印

下り蠟燭問屋行事

本町四丁目家持

弥左衛門京都住宅二付

店支配人彦七煩二付代

仁兵衛^印

└ (8)

小舟町壱丁目

久兵衛地借惣左衛門

煩二付代

清四郎^印

└

御番所様

(朱書)

『酉五月五日、大和守殿片山与八郎を以御渡』

〔酉三月五日差出

松平隠岐守

印

三月五日御下

〔大和守殿

└ (9)

神奈川表御警衛被 仰付候二付、台場
築立等仕候間、旧冬は少将被 仰付并家格
御引立被下、永世之御用相立候様可致旨被
仰渡、私儀は申二不及、家来末々之もの共冥
加至極難有仕合奉存候、就而は御警衛向

之儀粉骨碎身仕、永世之御用相勤申度、
奉存候処、兼而奉申上候通、台場築立候而已
二而も莫大之入費相嵩申候、乍併築立之儀ハ、

只一時之儀二御座候間、如何様共仕相凌可申候得共、
御警衛被 仰付候以来、在所表方度々家来
大勢呼寄候長途之入用、且又御警衛場江
差遣勤番為致候手当、在所表と違御場

所柄之儀二付、是迄も夥敷相懸申候、此後右等

之儀を始、年々台場破損之補理、大小炮試
打致し候玉薬之用意、其外費用不少、其上

去年奉伺置候幸ヶ谷陣屋取広之儀御差図

相濟候得は、堅固二築立万々一異変有之候

節殿〔誠力〕忠を尽し、一廉之御奉公仕、奉報

御国恩度内存御座候処、台場築立候方引続

追々領分疲弊仕様候、近頃金銀融通不自

由二而、差向他借も行届兼難渋仕、永世之

御用難相勤方深心配仕候間、年々台場為

御手当御下ヶ金奉願候歟、又は御警衛場附

属之土地拝領奉願候歟、両道之内何歟奉願

度候得共、当節柄御事多之御時節と

奉恐察候二付、此儀は差扣申候得共、

何歟別段一廉之助成も無御座

候而は、御警衛御用永続可致様無之、

右二付去年領分方織出候縞木綿、

御当地其筋問屋共江売捌方之儀

家来共方御内慮奉伺候処、其筋

問屋共江入札払取計候様可仕旨

被 仰渡、委細奉畏候、乍去入札払之

儀は品柄之向不向申立、兎角落札

直段相進兼、殊二諸雜費相懸り

損失多相成候由二而、是迄入札払

いたし候ものも永続不致、半途二而

相止候段相聞申候間、在所表二而夥敷

織出候もの共、無何処休業仕罷在

申候二付、おのつから木綿払底二成行、

領分衰微仕候、酒井勘解由方二限

文化之度領分方織出候、白木綿御当地

其筋問屋共江家別払売捌申度旨

願相濟、其後

晴光院様御賄方御融通之御為二も

相成候由二而、今以不絶家別払二

売捌申候旨伝承仕候、右は白木綿二而、

私領分方織出候は縞木綿二御座候間、

品柄も相違仕差支之筋も有之間敷

┌

┌ (10)

┌

┌ (11)

┌

┌ (12)

┌

┌ (13)

候間、御警衛御用取続のため

勘解由方同様之振合二而、売捌方
被仰付被下候ハ、自然と在所表之

もの共大ニ氣配引立、家業出精いたし

夥敷織出、当時絹布高直之時節、

世上之潤色ニ相成、私手許二而も利益ヲ

生し可申候、右利益ニ相成候金銀

少しも私用ニ不用、神奈川表御警衛向

之手当致し候ハ、此後防禦之手筈

嚴重行届、永世之御用被相勤可申候、

尤私家ニおゐてハ、他家方木綿織出し、

御当地問屋共江家別払二売捌候而も、

全天下之財宝國中ニ充滿仕、

御国益ニ相成、諸人安堵之基を

開候一端ニも可有御座と奉存候付、

聊御差支之筋申上間敷候間、縞木綿

売捌方之儀、当方其筋問屋共江

入札払二不致、家別払二勝手次第

売捌申度、此段奉内願候、以上

三月五日

松平隠岐守

「(15)」

(朱書)

『酉五月廿七日大和守殿』

「

「石谷因幡守江
覚

松平隠岐守領分織出候縞木綿、入札無之、

其筋問屋共江家別払申立之趣、無余儀

相聞候間承置候積二而、取調可被申聞候事

(朱書)

『酉六月三日、久世大和守殿加藤惣兵衛を以御渡』

「(16)」

酒井雅楽頭家来勝手方

内意申聞候書付

大和守

雅楽頭領分国産木綿之儀二付、昨

申年九月十五日別紙之通申上候処、

同十月十八日書面内意之趣承置候段、

御書付を以被仰渡、難有仕合奉存候、然処

「(17)」

此度又候外様方御国産木綿家別
引請之儀、御願立有之候由、問屋共方
及承候、右は昨年御差図相済候儀二ハ
御座候得共、万一此度類例出来仕候へハ、
是迄御差留二相成候御方々様方も
御同様、追々御願立可相成哉、左候へは
必定不捌二成行、領中衰微は不及
申、第一

晴光院様御賄筋眼前御差支二
相成可申、且当節二之御台場

御預之蒙

仰罷在候付而ハ、右用途も不少、旁深以
心痛仕候二付無余儀申上候、右之段厚
御憐察被成下、別紙之趣幾重二も
御差含、家別引請之儀ハ類例出来
不仕候様只管奉歎願候、此段右様迄
可申上旨雅楽頭申付候、以上

酒井雅楽頭家来

六月二日

神戸四方之助

別紙三通は、去申九月差出候
書付、同文言二有之候

下ケ札

書面松平隠岐守申上候趣取調
候処、右は神奈川御警衛に付、
台場築立修復并陣屋取広ケ、
其外家来在所表方多人数呼寄
等二付、入費不少相掛、領分疲弊
いたし候上、近頃金銀融通向不宜、
永世之御用難相勤、深く心配仕候間、
年々台場御手当御下ケ金相願候歟、
又ハ御警衛場附属之土地拝領
相願候歟、両様之内何歟奉願度
候得共、御時節柄恐入差扣候儀二而、
右二付何歟別段一廉之助成無
御座候而ハ、御警衛御用永続難致
候処、去年領分方織出候縞木綿、
御当地其筋問屋江売捌之儀相同
候処、其筋問屋江入札払二取計候程
被仰渡候、然処、右入札払之儀ハ、品物之
向不向申立、兎角落札直段相進
兼、殊二雜費相懸損失多、入札

┌ (18)

┌ (19)

┌ (20)

┌ (21)

払いたし候もの永続不致、半途二而相止、織出候ものは休業相成、領中衰微仕候二付、文化度願濟二而酒井雅楽頭方二限り、領分方織出候白木綿御当地其筋問屋共へ家別払二

売捌候趣二有之、隠岐守領分方織出候は縞木綿二而品柄も相違仕、差支之筋も有之間鋪候間、前同様之振合を以、御警衛御用取続之ため売捌方被仰付度旨申立、御警衛二付多分之諸入用相懸候折柄、領分産物捌方差支候と之故を以、其筋問屋共へ家別払二いたし候と之儀ハ、素人直売買とも訳違ひ、去ル亥年諸家国産売捌御触二も相障不申、無余義相聞、尤御国益御主法被仰出候上ハ、又候振合も替り可申候得共、一応町奉行江御下ケ之上、差支之筋も無御座候ハ、隠岐守願之通被仰渡可然哉奉存候

西四月

松平出雲守

小笠原長門守

竹内下野守

設楽八三郎

高橋平作

立田録助

池野勇一郎

(朱書)

『西六月十一日、平田諛之進ヲ以御渡』

「拙者儀何之存寄
無之候

〔備中守殿江相談もの

西六月 備中守〕

書面松平隠岐守申上候、同領分産物之縞

木綿、御当地其筋問屋共江入札払二無之、

家別払売捌之儀、御書取之趣奉承知、因幡守

御役所江木綿問屋行事共呼出相糺候処、

右縞木綿、以来其筋問屋共江家別払

相成候而も故障之筋無之旨申立候二付、隠岐守

願之通被仰渡、可然哉二奉存候

西六月

石谷因幡守

黒川備中守

(ヒレ)

「(22)

「(23)

「(24)

〔大和守殿

諸家国産木綿類売捌方之儀二付
申上候書付

石谷因幡守
黒川備中守

当三月五日松平隠岐守申上候、同人領分

産物縞木綿御当地江積込、其筋

問屋共江売捌仕度旨、去申七月同

家来方御内慮相伺、入札払取計候様

被仰渡候処、入札払之儀は損失多

引合不申候趣二而、酒井雅楽頭領分

産物白木綿其筋問屋共江家別払

売捌候同様之振合二而、売捌申度段

相願候趣、無余儀被思召候間承置候積

に而取調可申旨被仰渡、右書面因幡守江

御下二付、木綿問屋行事共相糺、差支

無之候趣は別もの下ヶ札を以申上候、然処

酒井雅楽頭方二而、右之趣及承類例

近々共増候而ハ、同人領分国産木綿

之儀、数年之間家別売「払」仕来候処、

不捌二成行、領中衰微者不及申、

第一

晴光院様御賄筋差支、且二之御台場

御預之用途も不少、旁心痛仕候由二而、

家別払之儀は類例出来不仕候様

相願候旨、当六月二日雅楽頭家来方

差上候書付類御下ヶ、同人方差響キ

不相成様見込之程可申上旨被仰渡

候間、勘弁仕候処、右は先秋紀伊守殿

御下御座候隠岐守領分縞木綿

売捌之儀、先役池田播磨守取調中

先代雅楽頭家来方御勝手江差出候

書面、播磨守江御下、見込之趣御尋二付、

同人并因幡守連名二而其節申上候通、

諸家国産売捌之儀ハ、奉行所江

届済之上、問屋共おゐて故障無之

候得は、其品二寄家捌「別」売并入札払共、

都合次第売捌方仕、別段規則ハ

無御座候二付、先年方諸家国産

木綿家別払之儀申立候儀有之候処、

雅楽頭方二而及承、同領産物二限、

文化度以後数年之間、家別払済来

候廉を以、品々差支相成候趣、其度々

「(28)

「(25)

「(26)

「(27)

「

其度々歎願申立候二付、他領産物家別
払は都而差留候儀二有之、既二去夏
佐竹右京太夫領分産物之木綿

家別払之儀、先役池田播磨守方江
申出承届候後、酒井雅楽頭家来方
故障申立、右京太夫方八家別払相除
候儀も有之、畢竟規則無之候二付、
奉行所おゐて取調可申品を、雅楽頭方
申立候得は、差除候儀は如何二も不都合之
仕儀二付、同人方おゐても

晴光院様御賄向等眼前差支候段、
無余儀次第二相聞候を、時々歎願申立
候も煩敷筋二有之、且又此上雅楽頭方
同様、追々諸家国産之木綿類家別払
相増候而ハ、入札払と違ひ買取直段
聞合高直之方江売捌候事情二付、
問屋共二而も買取「落し」可申と競合、直段

糴上候場合二至、自然相場合二差響
可申哉二付、白木綿類之儀は、前書
之通永年仕来候由緒も有之候二付、
向後雅楽頭方二限家別払御聞置

相成、其余諸家国産之品は家別払
難相成筈、奉行所内規矩二仕置候ハ、
紛敷筋も有御座間敷と「奉存候、」尤今般

隠岐守申上候縞木綿之儀は、品柄も
違ひ、殊二同領分予州松山一領限之
産物二而、他二類品も無之候間、旁
家別払御聞置相成候間、不相当之
筋無御座候二付、別紙下ケ札を以申上候
儀二御座候、依之御下之書付類四通
返上、此段申上候、以上

西六月

石谷因幡守

黒川備中守

「(29)

「(30)

「(31)

⑥文久元酉年八月 右同断 水戸殿国産売捌方之義二付御差図振申上
(扉、小口見出し)

「(朱書)

『文久元酉年八月』

水戸殿

国産売捌方調

(朱書)

『六』

中村次郎八

「(32)

(朱書)

『酉八月五日森鉄蔵を以御渡、同廿七日挨拶下ヶ札付返上』

「

「備中守殿

石谷因幡守

水戸殿国産物売捌方之義二付、
別紙之通御差図振取調可申上哉と
存候、依之書類相添、此段及御相談候

酉八月

御書面之趣致承知、申上案其外一覽

致し候処、拙者儀何之存寄無之候、依之
書類返却、此段及御挨拶候

酉八月

黒川備中守

「(34)

「大和守殿

水戸殿国産物売捌方之義二付申上候書付

石谷因幡守

町奉行

水戸殿国産物之義、領民近年別而

及窮迫、荷主共仕入方も(朱抹)不行届(朱書)「兼」候間、

「(35)

国許方問屋方へ相送差支無之分ハ、
是迄之通取引為致候由之処、其節

不向二寄、産物は一ツ目石置場江預ヶ置、

其都合二寄、是迄(朱書)「売捌」付候問屋共江、為売捌

候様被致度旨被申上候書面御下ヶ、取調

可申上旨被仰渡候

此儀右産物之品柄相分兼候間、同家
来江相尋候処、紙・煙草・紅花・茶

漆・氷菟蓐・鯉節・種油・醬油・炭・
槓板・材木・砥石・燧石・塗物・瀬戸物
薬種・綿。椎茸・菜種等、同家江出入
いたし候元浜町庄八地借藤八江取扱被

「(36)

申付、問屋共江為売捌候趣二付、同人并
夫々問屋共呼出相糺候処、兼而問屋共方
荷元江仕切、前金引合等有之分

相除、其余御当地江積廻し、前書石置場
おゐて入札払之義、右藤八取扱候旨申立、

「

問屋共義も右品々素人江直売無之、
問屋二限入札払相成候得は差障無之旨
申立候間、右之廉御聞置相成候而も
可然哉二候得共、産物之内不向之品を石
置場江預り置候義は不都合之次第第二
相聞、悪弊を生し可申哉、国々領主
地頭おゐて、産物を買集困置ル売

「(37)

同様之及取計候義二付而は、天保十三
寅年十月中御触之趣も御座候間、不向
之品を預り置候義は被及御沙汰方
可然哉二奉存候、

右取調候趣、書面之通御座候、依之御渡
被成候書付書通返上、右御触写相添、」
此段申上候、以上

酉八月

石谷因幡守
黒川備中守

「(38)

近来五畿内・中国・西国・四国筋国々
領主地頭二おゐて、自国之産物は不及
申、他之国産をも夫々手段を以買集
売荷を蔵物二引直し、蔵屋敷江困置
相場高直之砌手払、又は銘々出入
町人共二為売捌、ル売同様之及取計、
依而は、領主地頭之權威を以、他之
売買江差障、或は無謂他所之もの方
冥加銀等為差出候哉之趣も相聞、以之外之
事二候、尤諸色直段引下ヶ方之義二付、
追々相触候趣も有之候上は、領主地頭二
おゐて前書悪弊早々改革可然之（は力）
勿論二候得共、万一是迄之仕来二
因循いたし不良之取計於不相止は、
糺之上急度可被及御沙汰候

「(39)

右之趣可被相触候

天保十三寅年十月

「(40)

〔大和守殿
書付

〔水戸殿

水戸殿表国産物追年相衰

勝手向江も相響キ候義二付、役人共
精々引立方世話致し候得共、領民共
近年別而及窮迫、荷主共も元薄
之者二而、仕入方也不行届、左候込
領民共迷惑不致様手当致候二は、
多分之入費二而難行届、去込
其促難打捨置候二付、国許より
是迄問屋方江相送り差支無之品二ハ、
勿論是迄之通り取引為致候得共、
其節之不向二寄、産物等一ツ目
石置場江預り置、其都合二寄、是迄
売払附候問屋共江、為売捌候事二
被致候得は、勝手向都合二も相成候
義二付、右之通為取計候様役人とも
申出候、尤御府内商人共江差響候
義は勿論無之候間、被申達候迄も
無御座候得共、此節柄之義二付、此段
一応及御物語置候様被申付候、以上

申八月

書面之趣一覽評議仕候処、水戸表
国産物追年相衰、御同所勝手

向江も相響候二付、引立方世話

被致候得共、領民近年別而及窮迫、

荷主共も身薄之もの二而、仕入方也不行届、左候込手当いたし候二は多分之

入費二而、難行届候二付、国許方問屋

方江相送差支無之分は、是迄之通

取引為致候由之处、其節不向二寄

産物は一ツ目石置場江預り置、其

都合二寄、是迄売捌付候問屋共江

為売捌候事二被致度、尤御府内

商人共江相響候義者無之旨等

被仰立、右は去ル亥年問屋組合再興

之節、諸家国産之義は、其筋

〔(44)〕

〔

〔(43)〕

〔

〔(42)〕

〔

〔(41)〕

〔

問屋江相払可申旨御触面之趣二相障候義も
無之候得共、不向之節は石置場江
預り置候と有之候間、一応町奉行
見込をも御尋之上、故障筋も無御座
候ハ、書面之趣（朱書）「被」御聞置可然奉存候
申九月

松平出雲守
塚越大藏少輔
設樂八三郎
福田八郎右衛門
立田録助

「(45)」

書付

覚
紙 煙草 紅花 茶 漆
氷菟蓐 鯨節 種油 醬油
炭 槓 板材木 砥
燧石 塗物 瀬戸物 藥種
綿 椎茸 菜種
右之通御座候、以上 水戸殿国産取扱掛
十月 落合鏞之助

「(46)」

乍恐書付ヲ以奉申上候
一、水戸様御国産

紙 煙草 紅花 菜種
茶 漆 椎茸 氷菟蓐
鯨節 種油 醬油
砥石 瀬戸物 藥種
綿 炭薪 板材木 燧石
塗物

「(47)」

右品々之内、兼而御当地問屋共方仕切、
前金引合等有之分相除、其余本所
一之橋際御石置場江御積廻シ之上、
元浜町庄八地借藤八江取扱被仰付、
其筋問屋江入札御払可相成義、差障
有無御尋二御座候、右品々素人江
御直売無之、私共仲間二限り入札
御払相成候得は、聊故障無御座候、
尤御払之御仕法等取扱人藤八江
引合候処、未々御治定不相成趣、
御仕法相分り候上、万一差支之義も

「(48)」

御座候ハ、其砌奉申上度、此段奉申上候、以上

紙問屋行事

南新堀壱丁目家持

森田屋半兵衛煩二付代

万延元申年十月朔日

勘次郎印

堀留組畳表問屋行事

小網町貳丁目家持

倉田屋半七煩二付代

銀之助印

通町

内店組

小間物問屋之内

丸合組行事

通貳丁目庄次郎地借

枡屋五郎三郎煩二付代

嘉兵衛印

茶問屋壺番組行事

本町四丁目利兵衛地借

大橋屋太郎次郎勢州住宅二付

店支配人伊助煩二付代

儀八印

漆問屋行事

堀江町貳丁目重兵衛地借

越前屋

清次郎印

乾物問屋行事

万町三郎右衛門地借

伊豆屋清吉煩二付代

清兵衛印

地廻り水油問屋行事

深川大和町家持

湯浅屋

十郎兵衛印

地廻り醤油問屋行事

北新堀町元右衛門地借

徳嶋屋市郎兵衛煩二付代

宗吉印

深川木場材木問屋行事

深川木場町家持

柳原屋角兵衛紀州住宅二付

店支配人太七煩二付代

藤七印

板材木問屋

熊野問屋

組合行事

本八丁堀三丁目家持

三河屋八三郎煩二付代

└ (50)

└ (49)

竹木炭薪川辺問屋行事 忠蔵印

本所茅場町三丁目家持

山田屋庄次郎煩二付代

宗助印

浅草山之宿町家持

清水屋惣七煩二付代

半七印

芝金杉裏四丁目家持

鍋屋七郎兵衛煩二付代

久兵衛印

大工道具打物問屋行事

通油町家持

炭屋七左衛門京都住宅二付

店支配人

新兵衛印

塗物問屋行事

尾張町壺丁目新地

佐兵衛地借

万屋

文次郎印

瀬戸物町問屋行事

南新堀壺丁目五人組持地借

高嶋屋藤右衛門煩二付代

久之助印

本町組薬種問屋行事

橘町三丁目家持

大坂屋重八郎煩二付代

松兵衛印

大伝馬町組薬種問屋行事

瀬戸物町半右衛門地借

和泉屋金蔵煩二付代

仙蔵印

操綿問屋行事

大伝馬町壺丁目幸平地借

長谷川屋治郎吉勢州住宅二付

店支配人

平七印

真綿問屋行事

通旅籠町茂兵衛地借

丸屋庄左衛門京都住宅二付

店支配人治兵衛煩二付代

伊三郎印

下り鯉節塩干肴問屋行事

└ (51)

└ (52)

└

└ (53)

小舟町貳丁目和右衛門地借
榎坂屋卯兵衛煩二付代

忠兵衛印

四日市組塩干肴問屋行事

青物町六左衛門地借

大坂屋治兵衛煩二付代

吉兵衛印

小舟町組同

小舟町三丁目文左衛門地借

熊野屋文右衛門煩二付代

権右衛門印

通町組
内店組
小間物問屋行事

宝町貳丁目家持

木屋

九兵衛印

関東米穀三組問屋行事

小網町壱丁目家持

丸屋勝次郎煩二付代

治兵衛印

地廻米穀問屋

浅草天王町常藏地借

坂倉屋

善兵衛印

御番所様

乍恐以書付奉申上候

一、元浜町庄八地借藤八奉申上候、

水戸様御国産品之内、其筋問屋方

兼而荷元江仕切、前金引合

有之分相除、其余御当地御積

廻し、本所一之橋際御石置場おゐて、

夫々問屋へ入札御払二可相成、右二付

私江取扱之義

御屋形御役人中方被仰付、依之

今般問屋共并私義も被召出

問屋共差障有無御尋之上、

私方も引合候様御沙汰被為在

候間、右問屋共江引合候処、差支候儀

無御座候、依之此段奉申上候、以上

元浜町庄八地借

万延元申（朱書）

「年」十月

藤八印

御番所様

└ (57)

└ (54)

└ (55)

⑦文久元酉年八月 稲葉伊予守領分産物青筵売捌方之義二付調
(扉、小口見出し)

「
(朱書)

『文久元酉年八月』

稲葉伊予守領分産物之
青筵売捌方之儀二付調

(朱書)

『七』

安藤源五左衛門

「
(58)

(朱書)

『申十二月廿三日、水谷武治を以御渡』

稲葉伊予守家来
大崎十郎兵衛

伊予守領分豊後国臼杵産物

青筵之儀、天保二年六月

町御奉行榊原主計頭様江御届

申上、日本橋通壱町目近江屋

惣兵衛江引受方申付為取捌候得共、

追々不引合二付中絶仕居候、然ル処

此節相廻候付、本所徳右衛門町

貳町目万屋兵四郎引受、同断

林町五町目相模屋安太郎

世話人二而潤沢相廻、軒別売捌二

仕度、此段奉願候、以上」

稲葉伊予守家来

十二月廿三日

大崎十郎兵衛

「
(60)

(朱書)

『酉八月十八日、長江淳右衛門を以上ル』

書面青筵之儀、着荷之節

蔵元方其筋問屋行事江相達、

入用望之束数取極、其外廉々は

今般問屋并蔵元示談およひ候

書面江、林盛木奥印致し差出

候二付、右之趣承り置候間、其通

相心得、素人直売買者不相成

候間、其旨可被心得候

「
(61)

（朱書）

『西六月廿八日森鉄蔵ヲ以御渡二付館市右衛門へ達』

稲葉伊予守家来

大崎十郎兵衛

稲葉伊予守領分豊後国曰

杵産物青莚家別売捌

之義、旧臘廿三日御先役池田

播磨守様江奉願置候処、未々

御差図無御座当惑仕候、何卒

於御奉行所御取調、早々願之通

御差図被成下候様奉願候、以上

稲葉伊予守家来

六月廿八日

林盛木

（朱書）

『西七月九日出ス』

稲葉伊予守領分曰杵産物青莚

軒別売願之儀取調申上候書付

館市右衛門

去申十二月廿三日池田播磨守殿御下ケ

稲葉伊予守領分豊後国曰杵

産物青莚之儀、天保二卯年

榊原主計頭殿江御届申上

取捌、其後中絶仕、此節相廻し

本所徳右衛門町貳町目万屋兵四郎

引受、同所林町五町目相模屋安太郎

世話人二而、軒別売捌仕度旨、

同家来大崎十郎兵衛願書之趣、

相調候処、畳表青莚引受候

問屋共四組、天保度例を以素人

直売無之、問屋限入札払相成

候得は差障候無之、家別売捌

之儀は、自然糴買二相成、難儀仕

候旨申立候処、天保度之儀問屋

御差止以前二有之、（朱抹）軍（朱書）「一旦」相潰、嘉永度

問屋再興後、同六丑年松平

左衛門尉領分豊後国府内産物ハ、

嶋青莚引請方当御役所御調

之上、問屋并蔵元示談仕、家別

売二致し候共、行事之者直組

取極候共、両様之内対談次第

取極可申旨熟談仕、左衛門尉

「（63）」

「（64）」

家来奥書仕濟口差上候近例

有之、同国同品引受方二付、当二月

播磨守殿江相伺候処、七嶋蒔振合も

有之、再応取調可申上旨被仰渡候

右依之、重立候名主共江申渡為取扱

候処、問屋共振合不申候間、私方江

呼出し再三相諭候処、稻葉家産物

之儀は、天保度中絶之品二付先例

入札払奉願度候得共、猶近例

御利解承伏仕、則七嶋青蒔

振合を以、今般稻葉家産物青蒔

家別売致候由「共」、行事之者直組

取極候共、両様遂示談取扱度旨、

四組問屋共申之候、然ル処先月廿八日、

猶又稻葉伊予守殿家来方旧臘

願置いまた御差図無御座当惑

仕、何卒於御奉行所取調、早々

願之通御差図被成下候様願書差上、

軒別売捌一方奉願候儀と相聞、

左候得は問屋共据合不申、且播磨守

殿江申上候通り、同国同品之儀引受

方差別出来候而は不平之儀と

奉存候、此上者左之もの共

表店組畳表青蒔

問屋行事

通寺町目

家持

近江屋三左衛門

代

又兵衛

堀留組畳表荒物

問屋行事

堀江町寺町目

文兵衛地借

大坂屋伝兵衛

代

仙吉

新堀組同行事

北新堀町善助地借

山田屋新太郎

店預り人忠兵衛

代

由兵衛

住吉組同行事

┌

└ (65)

┌

└ (66)

┌

└ (67)

鎌倉町又兵衛地借

扇屋六右衛門

代

嘉七

右曰杵産物青莖引受人

本所徳右衛門町貳町目

家持

兵四郎

同世話人

同所林町五町目

家主

安太郎

右之もの共、当御番所江御呼出、御直調被成下候ハ、再応稻葉家方申上候意願通し、且下方之もの共江抄取据合可申と此段奉願候、則別紙七嶋青莖引受方濟口写相添、御渡被成候書付貳通返上仕、依之申上候、以上

西七月

館市右衛門

乍恐以書付奉申上候

一、松平左衛門尉様御領分大分郡府内七嶋青莖引請方之儀、先達而御尋之節、先規取調置表問屋・荒物問屋四組行事共方奉申上候二付、先規之振合を以、去子年中方御払相成候処、御領主御家来衆方、猶又被申上候次第も有之候二付、四組問屋共并蔵元被召出、再示談可仕旨奉蒙御沙汰候二付、御払之節仕法、左之通示談仕候趣、奉申上候

一、七嶋青莖、大坂表方積付船元方申越候

案内書を以蔵元方四組行事へ相達候砌、荷物入用望之束数取極メ、右名前年番行事江承置、船入津之度毎船手より送り状年番行事江持参致、名前引合裏書并表印いたし、船手之者方其送り状面之通、買請候問屋江水揚げいたし候

但買附書を以案内いたし候節、組々片寄

不申候様、堅く平等二相廻し可申候

一、入津荷物直組之義は、新口貳三艘入津之節、四組立合其年之品柄善悪見分之砌、家別売二致候共、行事之者直組取極候共、両様之内対談次第取極可申候、其跡直段之儀は時之相場品柄二応し、翌年古新荷物境目迄、同様兩三度ツ、直立仕候

「 (69) 」

「 (68) 」

「 (70) 」

一、代金取集之儀は、家別売之分ハ滞候共、
 相對二而取引可致、尤行事之者直組取極
 買取候、口立は其行事二而取集相渡可申候
 一、船中二而漏痛等之品は、買請人より廻船
 船方江直々弁限之儀、引合可申候
 一、船積付案内無之荷物見越売等、一切
 致間敷候
 一、廻船運賃并水揚買請人蔵前持込、
 迄之運賃并海難損金は、御領主様
 御一手持二取極候
 但買請人居宅遠方之分は、明和度取極メ
 之通、半駄賃買請人方方可差出候
 右之通御産物四組問屋江引請方仕法、
 再応請合熟談仕候二付、此段奉申上候、
 御聞濟奉願上候、以上

表店組疊表青莚問屋
 行事
 通壺丁目源内地借
 九右衛門煩二付代
 仁兵衛

「(71)」

嘉永六丑年十月

同
 同町家持
 惣兵衛
 堀呂組疊表荒物問屋
 行事
 小舟町壺丁目藤次郎地借
 小四郎
 同
 堀口町壺丁目
 文兵衛地借
 九兵衛
 新堀組疊表荒物問屋
 行事
 南新堀町壺丁目
 茂兵衛地借
 茂兵衛
 同
 箱崎町壺丁目
 伊右衛門地借
 清兵衛
 住吉組疊表荒物問屋
 行事
 鎌倉町又兵衛地借
 六右衛門煩二付代

「(72)」

源七
同
伊勢町家主
平蔵煩二付代
弥兵衛

深川大嶋町家持
弥兵衛煩二付代

取扱人 作兵衛
五人組 常八
右主茂左衛門煩二付代

常蔵

諸色掛

堀江町名主

熊井理左衛門

長谷川町名主

鈴木市郎右衛門

大伝馬町名主

勘ヶ由

坂本町名主

新助後見

新右衛門

前書之通四組問屋共、江蔵元弥兵衛より
示談行届候二付、此上差支筋無御座候、以上

松平左衛門尉家来

渡辺瀧右衛門

御奉行所

（扉）

上

乍恐以書付奉申上候

一、稲葉伊予守様御領分豊後国臼杵御産物青莚

家別売之儀、御同家方被仰立候二付、引請方之儀先達而

御尋之節先規取調候処、去儿天保二卯年中右御産物

青莚之儀二付、御調之節御答奉申上候通、仲間一同立合

入札を以買取申度段、畳表問屋・荒物問屋四組

行事共方奉申上候処、嘉永六丑年松平左衛門尉様

御産物同国七嶋青莚引請方之儀二付示談仕候近例

も有之、同国同品区々二相成候も不都合二付、再忒

勘弁可仕旨被仰含候二付、此度右之振合を以問屋并

蔵元示談之上、御払之節仕法左二奉申上候

一、曰杵青莖積元方申越候案内書を以

藏元方四組行事江相達し候砌、荷物入用望之束数取極見分、四組年番行事へ

承置、船入津之度毎船手方送り状、年番行事へ持参いたし船手之もの方其送り状面之通、買請候問屋へ水揚げいたし候

但買附書を以案内致候節、組之片寄

不申様堅く平等二相廻し可申候

一、入津荷物直組之義ハ、新口式三艘入津之

節四組立合、其年之品物善悪見分

之砌家別売二いたし共、行事之者二而直組

取極メ候共、両様之内対談次第二取極メ

可申候、其跡直段之儀は時々相場品物二

応し、翌年古新荷物境目迄、同様

両三度ツ、直建仕候

一、代金取集メ之儀は、家別売之分は、

滞候共相對二而取引可致、尤行事之者

直組取極買取候、口建は其行事二而取集

相渡可申候

一、船中二而漏痛等之品は買請人方廻船

方船手江直々弁銀之義、引合可申候

一、船積附案内無之荷物見越売一切

致間敷候

一、廻船運賃并水揚げ買請人蔵前江

持込迄之運賃并海難損金は、御領主様

御一手持二取極候

但買請人遠方之分ハ、明和度取極之通

半駄賃買請人方可差出候

右之通御産物四組問屋江引受方仕法

再応請合熟談仕候二付、此段奉申上候、

御聞濟奉願上候、以上

表店組

畳表青莖問屋行事

通壱丁目家持

三右衛門煩二付代

又兵衛[㊦]

文久元酉年七月廿九日

堀留組

畳表荒物問屋行事

堀江町壱丁目文兵衛地借

伝兵衛煩二付代

仙吉[㊦]

新堀組

同 行事

┌

└ (77)

┌

└ (78)

┌

└ (79)

┌

北新堀町善助地借
新太郎煩二付代
弥兵衛印

住吉組
同 行事

鎌倉町又兵衛地借
六右衛門煩二付
弥七印

本所徳右衛門町式丁目
家持

兵四郎煩二付代

蔵元
安太郎印

取扱人
五人組
喜三郎印

名主太郎兵衛煩二付
喜兵衛印

代

前書之通四組問屋共蔵元兵四郎方示談

仕候二付、此上差支筋無之候、以上

稲葉伊予守家来

林盛木印

御番所様

「(81)

「(扉

上

「(82)

稲葉右京亮様御領分豊後国臼杵御産物青筴、其筋
問屋江家別売之義、御同家方被仰立候二付、右問屋四組行事共
并蔵元取扱人被召出、示談方被仰付、懸合之上家別売二致シ
候とも、行事之者直組取極候共、両様之内対談次第いたし候筈、
其外廉々懸合行届、文久元酉年七月中書面一同より
差上御聞濟相成、其已来右振合二而取引仕来候処、行事

「(83)

并家別両様之売方二而は、蔵元不都合之趣二而、今般猶又
家別売一方二取極、尤新口初荷之義は年々藺草豊凶
品之善悪有之候二付、壹々年二一度は一同立合直組致し候積、
対談行届候旨、私共迄申聞候、先年当 御番所江御産物
取扱振書面差上候義二付、別紙之通、問屋并蔵元方差出候、
書付相添奉申上候、以上

子

諸色掛

「

四月

（扉）

上

名主共

（84）

（85）

以書附ヲ申上候

一、曰杵様御産物青蕤御弘方、文久

元年酉七月家別売二いたし候共、行事

之者共直組取極候共、兩様之内対談次第と

取極候所、今般藏元兵四郎方前書兩様

之売方二而は不都合二付、已来家別

売二いたし度趣示談二付、一同相談仕候所、

新口花延之義は、年々豊凶有之候二付、一同

立合、品柄見分之上直組取極仕、其外は

家別売承知仕候、然ル上は売方束数

格別不同無之様、双方示談行届申候

間、此段奉申上候、以上

表店組畳表問屋行事

通四丁目家持

元治元年子三月

近江屋

久右衛門

代佐兵衛印

堀留組右同断

堀江町壱丁目店者地借

大和屋

直兵衛印

新堀組右同断

北新堀町善助地借

山田屋

新太郎

代忠兵衛印

住よし組右同断

鎌倉町又兵衛地借

扇屋

六右衛門

代甚七印

蔵元取扱人

本所徳右衛門町貳丁目家持

万屋

兵四郎

代市太郎印

諸色掛り
名主衆中

「
(88)
」

⑧文久二戊年二月 水戸殿国産油売捌場所替之義二付御城付方懸合調
(扉、小口見出し)

文久二戊年二月

水戸殿国産油売捌場所替
之義二付御城付方掛合調

(朱書)

『八』

└

└ (3)

(朱書)

『文久元年

西十二月六日、淳右衛門を以御渡』

水戸殿

「石谷因幡守殿江

御城附

水戸殿産物油売捌方取扱

人伊勢屋伊兵衛儀、弘化二巳年中

及御掛合、是迄本所一ツ目於石

置場、問屋共江入札払致来候処、

追々国許方相廻手狭二相成候二付、

今般小林蔵屋敷前抱地之内江

為引移、同様為取扱申度候、尤

右者西三月中砂糖取扱人井上

次郎右衛門儀、同断二付場所替之義

及御掛合候節、御下札を以御挨拶之

趣も有之候義二付、此度之義も兼而

御含御聞置二相成候様致度、此段

及御掛合候様、役人共申候

西十二月

└ (5)

└

書面御領分水油捌方之儀、小梅「御」蔵屋敷前
抱地之内二而被取扱候共、是迄之通、素人直売
不致、問屋共限入札払二相成候儀二候得は、於町方
差支之筋無之候、尤右問屋共江は為心得
申渡置候様可致候

戊二月

└ (6)

└

水戸殿国産水油売捌所場所替
御掛合之儀取調申上候書付

館市右衛門

水戸殿産物油売捌方取扱人伊勢屋
伊兵衛儀、弘化（朱書）「二」巳年中及御掛合、是

「（7）」

迄本所書ツ目於石置場、問屋共江入札
払致来候処、追々国許方相廻り手狭
相成候二付、今般小梅蔵屋敷前抱地之
内江為引移、同様為取扱申度、尤右は
当三月中砂糖取扱人井上次郎右衛門
儀同断二付、場所替之儀及御掛合
候節、御下ケ札を以御挨拶も有之候儀
二付、此度之儀も兼而御含御聞置二相成
候様致度段、役人共申候旨、御城附御掛
合事御下ケ被成候間、取調候趣、左二申上候

「

地廻り水油問屋行事

南八町堀壱丁目代地

家持

七五郎

「（8）」

外

壱人

右は前書水戸様御国産水油売捌
方之儀、弘化二巳年之頃は問屋
再興以前二付、仲間書類等相見不申
候得共、是迄御払之節二売捌方引受人
伊勢屋伊兵衛方廻状差越、本所
一ツ目於御石置場二、私共罷出入札之
上買受来候、追々相廻り御手狭二相成
候二付、今般小梅御蔵屋敷前抱地之内江
引移、御場所替相成候而も、是迄之通
素人御直売無之、私共仲間二限入札
払相成候得は、聊差障候儀無御座
旨申之候

「（9）」

但右は地廻り水油問屋共引受持前

二而、下り水油問屋共は差加り不申候

段、同問屋行事申之候

右取調候処、書面之通御座候、弘化
二巳年之儀は、私共方書留等も相
見江不申候得共、是迄之通地廻り
水油問屋仲間限入札払相成候得は、
売捌所本所一ツ目石置場手狭二付、
今般小梅御蔵屋敷前抱地之内江、

下ケ札

引移場所替而已之儀、差障等相聞
不申候、依之御渡被成候御掛合書写
返上仕、此段申上候、以上

但右場所替御聞置相成候上は、為心得
地廻り水油問屋共江申渡候様可仕
候間、其節御沙汰被成下度奉存候

西十二月

館市右衛門

下札

当三月水戸殿産物砂糖入札払、本所
一ツ目石置場手狭二付、松平大学頭
本所蔵屋敷江為引移候儀、御向様
御取扱書類御下ケ被成候処、右は
御同様と、私共江御下ケもの無御座
候間、留記相見不申、御渡被成候御書類
返上仕候

「(11)」

弘化二巳年十一月廿七日

「鍋嶋内匠頭殿江 水戸殿 御城附

水戸殿領分産物類御府内江指出
売捌来候処、領民共方追々願之
趣も有之候間、領中為扱此度
屋形二而致世話取扱候二付、本所
一ツ目石場之内江、右産物類為相廻、
同所ニおゐて入札払為取計候間、
兼而御聞置二致し度、此段及御届
置候様、役人共申候

「(12)」

巳十一月

書面御領分産物類捌方被御
申付候趣、御達之趣致承知候
巳十一月 鍋嶋内匠頭

「(13)」

「左衛門尉殿 鍋嶋内匠頭

水戸殿領分産物類本所一ツ目
石場ニおゐて入札払取扱候儀二付、
別紙之通 御城附方達有之候処、
去ル丑年問屋組合等停止被
仰出候御書付二、諸家国産類其外、
総而江戸表江相廻し候品々は、問屋ニ

「(14)」

不限出入之もの等引受売捌候
儀も勝手次第と有之二見合、手捌
之儀は猶更子細も有之間敷哉二付
承届、以後諸家方同様之届申出
外二子細も無之分は、其度々不及
御相談承届可申哉と存候、右は
両御役所取扱振区々相成候而は
如何二付、此段及御相談候

巳十一月

「(15)」

御書面之趣致承知、別紙をも一覽
致し候処、存寄無之候、尤拙者御役所江
以後諸家国産物手捌之儀達
有之候節は、御懸合之趣を以承届、
区々不相成様可致候、依之別紙式通
返却、此段及御挨拶候

巳十一月

遠山左衛門尉

「

南

市中取締掛

北

御同役中始

御同役

御手紙致拝見候、然は当三月中
水戸殿産物砂糖取扱人井上
次郎右衛門売捌所場所替之義二付、
右留記御見合之義有之可差越旨、
被仰越致承知則差進申候、右御報
得御意候、以上

十二月十日」

「(16)」

(朱書)

『文久元酉三月晦日』

「石谷因幡守殿江

水戸殿 御城附

水戸殿産物砂糖取扱人井上
次郎右衛門儀、安政五年九月中
及御懸合、是迄本所一ツ目於石置場
問屋共江入札払致来候処、追々国許方
相廻り、手狭二相成候付、今般松平大学頭
本所石原蔵屋敷江為引移、同様
為取扱候間、兼而御合御聞置
之上、問屋共江も御申渡二いたし度、
此段及御懸合候様、役人共申候

西三月

「

「(17)」

御挨拶案

書面砂糖之儀は、問屋引受之品
無之候二付、先達而申懸候通砂糖屋二
不限、菓種問屋并素人江も売捌
御申付不苦候、尤書面之趣は為心得、
右問屋并砂糖渡世之もの共呼出
申渡置候儀二御座候

└ (18)

南 北

市中取締掛中様 市中取締懸

御紙面致拝見候、右様弥御安全
被成御勤仕珍重奉存候、然は
水戸殿産物油、小梅蔵屋敷
前抱地之内二而、問屋共江入札
払之儀、水戸殿御城附方懸合
有之候二付、町年寄江御下御取調
有之候処、差支之筋は相聞不申候得共、
弘化二巳年中懸合済之御留記
無之、町年寄共方も同様二付、
其頃此方取扱二而相済候儀二候ハ、
右留記差遣可申旨被御申越
致承知候、右は其節御相談廻
相成候間、其御方二も御書留有之候
儀とは存候得共、書類写取別紙
差進申候、尤諸問屋再興以前
之儀二付、今般之見合二は難相成哉、
尚御勘弁有之候様存候、此段
御報得御意候、以上

二月三日

└ (20)

ヒレ末二記ス

水戸殿御領分水油売捌方之義
場所替之義問屋共江可申渡受取候案

館市右衛門

先日御調御座候

水戸（朱抹）殿（朱書）「様」御領分水油売捌方之義、
小梅御蔵屋敷前抱地之内江御引移
御取扱（朱書）「被成候二付」、是迄之通、素人直売無之、
問屋共限入札御払相成候筈、右御屋形
様江御達相済候二付、此旨可相心得段

└ (21)

被仰渡奉畏候、依之御受書差上申候、
以上

戌二月 日
下ケ札

地廻り水油問屋行事
辰蔵

札ケ下

本文水戸様御国産水油之義は、
地廻り水油問屋共引受持前二付、
下り水油問屋共は加り不申候旨、
去酉十二月御調之節、右下り油
問屋行事共申上候

鰭付

朱書御書入之通、今十六日
地廻り水油問屋行事本八町堀
壱丁目代地相模屋七五郎外
壱人江申渡候
二月十六日 館市右衛門

┌
(22)
└

└

└

⑨文久二戊年四月 二条殿領地瀬戸物売捌所場所替之義調
(扉、小口見出し)

┌

文久二戊年四月

二条殿領知瀬戸物売捌所場所
替之義二付調

(朱書)

『九』

└

└ (23)

(朱書)

『文久二戊年四月十七日

紀伊守殿上倉彦右衛門を以御渡』

御口状覚

去万延元申年十二月十日小谷

通新町家主又兵衛宅

二条殿瀬戸物御売捌御用所二

被相設候段、御用番久世大和守殿江被

仰立置候之分、今般右又兵衛退去仕、

跡家作之儀、同所家主新十郎地借

吉五郎引受候二付、同人宅右場所其俣

御用所被相設置候、為念此段御届

被」

仰入候、以上

二条殿御使

戊四月

塚原左馬

└ (25)

└

前例覚

安政二卯年七月廿五日深川相川町江

二条殿御用所被相設候段、其節

御用番久世大和守江御届被

仰入候処、御落手之上、町御奉行

池田播磨守殿御調二而相済候事

大和守殿御達振

二条殿領地より出候瀬戸物売捌

所、此度深川相川町吉右衛門店利三郎

宅江場所替被致候旨、御届被 仰入」

候趣各承置候、尤委細町奉行承合

└ (26)

候様、可被致候事

万延元申年十二月十日

二条殿御用所場所替、下谷通新町

家主又兵衛宅御用所二被相設候段、

御用番右同御方江御届被

仰入候処、御落手之上、右同御奉行所

御調二而相濟候事

右之通御座候、以上

二条殿御使

戊四月

塚原左馬

(朱書)

『此書面徳之進を以御下ケ二付、御月番御取扱
二而宜旨申上、本紙は写之上、同人を以上ル』

(朱書)

『戊四月廿八日、森鉄蔵を以御渡』

「備中守殿江相談もの

拙者儀何之存寄

無之候

戊四月 備中守

書面二条殿領分方焼出候瀬戸物

売捌所場所替之義、一応町年寄江

申渡、為取調候処、是迄之振合を以

取扱候事二候得は、今般之下谷通

新町新十郎地借吉五郎宅、売捌所二

取扱候而も差支候筋無之旨申立候間

其(朱杓)後(朱書)『段』二条殿家司江被仰達

可致哉奉存候

戊(朱抹)卯(朱書)

「六」月

石谷因幡守

黒川備中守

(朱書)

『戊六月廿七日 和泉守殿佐久間三蔵を以御渡』

右挨拶

覚

二条殿領地方出候瀬戸物売捌所、

下谷通新町又兵衛退去二付、

此度同所新十郎地借吉五郎

引受、其俣売捌所二被相設候旨

被仰入候趣承置候、尤委細町奉行

承合候様可被致候事

〔朱書〕

「戌六月廿九日
和泉守殿江佐久間三藏を以上ル」

一覽仕候

戌二月廿八日 小笠原長門守
黒川備中守

扣 和泉守

二条殿御使

塚原左馬

右一覽

付向方二而出来

申渡案

申渡

瀬戸物問屋

行事

〔朱粹〕

「(30)」

力 ケ 紙

二条殿瀬戸物売捌所深川相川町
吉右衛門店利三郎宅、先年地震後
不都合二付、今般下谷通新町家主
又兵衛宅江場所替相成候二付、去ル安政
二卯年場所替之節、申渡之通相心得
問屋一統申通買受可致候

下谷通新町

〔朱粹〕

〔朱書〕「同」

力 ケ 朱 書
(紙

名主
月行事

名主
新十郎
五人組
名主

前書瀬戸物問屋共江申渡之趣相心得、夫々
心付候様可致

右之通御町御奉行所被仰渡候旨〔朱書〕「間」其旨可存

〔粹線朱書〕

下 ケ 札

〔酉八月

力 ケ 紙

同 〔戌四月

「(31)」

（朱書）『力ヶ紙』
（朱梓）

去酉年申渡候、下谷通新町家主又兵衛宅二条殿瀬戸物売捌所之義、今般右又兵衛退去致し跡家作之義、同所家主新十郎地借吉五郎引受候二付、同人宅右場所其儘売捌所被相設置候間、去酉年申渡之通、相心得問屋共一統買受可致候

下ヶ札

（朱書）
『去酉年又兵衛義者家主二付、月行事名主江申渡候、今般吉五郎義者地借二付、右家主并五人組名主江申渡候様掛紙仕候』

二条殿瀬戸物売捌所御届之趣取調申上候書付

舘市右衛門

紀伊守殿御下

去ル万延元申年十二月下谷通新町家主又兵衛宅

二条殿瀬戸物売捌御用二被相設候段被仰立置候処、今般右又兵衛退去仕跡家作之儀、同所家主新十郎地借吉五郎引受候二付、同人宅右場所其儘御用所被相設置候、為念此段御届被仰入候旨、二条殿御使塚原左馬并前例覚書御渡被成、取調可申上旨被仰渡候

依之相調候処、右は去々申年十二月大和守殿御下ヶ、安政度深川相川町利三郎宅
二条殿瀬戸物売捌御用所不都合二付、場所替右下谷通新町家主又兵衛宅御用所二被相設御届被仰入候旨、

└ (33)

└ (32)

└ (34)

二条殿御使関口監物并前例
手覚書相添、池田播磨守殿
御勤役中御渡被成取調

候処、差障候儀無御座、其旨

申上、去酉年八月御向様方

場所替御聞届、瀬戸物問屋

行事并下谷通新町名主

月行事江可申渡旨被仰渡候

一、今般右下谷通新町役人共

取調候処、前書家主又兵衛

身上不如意二相成家守退役、跡

新十郎と申もの家守相勤、并

又兵衛家作之儀、右新十郎地借

吉五郎引受候二付、同人宅

右場所其尽

二条様瀬戸もの売捌御用所二

相成、町内二おゐて差障候儀

無御座、尤是迄又兵衛取扱候

振合を以取計候由、吉五郎

申之候段、右町役人共申立候、并

瀬戸もの問屋共相尋候処、

右は問屋共買受方は迄

通相心得候得は差支無之

候旨申聞候

右取調候処、書面之通御座候、

今般御届之趣御聞置相成

候ハ、去酉年申渡之廉を以、

猶又瀬戸もの問屋并通新町

町役人共江申渡候様可仕候哉、則

去酉年申渡江掛紙仕入御覧

御渡被成候書類返上仕、此段

申上候、以上

戊四月 館市右衛門

└ (35)

└ (36)

└

└ (37)

└

⑩文久二戌年八月 浜吉組と唱候問屋共引受売捌候産物入津次第箱館会所江届出
改受候様箱館奉行方懸合調

(扉、小口見出し)

「文久二戌年八月

安藤对馬守殿御下ケ

箱館奉行申上

下り鯉節問屋之内浜吉組と唱え

問屋共引受候蝦夷地産物

取扱方之義二付調

(朱書)

『拾』

小林藤太郎

┌ (38)

└

「町奉行衆

村垣淡路守
箱館奉行

浜吉組と唱候問屋共引請売捌候蝦夷地

産物、入津次第以来会所江届出改受

候様、右問屋共江即御申渡候様致度候、依之

別紙伺済写相添、此段及御懸合候

戌八月

御書面之趣致承知、浜吉組問屋共江申渡候、

依之、御差越之書類は写之儀二付留置、

此段及御挨拶候

戌八月

小笠原長門守

黒川備中守

┌

(朱書)

『酉十一月十七日、对馬守殿江小野田吉次郎を以上ル、

戌八月二日和泉守殿同人を以承付御下ケ

同日同人を以返上』

書面伺之通二取計旨

被仰渡奉承知候

戌

村垣淡路守

八月二日

箱館奉行

浜吉組と唱候問屋共引受候蝦夷地産物取扱方

之儀二付、相伺候書付

糟屋筑後守

箱館奉行

蝦夷地産物江戸廻り相成候分は不残会所江届出、於同所
売捌方いたし候処、浜吉組と唱候下り鯉節・塩魚・干魚

┌ (39)

問屋有之、蝦夷地産物之儀も、大坂・兵庫・下ノ関其外二而商人共一旦買請、夫より江戸表江差送り候荷物并蝦夷地与

「(40)

西海相廻り江戸入津之分を下り荷物と唱、右浜吉組問屋共引請売捌、是迄会所江届出不申趣二付、

相糺候処、相違も無之、右は西海廻り并大坂・兵庫等与

相廻り候品を、下り荷物と唱、浜吉組問屋共二而引受取扱候は、從來之事二而差構候筋は無之候得共、

縦令西海相廻り候とも、又大坂・兵庫其外二而一旦

買請候荷物二候共、元々蝦夷地之産物二相違無之、

下り荷物と名目之替り候儀而已二而、会所之改請不申

との義は不相当二相聞、其上外荷物と打混り

甚以紛敷、御取締二も拘り候義二付、以来右荷物之分も

為届出、外荷物同様会所二而取扱当然之義と奉存候、

乍併一旦大坂・兵庫二而買取候品は、其所之会所二而

歩合も取立改済之荷物二付、右之分は両会所二而

送状江裏書いたし候儀も有之候得共、前々不届出

儀二付、是迄右裏書を以届出候義も無之候得共、何れヲも大坂・兵庫・堺等二而歩合取立相済候分は、江戸

廻し相成候節、歩合取立候而は二重二忝「罷」成候儀二付、歩合は

不取立、陸揚之節届出改受候上、勝手次第為売捌

候積、尤右之趣は大坂・兵庫・堺等之問屋共江申渡、

以来江戸廻し之分は急度裏書可申請段、申渡

為置候様可仕、其地西海廻り之荷物は勿論、一旦

下之関其外江買取、江戸廻し相成候荷物は、並之通

会所江届出、定例之手続二取扱候而可然奉存候、尤

是迄浦賀并常「常」州中之湊品江一旦買取候品

江戸廻し相成候節は、定例之通会所二而取扱

歩合も取立候儀二御座候間、右二見合旁前書之通、

取扱可申と奉存候、右之趣立会御勘定方・町方江も

及相談候処、存寄無之旨申聞候、依之此段奉伺候、

以上

西

十一月

覚

伺之通可被取計候事

申渡

下り鯉節問屋

行事共

其方共仲間之儀、浜吉組と唱、下り

鯉節・塩干肴類引受、是迄蝦夷地

出産塩干肴類下り荷物と唱引受候

趣之处、御当地箱館会所江届出候儀

「(43)

無之、外荷物と相混紛敷候二付、以来
蝦夷地出產荷物、大坂・兵庫・堺等会所
裏書積来候共、御当地入津陸上之節
送り状ヲ以其度々新大橋向箱館会所江
届出差図受可売捌、其他大坂・兵庫・
堺等打越、御当地江入津之分、并一旦
下ノ関其外商人共買取、江戸廻り
相成荷物共、右会所江相届可請
差図

戌

月

「(44)

乍恐書付ヲ以奉申上候

一、下り鯉節問屋行事室町壱丁目

半兵衛地借治郎兵衛外壱人奉申上候、
是迄蝦夷地出產塩干肴類、私共
仲間二而下り荷物と唱引受候廉
御糺し有之、且已来新大橋向
箱館御会所江荷物入津之節、
御届可申上儀、今般御沙汰被為在候二付、
左二御答奉申上候

「(45)

此段私共仲間之儀は、浜吉組と

唱江、是迄西海江州今切ヲ境、

大坂表商人共買取積来候、

荷物は、惣体下り品と相唱、古来方

引受候義二有之、且又大坂・兵庫・境等方

「

蝦夷地產物御会所御取建相成、
同所商人共買取候蝦夷地產物
之儀は、右御会所二而御改濟之上、
送り状江御裏判被成下、其儘
積下候儀二付、是迄箱館方
御会所江御届も不致罷在候処、
外荷物と相混し紛敷候二付、
以来御当地入津陸上ケ之節、新
大橋箱館御会所江御届申上候様
御沙汰二付、蝦夷地出產之諸荷物
大坂・兵庫其外御会所二而、御改
御裏判無之分は勿論、御改濟之
分共、御当地入津之荷物は、送り状ヲ以、
其度々早速箱館御会所江御届
申上、御差図ヲ受取計、且又大坂・
兵庫・堺等打越、御当地江直入津
之分、并一旦下ノ関其外商人共

「(46)

買取、江戸廻し相成候荷物二至候迄、
是迄入津之度々御届同様、御差図ヲ
受候様可仕候

右御尋二付、私共心得方奉申上候、以上

下り鯉節問屋

行事

室町壺丁目

半兵衛地借

治郎兵衛印

文久二戊年四月
同

本船町

与兵衛地借

新七印

煩二付代

忠兵衛印

舘

御役所

右之通相違無御座候、以上

御肴俵所取締役

檜物町

名主 又右衛門印

┌ (48)

蝦夷地産物入津届之儀浜吉組之者共
取調申上候書付

舘市右衛門

対馬守殿御下ケ箱館奉行衆伺

蝦夷地産物相廻り候分は、不残会所江届

出、於同所売捌方致候処、浜吉組と唱候

下り鯉節・塩魚・干魚問屋有之、蝦夷地

産物之儀も、大坂・兵庫・下ノ関其外二而、

商人共一旦買受、夫方江戸表江差送候

荷物、并蝦夷地方西海相廻江戸入津之

分を下り荷物と唱、右浜吉組問屋共

引請売捌、是迄会所江届出不申

趣二付、相糺候之処、相違も無之、右は西海

廻并大坂・兵庫等方相廻り候品を下り荷物と

浜吉組問屋共二而引受取扱候は、

從來之事二而差構候筋は無之

候得共、縦令西海相廻り候共、又大坂・

兵庫其外二而一旦買受候荷物二候共

元々蝦夷地之産物二相違無之、下り

┌ (50)

荷物と名目之替り候而已二而、会所
之改受不申と之儀は不相当二相聞、
其上外荷物と打混紛敷、御取締二も
拘り候二付、以来右荷物之分も為届出、
外荷物同様会所二而取扱、併一旦
大坂・兵庫二而買取候品は、其所之会所
に而歩合も取立改済之荷物二付、
両会所二而送状江裏書致候儀も有之
候得共、前々不届出義二付、是迄右
裏書を以届出候儀も無之候得共、何れ
にも大坂・兵庫・堺等二而歩合取立
相済候之分は、江戸廻相成候節歩合
取立候而は二重二相成候儀二付、歩合は
不取立、陸上ヶ之節届出、出改受候上、
勝手次第為売捌候積、尤右之趣は
大坂・兵庫・堺等之問屋共江申渡、以来
江戸廻し之分は急度裏書可申請段、
申渡為置候様仕、其他西海廻之荷物は
勿論、一旦下之関其外江買取、江戸廻
相成候荷物は、並之通会所江届出
定例之手続二取扱候而可然、尤是迄
浦賀并常州中之湊等江一旦買取
候品江戸廻相成候節は、定例之通
会所二而取扱、歩合取立候儀二御座候間、
右二見合旁前書之通取扱可申と奉存候、
立合御勘定方・町方とも及相談存寄
無之奉伺候間、御書面写御下ヶ被成取調
被仰渡候間、左二申上候

下り鯉節問屋行事

室町壹町目

半兵衛地借

次郎兵衛

本船町

与兵衛地借

新七煩二付代

忠兵衛

右仲間之儀浜吉組と唱、是迄蝦夷地
出産塩干肴類下り荷物と唱引受候義、
西海九州都而遠州今切境、大坂表商人
とも買取積来候荷物は、惣体下り荷物と
前々相唱来候、大坂・兵庫・堺等江蝦夷地
会所産物御取建相成、同所商人共買取候、
蝦夷地産物之義は、右会所二而御改済
送り状江御裏判、其儘持下り候儀二付、是迄

「 (52) 」

「 (51) 」

「 (53) 」

御当地箱館御会所江御届不仕候処、外
荷物と相混紛敷候二付、以来御当地入津
陸上ヶ之節、新大橋向箱館御会所江
御届可申上御沙汰之趣、承伏仕、蝦夷地
出産之諸荷物、大坂・兵庫其外会所
御裏判無之分は勿論、御改済之分は
御当地入津之荷物は送状を以、其度々
箱館御会所江御届申上、御差図受取計、
且又大坂・兵庫・堺等打越、御当地江直入
津之分、并一旦下之関其外商人とも
買取江戸廻相成候荷物二到迄、是又
入津之度々御届仕、同様御差図受候様
可仕旨、御肴役所取締役櫓物町名主
又右衛門差添申之候

右取調候処、書面之通承伏仕申立、則差出候
書付奉入御覧候、歩合之義は御定可有之
奉存、別段相尋不申弥箱館奉行衆
御伺之上相済候上は、以来浜吉組之者共
蝦夷地出産之諸荷物引受、御当地入
津陸上ヶ之節、箱館産物会所江可相届
段、別紙之通被仰渡、心得方治定可仕哉、
則被仰渡案相添御渡被成候伺書写
返上仕、此段申上候、以上

戊五月

館市右衛門

繕付末々有之

浜吉組組と唱候問屋共引請蝦夷地
産物被仰渡之義取調申上候書付

館市右衛門

浜吉組と唱候問屋引請売捌候蝦夷地
産物、入津次第以来会所江届出改受
候様、右問屋共江被御申渡候様致し度旨、
別紙伺済写相添、村垣淡路守殿・箱館
奉行衆御掛合書御下ヶ被成候、

右は先達而对馬守殿御下ヶ、糟屋筑後
守殿・箱館奉行衆伺書、御勘定方下ヶ札
付御渡被成取調、右御伺済之上は浜吉
組之者共江、別紙之通被仰渡案相添、
当五月中申上置候、今般御伺済之上、前書
之通御掛合御座候上は、右浜吉組と唱候、
下り經節問屋行事共江被仰渡可然哉、
則五月中差上候被仰渡案、尚又奉入

└ (54)

└ (55)

└

└ (56)

└

御覽候

右依之御渡被成候書類返上、此段申上候、以上

戌八月

館市右衛門

(朱書)

『酉十二月十五日、佐藤清五郎を以御渡』

〔対馬守殿

浜吉組と唱候問屋共引受候蝦夷地

産物取扱方之儀二付、相伺候書付

糟屋筑後守

箱館奉行

蝦夷地産物江戸廻り相成候分は、不残会所江

届出、於同所売捌方致し候処、浜吉組と唱候、

下り鯉節・塩魚・干魚問屋有之、蝦夷地産物

之儀は、大坂・兵庫・下ノ関其外二而商人共一旦

買請、夫より江戸表江差送り候荷物并蝦夷

地より西海相廻江戸入津之分を、下り荷物と

唱、右浜吉組問屋共引請売捌、是迄会所江

届出不申趣二付、相糺候之処、相違も無之、右は

西海廻并大坂・兵庫等より相廻り候品を下り

荷物と唱、浜吉組問屋共二而引受取扱候は、従

来之事二而差構候筋は無之候得共、縦令西海

相廻り候共、又大坂・兵庫其外二而一旦買請候荷

物二候共、元々蝦夷地之産物二相違無之、下り

荷物は名目之替り候儀而已二而、会所之改受

不申との儀は不相当二相聞、其上外荷物と打

混甚以紛敷、御取締二も拘り候儀二付、以来右

荷物之分も為届出、外荷物同様会所二而

取扱当然之儀と奉存候、乍併一旦大坂・兵庫二而

買取候品は、其所之会所二而歩合も取立改済

之荷物二付、右之分は両会所二而送状江裏書

致し候儀も有之候得共前々不届出儀二付、是迄

右裏書を以届出候儀は無之候得共、何れ二も大坂・

兵庫・堺等二而歩合取立相済候分は、江戸廻り

相成候節歩合取立候而は、二重二相成候儀二付、

歩合は不取立、陸揚之節届出改受候上、勝手

次第為売捌候積、尤右之趣は大坂・兵庫・堺等

之問屋共江申渡、以来江戸廻り之分は急度裏

書可申請段申渡為置候様可仕、其他西海廻

之荷物は勿論、一旦下ノ関其外江買取、江戸廻

相成候荷物は並之通会所江届出、定例之手

続二取扱候而可然奉存候、尤是迄浦賀并常州

下ケ札

└ (57)

└

└ (58)

└

└ (59)

└

└ (60)

中之湊等江一旦買取候品、江戸廻り相成り候節は、
定例之通会所二而取扱、歩合も取立候儀二御座
候間、右二見合旁前書之通取扱可申と奉存候、
右之趣立合御勘定方・町方江も及相談候處、
存寄無之旨申聞候、依之此段奉伺候、以上

西十一月

「(61)」

書面之趣取調候處、蝦夷地産物之内大坂・兵庫
下ノ関其外二而商人共一旦買取、夫方江戸
表江差送り候荷物并蝦夷地より西海相廻り、
江戸入津之分を下り荷物と唱、浜吉組と唱へ
候間屋共引受売捌、是迄会所江不届出候處、
以来大坂・兵庫・堺等会所御取建有之候場所
二而一旦買取、江戸廻し相成候荷物は、其所
会所二而歩合も取立候儀二付、送状江裏書
致し、右を以相届改受候迄二而、歩合等二重二
取立不申、其余西海相廻り候荷物は勿論、
下之関其外会所御取建無之場所二而買取、
江戸廻相成候荷物は、会所江届出歩合取
立、並之通取扱候は当然之儀二候處、右様蝦夷
地産物二相違無之品を、下り荷物杯と名目
を付ケ会所之改請不申、勝手二売捌候様二而は
会所御取建有之候詮も無之、一体之御取締二は
拘り候儀二付、都而伺之通被仰渡可然、尤町奉行江も
一応御下ケ御座候方と奉存候」

西十二月

松平出雲守
小笠原長門守
竹内下野守
池野勇一郎

「(63)」

(朱書)

『戊五月廿三日

拙者儀何之存寄

和泉守殿江北角十郎兵衛を以上』

無御座候

戊五月

因幡守

下札案

書面下り鰐節問屋之内、浜吉組と
唱候問屋共、蝦夷地国産塩干肴
類・西海廻并大坂・兵庫等方相廻候
品を下り荷物と唱引受候處、是迄
会所江届出候儀無之、外荷物と
打混紛敷候二付、以来右荷物二ても
為届出、尤大坂・兵庫・堺等会所

(別紙)

「備中守殿江返却もの」

「(64)」

「(65)」

御取建有之候場所二而、一旦買取
江戸廻し相成候荷物ハ、其所
会所二而歩合も取立候義二付、送状江
裏書致し、右は相届改受候迄二而、
歩合等二重二不取立、陸揚之節
届出改受候上、勝手次第為売捌、
其余西海相廻り候荷物ハ勿論
下之関其外会所御取建無之
場所二而買取、江戸廻相成候荷物ハ、
会所江届出歩合取立、並之通
取扱候義共、都而箱館奉行伺之通
被仰渡可然哉と奉存候間、御下知次第、
其段御当地右問屋共江申渡候様
可仕候、此段申上候、以上

戊五月

石谷因幡守
黒川備中守

(朱書)

『戊五月十三日差出』

蝦夷地産物入津届之儀浜吉組之
もの共取調申上候書付

館市右衛門

対馬守殿御下、箱館奉行衆伺
蝦夷地産物相廻候分は不殘
会所江届出、於同所売捌方致し
候処、浜吉組と唱候下り鯉節・
塩魚・干魚問屋有之、蝦夷地
産物之儀も大坂・兵庫・下之関
其外二而商人共一旦買受、夫方
江戸表江差送り候荷物并
蝦夷地方西海相廻江戸入津之
分を下り荷物と唱、右浜吉組
問屋共引受売捌、是迄会所江
届出不申趣二付、相糺候之処
相違も無之、西海廻并大坂・兵庫
等方相廻候品を下り荷物と唱、
浜吉組問屋共二而引受取扱
候は從來之事二而、差構候筋ハ
無之候得共、縦令西海相廻候共、
又大坂・兵庫其外二而一旦買受候
荷物二候共、元々蝦夷地之
産物二相違無之、下り荷物と
名目之替り候而已二而、会所之
改受不申と之儀は不相当二

相聞、其上外荷物と相混紛敷
御取締二も拘候二付、以来右
荷物之分も為届出、外荷物
同様会所二而取扱、併一旦大坂・

「(69)

兵庫二而買取候品は、其所之
会所二而歩合も取立改済之
荷物二付、両会所二而送状江
裏書致し候儀も有之候得共、
前々不届出儀二付、是迄右
裏書を以届出候儀も無之

「

候得共、何れ二も大坂・兵庫・堺等二而、
歩合取立相済候之分ハ、江戸
廻り相成候節、歩合取立候而は、
二重二相成候儀二付、歩合ハ不取立、
陸上ケ之節届出改受候上、
勝手次第為売捌候積、尤

「(70)

右之趣は大坂・兵庫・堺等之
問屋共江申渡、以来江戸廻り之
分ハ急度裏書可申請段、

申渡為置候様仕、其他西海
廻之荷物は勿論、一旦下之関
其外江買取江戸廻相成候

「

荷物は、並之通会所江届出、
定例之手続二取扱候而可然、
尤是迄浦賀并常州中之

湊等江一旦買取候品、江戸廻
相成候節は、定例之通会所二而、
取扱歩合取立候儀二御座候間、
右二見合旁前書之通取扱

「(71)

可申と奉存候、立合御勘定方・
町方とも及相談、存寄無之
奉伺候旨、御書面写御下被成
取調被仰渡候間、左二申上候

「

下り鯉節問屋行事

室町壱町目

半兵衛地借

一 次郎兵衛

本船町

与兵衛地借

新七煩二付代

忠兵衛

「(72)

右仲間之儀、浜吉組と唱是迄
蝦夷地(朱書)『出』産塩干肴類下り
荷物と唱引受候儀、西海九州

	都而遠州今切境、大坂表 商人共買取積来候荷物は、 惣体下り荷物と前々相唱 来候、大坂・兵庫・堺等江蝦夷地 会所産物御取建相成、同所 商人共買取候蝦夷地産物 之儀は、右会所二而御改済、 送状江御裏判其俣持下り候 儀二付、是迄御当地箱館御会所江 御届不仕候处、外荷物と相混 紛敷候二付、以来御当地入津 陸上ケ之節、新大橋向箱館 御会所江御届可申上御沙汰 之趣承伏仕、蝦夷地出産之 諸荷物、大坂・兵庫其外会所 御裏判無之分ハ勿論、御改済 之分共、御当地入津之荷物は 送状を以其度々箱館御会所江 御届申上、御差図受取計、且 又大坂・兵庫・堺等打越御当地江 直入津之分、并一旦下之関其外 商人共買取、江戸廻相成候荷物二 至迄、是又入津之度々御届仕 同様御差図受候様可仕旨、 御肴役所取締役檜物町 名主又右衛門差添申之候 右取調候处、書面之通承伏仕 申立、則差出候書付奉入御覧候、 歩合之儀は御定可有之奉存、 別段相尋不申、弥箱館奉行衆 御伺之通相済候上は、以来浜吉組 之もの共、蝦夷地出産之諸荷物 引受御当地入津陸上ケ之節、 箱館産物会所江可相届段、別紙 之通被仰渡心得方治定可仕哉、 則被仰渡案相添御渡被成候 伺書写返上仕、此段申上候、以上 戊五月 館市右衛門		
被仰渡案			
申渡			
下り經節問屋 行事共			

└ (76)

└

└ (75)

└

└ (74)

└

└ (73)

└

其方共仲間之儀、浜吉組と唱、
下り鯉節・塩干肴類引受、
是迄蝦夷地出産塩干肴
類下り荷物と唱引受候趣
之處、御当地箱館会所江
届出候儀無之、外荷物と相混
紛敷候二付、以来蝦夷地出産
諸荷物、大坂・兵庫・堺等会所
裏書積来候共、御当地入津
陸上之節、送状を以其度々
新大橋向箱館会所江届出
差図受可売捌、其他大坂・
兵庫・堺等打越御当地江入津
之分、并一旦下之関其外商人共
買取江戸廻相成候荷物共、
右会所江相届可請差図
戌 月

「(77)」

「浜吉組返答書」

乍恐以書付奉申上候
一、下り鯉節問屋行事室町
寺町目半兵衛地借次郎兵衛
外商人奉申上候、是迄蝦夷地
出産塩干肴類、私共仲間二而
下り荷物と唱引受候廉御糺
有之、且以来新大橋向箱館
御会所江荷物入津之節、御届
可申上儀、今般御沙汰被為在
候二付、左二御答奉申上候
此段私共仲間之儀ハ浜吉組
と唱、是迄西海・九州・今切を
境大坂表商人共買取積来候
荷物は、惣体下り品と相唱
古来より引受候儀二有之、且又
大坂・兵庫・堺等江蝦夷地
産物御会所御取建相成、
同所商人共買取候蝦夷地
産物之儀は、右御会所二而
御改済之上、送状江御裏書
被成下、其儘積下候儀二付、
是迄箱館方御会所江御届も
不致罷在候處、外荷物と

「(79)」

「(78)」

相混紛敷候二付、以来御当地
入津陸上ヶ之節、新大橋
箱館御会所江御届申上候様
御沙汰二付、蝦夷地出産之
諸荷物、大坂・兵庫其外
御会所二而御改御裏判
無之分は勿論、御改済
之分共、御当地入津之荷物ハ、
送状を以其度々早速
箱館御会所江御届申上、
御差図を請取計、且又
大坂・兵庫・堺等打越、御当地江
直入津之分并一旦下之関
其外商人共買取、江戸廻り
相成候荷物二至迄、是又入津
之度々御届仕、同様御差図を
請候様可仕候
右御尋二付、私共心得方奉申上候、
以上

下り鯉節問屋
行事

室町壱町目
半兵衛地借
次郎兵衛印

文久二戌年四月
同

本船町
与兵衛地借
新七印
煩二付代
忠兵衛印

館
御役所
右之通相違無御座候、以上
御肴役所取締役
檜物町
名主又右衛門印

(朱書)
『戌八月五日来』

└ (80)

└

└ (81)

└

└ (82)

└

└ (83)

└

「町奉行衆
村垣淡路守
箱館奉行

浜吉組と唱候問屋共引受
売捌候蝦夷地産物、入津次第
以来会所江届出改請候様、右
問屋共江被御申渡候様致度候、依之
別紙伺済写相添、此段及御掛合候

戌八月

「(84)

(朱書)

『八月廿日達』

御書面之趣致承知、則浜吉組問屋共江
申渡候、依之御差越之書類は写之儀二付
留置、此段及御挨拶候

戌八月

小笠原長門守
黒川備中守

「(85)

(朱書)

『西十一月十七日、対馬守殿江小野田吉次郎を以申上、

戌八月二日、和泉守殿同人を以承付御下
同日同人を以返上』

書面伺之通可取計旨
被仰渡奉承知候

戌八月二日

村垣淡路守
箱館奉行

浜吉組と唱江問屋共引受候蝦夷地
産物取扱方之義二付相伺候書付

糟屋筑後守
箱館奉行

「(86)

(朱書)

『伺書前同様二付写略』

覚

伺之通可被取計候事

承緒付

書面村垣淡路守箱館奉行承付之通
被仰渡候旨奉承知候

戌八月三日

松平出雲守

小栗豊後守
川勝丹波守
福田甲斐守
青田録助
池野勇一郎
鈴木丈之進

「(87)

承緒付

書面村垣淡路守箱館奉行承付之通

被仰渡候旨奉承知候

戌八月七日

小笠原長門守

黒川備中守

「

(朱書)

『戌八月十日、館市右衛門方申渡請書写』

申渡

下り鯉節問屋

行事共

其方共仲間之儀、浜吉組と唱、下り鯉節・塩干肴類
引請、是迄蝦夷地出産塩干肴類下り荷物と唱、引
請候趣之処、御当地箱館会所江届出候儀無之、外荷物と
相混紛鋪候二付、以来蝦夷地出産荷物、大坂・兵庫・堺
等会所裏書積来候共、御当地入津陸上ケ之節、送り
状を以其度々新大橋向箱館会所江届出、差図
請可売捌、其他大坂・兵庫・堺等打越、御当地江入津
之分并一旦下之関其外商人共買取、江戸廻り
相成候荷物共、右会所江相届可請差図

「(88)

戌八月

右之通従町御奉行所被仰渡候間、此段申渡
右之通被仰渡奉畏候、以上

「

下り鯉節問屋行事

室町壱丁目

半兵衛地借

次郎兵衛印

文久二戌年八月十日

本船町

与兵衛地借

新七

煩二付

代 幸次郎印

御肴役所取締役

檜物町

名主 又右衛門

煩二付

代 定七印

「(89)

⑪文久二戌年十一月 尾張殿国産洪扇御当地廻取扱差止候義二付御城付方達又
(扉、小口見出し)

「文久二戌年十一月

尾張殿国産洪扇御当地廻取扱
差止候義二付御城付方達書

(朱書)

『十一』

「(90)

(朱書)

『戌十二月十二日、伊東惣五郎を以御渡二付
町年番江一応御下ヶ之積申上本紙返上』

井上信濃守様

磯野三右衛門

以手紙致啓上候、然は別紙之趣

御達申候様、其筋方申聞候二付、右

忝通為持差出申候、此段可得御意

如此御座候、以上

十二月十日

「

「(91)

尾張殿

「井上信濃守殿

御城附

尾州国産之洪扇、御当地江相廻、
四谷塩町五人組持店勝五郎外

「(92)

式人江取扱申付、尤素人売は不
為致、問屋二限為売捌候儀、去々
申年御望申達置候処、此度国産
之品仕法改革二付、取扱差止申候、
此段御断返申候事

十二月

「

尾州国産洪扇御当地廻取扱

差上御断返取計之儀申上候書付

館市右衛門

御城付方来紙文之略

右尾張殿御城附書面御下被成候間、書面取調
候処、去々申年十二月池田播磨守儀御勤役中、

「(93)

右御城付方御国産洪扇御当地江相廻、用

途(達力)町人四谷塩町五人組持店武蔵屋勝五郎

外式人為売捌候儀御達之節、通町組
内店組

小間物問屋行事并通町組之内丸合組
小間物問屋行事共取調候処、尾州洪扇之
儀は名古屋扇と唱、右両組二而元方仕入
取扱候二付、此度御直廻し相成、前書名前之
もの共取扱、素人直賣「売」無之、両組仲間江
御払相成候得は差障無之段申立候趣、
翌酉年二月申上候、依之、今般御国産
仕法改革二付差止御断返之旨、両組
小間物問屋行事共申渡置候ハ、可然、則
申渡案相添御渡被成候、御達書返上仕、
此段申上候、以上

館市右衛門

┌
(94)

申渡案

通町組 小間物問屋行事
内店組

通油町家持

炭屋喜右衛門京都

住宅二付店支配人

善兵衛

通町組之内

丸合組小間物問屋行事

通油町武右衛門地借

炭屋彦兵衛代

徳兵衛

┌
(95)

右は尾州御国産之洪扇、御当地江相廻、
用途（達力）町人四谷塩町五人組持店勝五郎
外式人取扱、尤素人売ハ不為致、問屋二限
為売捌候積去々申年御達有之取調之節、
尾州洪扇之儀は名古屋扇と唱、右
両組二而元方仕入取扱候二付御直廻し、右
名前之もの取扱素人直売無之、両組
仲々間江御払相成候へハ差障無之段、其方共
返答書差出置候処、此度国産之品
仕法改革二付、差止御断返相成候事、
右之通二候間、為心得此旨申渡

戌十二月

┌
(96)

書面尾州洪扇之儀、館市右衛門申上候通
可取計旨被 仰渡可然哉二奉存候

戌十二月

市中取締掛

┌

⑫文久二戌年十二月 尾張殿国産築地浜屋敷締所取建人売捌方之義調
(扉、小口見出し)

「文久二戌年十二月

向方方相談廻

尾州殿国産築地浜屋敷二

締所取建売捌方之儀調

(朱書)

『十二』

「 (97)

尾張殿

〔浅野備前守殿

御城附

尾州国産之儀、今度築地浜屋敷二

締所取建、御当地江積取候諸品之分

右浜屋敷において改済之上、是迄仕来候

問屋共江為差送候其余、勝手向并

家中用途残之品も有之候ハ、右

浜屋敷において出入商人牛込榎町

伊勢屋藤左衛門江取扱申付、夫々

問屋共江為売捌申度、尤右問屋共

不相当之入札いたし、自俣之仕成等

有之候而は、用途筋二も差響候二付、

其節ハ可及御達候間、其筋江御沙汰

有之候様致度、別紙品書相添及御懸合候事

十二月

「 (99)

国産品書

一、絹類

一、木綿類

一、麻類

一、糸類

一、綿類

一、荒物類

一、常滑焼

一、酒・酢・味淋

「 (100)

一、	醤油	
一、	味噌	
一、	油類	
一、	蠟類	
一、	紙類	
一、	鉄物類	
一、	生革細工物	
一、	塗物類	
一、	藍玉	
一、	材木	
一、	洪扇	
一、	砂糖	
一、	檜物類	白木小箆筥又者箱之類
一、	薪炭類	
一、	菜種類	
一、	煙草類	
一、	石類	
一、	竹	
一、	瓦	
一、	鯉節	
一、	菓子類	知多郡大野村製一口香之類
以上		

┌
(102)

(朱書)

『戌十二月廿七日、御向方御相談廻来、存寄無之候間付札致し、即日返上』

書面尾張殿産物別紙品書

之内、絹其外之義は、藤左衛門江壳捌方被申付、同方問屋共二限壳渡候儀二候得は、差支之筋無之候間、其段問屋共江申渡置候、砂糖・檜物類・瓦・菓子類は引受之問屋無之候間、素人直壳致し候二も不苦候、且酒并味淋之義は猶取調之上、追而可及御挨拶候、常滑焼之儀は入札払不相成品之由、前書藤左衛門申立候儀二有之候

┌
(103)

戌十二月 浅野備前守

┌

乍恐以書付奉申上候

一、尾州産物元方取扱人牛込榎町家持藤左衛門呉服問屋外式拾六組問屋行事共一同奉申上候、右御産物

┌

入札払引受方御尋二付、示談仕候趣、
左二奉申上候

(朱書)

『余写略之』

└ (104)

乍恐以書付奉申上候

一、瀬戸物問屋行事元数寄屋町

式町目平三郎地借久兵衛煩二付代久三郎

奉申上候、是迄私共仲間二而取扱候、(朱書)

「御」国産

瀬戸物并焼物類之儀は、尾州様

御国表御勘定所方御当地御館様

御勘定所江御積送二相成、御蔵屋敷方

売捌人江御渡し二相成候二付、入札御払二

不相成候品二御座候、此段奉申上候、以上

└ (105)

瀬戸物問屋行事

元数寄屋町式町目

平三郎地借

久兵衛煩二付代

文久二戌年十二月十六日 久之助印

右之通対談取極候間、此段申上候、以上」

御国産取扱人

牛込榎町家持

伊勢屋

藤左衛門

代

清兵衛印

御番所様

└ (106)

【第三了】

【第四】

①産物売捌方之儀二付評議書

(中扉)

「安政二卯年十二月

産物売捌方之儀二付評議書」

「(5)

(朱書)

『卯十一月四日 伊勢守殿御直 評定所一座

大目付

御勘定奉行 江御渡

御目付

御勘定吟味役』

覚

近年来諸国地震津波等之天

災打続、且諸夷屢入津致し、殊二

此度江戸表大地震二付而は、世上之

膽氣大二折け、此俣被差置候ハ、弥以

国家之衰弱相増、御国勢復古可致様も

無之、畢竟公辺御勝手向累年莫太

之御物入二而、御繰合不宜、其上諸夷之

御手当は暫時も難被差置候間、此後之

御入費ハ尚更顯然之儀二有之、諸家

連も同様積年散財相続、何れも疲弊

致し居候上、此度之地震二而上下一層之

氣力を落し候事故、方今之急務は

富国強兵之外有之間敷、然ル処、尋常

之御処置二而は連も可相届様無之、

当節之場合実二不容易時勢二付、

何れ二も非常之御所置有之度、就而ハ

諸国より出ル産物類、御料は御代官、

私領ハ領主・地頭方江戸表江直二運送

為致、都合宜場所相撰、諸国産物

会所と申名目といたし、四五ヶ所も御取建

有之、右運送之諸品物其所二おゐて

直二為売捌、尤御代官は手附・手代、

諸家よりハ家来差出し、町人共江直二

売捌、諸家・御旗本・御家人之向も産物

相求度望之ものは、小買等も勝手次第

為売渡、
公儀江は産物売上高へ応し、冥加

「(8)

上納金為差出、諸雜費之御入用二相充候ハ、御益二も相成、且諸家二而も出産之品直売二相成候ハ、大坂商人共を始津々

浦々江利分相掛候儀相省き、利益不

少儀二可有（朱書）『之』候、

右産物売捌方仕法之儀は、品々

有之べく候得共、可成丈簡易二主

法相立、尤 公儀より厚御世話無之

候而は大弊を生し可申候間、御勘定

方々会所江出役は勿論、御代官手附

手代其外御目付方等時々見廻、都而

公平二利潤行ハは

す候而は（朱抹）都（朱書）『却』而国家之大害を

醸し可申候間、其段は兼而厚

勘弁思慮いたし置、主法相立

候様有之度候

一、御代官所々出候産物は会所

一構二いたし、又諸家々出候産

物も、西国は西国二而一構二いたし、

其外中国・関東と夫々混雜

不致様、場所々を分候方可然哉

一、材木類・石類・瀬戸物類・漆

器類・絹紬木綿反物類・

其外着物・諸雜物類とも（朱抹）は（朱書）『と』、

品物二而部類を分、一構ツ、

別二いたし候方二も可有之哉

一、惣而国持より出候産物ハ、品数も

多可有之候間、申サハ薩州ハ

一構、仙台ハ一構と申様二手分

いたし候方二而も可然哉、

但此余持寄之分も右二准

諸家夫々手分いたし

候事

一、右様諸国産物江戸表江直二

相廻、会所二而売捌相成候上ハ、

諸家二而先ツ売買相始候姿

にて、其上

公儀江冥加運上御取上ケ

有之候而は、是迄日本之

御主法とは

更ニ雲壤之相違二付、果して

諸説紛々と申出、行ハれ難き筋二

可有之候得共、方今之急務国家ヲ

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

└

┌

間敷、此度地震ニ付諸家并
諸民御赦筋之ため産物会所
御取建有之候御趣意ニ候ハ、名議（朱書ルビ）『本ノママ』も
正しく、且は諸国之産物
江戸表ニ集居候方、自然御考合も
宜可有之哉

一、大坂商人共ハ申ニ不及、江戸表巨商
共も根本より売崩つれ候ニ付
×売×買等一切出来不申、定而
難渋申立、相騒ぎ可申候得共、熟（朱書ルビ）『本ノママ』れ

一方宜と一方不宜道理ニ候間、
夫等之事ニ貪着いたし候而は、
何事も出来致間敷、且商人之
難渋ハ難渋ニ相違有之間敷候へ共、
素より利ニかしこきもの共故、
決而他見より考候程ニは有之間敷、
又何と歟工夫いたし、活計之いたし

方ハいくらか可有之、尤江戸・大坂
町奉行等より申諭し方ハ精々
相達候筈ニ候、乍然余り商人共
騒敷事ニも至り可申候ハ、先ツ御試之
ため年限を定め、二ヶ年と歟

三ヶ年と歟、又は地震荒立帰候
迄と歟被 仰出候ハ、子細も有之
間敷哉、一体是迄大坂之巨商ハ
勿論、江戸之大戸ニ而自在ニ天下之
財宝を握り、諸大名（朱抹）治（朱書）『始』過半
金主ニ相頼、大利を貪られ、

却而彼等か為に

公務を相勤候様成行候は、国産
之利潤を奪れ、賓主所を換候
より、全く武家衰弱ニ至候儀ニ
有之、今般其根本より立直

され候ハ、武家之威権商人ニ
奪ハれ候儀無之、商人共も
身分を顧ミ四民各其分ニ安し
候ハ、質素節儉之御教令も是より
行ハれ可申、非常之時ニハ非常之
御所置無之候而は、

御国勢御更張之期有之間敷
候間、厚く勘弁評議いたし、早々
可被申聞候事

（扉）

「

奉 加藤余十郎
柴田貞太郎

産物売捌方之儀二付評議仕候趣申上候書付

評定所一座」

「 (17)

去月四日、評議いたし可申上旨被仰聞

御渡被成候御書取、一覽仕候処、近年来

諸国地震津波等之天災打続、且

諸夷屢入津いたし、殊ニ此度江戸表大

地震二付而は、世上膽氣大二折ケ、此俣

被差置候ハ、弥以 御国家之衰弱

相増、 御国勢復古可致様も無之、畢竟

公辺御勝手向累年莫大之御物入二而

御繰合不宜、其上諸夷之御手当ハ暫時も

難被差置候間、此後之御入費は猶更

顯然之儀ニ有之、諸家連も同様積年之

散財打続、何レも疲弊致し居候上、此度之

地震ニ而上一層之氣力を落し候事故、

方今之急務は富国強兵之外有之

間敷、然処尋常之御所置ニ而は連も可

相届様無之、当節之場合美ニ不容易

時勢二付、いつれにも非常之御所置有之度、

就而は諸国より出候産物類、御料は御代官

私領は領主・地頭より江戸表江直二運送

為致、都合宜場所相撰、諸国産物会所

と申名目二いたし、四五ヶ所も御取建有之、

右運送之諸品物其所ニおゐて直ニ為

売捌、尤御代官は手付手代、諸家方は

家来差出、町人共江直二売捌、諸家御旗本

御家人之向も産物相求度望之ものは、

小売等も勝手次第為売捌、

公儀江は産物売上高二応し冥加上納

金為差出、諸雜費之御入用ニ相充候ハ、

御益ニも相成、且諸家ニ而も出産之品直売ニ

相成候ハ、大坂商人共を始津々浦々江利分

相懸候儀相省キ、利益不少儀ニ可有之、

右様相成候得は、大坂商人共は申ニ不及、江戸

表巨商共も根本より売崩され候二付、

売

相騒可申候得共、いつれ一方宜と一方ハ不宜

道理二候間、夫等之事ニ貪着いたし候而は、何事も

出来いたす間敷、且商人之〇「〇難渋は」難渋ニ相違

「 (20)

有之間敷候得共、素より利二かしこきもの共故、決而他見より考候程二は有之間敷、又何と歟工夫いたし、活計之致し方はいくらも可有之尤江戸・大坂町奉行等より申諭方ハ、精々相達候筈二候、乍然余り商人共騒敷事二も至り可申候ハ、先ツ御試之ため年限を定被仰出候ハ、子細も有之間敷哉、一体是迄大坂之巨商は勿論、江戸之大戸二而自在二天下之財宝を握り、諸大名始過半金主二相頼、大利を貪られ、却而彼等か為二公務を相勤候様成行候は、国産之利潤を奪れ、寶主所を換候より、全武家衰弱二至り候儀二有之、今般は根本より立直され候ハ、武家之威權商人二奪はれ候儀無之、商人共も身分を顧四民各其分二安し候ハ、質素節儉之御教令も是より行ハれ可申、非常之時二は非常之御所置無之候而は

御国家御更張之期有之間敷趣を以、会所御仕方をも荒増御書取、厚勘弁評議致し早々可申上と之趣二御座候

此儀御沙汰之通、武家上下一般積年困窮致し、平生之經費二も差支候向不少折柄、異国船渡来又は津波地震等二而、非常之手当領分救方等暫時も難延入用相湊ひ、銘々領分知行江用金申付候上二も、猶町人共より金子借受諸事取計候儀故、

御国家之衰弱一ト通りならさる儀二有之、右体之次第二付、御備向之儀、人夫武器類用意致し整候様相見候とも、内実は用途必至と差支候もの多く、只々疲弊を増し候而已二而、迺も御国力可立直期無之、尤質素節儉之儀度々被仰出候得共、

兎角二風俗人情奢廃怠懦二馴、困窮貧苦之中二も多年之旧習改兼、然処今般之地震御府内惣体之儀二は候得共、職人商人共は却而夫かため二大判「利」を得候ものも多ク、詰り武家之難洪二相成候より、

中二は是迄之弊風を聊感悟仕候者も御座候哉二付、其機二乘し諸家并諸民御救助之名義を以、諸国産物会所御取建、巨商を頼公務を勤候様之仕癖御改革可有之と之

「
(23)

「
(22)

「
(21)

御儀御尤至極之御趣意二而、商人共難渋申立騒敷位之儀二、素より御貪着可被為在訳無之、乍然何分大變革二付、廉々一体之御制度二も拘り候間、案外之悩を引出入間敷とも難申、尤御沙汰之通非常之節には非常之御所置可有之筋二候得共、非常二候^二御見居無之儀は、小事二候とも難相成、依之得と勘弁評議仕候^二、一体当時御制度之大体、万石以上以下江府おゐて屋敷被下、万石以上は多分參勤交替、万石以下は定府致し候事故、武家人別之二三分は在府可致、就而は寺社・山伏・工・商之類も多候^二、江府産物と申は無之、

公儀を始武家之分、米は御料・私領より相廻候得共、其余は塩・味噌・炭・薪・呉服類其外都而之儀、收納之金銀を以買上、町人共ハ右を目当二諸国之産物引受、売上ヲ右に付而は食料をも多分二買入、諸国二而ハ江府江出候右米穀産物代金を、年貢金銀并

暮方足合二致し候儀二付、年々年貢筋二而江府江集り候金銀は、武家より町人之手二渡り、夫より農民江戻り、又年貢筋二而武家江集り候儀二付、四民多少之釣合宜敷、且質素二而各分限を守候得は、仮令非常之災害有之候とも、容易二当時之如く武家

困窮二も不至候得共、日を追而世上奢侈二移り衣類・器物類結構而已二無之、諸事手重二相成、無益之入費多ク相懸り、定式之收納に而は暮方足兼候より、種々之手段を以多分之借金いたし、扨農民は右体領主地頭勝手向不如意相成、先納金用金

申付候程之儀二付、凶年飢歳之救方平生之世話等も不行届故、追々衰へ田畑は質地二差入、或は江府江出商人二成候類多く、^力引替、町人は世上奢侈二随ひ、衣服・食物ヲケはしめ色々新規之品を拵、高価二売出し、

又ハ手段を以不正之商ひをもいたし、^紙武家之金銀を貪取候故、追々人別も

相増候儀二而』、元来武家は年々收納之定り有之、農民は田畑其外作徳之限有之候得共、町方二利潤之限と申は無之候間、漸々武家・農民は困窮およひ、

町方は人別増加二随ひ（朱抹）弥盛二物価引上り候二付、享保度右を可制ため諸商

「（26）」

「（25）」

「（24）」

人仲間組合相立、 $\times$ 売 $\times$ 買不相成、猥二
高価二不売出様、一旦嚴敷御取締相立

(朱粹)

『候得共

(朱書)

『仲ケ間組合之儀、享保前後二相立候も有之、
組合仕法も当時とは違ひ候も可有之候得共、
凡を以本文之通申上候儀ニ御座候』
有之
末二
紙ケ力
書

右之通仲ケ間相立、友吟味之姿ニ相成候方
却而申合行届、益物価引上ケ』、終ニ彼か

「(27)

力を仮らず候而は

公務も勤り兼候次第二至り候儀ニ付、富国强

兵之御所置之急務は、奢侈手重之儀を

禁し候と、商売「賈」之権を挫き候と之ニツニ付、御書

取之趣整候筋ニ候ハ、素方右之通ニいたし

度儀万々ニ候得共、諸国之産物を御代官

領主地頭等より残らず江府江運送致し

候而は、江府・大坂之商売「賈」其外津々浦々

之もの而已ニ無之、国々悉ク差支、挙而難渋

申立候様可相成歟、尤御沙汰之通、一方宜

候得は一方差支候は素より之儀ニ候間、商

売「賈」之差支は論し候ニ及はす候得共、右諸国之

差支と申候ハ

御国内之産物は迄不残江府江廻り候

と申ニは無之、最寄之城下又は市場等江持出

相互ニ有無を通し候は勿論之儀、遠国掛隔候

場所ニ而も、彼所ニ而出来之品は此所ニ而すたり

候と申前々之仕来有之、右は近く野州

宇都宮辺ニ而は、多く土地之米は酒ニ

造り江府江相廻し、会津米を食用ニ致し、

甲信両国は織物出来候得共、塩・味噌類ハ

上方筋方相廻り、且信州路ニは中馬と唱候

稼致し候もの数多く有之、産物を附ケ宿々

附通し、三州・尾州辺迄も罷越、戻り馬ニは

先々之産物を附持越候哉ニ及承候間、何れ

之国々も右様之仕来可有之、然ルを一旦不

残江府江取集候事ニ相成候得は、運送二重ニ

相成、手数・賃銭余分ニ相懸り、其上前々之

運送路とは道筋相違いたし、船乗駄賃

稼身薄之もの渡世ニ離し候類不少候間、

(朱書)

『船乗・駄賃稼之もの共は、運送路替候迄ニ付

渡世ニ離し候もの而已ニは無之、道筋ニ寄候而ハ

存外ニ運送之品相増候場所も多可有之

「(28)

「(29)

候得共、右は渡世二離レ候もの之足合二は
不相成候間、自然難渋申立候もの諸国二多ク
出来可申候、』

┌

辻も御書取通二は難相成候間、江府并
大坂江相廻り候品而已、御仕方立可申哉二候得共、
是以御書取之如く御料は御代官、私領は
領主・地頭取計二而相廻し、手附・手代・家来
出役いたし、町人共江売渡候二は、諸色之内
売口遠キ品又は久敷困ひ置候而は不
用立品も出来、且は火災其外等二而臨時之
損失相立候儀も可有之儀二付、一旦
公辺并領主・地頭おゐて買上ケ、代金荷主江
不相渡候而は相成間敷候処、素方領主・地頭ハ
困窮多二付拝借金杯相願候向も出来
可申、左候得は自然而所之大都会二集候
諸色は不残御買上相成候姿二付、彼是以
莫大之御用意金無之候而は不行届、殊二
諸家之内二は年々産物を引当二致し、
江府・大坂之巨商共より二年も三年も
追々二取越、前金借受居候向も不少哉二付
右等之向は借金銀当分居置二而も不被
仰出候而は難出来候得共、右様取計候得は
一時金銀融通差支、端的取続兼候向も
可有之、勿論金銀さへ差出候得は武具
馬具以下人数迄も外見たけハ間二合候様なる
世の中故、殊更武家之嗜薄く相成候二付、
一躰ハ融通候上二無之候而は武家之風儀
不改候得共、左候二は品々御差支出来、余程之
御覚悟無之候而は難相成、

(朱書)

『是迄多分之御足高二而俄二御役被 仰付候

┌

向は勿論、素方持高相応之面々二而も、困窮
之向はいつれも金銀之融通と市中諸圀「色」之
自由と二而無差支済来候儀二付、融通二拘り候
儀を無頓着被 仰出候二は、右等之辺迄も

御覚悟無之候而は難相成儀二御座候』

旁以是又容易二難整○「○此所二小札付有之候」、乍然右躰之御仕方不相立、
町人共都合宜様盛二金銀取引為致候とも、
極々武家困窮仕、詰返済金ハ勿論之儀、
利分をも不差遣候得は、何程町人共貯
有之候而も用達金可致筋無之候間、矢張
武家之融通ハ差支候儀二有之、然ル上は
武家二而頼二いたし候融通之事實は無
滞利足を町人共江差遣候儀肝要二有之

┌ (32)

┌ (31)

┌ (30)

候得共、素々困窮故金銀借入候武家より
町人共江、永代利足を遣し融通差支

無之様二と之儀は、譬ハ養生二毒を飲候も同様
之儀二候間、猶種々勘弁仕候処、仮令漸々

なりとも町人之権を挫候ハ、其俚江差置候
よりハ可然、就而は仲ヶ間組合之儀天保度

一旦停止冥加運上御差免相成候処、矢張

物価高く取締不宜由を以、去ル子年

文化度以前之姿二復古、冥加運上ハ弥相納候二
不及旨被 仰出候儀二候得共、復古致し候而も

物価ハ不引下候間、第一右を猶又停止被

仰付可然哉、尤仲間組合相止物価引上ヶ

候は、商売「賈」共銘々一己二相成候故、先を争ひ
払底之品或は流行之もの余分二可買入と、

元方江せり込元直段引上ヶ、且ゞ買ゞ売も

いたし易キ意味も有之候故二可有之候間、

(朱書)

『仲間組合立居候得は、脇売不相成故、商

売「賈」共安心いたし敷「前」金差出候二付、自然品

物も潤沢いたし、組合相止候得は少も直段

高直之方江売渡、江府・大坂之着荷相減

差支二可相成と之論有之候得共、右は

御国内之産物、必江府・大坂江可差出筋之

品有之候ハ、右之趣を以脇売嚴禁被 仰付

候得は差支無之、仲間組合等二拘り候二不及

儀二而、然ル上は銘々一己之取引二相成候とも、

危踏候意味無之候間、矢張前金差出候

二可相成と奉存候、』

御書取之趣二不拘、右を相制候丈ヶ之

御仕方二而、江府・大坂両所とも場所見計

海陸二会所三四ヶ所御取建、荷物取引は是

迄之通元方と町人共相對二いたし、着荷

之節は船廻し之分ハ海岸会所、駄荷之

分は陸地会所二而、必品を改買方々直段

書為差出置、且右駄取計候は役々出役

其外会所入用も相懸候間、荷数又は直段二

応し運上御取立、詰り是迄問屋共之口銭丈ヲ

御益并会所入用二振向候様之仕方二而は

如何可有之哉、尤右様相成候上、元方之

もの共江連々申諭、代金渡は品物御払

次第之積二而、会所直払二願わセ、右之分ハ

御書取二准し候取計二いたし、又ハ御操合宜

節は実用之品之内何ニよらす元方々

御買上ヶ御払二いたし、市中相場を売

「 (35) 」

「 (34) 」

「 (33) 」

崩し候様二も取計、其外臨時二高直相成り候
品有之候ハ、兼而改置候直段并品物仕入元
高取調、格別之利潤を貪候ものは其品
取上、身上二応し重キ過料杯申付候ハ、
自然少ハ町人共之權を挫キ、御益二も
相成可申歟、併いつれも見越之儀、且前書
之通り不容易事柄二付、弥御取用相成候
儀二候ハ、役々御人撰得と取調方被 仰付、
先ツ一二品ツ、相様し、追々ニ惣躰二およほし
候方可然哉二奉存候、

右評議仕候趣書面之通御座候、御渡被成候

御書取忝通返上仕候、以上、

卯十二月

(朱粹)

(朱書)

力 ケ 紙

候得共、累年都下繁栄、世上奢侈之
風儀二流れ、衣類・食物をはしめ何事も
新奇を好ミ候人情より、奸商共右之
弊二随ひ、弥商利を得、戸籍ハ益相増
候故、物価引上り

(37)

書面評議之趣得と熟考致候
処、白札付ケ有之迄二候ハ、存寄
無之、末文御認加二相成候ハ、異存二付、
別段勘弁之趣可申上と存候、

播磨守

(38)

書面評議之趣熟覧いたし候処、
白札付有之候迄は存寄無之、
其末二至候而は異存二付播磨守
見込同様二有之候、

対馬守

(朱書)

「前書小札之末御評議書如此直り候旨二御座候、
三月七日御渡」

何分可然とは難申上、尤武家方二而ハ
弥以質素節儉いたし、可成丈
町人共江用達金等不申付様心掛、
町人共之義は、於其筋精々探索

(39)

等いたし、高直二売出候品有之候ハ、
元直段相改、格別之利潤を貪候者ハ、
其時宜二応し急度御咎等申付候
ハ、武家之権威も相立、自然少は
町人共之権を挫き候様可相成と奉存候、

(朱書)

『「末文左直り候而も

寺社奉行衆御異存之趣也、』

「本多加賀殿

石谷因幡守殿 江

寺社奉行

書面評議之趣は拙者共見込之
次第も有之、此程及御掛合候通之
義二而御取調通二而は異存二付、別
紙を以可申上と存候、依之御廻し之
評議書案令返却候、

(朱書)

『「此程及御掛合候通之義と有之候は、

左之写二御座候、

(朱書)

『辰二月十日、本多加賀守方受取、

同十四日、勘弁いたし可申上旨被仰渡、勘右衛門を以御渡二付
写いたし、翌十五日、同人を以返上、』

「本多加賀守殿 江
石谷因幡守殿

寺社奉行

去卯十一月四日評議二御下ケ有之候産物
売捌方之儀二付、御取調之評議書熟覧
勘弁いたし候処、御書取之通諸国産物
不残江戸江相廻し、御料・私領共会所取建
取捌候様相成候而は、諸国入用之品は猶又
江戸方相廻し二重二運送いたし
賃銀余分二相懸り、物価引下方御仕方
難相立は勿論、御見込之通差支
之廉々不少、尤御書取之趣は江戸
廻し二相成候産物而已之御趣意二可有
之哉も難(朱抹)計「量」、左候得は国々所用之
品二重二運送いたし候と之差支は
無之候得とも、江戸廻し之(朱書)「諸」産物而已二而も、
不残御代官・領主・地頭之取捌二相成候而は
問屋共初町人共彼是申立、必不都合之

「 (42)

「 (41)

「 (40)

儀出来いたし候而已二無之、第一右様
取計候二は、御代官・領主・地頭方元方江
仕入金不相渡候而は難整筋二候処、
江戸廻し諸産物不残と相成候而は、莫
大之金子無之候而は難相成候得とも、
当節諸家困窮之折柄二候得は、逆も
行届間敷候間、旁御書取通二は難
相成と之儀は至極御同意二候得共、問屋
組合相止メ、江戸・大坂両所とも場所
見計ひ海陸二会所取建、荷物取引は
是迄之通元方と町人共相对二いたし
着荷之節会所二而品物相改、買方方
直段書為差出、運上御取立、詰り是迄
問屋共之口銭文ケを、御益并会所入用二
振向候而ハ如何可有之（朱抹）『哉』と之儀は、
問屋共之口銭を

「
(43)

公儀江御取立相成候迄二而、聊之御益二は
可相成候得とも、矢張運上為差出候儀二
候得は、是又物価引下ケ候場合二は
至り申間敷、左候得は

「
(44)

公儀御益は聊二而、世上一統高価之
諸色買上候様相成、益武家之困窮
を招候筋二相当、何分可然とは難申
併富国強兵之術、御料・私領とも国産
直捌之外有之間敷、御良法其低可被
差置筋二無之候間、猶再考いたし
候処、今般御書取之趣は、富国強兵之
御仕法眼目二而、詰り天下之財宝を掌
握いたし候商人共之権を不取上候而は、
右御趣意も難相立、乍去一時二取挫
候而は、諸国之巨商共難渋之余り彼は
申成、運送方其外必不都合之儀出来
いたし候而已二無之、元方下ケ金差支之段も
顯然之儀二付、先ツ諸国産物取引は
是迄之姿二被差置、物価引下ケ方之ため
公儀并諸家二而も、国産之内土地差障
其外差支無之品は、御代官・領主・地頭之
見込を以、江戸其外可然場所江会所
取立、又は屋敷（朱書）『々』等二而も都合次第取捌、
公儀二而は、八丈嶋産物会所等之振合二
見合会所御取建、元方江代金御下ケ之上
直二右会所江諸荷物差向、是迄市中方
御買上相成候

「
(45)

公儀御用之品は可成文御差止、会所

「

着荷之内より御遣方ニいたし、其余之分は、武家・町（朱抹）家（朱書）『方』之無差別（朱抹）武家、
（朱抹）町方御払二被成遣、町人共之内請売
（46）

を以被差遣、右代金之内御益相成候分・
会所諸入用之外は、都而御国備二相充、
領主・地頭おゐても右二准し、国産
取捌方勝手次第二相成候ハ、相応之
益筋も出来、且は右躰御仕方相立候
上は、諸組問屋共取引之品も正路二
取捌不申候而は難相成故、右御払直段
等二見合、自ら諸物下直二相成可申は
勿論二而、是迄仕入方いたし候諸品之内
多少は可有之候得とも、会所江引上ケ
候丈は問屋共引請荷物之内相減候
筋二付、則夫丈ケ之利権を挫候訳二も相当、
一躰之趣意も
（47）

公儀并領主・地頭おゐて、其所之産物
売捌候訳二付名目も正敷、町人共おゐて
強而故障可申立様も有之間敷、右之
通二候得は、万々一意外之故障有之、
其低二相成候而も、更二御不都合は無之、
まして前書之御仕法二候得は、追々
張大ニ相成、元方江之下ケ金等も増益
いたし、会所江引上ケ候品次第二相増、
往々御趣意之通、国産諸品は大方
武家方町人共江請売為致候様可
（48）

相成、左候得は諸色相場も、武家二而
掌握いたし、町人とも利権を失ひ、品之
精粗二不拘、元方払底之由申唱
猥ニ物価引上候様之儀も無之、全一家
経営之ため、正路之商ひいたし候迄二而、
×売×買等不届之取計も難相成
（49）

場合ニも至可申、畢竟是迄国産二而も、
武家二而は直売不相成御制度之様相成
居候事二付、町人共（朱抹）江（朱書）
領主・地頭困泥ニ陥り、且は領民共も
所産之品町人共江送候得は、格外
直安ニ無之候而は買入不申、相応之品
生産之向も、直段引合不申候より稼
方不行届、廃業いたし候類も可有
之哉之処、町人共手を不経、御代官・領主・
地頭二而直二取捌出来候ハ、右等之
憂も無之、産物も自然潤沢いたし、
（49）

益物価引下方御趣意も相貫、武家二而
天下之財宝握り、追々巨商共衰弱
いたし、全之利権武家江相帰し候は
粗掌中を視る如く二而、富国強兵之
御所置、前書之外有之間敷候間、右之趣
御触有之、尤右は御勝手方御勘定
奉行主二成取扱不申候而は難行届
筋二付、其段厚被 仰渡可然哉之趣を以、
別紙之通御触案相添返達致度、
今一応御勘弁之上否被御申聞候様
存候、

「(50)」

二月

「

御触案

物価引下之ため天保度問合組合
停止被 仰出、冥加運上御差免相成、
猶又去ル子年復古いたし、冥加運上は
弥相納候二不及旨被 仰出候得とも、兎角
物価引下方不行届、就而は御料は
御代官、私領は領主・地頭二而、其所産物
之内差障無之品は、御府内其外何方
二而も都合次第市中江会所取建、
又は屋鋪々おゐて取捌、御用品之
外は武家・町方之無差別夫々
御払二被成下、私領おゐても右二准し
可取計旨被 仰出候間、問屋共おゐても
物価引下方精々相励候様可致候、
右之通被 仰出候間、御料は御代官、
私領は領主・地頭江可被相触候、
月

「(52)」

(ヒレ)

「御同意 八右衛門

御同意奉存候 次郎八

同 八太郎」

「(53)」

(朱書)

『辰三月十六日上ル』

先達而御下有之候(朱抹)諸家産物売捌
方之儀二付御評議書末之御文言
相直り御廻相成候処、寺社奉行衆は
御異存二而、別段被 仰上候由、就而八右
相改り候末文之趣二而御同意、御連名

被仰上可然哉、其所得と評議仕可
申上旨被仰渡候、

此儀相改り候御評議書御末文之趣
に而は、問屋組合停止之義ハ御除
相成、是迄之御法度不弛様二との
御主意迄二付、別段御異存之廉
可被仰上品も有之間敷、御勘定
奉行衆御連名二而御評議書御進達相成
可然哉二奉存候、以上、

辰三月 諸問屋組合再興掛

「 (54)

「本多加賀守殿
石谷因幡守殿

井戸対馬守
池田播磨守

去卯十一月四日評議二御下有之候産物
売捌方之儀二付、御取調書白札付ケ
有之候迄二候ハ、存寄無之、末文御認
加二相成候上ハ拙者共異存二付、
別段勘弁之趣可申上旨、先達而及
御談置候処、猶又末文御取直し、
問屋組合停止之儀は御除相成、是
迄之御法度不弛様二と之文意二付、
強而之存寄無之候得共、寺社奉行衆
異存二而、別段申上二相成候二付而は、
元来問屋組合商法筋は専ラ拙者
とも取扱二拘り候儀二付、右之趣意
別段可申上哉と存候、依之申上案
御廻申候、

辰 月

「 (57)

(朱書)

『前文評定所一座評議書同様二付略之』

此儀御沙汰之通、富国強兵之術、御料・
私領とも国産直捌之外有之間鋪と
之御儀御尤至極奉存候、然ル処「去ル丑年
問屋組合停止被 仰出候節、却而何国方
出候何品二而も素人直売勝手次第
たるへく候、且又諸家国産類其外
惣而江戸表江相廻し候品々も、問屋二
不限、銘々出入之もの等引受売捌候
儀も是又勝手次第之旨御触有之候
二付、諸家二おゐても為筋相成候儀二

「 (58)

候ハ、十分手捌をも可致筈之處、矢張町人共之口為任置、別段弁利之趣も無之、「殊二他之國産を買集、売

荷を蔵物二引直、蔵屋敷江困置候類も有之哉之段風聞入御聴、既翌寅年近來五畿内・中国・西国・四国筋

國々領主・地頭二おゐて自國之産物は不及申、他之國産をも夫々手段ヲ以買集、売荷を蔵物二引直、蔵屋敷江困置、相場高直之砌、手払又は銘々

出入之町人共二為売捌、×売同様之及取計、依而は領主・地頭之權威を以他之売買江差障、或は無謂他所之

ものゝ冥加銀等為差出候哉之趣も相聞、以之外之事二候、諸色直段引下ヶ方之儀二付、追々相触候趣も

有之上は、領主・地頭二おゐても前書惡弊早々改革可有之ハ勿論二候得共、万一是迄之仕來二因循致、不良之取計於不相止は、糺之上急度

可被及御沙汰旨御触有之、去ル亥年諸問屋組合停止被 仰出候以來商法取締相崩、諸品下直二も不相成、

却而不融通之趣も入御聴、都而文化以前之通再興被仰出、左候迎元十組之もの共冥加金上納等之御沙汰は弥以無之候間、文化以來之商法二不流様取締方等精々可申渡旨被仰渡候二付、其段申渡追々商法筋取調候儀二有之、其後去ル丑年

浦賀表江異國船渡來之節、市中

御手当御仁惠筋之儀御沙汰有之

候二付、差向米穀を初、日用之品御当地払底二相成候而は、以之外之儀二付、下リ荷物仕入方運送等差支無之候様申渡、夫々手配為致

(アキママ)

去卯十月地震出火以來諸色潤

沢方并直段引下ヶ方等申渡、別而板・材木類は必用之品二付、問屋共一同差はまり、急速潤沢致し候様厚可申合旨申渡、

売捌高壱人別取調、手薄之ものは問屋家業差除可申付旨をも

委細申渡候二付、問屋共儀も勵合、山方江

「 (59)

「 (60)

「 (61)

「

「

仕入前金差送り、追々荷物着致し、
其外諸色之儀も同様之振合

に而、右は再興之廉を以申諭、又は
及察斗候故、一（朱抹）統（朱書）『統』氣勢相進ミ、大金

之仕入をも致し、先ツ差支も無之様
相成候儀二而、差向商賈之權を挫キ
候廉も無御座、尤再興後必定物価

下直二可相成りと之見込二は、曾而無御座

候段は、先役遠山左衛門尉方も委細

申上置候通二御座候得共、前書御用

金調達を始、諸色潤沢方等いつれも

問屋組合再興之功驗を顕し候儀二

有之、一躰諸国方出候産物類、御料

は御代官、私領ハ領主・地頭方江戸表江

直二運送為致候様取計候二は、御代官・

領主・地頭方悉く元方江仕入金不

相渡候而は難整筋二而、殊二海上難
破船之取計方損失之見込等も

有之

（朱書）

『一、下り荷物菱垣廻船・樽廻船江積候分

海上難破船之節、遠州今切方西

之方ハ大坂表江相達、今切方東之方ハ

江戸表江相達し候得は、積合問屋共

之内廻船流寄候湊海岸江罷越、

浦役人立合荷物相改、吹「沢」手と唱

濡荷物・散乱荷物は其浦二而入札

払二いたし、諸入用は一船積合、荷物は

元直段江割付、荷主損毛二相成、

尤大坂表其外上方筋方送荷物

に候得は荷主之損、買付荷物二

候得は江戸表注文いたし候者之

損失二相成申候、

一、諸家雇船之儀は、右同断今切

を境、廻船流寄之浦方江戸表

又は大坂表江為相知、武家荷物

一手積二候得は家来出役之上、沢手

荷物仕払・難船浦入用等も都而

一手賄二相成、廻米其外荷物積

切一船雇之節は、手船同様取計

候趣二御座候、

彼是差支之筋も御座候間、再応

勘弁仕候処、諸問屋組合之定無之、
諸品武家之進退二相成候而は

┌

┌ (63)

┌

┌ (64)

┌

┌ (65)

┌

┌

御当地入津高取調は勿論、已後
非常之災害有之候節、市中御救
筋諸色潤沢方等取計向、私共二
おゐて見居無御座、其上再興後
いまた十ヶ年も不相定内、猶又
停止被 仰出候而は、町人共都而之
取引を危踏、金銀融通二差響、
詰り武家之差支二相成可申候間、
問屋組合之儀は、先ツ是迄之姿二
被差置、尤兼而触申渡置候通り、
諸色高直二売捌、格別之利潤ヲ
貪り候ものは夫々吟味之上、御仕置
御咎等申付候儀二御座候得共、猶此上
精々探索いたし、 $\times$ 買 $\times$ 売等致し
候者有之候ハ、速ニ吟味取掛候様
可仕哉と奉存候、
右御尋ニ付取調候趣書面之通御座候、
然処寺社奉行・御勘定奉行・私共存寄
致區別、評議之趣一定不仕候間、格通
を以此段申上候、以上、

辰 月 井戸対馬守

池田播磨守

市中問屋組合丑年中御停止被仰出、諸色
売買手広御主法中取締無之、物価引
下も不相成廉々御尋ニ付左ニ申上候、

一、市中燈油之儀凡拾万樽之見積二而、此内下り

油と唱候大坂表・勢州・泉州等仕入候分凡七万
樽、地廻と唱候關東筋二而仕入候油凡三万樽
程之見積二而、売買致日用二相成候処、文政度
之頃より高直二付、天保三辰年 方 靈岸嶋江
油寄所御取立、御役人様方御出役有之御世話
被為在候処、追々市中日用差支、直段も
高直二相成候二付、同八酉年御沙汰止、如元之
油問屋江売買被仰付候得共、大坂表之近郷・
江戸表之近郷共、辰年以来六ヶ年程之間、其筋
絞草売買方一変致し候癖付候二付、

問屋共売買方其筋々据合兼、酉年 方
天保十二丑年迄、兎角市中日用物切れ等
有之、同年問屋御停止手広被仰付候二付、仕入方
可致油屋共損失を厭、又他商売之ものは
仕入致候而も、油怔合等不弁二而、日用差支候二付、
翌天保十三寅年手広御沙汰二不拘、下り油
元問屋・地廻油元問屋共江、仕入方品切無之、日用
不差支様申合出情（ママ）可致旨、当

┌
(66)

┌
(67)

┌
(68)

┌
(69)

御番所江被召出被仰渡、其節方下り・地廻油
害人毎二仕入買附書状・仕切状封書二而差上、
売徳口錢等も差定申上、大坂表其外筋様江
度々御掛合被成下候而、日用油差支無之様元
問屋共取計候二付、手広御仕法二而八差支候間、
寅年中方問屋組合有之節、同様之候方二而、
去ル亥年迄引続、同年問屋再興被仰付
名前書は差上候得共、寅年以来手広之御仕
法二而は眼前差支候間、書面之通之御主法二
御座候、

「 (70) 」

- 一、下り鯉節塩干肴問屋
- 一、七組肴問屋
- 一、松前産塩干肴納方之者
- 一、地廻塩干肴問屋
- 一、乾物問屋

右天保十二丑年問屋組合御停止被仰渡候而も、
日々御用肴・同乾物御品数荷請二而ハ御差
支相成候二付、丑年迄仲間行事と唱候名目、御用
肴・同乾物納番納人と相唱、仲間会所と唱候
分ハ御差止二候得共、日々御用品撰立取集致
候二付、此家業筋二限右会所は御用品撰立
所と唱、無余義次第二付、無急度御聞濟被成下置、
其外荷物引請方之儀は、都而仮御仕法と申上
候而、御用勤続仕候、

「 (71) 」

- 一、錫鉛問屋は未タ再興御沙汰無之、當時も手
広中二御座候処、四ヶ年以前丑年頃方御諸家様
方大炮御鑄立并御打試二付、和錫鉛御注文
多二付、素人他商売之もの銘々売買致候ハ、
売徳可有之と、大坂表其外諸国手筋を求、
互二糶合買取、内実は武家方御家来衆
も此見込有之買入二付、元問屋共荷元買入方
注文いたし候而も、調兼候程二売買競候二付
四ヶ年以前丑年
- 一、和錫

「 (72) 」

六月頃
 壹貫目二付代
 銀百八拾匁
同九月頃
 同断
 銀貳百五拾匁
同十二月頃
 同断
 銀六七百匁
翌寅年正月頃
 同断

銀七八百匁

同三月頃

同断

銀七百匁

卯年六月頃

同断

銀四百五拾匁

当辰正月頃

同断

銀三百匁

当時

同断

銀貳百八拾匁

└ (73)

四ヶ年以前丑年

一、鉛

正月頃

壹貫目二付代

銀拾八九匁

同年十二月頃

同断

銀三拾三匁五分

寅年正月頃

同断

銀三拾六匁

卯年

同断

銀貳拾七八匁

当時

同断

銀貳拾四五匁

└

右之通丑寅年素人景氣立候而も、問屋組合有之候得は、荷物為潤沢引上方向致懸引候而も右躰大高下ハ無御座候得共、素人糶合候故大高下有之候而も取締方相成兼、且素人手元江隠買入候二付、市中江有品顯れ不申候間、自然御用之節御差支相成申候、

└ (74)

一、蠣殻灰竈持石灰問屋之儀は、御普請所

御用品は御材木御移徙奉行様御進退請候処、御勘定御奉行様御掛二而未々再興御沙汰

無御座候二付、蠣殻灰竈数も享保度拾口二

御定、寛政度人足寄場江式口、都合十式竈二付

焼立候種貝、年々海面江生し候嵩相当二

御世話被為在候間、焼立差支無之処、手広中

蠣殻灰竈数相増候二付、焼立種貝引足不申

└

候間、年来相続之竈持共種貝払底故焼立
差支、并石灰之儀も八王子・野州産共素人并
漆喰練売之もの共勝手次第買取、取締無
御座処、去十月以来、乍恐御場所柄御普請
所御ヶ所多二相成、全御差支相成候二付、俄之御沙汰
二而、去十二月中此度限新大橋際灰置場江、一
手二積付御用品相納、市中売買も無差支
可致旨被仰渡候、然共前段之通勝手尽之売
買癖付候間、御用品納入共取締方御用弁筋二
心痛仕罷在候由、

一、大道春共、御春屋御次米春立、享保十二未年
より相勤候処、手広御沙汰二付、右春立御免
相成候処、御賄方御掛二而実々御差支相成候二付、
去ル十三ヶ年以前辰年中、市中大道春共
名主番組限人数取調、前々之通春方御用
相勤候、

一、桶職人共、桶大工頭方触当次第御国役可相勤
義二御差候処、寛政度方桶職人住居之表役・裏
役差別相立、役錢を以相勤候御仕法被仰渡候処、
手広御仕法二相成、桶方御用御不弁利之由二而
去ル子年方寛政度御仕法之通古復被仰付候、

一、諸商売手広諸荷物船積方も、諸国勝手
次第被仰渡候二付、廻船船頭・水主共迄自俣二
相成、元問屋共仕入荷物渡海中不正取計致
候而は、浦改も無之、難船又は荷打致候旨申立
候二付、諸商人共諸国諸色仕入致候而も損失多
二付、銘々仕入之手を縮候間、世上品切多差支
候二付、手広中二は御座候得共、十四ヶ年以来卯年
中

大伝馬町組木綿店 白子組木綿店
綿店 釘鉄店 油店 蠟店
薬種店 砂糖店 紙店

此九店申合、大坂表丈夫造之船相撰ミ、并此
仲間内之もの共銘々出張いたし、廻船造立致
候而、元菱垣積諸問屋諸色積合之世話いたし、
難船有之節は大坂表并江戸九店二而定世話
致候二付、漸船方取締相立、市中諸商人共大坂
表買附荷物運送無滞相候儀二而、此九店
廻船積合相立不申候而ハ差支相成申候、

亥年以来問屋再興（貼紙）「後」被 仰出候後は手広中之
（貼紙）模様と違取締も相立、諸荷物運送其外物価
引下ヶ二相成候品も有之哉、御尋廉左二申上候、
一、生蠟（貼紙）「問屋組合停止中」手広中

	金壹兩二付目方	
	貳貫五百目替	
	同	
	貳貫目替方	
	三貫目替	
	再興（貼紙）「 印 後」被仰付候二付取締	
	同	
	三貫目替	
	同	
	三貫五百目替	
	同	
	四貫目替	「（79／80）」
一、塩	手広中	
	赤穂塩壹俵二付	
	銀拾匁位方	
	九匁五分位迄	
	再興被仰付候二付取締	
	同断	
	銀六匁五分位方	
	五匁四五分位迄	
一、木綿	手広中	
	白木綿壹反二付	
	銀八匁三分位方	
	七匁五分位迄	
	再興被仰付候二付取締	
	同断	
	銀七匁五分位方	
	六匁三分位迄	
一、繰綿	手広中	
	三拾本二付代	
	金百五拾兩位方	
	百貳拾兩位迄	
	再興被仰付候二付取締	
	同断	
	金百三拾兩位方	
	百五兩位迄	
一、畳表	手広中	
	尾道表拾枚二付代	
	銀六拾七匁位方	
	五十四匁位迄	
	早嶋同断	
	銀五十七匁五分位方	
	四十四匁位迄	
	青筵同断	

一、紙

銀三拾五匁五分位^方
貳拾匁位迄
再興被仰付候二付取締
尾道同断

銀五拾七匁五分位^方
四十貳匁五分位迄
早嶋同断

銀五拾匁位^方
貳拾八匁位迄
青莚同断

銀三拾三匁五分位^方
拾貳匁位迄

手広中
脇半紙壹^咫二付

銀三拾七匁位^方
貳拾貳匁位迄
西之内拾帖二付

銀三拾五匁位^方
貳拾匁位迄
越前大奉書壹帖二付

銀拾貳匁位^方
九匁位迄

再興被仰付候二付取締
脇半紙同

銀三拾三匁位^方
拾八匁位迄
西之内同

銀三拾貳匁位^方
拾八匁位迄
越前奉書同

銀拾匁位^方
八匁位迄

手広中
白羽二重壹疋二付

銀百四拾壹匁五分位^方
百三拾七匁五分位迄
白縮緬同

銀貳百壹匁七分位^方
百九拾五匁三分位迄
白紬同

銀九拾四匁八分位^方
九拾貳匁位迄
白絹同

銀六拾三匁五分位^方

「
(82)

一、呉服

「

一、酒

越後縮壹反二付
銀九拾匁位方

八十七匁位迄

再興被仰付候二付取締

白羽二重壹疋二付

銀百貳拾七匁三分位方

百貳拾匁位迄

白縮緬同

銀百八拾壹匁五分位方

百七拾貳匁四分位迄

白紬同

銀八拾六匁位方

八拾壹匁五分位迄

白絹同

銀五拾八匁位方

五拾五匁壹分位迄

越後縮壹反二付

銀九拾匁位方

七拾六匁五分位迄

手広中

極上酒拾駄二付

金三拾五兩方

三拾三兩位迄

上酒同

金三拾貳兩方

貳十九兩位迄

中酒同

金貳拾八兩方

二拾三兩位迄

並酒同

金貳拾壹兩方

拾九兩位迄

再興被仰付候二付取締

極上酒拾駄二付

金三拾壹兩方

廿四兩貳分位迄

上酒同

金貳拾八兩方

廿壹兩位迄」

中酒同

金貳拾五兩方

拾九兩位迄

並酒同

「 (83)

「 (84)

金拾八両
拾五兩位迄

一、材木は文政十二丑年三月大火二付、問屋・

仲買・素人無差別、諸国荷物手広直買

被仰付候二付、職人・素人共互二糶合買取、山方

之ものも江戸表江罷出高直二売捌候二付、

板・材木入津品隠れ候間、作事方差支、

同年八月二至候而も品差支候二付、天保五年年

二月大火之節は、諸国板材木問屋共二限り

引請可申、問屋共ハ手筋之荷主方引請方

出情（ママ）いたし、差支無之様可致旨被仰渡候二付、

同年三月二至潤沢いたし候処、其後手広中

弘化三年年正中、大火之節は問合組合

御停止中二付、素人・職人共諸国材木直売

致候間、隠れ荷物二相成、同年九月頃漸板・

材木売捌方穩二相成候二付、亥十月中地震

引続出火類焼場も多、其上右三度之大

火は焼失場二限候得共、去十月は震損・焼

失、御諸家様方御屋敷・町方共不残作事

向有之、殊二近在之義も震損場所も同様

作事向有之、板・材木類入用高夥敷折柄二

候得共、荷物問屋二限引請候儀二付、諸国板・材木

仕入方急速懸引いたし、御武家方・町方

作事無差支様可致旨、同十一月十五日被仰渡

候二付、同年十二月上旬方追々板・材木類入津

高相増、当二月廿三日品潤沢御差支無御座段

申上候、尤諸国山方杣平和金沓分二付八拾

間木取候処、六拾四間木取仕、木挽平和

金沓分二付式拾間挽立之処、拾六間挽立

并日光水戸道御代参川船積賃錢凡三四割

増、遠州・紀州・駿州・参州・奥州廻船運賃

凡八割・五割・三四割増、国々二寄甲乙之増方

仕候二付、市中材木売直段も右二准平和方

凡四五割増之直段売捌候処、当時潤沢仕

候二付、荷主共并運賃・山稼賃錢共追々

引下候間、江戸表問屋仕切直段も追々引下

候而も、荷主共氣請二も相障不申候、全問屋

共江御任荷物仕入方被仰付候二付、四五ヶ月之中

近国関東筋下り荷物共潤沢仕候、

一、

紅花 天保十二丑年 手広中

沓駄二付

金百両より

六拾兩位迄

再興被仰付候二付取締

（85）

（86）

（87）

（88）

嘉永五子年

壹駄二付

金五拾五両方

廿八両位迄

当時

同断

金六拾五両方

三拾五両迄

右於尋二御座候処、手広中差支候口々ハ多端二御座候得共、此内御世話被為在候分を荒増廉書申上候、且又亥年再興以来直段引下等相成候分を申上候得共、一躰之处乍恐手広之儀二而問屋於停止後、休業又は新二素人二而其品売買相始候分、忝人別二荷物引請高、荷主送状等事実之处取調、問屋名前書上候処、多端之義二而、寅年方御取掛、凡昨卯年迄二人数取調差上候程之儀、又問屋共も再興被仰付候而も、諸国之荷主丑年方亥年迄之年間、勝手俚二荷物市中江売捌方癖付候間、荷主は問屋江差送候外、隠荷物・洩荷物取締方問屋共方俄二調詰候而は不穩成候間、追々二荷送方荷主江相談中二付、商法之儀は未夕漸半二而直段引下方も際立候儀二至兼、此上五六ケ年も懸引致候ハ、古復可仕当時之場合二御座候、

一、寛政度頃之諸国荷主は、問屋共江実意二

荷送致候間、正路二取引致候処、近来諸色

荷主ハ、其身送候荷物直段高直之方江売

渡度と之心組方、荷主忝人二而も問屋三四軒も取組、直段見合候儀は通例二候得共、此外御諸家様方之用途二納候残品払、又ハ御家々御家来衆之内二は、御領分品御国産仕法二而江戸表御払品御達済之分、口々相増候二付、荷主より

一己限問屋江送候品も、御国産相成候得は其御筋々之御失脚も相掛候故、自然と問屋共江

手取候直段相増候間、当時之諸色直段、寛政

度之見合二而引下仕儀二は至兼、右御家来衆之内二は表向国産不相成候而も、御領分荷主共

江戸問屋共二洩荷・隠荷物差送候を、問屋共

より取押候而談合候得は、其荷主ハ其身勝手筋之儀而已を、御領主様御家来衆江苦情申立、

此御家来衆御領分之者之申立を御信用有之候間、世上惣躰之為二は差障候趣意二至候類、

両三年以前方多端二有之哉二付、是等之類荷主共全正路二至候迄ハ、問屋共再興被仰付

候而も一旦之儀二は行届不申、追々荷主も再興

(90)

(91)

(89)

之御趣意相弁候ハ、諸色共商法淳直二至可申
見込二御座候、乍恐広太之御手数引合方二付、此上
五六ヶ年も御試被為在候ハ、据合可申候、尤凡當時
之處、大坂近郷方上方筋は荷主人氣も扱方

「 (92)

致能候得共、関東筋都而諸色共荷主之人氣
我強二而欲情而已相含、種々手段仕候由、然共
元来享保度

大岡越前守様御勤役中、市中町法并諸商

人売買之道厚御世話被為在御立被置候二付、

寛政度も右之御主法相続仕候処、文化度諸

問屋共商法精細過候間、天保度諸色直段

引下之御主意二而手広被仰付候処、諸国荷主共

其節迄江戸問屋共方荷物引合、前借金不

義理二いたし、外素人共江荷送致、又素人共は

手広中故、荷主方直買致候得は直段安二

品買取候儀と、不手馴品直買致置、売捌候

「 (93)

節二至損毛等致候類多端二而、惣躰人氣相狂候
年間、凡十ヶ年余癖付候二付、此仕癖追々二立
直り候而、諸色都而豊凶・漁不漁二准直段高下
実直二行渡可申候、密々御尋二付此段奉申上候、
以上、

(朱書)

『安政三年』

辰四月

諸色掛

名主共

(扉)

「(朱書)

『辰五月三日御直御渡、対馬守殿思召無之候二付、昨二日於評定所
本多加賀守殿・石谷因幡守殿江御直談、御評議書別紙之通
御引直之積、尤別二御双方限 被仰上候趣も御口談相済候間、別冊は
此方二而清書致可差上旨被 仰渡候、』

産物売捌方之義二付申上候書付

再興掛」

「 (94)

産物売捌方之義二付御勘弁之趣被仰上書、
御勘定奉行衆江之御達書御案文御下、
右不容易御評議二付、十分二存寄可申上旨
被仰渡候、

此儀御向方御取調之趣御趣意至極可然
奉存候、然処右御評議書之義評定所
にて出来候処、寺社奉行衆御異存に付、

「 (95)

御両手之御書面御廻相成候節、書面

評議之趣得と熟考致候処、白札付有之

迄二候ハ、存寄無之、末文御認加二相成候ハ、

異存二付、勘弁之趣可申上旨御附札有之、

對馬守殿も御同意、御附紙にて評定所江

御戻為成候処、末文御取直、問屋組合停止

之御論は更ニ御除相成、再御廻有之候処、

寺社奉行衆ニは、初発之通別段被仰上候趣ニ

御座候得共、御勘定奉行衆ニおゐては、畢竟

御附紙故、速ニ御取直相成候儀と奉存候処、

打返尚又御異存二付、格通ニ被仰上候様

御談相成候而は、小札付有之迄二候ハ、御存寄

無之との所江對、如何可有御座哉、再応

御勘考之上、弥御異存と有之候ハ、御勘定

奉行衆も素之御論ニ復シ、末文之俣問

屋組合御停止之方ニ可被仰上旨、多分被 仰

越候半歟と奉存候、左候得は御一座之御内

評廉立候儀ニも相成可申哉と懸念仕候二付、

御評議書之内、專市中江拘候文勢猛烈

之処、御連名ニ而は不都合之意味に有之候間、

掛紙之趣ニ御取直之義被 仰談、扨御連名ニ而

御評議書御進達相成候方可然哉、併

右御評議迄にて別段之仰上無之候而は、

市中之事実尽兼可申候間、再興前後

之得失事情等入御聴被置度趣を以、御双方

限被仰上、尤御一座江は（懸紙抹消）㊦「右写を以」御演舌御座

候ハ、小札付候末文問屋組合停止之廉御除

之俣ニ而相済可申奉存候、依之御向方

御仕出之趣意江廉々増補仕、下案試ニ

取調奉入御覧候、右は別段之御沙汰二付、

御取舍（捨）は御評議次第之御儀と存寄之趣

奉申上候、以上、

辰四月

再興掛

「（98・99）」

（朱書）

『伊勢守殿方国産売捌方之義二付評議いたし可申上旨ニ而、御書取

一座江御渡被成候二付、致評議候処、議論区々ニ而決断不致候、依之

寺社奉行・御勘定奉行江も品々及談判候処、詰り寺社奉行ハ異存ニ相成、

御勘定奉行・町奉行同意ニ而本紙評議書ハ五月九日進達ニ相成候、

此書面は全町御奉行限り、事実を尽し候勘弁之趣を以
同月九「十」日対馬守自分一同方御同人江御直二上ル』

国産売捌方之義二付申上候書付

町奉行

国産売捌方之義二付評定所一座江御下
被成候御書取之趣、追々評議仕候処、寺社
奉行は異存二付別紙を以申上、私共ハ御勘定
奉行連名を以、評議書昨九日進達仕候、
然処、右御書取二御主意之通相成候ハ、
大坂商人共ハ申二不及、江戸表巨商共も根本
より売崩され候二付、 $\times$ 売 $\times$ 買等出来不
申、騒立可申候得共、夫等之事二貪着
不致、且商人共難渋二候共、別二かしこき者共
活計之いたし方はいくらも可有之、江戸・大坂
町奉行等より申諭方は為達候と申し候御文言
有之、次二一躰是迄大坂之巨商ハ勿論、
江戸之大戸二而自在二天下之財宝を握、
諸大名を始過半金主二頼、大利を被貪、
都而町人之為二

（101）

公務を勤候様成行候は、国産之利潤を
被奪、賣主所を換候 $方$ 、武家衰弱二到
候義二付、今般其根本より被立直候ハ、
武家之威權商人二奪はれ候義無之、
商人共も身分を顧、四民各其分を安シ
候ハ、質素節儉之御教令も可被行との
御主意御尤之御儀にて、右被仰出、武家・町人共
遵守仕被行候義二候ハ、至極可然御座候得共、
一座評議書二申上候通二而、大変革之御
所置、逆も御主意難整義と奉存候、元
来国産物、是迄江戸廻仕市中町人共江
引請人申付候仕法は、素人売決而不為致、問屋二
限入札払致候趣を以、私共江諸家より達有之
候得は、其問屋共呼出為尋、引請人は為及
示談無差支取引致来候義二有之、右は
多分蔵元と唱、町人とも金主二而荷請致候故、
表向は領主・地頭之国産を家来とも
取扱、商人江売捌候姿二候得共、内実は町人共
之金繰にて取引出来、夫二付而は前金納
又は売直段等二も、領主・地頭江利益は附、融
通二相成候由二相聞候得共、諸家悉右仕法

（102）

を相望候義二も無之哉二而、領主・地頭之
取扱二相成候共、町人之助力を借不申候而は、

「 (103) 」

仕入金之才覚、且相場買積注文等之懸引
不馴二而不行届候間、会所出来候迎商人之
権を挫、武家之衰弱を立直候義二は
到申間鋪、都而書面之論二而は良法と相見
候而も、実地を踏候趣は、案外之故障有之
候二付、懇二新法之仰出有之、何様之差支
を醸可申哉、殊二海上難破船損失割

「

合方定法等、品々差支筋多端二而、何分
御見据無之義は却而有害無益之義二
到可申哉奉存候、尚此上御評議御一定、御書
取之通、私共并大坂町奉行江市中申諭
方被 仰出候品も可有御座奉存候二付、問屋
組合再興前後之得失事情は際立不
申候とも、再興後物価下落之廉等入御
聴置度、左二申上候、

「 (104) 」

一、 去ル丑年問屋組合停止被仰出候節、却而
何国より出候何品二而も、素人直売直買勝手
次第たるへく候、且又諸家国産類其外
惣而江戸表江相廻候品々も、問屋二不限銘々
出入之者等引請、売捌候義も是又勝手
次第之旨、御触有之候二付、諸家二おいても
為筋二相成候義二候ハ、十分手揃をも可致
筈之处、矢張町人共江為任置、別段便利
之趣二も相聞不申候、

「 (105) 」

一、 他之国産を買集、売荷を蔵物二引直シ、
蔵屋敷江囲置候類も有之哉之風聞入
御聴、翌寅年近來五畿内・中国・西国・
四国筋国々領主・地頭二おいて自国之産
物は不及申、他之国産をも夫々手段を以
買集、売荷を蔵物二引置、蔵屋敷江
囲置、相場高直之砌、手払又は出入之町人
共二為売捌、~~ノ~~売同様之及取計、依而は
領主・地頭等之權威を以、他之売買江差
障、或は無謂他所之者^ノ冥加銀等
為差出候哉之趣も相聞、以之外之事二候、
尤諸色直段引下方之義二付追々相触
候趣も有之上は、領主・地頭二おいても前書
悪弊早々改革可有之は勿論二候得共、
万一是迄之仕来二因循致、不良之取計
於「不」相止ハ、糺之上急度可被及御沙汰旨、御触
有之候、然処諸問屋組合停止被仰出候
以来、商法取締相崩諸品下直にも

「 (106) 」

不相成、却而不融通之趣も入於聴、都而文化以前之通再興被 仰出、左候連元十組之者共冥加上納金等之御沙汰は弥以無之候間、文化以来之商法二不流様、取締方等精々可申渡旨被 仰渡候二付、其段申渡、商法筋追々取調候義二有之、右躰被 仰出候は

┌
(107)

(ココニ落丁アリ)

一、問屋組合於停廢後、商法相乱品々差支候、第一は諸国荷主共江戸問屋方荷物前貸金借請居なから、右御触故素人江荷送いたし、素人は直買致候得は利潤可有之と存違、元方を糶上買出売捌候節二到損毛致候類多、右躰人氣一変致し相場区々二而取締無之候間、却而物価高直二相成候も有之、其差支と申中にも公辺江拘候義は勿論、船手之義等不得止事、問屋組合有之候節之振合二仕法相立候廉々、

一、船手之義元来下り荷物菱垣廻船・樽廻

┌
(108)

船江積候分難破船之節、遠州今切方西は大坂江為達、東八江戸表江達候得は、積合問屋之内廻船流寄候湊海岸江罷越、浦役人立合荷物相改、濡荷物等は其浦にて入札払二致、入用は一船積合荷物之元直段被割付、荷主損失二相成、尤大坂表其外上方筋方送荷二候得は荷主之損、買附荷物二候得は江戸表注文致候者之損失二相成、諸家雇船之義も、右同様今切を境、廻船流寄候浦より江戸・大坂江為相知、武家一手積二候得は家来出役之上、入用ハ一手賄二相成、廻船「米」其外荷物積切一船雇之節ハ、手船同様取計候義二御座候、然処浦改之取締無之、諸国勝手之積方二相成候二付、船頭・水主二至まで難船荷等致候旨偽、樽船は酒江水入等之品々不正相働、都而奸曲之所業猥り二相成候間、諸商人仕入を控候気配二相成、品切多差支難捨置場合より、大伝馬町組木綿店・白子組木綿店を始、綿店・釘鉄店・油店・蠟店・薬種店・砂糖店・紙店等之九店重立候もの申合、大坂二而丈夫之船相雇、別二右之者とも出銀廻船造立致、夫々取締相付、難船之節両地にて厚世話致候二付、諸商人共安心致、大坂表買附荷物運送無滞相成候義二而、

┌
(110)

廻船積合之締不相立候而は、事実差支候故、右仮之仕法を以、船手之不正を相防、再興迄取締相附候義二御座候、

一、燈油之義、下り・地廻共拾万樽之見積二而売買致し候処、天保三辰年油寄所於取立有之候得共、無其詮同八酉年寄所相止、如元油問屋売買相成候処、六ヶ年之間絞草売買

方一變致し候二付、問屋共仕入居り合

悪敷、其内問屋組合停止被 仰出

候二付、益油屋共は損失をいとひ

手を縮、他商売之ものは仕入方

不弁二而、終二日用差支候二付、無扨

天保十三寅年元油問屋共、鳥居

甲斐守勤役中呼出、品切無之

日用不差支様申合、出精可致旨

申渡、再興迄取締相附候義二御座候、

一、御用着・同乾物類之義、素人共勝手之荷請二而は日々御用差支相

成候二付、七組肴問屋・塩干肴問屋・

乾物問屋共御用品撰立取集致

都而仮御仕法と唱、御用勤続、再興

迄取締相附候義二御座候、

一、大道春共、御春屋御次米春立、享保

度起立之処組合停止二付、一旦御免

申渡候へ共、御賄方二而実々差支相成候

に付、弘化元辰年々市中大道春共

名主番組「限」人数取調、前々之通御用

相勤候、

右之外廉々差支有之候得共、前条之

義は公私共差支顯然之故を以、仮二

仕法相立候義、停止は名のミにて、其

実は問屋組合有之節之振合二而

取締方為仕候義二御座候処、右之趣

追々入御聴、御評議之上、終二再興被

仰出候儀二有之、其後商法筋取調候

得共、多数之問屋組合之義、未堅「皆」濟二

不相成候処、去ル丑年浦賀表江異国

船渡来之節、市中御手当

御仁恵筋之義御沙汰有之候二付、差向

米穀を始日用之品、御当地払底に

相成候而は以之外之義二付、下り荷物仕入

方運送等差支無之様申渡、夫々手配

為致、猶又近頃海防御手当向其外

└

└ (111)

└

└ (112)

└

└ (113)

└

臨時莫大之御入用筋御差湊二相成候間、御融通之為、御府内町人共江御用金可申付旨被仰出候二付而ハ、諸問屋仲間組合再興二而、商法取締等も際立、家業致し能場合を以申諭、

御国恩之程為相弁、身元相応之

町人共は勿論、小前之商人共二至迄

御用金速二上納仕、合金貳拾九万

三千九百四拾兩余、去五卯月御蔵納

取計候義二有之、其上同十月地震「出火」、已来

諸色潤沢方并直段引下方等申渡、

別而板・材木類は必用之品二付、問屋共

一同差はまり急速潤沢致し候様

厚可申合旨申渡、売捌高商人別取

調、手薄之ものは問屋家業差除可

申付旨をも委細申渡候二付、問屋共義も

勵合、山方江仕入前金差送、追々

荷物着致し、其外諸色之義も同

様之振合二而、右は再興之廉を以

申諭、又は及察斗候故氣勢相進、

大金之仕入をも致し、先ッ差支無之様

相成候義二而、尤再興相成候込、必定

物価下直二可相成との見込二無御座候

段は、先役遠山左衛門尉方申上置候義も

御座候得共、生蠟・塩・木綿・繰綿・畳

表・紙・呉服・酒・紅花等之類、問屋停止

已来と再興後と見競候へは、別冊之通

いづれも直段下り居候上は、一般二再興

後物価引下り候驗無之と而已は難

申、一躰荷主共之義、上方筋は穩順

に而、扱方致能方二候へ共、関東筋は

欲情深、兎角二直組を考、問屋三四軒も

取引致し置、直段之高下を見合候義、

又諸家国産も追々引請人相増候二

随ひ、荷主方問屋江直送之品も、国産二

相成候得は、其筋々失脚相懸候故、

自然と直段江差響、彼是之弊二而

眼前際立直段引下り候程之義二は

未至兼、右は丑年方亥年まで

十一ヶ年之間勝手俣之商風癖付候

故、隠荷物・洩荷物も有之候処、俄二

及嚴談候而は、山方之ものと議論

を生し不穩候間、荷送方漸々示談

致候心得二付、今五六年も相立候ハ、

「 (114) 」

「 (115) 」

「 (116) 」

「 (117) 」

停止以前迄二は古復可致哉之見込之趣、諸色懸名主共申立、是以全信用仕兼候義二ハ御座候得共、前書御用金調達を始、諸色潤沢方等、いつれも

再興之功驗を顕候義二有之、一概二商人之權を挫候へは、世上之益二相成候と申見据も無御座、国産之諸品

公辺「并」領主之進退二相成候而は、全

問屋組合停廃之振合二相成可申、別

段申上候通、山方と商筋之懸引は

商賈二無之候而は不行届候処、向々

之役人不事馴もの共取扱候義は、於事

実差支有之候二付、内実巨商を金

主二いたし、問屋共之指揮二任取引

致候様相成候は必定二而、左候へは其雜

費文は品物之代金二懸り、物価高

直二相成候惡弊も生可申哉、第一

非常之節御当地入津高之調は

勿論、相場も区々二相成、市中御救

筋諸色潤沢方等取締相乱、停止中

之姿二可相成と、私共二おゐてハ深く

懸念仕候義二而、都而下々之もの共は、

上之御政務武家之所置二随ひ候義二付、

質素節儉之御教令被行候へは、自然と

漸靡之風化を以、商賈も正路之売買二

押移候道理二而、旧来

御膝元二安住仕候町人共、身分之浮沈二

拘候義被 仰出候品二寄、教諭方不行届

義御座候而は、私共於職掌恐入、何とも

心配仕候間、再興後年限も無之内、

問屋組合再停止之振合二至候而ハ、町人

とも都而之取引を危踏、金銀融通に

相響、止まる処武家之差支相成可申候

間、兼而触申渡置候通、諸色高直二売

捌、格外之利潤を貪候ものは、無間斷

取調、夫々吟味之上御仕置御咎等申付候

義、是迄も厚相心得、組之もの共江も申

付置候へ共、猶此上精々探索いたし、

×売×買等致候もの有之候ハ、速二吟味

取懸可申奉存候、

右は一座評議之外、私共限御含迄に

申上候義二御座候、此上被 仰出方之義

厚御勘弁「賢慮」被成下候様仕度、配下之

「(118)」

「(119)」

「(120)」

「(121)」

町人共回護仕申上候義ニは曾以無
之、他向ニ而は事情不相弁儀二付、此段
入御聴置申候、以上、

辰四「五」月

井戸対馬守
池田播磨守

「(扉)

上

諸色懸
名主共

「(122)

亥年以來問屋再興後取締も相立、
諸荷物運送其外物価引下々相成候
品も有之哉御尋廉、左二申上候、
一、生蠟

天保十二丑年
同
金壹両二付目方
貳貫五百目替

同十三寅年
同
貳貫目替方
三貫目替

再興後
金壹両二付目方
三貫目替

嘉永四亥年
同
三貫五百目替

同五子年
同
四貫目替

一、塩
當時
問屋組合停止中
赤穂塩壹俵二付
銀拾匁位方
九匁五分位迄

再興後
同断
銀六匁五分位方
五匁四五分位迄

一、木綿
問屋組合停止中
白木綿壹反二付
銀八匁三分位方
七匁五分位迄

再興後
同断
銀七匁五分位方

「(123)

一、繰綿

六匁三分位迄
問屋組合停止中
三拾本二付代

金百五拾兩位^方
百貳拾兩位迄

再興後
同断

金百三拾兩位^方
百五（朱抹）「拾」兩位迄

一、疊表

問屋停止中

尾道表拾枚二付代

銀六拾七匁位^方

五十四匁位迄

早嶋同断

銀五十七匁五分位^方

四拾四匁位迄

青莚同断

銀三拾五匁五分位^方

貳拾匁位迄

再興後

尾道同断

銀五拾七匁五分位^方

四拾貳匁五分位迄
「
(125)

早嶋同断

銀五拾匁位^方

貳拾八匁位迄

青莚同断

銀三拾三匁五分位^方

拾貳匁位迄

問屋組合停止中

脇半紙壹^々二付

銀三拾七匁位^方

貳拾貳匁位迄

西之内拾帖二付

銀三拾五匁位^方

貳拾匁位迄

越前大奉書壹帖二付

銀拾貳匁位^方

九匁位迄

再興後

脇半紙同

銀三拾三匁位^方

拾八匁位迄

西之内同

「
(126)

一、呉服

銀三十拾弍匁位^方
拾八匁位迄
越前奉書同

銀拾匁位^方
八匁位迄

問屋組合停止中

白羽二重^{壹疋二付}

銀百四拾^{壹匁五分位^方}
百三拾七匁五分位迄

白縮緬同

銀貳百^{壹匁七分位^方}
百九拾五匁三分位迄

白紬同

銀九拾四匁八分位^方
九拾貳匁位迄

白絹同

銀六拾三匁五分位^方
六拾^{壹匁六分位迄}

越後縮^{壹反二付}

銀九拾匁位^方
八拾七匁位迄

再興後

白羽二重^{壹疋二付}

銀百貳拾七匁三分位^方
百貳拾匁位迄

白縮緬同

銀百八拾^{壹匁五分位^方}
百七拾貳匁四分位迄

白紬同

銀八拾六匁位^方
八拾^{壹匁五分位迄}

白絹同

銀五拾八匁位^方
五拾五匁^{壹分位迄}

越後縮^{壹反二付}

銀九拾匁位^方
七拾六匁五分位迄

問屋停止中

極上酒拾^{駄二付}

金三十拾五兩^方
三十拾三兩位迄

上酒同

金三十拾貳兩^方

一、酒

右之通御座候、以上、
辰四月

中酒同
貳拾九兩位迄

金貳拾八兩方
貳拾三兩位迄
並酒同

金貳拾壹兩方
拾九兩位迄

再興後
極上酒拾駄二付

金三拾壹兩方
廿四兩貳分位迄

上酒同
金貳拾八兩方

中酒同
貳拾壹兩位迄

金貳拾五兩方
拾九兩位迄
並酒同

金十八兩方
拾五兩位迄

諸色懸
名主共

┌
(130)

┌
(129)

┌

②水戸殿領分仕切金之儀問屋共自俣之取計無之致度旨御城付方懸合
(扉)

「安政三辰年五月

水戸殿領分薪仕切金之義

問屋共自俣之取計無之様致度旨

御城附方懸合調

東條八太夫

(朱書) 『弐』

「 (3)

(朱書)

『辰五月十二日、折右衛門ヲ以御渡』

「池田播磨守殿江

水戸殿

御城附

水戸殿領分常州茨城郡

新治郡村々百姓共之内、

冬春之農隙ヲ以、真木

山改渡世御府内江壳捌

候もの大人数有之、既去

卯年中も榎荷多分相送り、

仕切金之義は追年之通り

十月中可相請取筈之所、

不慮之地震二而混雜二付、

当春迄猶予之儀、問屋惣代

幸右衛門と申もの罷下り、他領

四ヶ村山方行事安兵衛と

申もの江示談有之、無余儀

次第二付、山師一統相談之上

任其意打過、当六月二至り

仕切金為請取罷登候由

之處、其砌問屋共居宅江

張紙二而、卯十月二日迄二入津

荷物之内、流失木数割割

引方二相成候旨断書差出

置、「榎」荷流失多分之様申成、

或は焼家之もの二割三割

引二無之候而は仕切難相渡

杯申之、勿論実ニ焼失・流

失等相成候分は無余儀筋二

候得共、全右様二無之段は、

地震後出府之上槌に

見届候もの有之、虚実睨と

「 (6)

「 (4)

「

「 (5)

「

見定も有之儀、地震二事寄
問屋共示合、柳原壺丁目
重兵衛店半七・同店平五郎・
林兵衛店市兵衛・五人組持店
茂平四人之もの共惣代二
相成、謀計を以件之通、
山方一統江損失可相懸取
巧、彼是不法之申分甚難
洩至極二付、出訴仕度旨、領内
村々右渡世之もの共方頻而
歎願有之候得共、非常之
変災後二付申諭、出訴之
儀は先ツ為差扣置候処、右問屋
とも之内、実ニ震災二罹り
難儀致し候もの、又は致流失
候槓荷之儀は、引方相立
候とも不得止次第二候得共、前
件之通り地震二乗し、無難之
槓荷引方相立候様二而は、兼而
取引致し候実意をも取失、山
方一統及難洩候儀二而、村々
歎願無余儀相聞候間、得と
御取調之上、不実之儀無之
様御申諭相成候様御扱致度、
此段及御掛合候様、役人共
申候、

辰五月

(朱書)

『辰六月十九日持出し、弁作を以達し』

書面之趣、一応薪問屋共方内探為致
候処、震災後割引之儀、山方荷主江
申談候処、納得致候ものも有之、中二(朱抹)而は
不承知二而、既ニ常州信太郡上嶋津村
名主惣右衛門外貳拾人惣代右惣右衛門方、
本所柳原町壺町目重(朱抹)郎兵衛店半七外三人
相手取難洩出入、去月中御勘定
奉行石谷因幡守御役所江致出訴、
当時吟味中二有之、右出訴之趣も割引
之談方不相当に而、及難儀候由之
申立二而、本文御達有之候趣意は同様
之儀と相聞候処、御内談之廉を以拙者方に而
荷主・問屋共等及吟味候而は、一事兩様之
取扱に相成、殊ニ在方之もの出訴に付、
吟味掛り場にも拘り、彼是「不」都合に付、御

「(7)

「(8)

「

「(9)

「

領分之ものゝ其筋江出訴致し候方相当と
被存候間、此段及御答候、

辰六月

└ (10)

(朱書)

『辰六月十六日、小源太ヲ以御渡』

〔池田播磨守殿

水戸殿 御城附

水戸殿領分霞ヶ浦附村々より、江戸出
致候榎荷、御府内問屋共示合、直段割
引相立候一条、及御問合候 (一字アキママ) 有之候処、
右之儀決着不致内は、荷積相成兼候
儀二而、融通にも拘り候而已ならず、問屋共
果敢々鋪示談も無之、兎角延日ヲ旨
と致し候様子二而、被打捨置、甚及難
儀候旨、村々歎願申立も有之候間、早期
致落着相成候様御扱致し度、此段
御掛合および候様役人共申候、

辰六月

└ (12)

板材木 浅草茅町
一、竹船具 名主 弥兵衛
筈炭薪 南伝馬町 新右衛門

西紺屋町 同 六右衛門

神田佐柄木町 同 忠次郎

湯嶋町 同 六右衛門

市谷田町 同 左内

本所茅場町 同 助左衛門

深川中嶋町 同 久右衛門

同所熊井町 同 理平次

亀戸町

└ (14)

同 次郎助

（扉）

「石谷因幡守様御掛り

常州信太郡上嶋津村訴訟人惣右衛門ゝ本所柳原壹丁目

重右衛門店半七外三人江相掛り候難渋出入訴状并返答書写」

「（15）」

乍恐以書付御訴訟奉申上候

篠本彦次郎御代官所

上州信太郡上嶋津村

名主 惣右衛門

百姓 友吉

同御代官所

同州新治郡中林村

久吾事

百姓 又兵衛

土屋采女正領分

同州同郡広岡村

百姓 庄次右衛門

同領分

同州同郡大畑村

同 飛子兵衛

同領分

同州同郡酒井村

同 丈助

同領分

同州同郡深谷村

同 儀左衛門

同領分

同州同郡田村

同 新助

同領分

同州同郡下坂田村

組頭 半左衛門

同領分

同州同郡虫掛村

名主 庄左衛門

同領分

同州同郡吉瀬村

同 嘉平治

同領分

同州同郡常名村

同 源兵衛

「（17）」

「（16）」

同領分

同州信太郡佐野子村

百姓 八左衛門

同領分

同州同郡中林西根

同 太右衛門

同領分

同州同郡完塚村

同 長右衛門

同 伝左衛門

同 飛子右衛門

同 九右衛門

曲渚出羽守知行所

同州同郡上嶋津村

百姓代 徳右衛門

水野采女正知行所

同州同郡石川村

組頭 五郎右衛門

水野因幡守知行所

同州新治郡新治村

名主 安兵衛

右貳拾壱人惣代

篠本彦次郎御代官所

同州信太郡上嶋津村

名主

訴訟人 惣右衛門

難渋出入

本所柳原壺丁目

重右衛門店

相手 半七

同店

同 平五郎

林兵衛店

同 重兵衛

五人組持店

同 茂兵衛

右訴訟人名主惣右衛門奉申上候、私共村々之儀は、田畑少山林勝之土地故、農業之間新商ひ渡世仕、諸家様方御林又は百姓持山共買請伐出、御当地薪問屋共江積送仕切代金請取之、右を以御年貢御上納諸郡役相勤来候儀二而、既二去卯年中私共方相手半七外廿五人江真木才束数合百五拾五万五千余積送有之、尤問屋共口錢之義八先前は仕切高之六七分二候処、天保度御改正被

└ (19)

└ (18)

仰出候後は、問屋方^方仲買之もの共江売捌候

帳面荷主江為見届、正路二取計候故を以、仕切高
壹割之口錢二増御定二相成候趣申聞、其壹両年は
紛敷取計無之候得共、近年は入船次第勝手二薪

売捌、帳面等一切不為見届、矢張増口錢而已請取
不相當之取計請居、難儀罷在候上、去暮中仕切
勘定可致之处、同年十月中地震二而差支候二付、
当春二相成候得は、聊損毛不相懸候間差延し

呉候様申之二付、任其意置候処無其儀、相手半七
外三人儀川辺薪問屋月行事二候込重立、去十月

二日迄入津荷物之内流失木数壹割引方二

相成候事、辰式月と認メ、則行事印形いたし

銘々居宅江張出、或は右問屋共六人之内五軒は

及類焼候二付、定式口錢之外貳割又は三割引二
無之候而は、仕切難相渡杯法外之義申之、誠二以

当惑仕、既二地震後無間も出府仕、様子睨と

見届候処、薪置場は川除^方余程相隔居、川

付候置場込も、菰板或は竹垣を以囲ひ有之、

流失可致謂無御座、且及類焼候者込も居宅^方

置場は相隔居候間、薪置場迄不残焼失ハ

不致、縦令焼流失仕候共聊之義二而、去春以来

積送候分、地震之節不残積置候儀二は決而

無之、当時手広二商売罷在、夫共不慮之義

有之荷主江損失相懸候程之義二候ハ、其砌可申

聞筈之处、品能申延置、当節二至り仲間掟杯

と申成、定式口錢之外前書之通流失分壹割、

焼家致候分貳割三割引^ケ方不相立候ハ、仕切

金難相渡旨強而申之、何様懸合候而も更二不

取設、誠二以難渋至極仕候間、無是非今般

御訴訟奉申上候、何卒以 御慈悲前文之始末

被為聞召訳、相手之もの共一同被召出、逸々御

吟味之上、是迄定式請取候口錢之外、此度

新規壹割引と申儀相止メ、都而自尽之儀不仕、

天保度増口錢二相成候節申聞取計来候通、

正路二仕切勘定仕候様被 仰付被成下置度

奉願上候、以上、

右式拾言人惣代

篠本彦次郎御代官所

同州信太郡上嶋津村

名主

安政三辰年三月

訴訟人

惣右衛門

┌ (22)

御奉行所様

如斯訴出候間、双方家主・五人組立合、来ル晦日迄
之内可相済、若不埒明候ハ、翌朔日五時双方召

┌ (21)

┌

┌ (20)

┌

連可罷出者也、
辰四月廿五日 因幡○

御役所

本所柳原壺丁目

重兵衛店

半七

同人店

平五郎

林兵衛店

市兵衛

五人組持店

茂兵衛

右

家主

五人組

名主

└ (23) ┘

乍恐以返答書奉上候

一、本所柳原壺丁目重兵衛店半七煩二付代忠藏

外三人一同奉申上候、篠本彦次郎様御代官所

常州信太郡上嶋津村名主惣右衛門外廿壺人

一同惣代として右惣右衛門方私共相手取、今般

御訴訟奉申上候処、今朔日五時双方可罷出旨

御裏書頂戴相付、恐入左二御答奉申上候、

此段訴訟人惣右衛門方申立仕は、農業作間二

薪伐出、私共仲間之もの共方江積送渡世

仕来候処、問屋共口錢之儀、天保度御改正

以来一兩年は、売先仲買共江売捌候帳面等

荷主江為見届、御定右壺割口錢私共方江

請取来候得共、近年問屋共自俣二品売捌

帳面等不為見届、其上去卯年十月中地震

之節、問屋共方二而震災之為二流失等致候

分を見込、木数壺割引ヶ方申出、又は類焼

之ものは式割余も引ヶ方不致候而ハ、仕切

勘定も難相立趣、私共方難渋申掛ヶ候杯、

廉々申立奉出訴候段奉恐入候、

右は私共儀川辺問屋之内、右常州筋山

方方出訴、薪荷物重モ取扱候もの、当時

百人程は奥川組薪問屋と相唱、時々行事

相立、直段高下等御届申上、其外仲間商

売躰取締之儀一同申談取扱来候儀二而

右奥川薪荷物之義は、多分夏秋中方

冬分二至り荷主共方送越候都度々内金

為書并仕入金等も差出置、追々売捌

└ (25) ┘

毎年冬分二至り、銘々仕切勘定合相立候儀二而、右仕切状相渡、仕切金銀相済候迄ハ

荷主共方品預り置候姿二致成し候、年来仕切二御座候得は、夏分売捌候荷物も冬分二至り市中薪焚用多ク、自然直段も宜相成候時日之相場を以、仕切立仕候義二御座候、然ル処去卯年十月二日地震之節、右嵩高成荷物、問屋共銘々河岸

置場江拼立置候置場圀等相崩れ、不残散乱致、河岸之分は流失多ク、置場等より相破れ品散乱仕、多分之荷物紛失致、別而本所深川辺強ク震崩れ、其上荷主共預り之荷物多分流失・紛失等致、一同当惑仕候、難渋之折柄無余儀

当正月中私共方申合、代之もの彼地江差越、重立候荷主江前段之始末相歎示談申入候処、荷主共二而年来取引之間柄と申、殊二年分問屋売捌之時日二も不抱、冬分之直段を以仕切立請取候義理含相考候得は、右震災流失・紛失等散乱薪才束共打交り、荷主銘々之品分ケも難取調は相弁呉、

昨年中惣仕切之内、十月二日前迄入津高之内割引ケ方不足勘弁致呉候二付、右之趣は山方一般二行届候義と相心得、其余引ケ方等二不同無之様、問屋共一同相心得罷在、既二当二月十二日、山方荷主大行事中江私共方礼謝文通差出候程

之儀二御座候処、荷主人数凡三百人程之内二而、今般訴訟人惣右衛門外廿七人もの共而已前段割引ケ勘弁方不承知二付、流失・紛失共木数巨細二

取調可申杯難渋申掛、難儀至極仕候二付、是迄追々及掛合候得共、彼是不実意申募り罷在、今般右躰御訴

訟仕、仲間之もの共一同難儀至極仕候間、前書奉申上候通外多人数之荷主共一同勘弁致呉候通り、訴訟人共儀も同様聞済呉候様、何卒格別之以御慈悲御利解被成下置候様偏二奉願上候、以上、

本所柳原吉丁目重兵衛店

半七煩二付代

安政三辰年五月朔日

返答人

忠

蔵

「(28)」

「(27)」

「(26)」

「

同所同町同人店
平五郎煩二付代
同 幸右衛門
同所同町林兵衛店
同 市兵衛
同所同町五人組持店
同 茂兵衛

御勘定

御奉行所様

「(29)

(朱書)

『辰六月廿四日持出し達ス』

「本多加賀守殿
石谷因幡守殿

池田播磨守

「(30)

水戸殿領分常州茨城・新治兩郡

村々百姓共之内、薪(朱抹)木荷物仕切金
之儀、江戸問屋共自俣之取計致し候二付、

相手取出所致し度旨申出候得共、為

差扣置候間、篤と取調之上諭方有之

候様致度旨達有之候二付、内探致候処、

問屋共不取計も有之哉二候得共、不正之

仕切致し候義とも不相聞、殊二割引之儀

荷主共納得致し候ものも多分有之、旁

容易二拙者方二而可及吟味筋二は

無之候間、其筋江出訴致し候方相当

之旨及挨拶候、就而は右村之者方

「各」(貼紙ニテ抹)(朱抹)各(朱書)「貴様御役所江願出可申哉と存
候、然処

「貴様」(貼紙ニテ抹)因幡守殿御掛常州嶋津村一件

「(31・32)

当時御吟味中之由、此出入りも同様之

主意と相聞候間、旁問屋山方之者共

風聞取調候趣、別紙式冊御廻し申候、

御城附往復巻綴は、写之儀二付御留

被置、風聞書は追而御返却有之候様存候、

辰六月

「

池田播磨守殿江御引合之覚

水戸殿領分百姓共之内、

薪荷物仕入金之儀江戸問屋とも

自俣之取計いあし候由二而、出訴致度

申出候得共為差扣置候間、御諭方有之

度旨、御城附方達二付御内探有之候処、

貴様方二而御吟味可被及筋二無之、

其筋江出訴いたし候方相当之旨

御挨拶被及候間、右村々之もの共

拙者方江願出可申哉、且拙者掛り

同国上嶋津村一件吟味中之処、

此出入も同様之趣意と相聞候間、右風聞

御取調之趣、別紙式冊并御城附達

御挨拶写等御廻し有之、先般

御達之処、其後御同所領分常州

井関村常吉外七人儀、右上嶋津

村一件江加り、前書之趣吟味受

度旨申之候二付、差加吟味致し

候処、一同熟談内済いたし、済口証文

差出振れ候儀も無之候間、承届候儀二

有之候、依之最前御廻し之御城附

御往復は写之儀二付留置、風聞御糺

書式冊返却いたし候事、

辰十月

川辺奥川薪問屋本所柳原壺丁目重兵衛店

半七其三人之者、惣代二相成、謀計ヲ以山方一統江損

失可相掛と巧候旨入 御聴二、御尋二付内調仕候

趣左二奉申上候、

一、右半七外三人之者共手元探索仕候処、仲間内

二而は荷請高中分之者二而、去十月中震損二付

山方薪荷主江割引勘弁頼談致候趣意柄は、

夫々歩合等も三段二仕訳ケ、荷主共江引合候儀二而、此

半七外三人之者は、常々一ト通之商人之所行之

もの二而、別段仲ケ間内二而巧事等致候程之もの

二は相聞不申、右一条二付抽取計候と申儀二も無之候

間、猶探索仕候処、当時出入中之荷主共并

水戸様御領分荷主共、種々江戸表奥川薪

問屋共之所置ヲ悪説申触シ、歩合損毛致間

敷と之見込方御領分御役場等江申立候儀と相

聞、且又当二十八日申上候通

本所弁天門前

小門屋佐太郎

└ (33)

└ (34)

└

└ (35)

└

└ (36)

同所徳右衛門町壺丁目
金子屋善次郎
同町貳丁目

┌

瀧田屋重次郎
同所菊川町壺丁目
吉田屋三六
同町貳丁目

常陸屋安右衛門

同町

┌ (37)

高碕屋五兵衛
同所柳原三丁目

福田屋徳兵衛
同町四丁目

矢口屋甚吉

同所茅場町壺丁目

酒井屋久兵衛

同所柳原貳丁目

┌

高野屋長十郎

同町壺丁目

近江屋茂兵衛

同所緑町四丁目

┌ (38)

瀧田屋重兵衛

常州薪荷主共近縁之者

本所緑町壺丁目

岡野屋惣五郎

此者共、近年山方より出店、奥川薪問屋家業

相始メ、年来之仲間引請荷物ヲ追々糶取候二付、

今般震損荷物之損金一条、常州村々荷主

差縫候場合故、仲間之もの可成丈ケ荷主と不

和ヲ生シ候得は、国元より佐太郎外十一人方江送附、荷

物相増候間、此意味合二而、彼是荷主ヲ為騒立候

風聞御座候間、何レも当時

因幡守様御掛出入訴答之外、常州荷物之

荷主并問屋共被召出、御吟味被成下置候ハ、佐太郎

外十一人之者、此節荷主と問屋之間柄ヲ為縫候手

段相止、穩便之掛合可相成風評二御座候、御尋二付

此段奉申上候、以上、

辰六月二日

西紺屋町

六右衛門

神田佐柄木町

忠次郎

深川中嶋町

久右衛門

┌

(扉)

「
上

「
(40)

水戸様御領分常州村々薪荷主共方、去卯年中市中問屋川辺共江差送候荷物問屋共置場二差置候処、同年十月二日夜地震出火二而焼失并川縁置場之分は川水震溢流失致候二付、毎年十月より十二月迄二叁年分を送荷物、仕切

「
(41)

代金荷主江相渡候時節二候得共、地震以来混雜致候間仕切時相延シ、当辰年式月二至、置場江川水震溢、荷物流失致し候分等、仕切代金之内荷主方二而壹割、又焼失は式三割勘弁引下ヲ、問屋共方荷主江掛合候得共、地震前問屋手元二而売捌候荷物も多分有之処、卯年荷送之分壹卜束二割引いたし候而は、荷主共難渋致候旨

「

御領主様江荷主共歎願仕候二付、一ト通二而は荷主共申立候通、壹ヶ年之送荷物を困置候義二は有之間敷、九月中迄二売捌相済候荷物も割引為致候と申仕様は、問屋共紛敷仕成方二入御聴、得と下々事実意味合可申上旨被仰渡候間、其筋内調仕候趣左二奉申上候、
一、市中江諸国方引請候薪荷物之内

「
(42)

下野国鬼怒川通積所

新宿河岸

寺畑河岸

水海道河岸

「

中妻河岸

石下河岸

宗道河岸

右河岸々方出候荷物は入津之時々相場ヲ以売捌仕切勘定仕候、

同川筋之内

「
(43)

大沼河岸

三木河岸

久保田河岸

女方河岸

蓼沼河岸

石井河岸

「

石法寺河岸

道場河岸

板戸河岸

吉田河岸

山川河岸
中村河岸
┌ (44)

右河岸々方出候荷物は入津時之相場二而売捌
仕切勘定仕、又は江戸問屋共置場江揚ヶ置、冬
仕切仕候義も御座候、

利根川之内上川筋

野州乙女河岸

同 友沼河岸

同 壬生河岸

同 半田河岸

同 嶋田河岸

同 佐野河岸

同 古川河岸

同 栃木河岸

┌ (45)

右河岸々方出候荷物は入津時之相場ヲ以売捌
仕切勘定仕、又は江戸問屋河岸江揚ヶ置、冬
仕切仕候義も御座候、

東利根川筋

下総国佐原河岸

同 木嵐河岸

同 源太河岸

同 幸崎河岸

同 郡河岸

同 松崎河岸

同 安西河岸

同 幸谷河岸

同 小見川河岸

┌ (46)

右河岸々方出候荷物は江戸問屋共置場江揚ヶ置、
冬分二至仕切勘定仕候義も御座候、

同国佐倉辺

同 印西辺

右両所方出候荷物は入津時之相場二而仕切勘

定仕、又は江戸問屋共置場江揚ヶ置、冬分二至仕

切勘定仕候義も御座候、

常州西浦辺

牛堀河岸

麻生河岸

橋門河岸

嶋并河岸

船子河岸

井上河岸

手賀河岸

玉造河岸

八木蒔河岸

┌ (47)

371

同 取手河岸
同 守屋河岸

右河岸々々出候荷物地廻り品と相唱、入津時之相場ヲ以売捌仕切勘定仕候、

右薪荷元国々々奥川荷物と唱、薪問屋之内ニタ派二別シ、此荷請致候者ヲ奥川薪問屋と相唱、本所堅川横川辺重二住居仕候、

一、此荷主と問屋共荷受仕来は、薪荷物毎年

「(52)」

三月上旬々七月中旬迄二入津致、樫壱万束二付運賃凡五兩貳歩々七兩貳歩位迄、問屋方相渡、荷物は問屋置場江預り置、日用品二付仲買共方買注文有之時々売捌、毎年六月下旬々七月中旬迄、常陸・下総辺荷主共は相州大山寺江参詣之節問屋方江立寄止宿、送荷物之内金樫壱万束二付平均凡拾兩位、松才も右格合二准シ問屋方荷主江相渡置、十月々十二月迄は市中薪「直段相場高直二相成候間、荷主共江此冬三ヶ月高直之所二而、仕切代金総勘定致候間、荷主は七月内金請取、冬仕切二金子請取候間、仕切直段高ク相成候、問屋手元は三月々九月迄薪相場安之時節買注文次第売捌候間、此売捌直段方十月相場仕切直段之方高ク仕切代金相渡候間、問屋手元二而は夏秋売捌直段と、冬仕切直段と見競候得は、仲買江売候方安ク、荷主江仕切直段之方高ク、問屋此直違之損毛は有之候得共、夏秋荷物売捌代金請取、冬仕切迄此金融通之金利等ヲ埋合候故、荷主共荷送之時節方仕切は遅ク候得共、相場高直之处二而仕切候故、荷主為二も相成候仕来二御座候处、去十月地震一条二付荷物流損焼失之分、

「

川辺奥川薪問屋之内

本所松井町貳丁目

太田屋喜三郎

外七拾九人

是は荷物流損壱割引ヲ荷主得申聞候分、

「(54)」

同所緑町壱丁目

岡野屋惣五郎

是は荷物流損焼失多候間、壱割五分引ヲ荷主江申聞候分、

同所徳右衛門町貳丁目

大口屋清兵衛

「

同町

生嶋屋彦助

同町

瀧田屋重次郎

同所花町

常陸屋善蔵

是は荷物焼失流失多候間、三割引荷主江
申込候分、

└ (55)

同所緑町壹丁目

上総屋友七

同町四丁目

瀧田屋重兵衛

同町三丁目

寺本屋善右衛門

是は同断二付、式割五分引ヲ荷主江申込候分、
右之趣意二而一躰常州御料・私料村々薪荷主
極印仲間と唱候惣人数三千人程も有之由、此
内江戸問屋江荷送引合候もの凡八百人程有之候
故、常州荷主は小前之者多、其上此人数之内
江戸問屋江引合候者は本所・深川・浅草辺震
損強義も心得居候故、前段問屋割引之類納
得致候者も多分有之候処、村々之内二而自身江戸
問屋江引合不仕、荷物荷主仲間二而引請送方
致候者、在所限之心得二而は、山方二而薪荷物伐出シ、
江戸表江運賃も相掛、其上毎年正月方山仕出シ
致、三月方川筋積所出シ、江戸入津、問屋手元二而は
売々致、売立代金は夏秋之内問屋共請取、融
通致居、荷主は七月中旬内金請取候迄二而、冬
仕切時節二至候震損ヲ申立二、年中之送荷物を
割引相頼候は、問屋共我低之致方と一途二心得候者
共有之、前段荷元村々之内常州向場八木組と
唱候荷主廿壱人惣代之者、当四月中問屋共相手取、
御勘定御奉行石谷因幡守様江出訴、当
時御吟味中二有之、今般

└ (57)

水戸様御領分村々荷主共も

御領主様江割引不伏之旨申立候処、右江戸表問
屋共冬仕切致候仕法は、一ト通二而は割引ヲ荷主江
相頼候は不直之様相聞候得共、得と本所豎川
横川辺薪問屋共之内輪内調致候得は、

川辺奥川薪問屋之内

本所弁天門前

小川屋佐太郎

同所徳右衛門町壹丁目

金子屋善次郎

同町貳丁目

瀧田屋重次郎

同所菊川町壹丁目

吉田屋三六

同町貳丁目

常陸屋安右衛門

同町

高崎屋五兵衛

同所柳原三丁目

福田屋徳兵衛

同町四丁目

矢口屋甚吉

同所茅場町壱丁目

酒井屋久兵衛

同所柳原貳丁目

高野屋長十郎

同町壱丁目

近江屋茂兵衛

同所緑町四丁目

瀧田屋重兵衛

此者共は常州山方薪荷主之出店二而
国元方荷物引請罷在候、

同断

本所松井町貳丁目

太田屋喜三郎

同所柳原町三丁目

山形屋甚右衛門

同町六丁目

伊勢屋治兵衛

同所緑町壱丁目

岡野屋惣五郎

同所松井町貳丁目

太田屋徳三郎

此者共は常州薪荷主方養子二参候者も
有之、又近縁之者共之由、

此薪荷主共、国元方御当地出店并所縁之者も
有之候間、江戸問屋共常々格別欲情二募り候

義有之候得は、此もの共方荷主共江都度々相聞候

間、其問屋江は荷主方送荷差留可申筈之处、震

損以前迄は荷送致、問屋共之扱振ヲ荷主共方

二而苦情相唱候義無御座熟合居候、取引方は全

夏秋安相場二而も売捌、冬分相場引立候処二而

問屋直違損ヲ不厭、仕切代金惣勘定致候故之

意味二相聞候間、奥川薪問屋平和之節不相

当之義は相聞不申、今般震損一廉之仕切代金

之内二而、割引頼談致候筋二候得は、荷主疑惑も尤二
相聞候得共、本所・深川・浅草辺は、去十月二日夜薪

「(58)」

「(59)」

「(60)」

置場矢来困等震損、一時二川水溢、井戸水吹
出シ、積置候荷物過半は流失致候二付、所々野宿
之者、其頃昼夜右流寄候散乱之薪を以食物
仕立、其上置場二散乱致残候薪類、焼場之分
は焼失致候荷嵩不少候得共、問屋共手元は
其身召仕共定日雇之者共怪我・死失等有之、
荷物取纏方も不相成候二付、此問屋共震損砌之
模様見請候而は、問屋共十月ノ冬分之売前直
段も宜敷候間、多置場二困置候荷物皆無損も有
之、凡荷嵩之五六割通は失ひ候二付、荷主・問屋と
半々損、又は三四割之損毛ヲ荷主勘弁致候共不
相当之義は相聞不申候、既二定飛脚問屋金
銀其外陸付運送荷物道中筋紛失・盗難
等は、其宿方ノ取調申聞候上、其御筋江御訴申上、金
銀其外荷物紛失之分は、荷主江飛脚問屋方弁
濟致候仕来二候得共、去々寅年十一月中御当地飛
脚問屋共方請負金銀并諸荷物陸付運送
途中東海道掛川宿・袋井宿震損焼失并荒
井宿津波二而濡荷物二相成候分共、出格之変
災故飛脚問屋弁金不仕、全荷主損失可致
旨、翌卯年四月中被仰渡候義も有之、又質屋共
質物入置候土蔵焼失致候得は、質屋と置主示
談之上、質屋は質代金損毛、置主は品損毛致候、
下々通例二有之、右等之義江引格為照合候得は、
奥川筋薪之入津之節運送賃問屋方二而立替
仕払、七月二至内金相渡候二付、更二預り品一方二も
難見極候間、凡荷物流失・焼失之歩合ヲ以薪
荷主忝割又忝割又左mm割と仕訳致、荷主勘弁を
頼候義不相当二も相聞不申候、

「(61)」

置場矢来困等震損、一時二川水溢、井戸水吹
出シ、積置候荷物過半は流失致候二付、所々野宿
之者、其頃昼夜右流寄候散乱之薪を以食物
仕立、其上置場二散乱致残候薪類、焼場之分
は焼失致候荷嵩不少候得共、問屋共手元は
其身召仕共定日雇之者共怪我・死失等有之、
荷物取纏方も不相成候二付、此問屋共震損砌之
模様見請候而は、問屋共十月ノ冬分之売前直
段も宜敷候間、多置場二困置候荷物皆無損も有
之、凡荷嵩之五六割通は失ひ候二付、荷主・問屋と
半々損、又は三四割之損毛ヲ荷主勘弁致候共不
相当之義は相聞不申候、既二定飛脚問屋金
銀其外陸付運送荷物道中筋紛失・盗難
等は、其宿方ノ取調申聞候上、其御筋江御訴申上、金
銀其外荷物紛失之分は、荷主江飛脚問屋方弁
濟致候仕来二候得共、去々寅年十一月中御当地飛
脚問屋共方請負金銀并諸荷物陸付運送
途中東海道掛川宿・袋井宿震損焼失并荒
井宿津波二而濡荷物二相成候分共、出格之変
災故飛脚問屋弁金不仕、全荷主損失可致
旨、翌卯年四月中被仰渡候義も有之、又質屋共
質物入置候土蔵焼失致候得は、質屋と置主示
談之上、質屋は質代金損毛、置主は品損毛致候、
下々通例二有之、右等之義江引格為照合候得は、
奥川筋薪之入津之節運送賃問屋方二而立替
仕払、七月二至内金相渡候二付、更二預り品一方二も
難見極候間、凡荷物流失・焼失之歩合ヲ以薪
荷主忝割又忝割又左mm割と仕訳致、荷主勘弁を
頼候義不相当二も相聞不申候、

「

「(63)」

一、問屋共震損割引相頼候は不相当二も不聞
候得共、荷主共方江銘々納得致候迄熟合仕様掛
合候得は、子細も有之間敷処、奥川薪荷物引請
候問屋共見世江、右割引之義ヲ認張出候間、未々熟
得不致、荷主共問屋勝手之筋ヲ申合候と噴、
出訴致し候荷主気合二も相聞、且又常々之義御改
正以前迄は、口銭六分其外置場諸掛り等之掛り
物ヲ、仕切代金之内二差引候処、此仕法二而は荷主
共口銭其外諸掛物束候得は、忝割余之引方二
相成候二付、御改正之節取調之上問屋口銭忝割二
相定、廉々之諸掛は此口銭之内二而取賄候間、荷
主為二は売徳聊二而も相増候得共、今般八木組惣
代共は口銭御改正方相増候と申義ヲ不滿二申立、置
場其外諸掛り相減候義は不申立并荷主共方方
江戸表売用二而罷越候者問屋江立寄候得は、食

「(64)」

事等も為致、一夜止宿致候者も不絶有之、此入用は問屋共荷主会釈向雜費故、問屋懷損二相成候間、双方二道理合も有之候得共、問屋再興被仰付候以来は、関東筋在々荷主共は兎角、問屋再興相成候而は問屋共余分之売徳ヲ取候故、国々在々農間稼之助成薄二相成、百姓方難立行と質朴之躰二申立、人氣ヲ狂セ候者共有之候二付、此上問屋共并今般震損二付苦情申立候村々荷主共被召出、乍恐御糺被下置候上、問屋共方頼談致候割引相止メ、問屋共一方之損失二致、一兩年為試之奥川薪荷物之内飯沼最寄・水海道最寄・江戸川筋最寄、地廻りと唱候荷物仕入方之通、入津時之相場二而仕切差出候得は、問屋共手元潔白之商振二付、荷主共苦情可申立謂無之、関東筋諸荷物荷主当時之風儀締方二も相成可申哉二奉存候、蜜々内調仕候趣奉申上候、以上、

辰五月

┌ (66)

奥川筋薪問屋之内、常州荷物引請候者

本所弁天門前

小川屋佐太郎

同所松井町貳丁目

同町 太田屋喜太郎

同町

同町 太田屋喜三郎

同町

同町 太田屋徳三郎

本所林町貳丁目

炭屋伊藤次

同町三丁目

同町 太田屋茂兵衛

同所徳右衛門町壹丁目

蔦屋米次郎

同町貳丁目

同町 大口屋清兵衛

同町

同町 生嶋屋彦助

同町

同町 万屋兵四郎

同町

同町 瀧田屋重次郎

同所菊川町壹丁目

┌ (67)

吉田屋三六
同町弐丁目
常陸屋安右衛門

同町

高崎屋五兵衛

本所菊川町三丁目

藁屋茂右衛門

同所柳原三丁目

山形屋甚右衛門

同所菊川町四丁目

田原屋庄八

同所柳原三丁目

松田屋文蔵

同町

福田屋徳兵衛

同町

浜松屋久右衛門

同町

亀屋太吉

同町四丁目

矢口屋甚吉

同町

大丸屋重兵衛

同町

墨屋嘉兵衛

同所茅場町壱丁目

酒井屋久兵衛

同町

梶間屋平三郎

同町弐丁目

岩田屋新兵衛

同町

酒井屋清兵衛

同所柳原六丁目

伊勢屋治兵衛

同町五丁目

万屋武七

同町弐丁目

高野屋忠助

同町壱丁目

梶間屋平五郎

同町

近江屋茂兵衛

同所花町

└ (68)

└ (69)

幸手屋忠七

└ (70)

同町

常陸屋善藏

同所緑町壺丁目

岡野屋惣五郎

同町三丁目

寺本屋善右衛門

同町四丁目

瀧田屋重兵衛

深川東平野町

石井屋儀兵衛

同所吉永町

大和屋市兵衛

本所柳原式丁目

高野屋長十郎

同所徳右衛門町壺丁目

金子屋善次郎

同所緑町壺丁目

上総屋友七

└ (71)

(扉)

「御勘定奉行衆出訴済口

上

└ (72)

差上申済口証文之事

一、常州信太郡上嶋津村名主惣右衛門外式拾人

惣代右惣右衛門方、本所柳原壺丁目重兵衛店半七

外三人江相掛り難渋出入申立、当三月中当

御奉行所様江奉出訴、五月朔日御差日

御裏書頂戴相附候処、相手方も返答

書差上御吟味中、同州新治郡完倉村組頭

栄次外七人惣代并関村常吉方訴訟方江

加り願致、尚御吟味中掛合之上熟談内済

仕候趣意、左二奉申上候、

右出入訴訟方申上候は、私共村々之儀田畑

少く山林勝之土地柄、農間薪渡世仕、御当地

薪問屋共江積送り仕切代金請取、御年貢

御上納諸郡役相勤、尤問屋共口銭之儀は売

捌帳面為見届、荷主共方壺割口銭差出無

難二取引罷在候処、去卯十月中地震災以

前、私共銘々多分之薪問屋共江積送り有之

候二付、右地震災二事寄川辺問屋行事共

「(74)」

私欲可致と、相手半七外三人重毛立、流失

木品壺割引ケ方致候自己二取極、右之趣

銘々居宅江張出置、猶定式之外口錢貳割

又は三割引ケ二無之候而ハ仕切難相渡杯、法

外之儀申之、当惑難儀至極仕候間、以来定

式之外問屋行事共新規之引ケ方不致、正

路之仕切相渡、無難二渡世相成候様被

仰付度段、其外品々訴上、且加り願人常吉

申立候は、私共村々之儀山中田畑少く山林

勝農業一統相続出来兼、依之農間槇木

渡世年々御領主御林入札二而引請伐出し、

御当地問屋共江積送り仕切金請取候上、

御払代金相納、其余百姓持山をも買請、

右助成を以御年貢御上納罷在、然ル処天保度

御改正被仰出、其後問屋共方仲買江荷物売

捌帳面荷主共江為見届、正路之取引仕候筈

二而、壺割之口錢二相定、壺兩年は右御趣意相守

紛敷取計無之処、追々流幣問屋共入船

次第勝手尽之取計いたし、荷主共難渋

罷在候処、去卯十月震災二付、是迄請取来候

口錢之外新規壺割之定二候迎、問屋共自己

之私欲を以銘々居宅江張札致、右震災二

事寄私欲可致心底紛無之、難渋仕候二付、

其段御府内川辺薪問屋行事相手之もの

共江掛合および候処、一旦仲間議定下ケ札

致候儀、今更交替難致旨申張、一切取敢

不申旨、其外品々申立、且相手之もの共奉

新庄候は去ル卯十月震災二而薪荷物流木二

相成候二付、不取敢右之段諸国之荷主江相届

置候処、既二当辰春中重毛立候仲間買行事

之主数多出府致候二付、前条之次第柄

相歎候処、眼前難渋之為躰、実々察入

候迎、示談行届為居合候大勢之荷主一同

取引候間、格別之慈愛を以、焼失ハ勿論

流失壺割之引ケ方致呉、猶又其最寄組々

之荷主江も此段申継呉候儀二付、其趣御府内

問屋共一同相心得不行届不相成様、銘々

張札仕置候処、荷主迎も国々数多之儀二付、

中ニは其旨趣行届兼候儀も有之候哉、其後

纔二出府之荷主、流木壺割引ケ方之儀

不承知之趣不行届段答上申争、御吟

味中ニ御座御候処、相手之もの共震災二付

仕切勘定之儀新規壺割引ケ方之儀其外

「(77)」

「(76)」

「(75)」

荷主江示談致候を、訴訟方江も行届候
心得二而、引ケ札等致候は心得違之

儀と相手方発明いたし、依之荷主心得を以
類焼之ものハ壹割方貳割五分迄、流木紛失
等致候もの共は歩割方相立不申候得共、仕切

金銀之内二而右意味合相合、夫々相当之引
方致請取事柄相濟候、然ル上は以来入津

時之相場を以売捌、御定壹割口銭二而正路二
取引可致筈取極、双方共聊無申分熟談内

濟仕、偏二 御威光と難有仕合奉存候、然ル上は

右壹件二付重而双方方御願筋毛頭無御座候、
依之為後証連印濟口証文差上申処如件、

篠本彦次郎御代官所

常州信太郡上嶋津村

名主 惣右衛門

百姓 友吉

同御代官所

同州新治郡下林村

同 又兵衛

土屋采女正領分

常州新治郡広岡村

同 庄次右衛門

大畑村

同 飛子兵衛

成井村

同 丈助

深谷村

同 儀右衛門

田村

同 新助

下坂田村

同 半右衛門

虫掛村

同 庄左衛門

吉瀬村

同 嘉平次

常名村

同 源兵衛

佐野子村

同 八左衛門

中村西根

同 太右衛門

完塚村

同 長右衛門

└ (78)

└

└ (79)

└

└ (80)

百姓代
徳右衛門

五人組持店

上嶋津村

$$\begin{pmatrix} 8 \\ 1 \end{pmatrix}$$
$$\begin{pmatrix} 8 \\ 2 \end{pmatrix}$$

同

茂兵衛

御奉行所様

前書之通 石谷因幡守様江济口奉

差上候処、御聞濟相成候間、後日違論為

無之、連印を以為取替置申候処如件、

右

辰十月

訴訟人

徳右衛門

右

加願人

常吉

半七煩二付

相手

幸次郎

平五郎煩二付

同

佐七

同

市兵衛

同

茂兵衛

（扉）

一

辰八月三日公事

川辺炭薪問屋本所林町四町目家持

吉右衛門、相手同所柳原式町目長十郎外一人

難渋出入

同十二月八日吟味下々

上

右出入、前書水戸殿掛合御勘定奉行衆

出入江自然混合候事柄二付、末二綴込置、

委細八济口証文二有之候事、

諸色掛

名主共

（84）

川辺炭薪問屋之内

拾六人代兼

家持吉右衛門煩二付代

願人

米吉

同所柳原式町目

家持

相手

長十郎

同所菊川町壱町目

善助地借

同

三六

（85）

右吉右衛門代米吉方長十郎・三六相手取御訴訟
申上候意味合御尋二付、蜜々相調候処、相手兩人之
内、長十郎義は常州新治郡岩坪村百姓薪荷主

長十忤二而、三六義は同州同郡高久村同吉右衛門
忤二而、兩人共先年御当地江出店致薪問屋相始、
去ル亥年中仲間組合再興被仰付候節、川辺炭

┌

薪問屋之内江加入、渡世相統致罷在候得共、素方荷主

出店之もの二而、山方之者江相泥ミ、荷主共利潤二可相成

義而已心掛候歟、兎角仕来之商法相崩し、同渡世之
もの共難儀致候義も間々有之候処、去卯十月二日夜

地震出火二而、本所竪川通別而強震潰、既二問屋共

置場圀等相損シ、積置候薪川中江押崩候折柄、

┌ (86)

右之場合故取集候人歩も無之、流失散乱致候分

多端二而、皆無捨り同様之ものも有之、難洪致し

罷在候由、依之荷主共江仕切代金割下之掛合

及候処、多人數之中二は不伏之もの有之候哉、既

當時御勘定御奉行所様二而御吟味中掛合方等

抄取兼、其上此節之模様二而は、願方申分相立、江戸

┌

問屋共申分相立兼候様子、右意味合仲間内蜜二

承合候処、長十郎・三六義は、震損之節格別之義も

無之忤と荷主共江申触レ候由、右兩人は荷主共之氣

請ヲ繕置、追而多分之荷物引受捌方致度心組之

由、若捌方手廻兼候ハ、荷主出商内同様、問屋名前

┌ (87)

貸之仕成二内実取巧、右方山方江同意致彼是

申触候二付、荷主共人氣騒立御訴訟等二相成、問屋共

一統難洪仕候二付、無余義右兩人相手取御訴訟仕、

御吟味奉願候趣二御座候、尤右兩人方江は今般御訴訟

仕候荷主共折々止宿等致候風聞も有之候故、問屋共

疑惑致、此兩人方荷主共方江掛合申有メ候ハ、割

下等之趣意格別相立可申見込二而、御訴訟仕候趣二

┌

御座候、依之當時御勘定御奉行所様御吟味之

御模様承合候書面相添、此段申上候、以上、

辰八月

名主共

常州山方薪荷主廿壱人惣代

篠本彦次郎様御代官所

同州信太郡上嶋津村

名主

訴訟人 惣右衛門

┌ (88)

本所柳原壱町目

重兵衛店

相手

半七

同所同町

同人店

同

平五郎

同所同町

林兵衛店

同 市兵衛

同所同町

五人組持店

同 茂兵衛

右訴訟人惣右衛門義、当辰三月中御勘定御奉行
石谷因幡守様御役所江奉出訴候薪震損二付、
去卯年春中より十月二日迄入津高き割引下方
勘弁不承知之趣ヲ以、右半七外三人相手取
奉出訴候処、五月朔日公事合当日相手問屋共方

「 (89) 」

申立候は、右奥川筋方出候薪荷物仕切立之義、
例年度秋中より多分入津、冬分二至入津之時日二
不抱、品送越候都度々内金為替金等相渡、其上
仕入金等も問屋共方差出置、追々売捌候品、毎
年冬分二至一ト束二仕切勘定相立、右仕切状
相渡、仕切金銀相济候迄は荷主共方品預り置候姿二
致成候は、年来仕切二有之、右二付夏分安直之頃
売捌候荷物も、冬分二至市中薪焚用多、直段も
宜相成候時日之相場ヲ以、仕切立仕候義二御座候、右等
之慈愛は荷主・問屋之間柄と申、右二付十月中

稀成震損、問屋共一同銘々河岸置場囲等も

「 (90) 」

相崩レ、不残散乱・流失・紛失之難渋も、当春山方
荷主惣躰江相歎。忝割引方勘弁申入候処、多人
数之荷主共勘弁致呉候処、右訴訟人惣代惣右衛門方
申立候忝人方不伏之旨申立候得共、何分外荷主共
同様割引方聞濟呉候様、相手方御答申上候処、
追々御吟味之上、当六月廿二日御掛内海多次郎様
被仰渡候は、流失薪員数取調方等は大災之

時節故難取調義尤之事二候間、願人方二而も

格別之慈愛ヲ以、相手方方申立候忝割之内

五分は引方勘弁致候而可然、相手之者は忝割之内

五分減分致、五分之引方勘弁之掛合可請旨

御仁慮之御利解、相手問屋共義は右奉承伏候得共、

「 (91) 」

願人共不伏之旨申立、嚴敷御利解御座候処、

其後追々御日延中、願人方何等之義認候哉、同

廿八日書面差上、其後七月六日御呼出、相手方江種々

御利解御座候二付、同廿二日相手方方書面ヲ以左之通
申上候、

乍恐以書附奉願上候

「

常州上嶋津村一件、相手本所柳原忝町目重兵衛
店半七外三人一同奉申上候、私共出入当時御吟味中二
御座候処、去十月中震損薪流失・紛失・焼失共
員数取調奉書上候様被仰付候二付、追々御日延奉願上、
問屋共銘々右員数高割合等書出候様一同江申談
候処、右は兼而奉申上候通、本所・深川共別而震災」

(92)

強、薪置場圀押崩れ、何二も拼立散乱荷品入交
取調も行届兼、其後入津之荷物等拼立打交り、
当節別而右紛失高難相分、取調方行届兼、奉恐
入候、尤当春中荷主惣代として山方方行事のもの
出府示談仕候節、忝割引引方勘弁之義は、荷主・問屋共
見積ヲ以凡積割合勘弁示談仕候義二候得共、今般
訴訟人惣代惣右衛門方申立候荷主廿忝人之者共義は、
右勘弁方不承知之旨申立候二付、当六月廿二日
訴答之もの江 御仁慮厚御利解被仰下候通、
忝割之内五分は減步致、五分は訴訟人方二而引方
勘弁仕候而可然旨被仰付、私共一同難有奉承伏候得共、
訴訟人共義は、御利解不伏之旨申立奉恐入候、
左候込、此上減步相立掛合候義候而は、外荷主共江も
差響難儀至極仕候間、年来取引之慈愛ヲ以
先達而被仰付候通五分引方之勘定合ヲ以、訴訟人共
厚勘弁致呉候様、御利解被成下置候様
御慈悲之御沙汰奉願上候、以上、

本所柳原忝町目

重兵衛店

半七煩二付代

安政三辰年七月廿二日 忠藏

同所同町

同人店

平五郎煩二付

幸右衛門

同所同町

林兵衛店

市兵衛

同所同町

五人組持店

茂兵衛

御勘定

御奉行所様

右之通二十二日書面差上候処、同廿七日猶嚴敷相手之
もの江御利解、此上は流失・紛失之薪員数取調候共
願人共申立候通、忝分之勘弁請候共掛合可申旨、
八月五日猶同様之御利解、同日
水戸様御領分常州新治郡完倉村組頭栄次
外七人代兼同州同郡井関村百性常吉と申もの
追訴仕候哉、訴訟人惣右衛門同様、御吟味之節右常吉
罷出候、依之、同九日出訴答方破談御訴申上候処、
追而之御沙汰被仰渡候、
右御尋二付此段申上候、以上、

辰八月

┌

└ (93)

┌

└ (94)

┌

└ (95)

再調

川辺問屋之内奥川
炭薪取扱人拾七人

惣代

本所林町四丁目

家持

願人 吉右衛門

同所柳原式丁目

家持

相手 長十郎

同所菊川町壱丁目

善助地借

同

三六

此者共之内長十郎・三六義は奥川筋薪荷主共之内より出店致、旧来十七人之引合荷物此兩人方江重二荷物送附、山方荷主出稼同様之商ひ振二付、同渡世拾七人之者共追々難儀致候二付、仲間商法二も相振候間、兩人家業為相止申度旨御訴訟致候出入、蜜々風聞御尋二付承探候趣左二奉申上候、相手之内長十郎義は常州新治郡岩坪村百姓

「(97)」

一、薪荷主長重悻二而、式拾ヶ年以前先代兄長十郎義本所菊川町式丁目江出店致、奥川薪商ひ相始候後、天保十四卯年中当所持地面買求、其後右長十郎病死跡、同人弟当長十郎同様薪商ひ仕罷在、荷主共は此者出店致候方旧来之引合致候問屋共江可送荷物ヲ、此者方江重二差送候、一、三六義は常州新治郡高久村百姓吉右衛門と申薪荷物大手二商ひ候者之悻二而、五ヶ年以前子年中本所花町江出店致、其後去々寅年中当住所江転宅致、前書同様之意味合二而荷物此者方江多分二送来候、

「(98)」

此兩人宅は常州完塚村外拾七ヶ村、水戸様御領薪荷主八木組と唱候四ヶ村、荷物共之薪荷物内実出売場同様之仕様二仕成、一躰奥川筋薪荷物は、毎年三月頃方追々拾九人之問屋共方江送附候而、夏氣相場安之節も売捌七月盆前荷主共相州大山石尊登山ヲ兼出府致、送荷物之見積り内仕切金問屋方請取立帰、十二月二至相場高直之節本仕切勘定致、問屋方荷主方江仕切金請取候年来之仕法二而、問屋手元は夏秋薪相場安キ節市中江売捌、十二月二至高直之時節二仕切候而は、直違之損失は有之候得共、夏秋売捌候代金時々請取融通致、此金利ヲ含、冬氣高直二仕切候而も、懷合は一途二直違損分二も

「(99)」

相成不申候、又荷主共は山主方薪立木買取伐出候而、
一ヶ年本仕切二不致延置候得共、高直之時節二本

└

仕切致候間、是又延金之利分二も仮成懷合二而は相
当致候故、双方持合候仕法二有之、然ル処手広中は
薪荷主而已二も無御座、諸品共荷元より市中江送附
素人も交元方仕切候間、直段糶上、追々諸色高
直二而已成行候二付、諸色直段為引下実直之商法

└ (100)

御立直シ可被下置御仁恵ヲ以、去ル亥年中問屋
再興被仰付候二付、右難有御趣意問屋共相弁、其
向々二而商法立方も談合候処、奥川筋薪取扱候惣
人数十九人之内、長十郎・三六兩人は薪荷主之出売
場同様之心得故、此兩人は直段引下ケ之御趣意相
背、常州薪荷物江戸表二而問屋元仕切直段ヲ可

└

成丈ケ高直二致候儀ヲ、国元荷主共江対シ差働之様
相心得、日々商候間、外拾七人之者共本仕切時節二至、
其時々之売前、天然相場ヲ以銘々仕切勘定可致
処、国元荷主共長十郎・三六手元二而仕切勘定致候

└ (101)

高直之仕切書ヲ、荷主共所持致居候而、長十郎・三六
之外拾七人之問屋共方江罷越、荷主共本仕切直段
談合、相当之天然相場仕切表ヲ問屋方荷主江申聞

└

候得は、長十郎・三六之仕切書ヲ其問屋江為見、兩人方之
仕切方直安二付、不承知申募候間、外問屋共も不相当
二は候得共、長十郎・三六之仕切直段江准候仕切勘定ヲ
致遣候、此兩人之仕切書ヲ不相用、市中相当之

└ (102)

天然相場二押而仕切候もの有之候得は、荷主は国元江
立帰、問屋誰々は仕切勘定二私欲有之旨、荷主仲
間江披露致、其問屋江は荷主共一統二荷送り差
留候故、此意味合故無是非長十郎・三六之仕切直
段二准シ、仕切勘定致し候義二相成候間、此兩人之仕切直
段、奥川筋薪元直段之立テ直二相成候様成行候間、
旧来家業致候致候問屋共、再興御趣意相弁直段引
下方之商法相立兼、此兩人之商振故、追々薪直段
高直二至候由、尤奥川筋薪商候問屋拾九人之内
長十郎・三六之外拾七人之内二も、奥川薪荷主縁合之
者養子等二罷越所縁有之もの等も御座候間、旧来
重立候問屋共、前段之意味合容易二仲間談合も
致兼、斟酌致居候処、問屋再興被仰付候、詮無御座
様成行候義恐縮致、其上荷主共長十郎・三六方二荷
物差送候得は差支無之故、我意二募候二付、十七人之内
荷主江所縁無之者は家業追々衰微致候間、商法
古復致度と之願意二相聞申候、

└ (103)

一、去十月地震之節、荷主方送来候薪置場二差
置候分焼失多候二付、総人数十九人之問屋共
相談之上、荷主方江此流失・焼失之割合損相頼候

└

一条仲間見世先江張出シ致候二付、荷主共は三月方地震前迄、問屋手元二而売捌候荷物も多分有之処、
右荷高ヲ束流失・焼失ヲ唱、問屋仲間二而取極見
世先江張出致候義ヲ、不伏二存、荷主惣代常州完塚村
九右衛門外吉人方奥川薪荷物仲間ヲ相手取、御勘定
御奉行石谷因幡守様江御訴訟致、御吟味中、
水戸様御領分常州八木組薪荷主共同
御役所江出訴致、忒口共御吟味中二有之、此出入筋は
薪問屋共預リ荷物流失・焼失之損金割合、荷主共江も
為弁候趣意は相当之筋も有之候得共、此問屋重
立候者仲間江談合、何様二も荷主方江銘々限談判
致不納得之荷主は其忒二勘定相立、又実意二而
損金割合弁候者は、其次第二取計候得は、問屋方荷
主之間柄不和二相成間敷処、仲間見世先江荷主
害割損と張出候仕成方は、問屋之所業二不似合之
致方故、荷主共二被相手取候次第第二至候は、愚力成仕成
方故、道理も有之意味合更二相立不申候而も致方
無御座、荷主願意而已尤之筋二相聞候義二御座候、此出入
中也願人之在方荷主共、長十郎・三六方江止宿致相
談致候而は、問屋手元越度二可相成義ヲ、御吟味中
在方之者申立候故、荷主所縁無之問屋共ハ憤罷在候由、
右地震之節之損失出入二不拘、今般吉右衛門方
長十郎・三六相手取候極意は、前ヶ条諸色直段
為引下、再興被仰付候御趣意、仲間内二此兩人荷元方
出店商致候而ハ商法難相立、荷主我意二募、奥川筋
薪荷物元直段高直二而已成行、仲間一統江御察
斗筋請候而は、申披方無之と存詰、御訴訟致候義二相
聞候得共、此薪問屋之内不作前之者多候二付、実直之
願筋二而も、相手之者江示談方も行届兼候二付、川辺問
屋之内二而は、忒番組古問屋老分之もの被召出、
長十郎・三六是迄薪荷物売捌候仕切勘定帳并売
帳面等、此忒番組老分之もの共立合取調、四五ヶ年之内
仲間天然相場と、長十郎・三六仕切相場と相当致候
哉、又は高直二仕切候哉、事実取調老分之もの共見
極治定致候と取調書差出上、全此兩人商振故、奥
川薪荷物之直段引下之妨相成候もの二御座候ハ、
其節之御沙汰御取締被成下置候ハ、問屋共之内不
直之者風儀立直り候様相成可申哉二相聞申候、蜜々探
索仕候趣奉申上候、以上、

辰十一月

諸色掛

名主共

┌
(108)

┌
(106)

┌
(105)

┌
(107)

┌